



TITLE:

『眞誥』 譯注稿(二)

AUTHOR(S):

「六朝道教の研究」 研究班

---

CITATION:

「六朝道教の研究」 研究班. 『眞誥』 譯注稿(二). 東方學報 1997, 69: 603-827

ISSUE DATE:

1997-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66778>

RIGHT:

## 『真誥』譯注稿（二）

### 真誥卷之五

#### 甄命授第一

道授（此有長史掾各寫一本、題目如此、不知當是道家舊書、爲降楊時說、其事旨悉與真經相符、疑應是裴君所授、所以爾者、按說實神經云「道曰」、此後云「我之所師南嶽赤松子」、又房中之事、惟裴君少時受行耳、真誥中有「吾昔常恨此、賴解之早耳」、此語亦似是清靈言故也）

君曰、「道者混然、是生元炁、元炁成、然後有太極、太極則天地之父母、道之奧也、故道有大歸、是爲素真、故非道無以成真、非真無以成道、道不成、其素安可見乎、是以爲大歸也、見而謂之妙、成而謂之道、用而謂之性、性與道之體、體好至道、道使之然也」。〈此說人體自然、與道契合、所以天命謂性、率性謂道、修道謂教、今以道

## 「六朝道教の研究」研究班

教、使性成真、則同於道矣

君曰、「太上者、道之子孫、審道之本、洞道之根、是以爲上清真人、爲老君之師」。〈此即謂太上高聖玉晨大道君也、爲太極左真人中黃老君之師〉

君曰、「老君者、太上之弟子也、年七歲而知長生之要、是以爲太極真人」。

君曰、「太極有四真人、老君處其左、佩神虎之符、帶流金之鈴、執紫毛之節、巾金精之巾、行則扶華晨蓋、乘三素之雲」。〈此二條事出九真中經、即是論中央黃老君也、黃老爲太虛真人南嶽赤君之師、裴既師赤君、所以崇其本始、而陳其德位也〉

君曰、「道有八素眞經、太上之隱書也、在世」。

君曰、「道有九眞中經、老君之祕言也、在世」。

君曰、「道有太清上經變化七十四方」。

君曰、「道有除六天之文三天正法、在世」。

君曰、「道有黃氣陽精藏天隱月」。

君曰、「道有三元布經道眞之圖」。

君曰、「道有黃素神方四十四訣」。

君曰、「道有黃書亦「界」<sup>②</sup>長生之要」。〈長史書本、杜家剪除此一行

君曰、「道有赤丹金精石景水母」。

君曰、「道有青要紫書金根衆文」。

君曰、「道有玉清真訣三九素語」。

君曰、「道有石精金光藏景錄形、在世」。

君曰、「道有丹景道精隱地八術」。

君曰、「道有白簡素錄得道之名」。

君曰、「道有紫度炎光夜照神燭」。

君曰、「此皆道之經也、「黃」「書」〈杜家贍易此字爲經方〉世多有者、然亦是祕道之事矣」。〈天師取其名而布其化、事旨大略猶同、但每增廣其法耳、此所云黃書赤界三經、涓子所說黃赤內眞者、非今世中天師所演也〉

(1) この條、『上清太上帝君九眞中經』卷上に見える。

(2) 俞本に従つて「界」の字を補う。

眞誥卷五

甄命授第一<sup>①</sup>

道授へこれには、許長史と許掾の寫しが各々一本ずつある。題目はこのようになってゐるが、神仙家の古い書物なのか、それとも眞人が楊羲のもとに降つた時に説いたものなのかは分からない。その主旨は、すべて眞人の經典と一致している。多分きつと裴君が授けたものであらう。その理由は、(裴君が)『寶神經』を説いて、「道が言われた」と言ひ、またこの後段に「私の師とする南嶽赤松子」と言つてゐるからである。また房中術は、裴君が若い時に授けられて實修したものであり、眞誥に「私は昔いつもこのことを殘念に思つてゐたが、幸いにも早く氣づくことができた」とある。この語もやはり清靈眞人裴君の言葉と思われるからである。

君が言われた。「道は混然としており、これから元氣が生まれた。元氣が出来あがると、その後太極が現れた。太極は天地の父母であり、道の深奥である。それ故、道には大いに歸るところ(大歸)があり、これを素眞という。だから道でなければ眞を完成することなどできず、眞でなければ道を完成することはできないのである。道が完成しなければ、その素(眞)をどうして見ることができよう。そこで大歸というのである。(素眞が)目に見える状態を妙といい、完成した状態を道といい、その作用を性という。性は道がはたらくための體であり、その體が至高の道を好むのは、道がそうさせるの

である」。これは、人が自然を體して道氣と合體することを説いてゐるのである。だから、天命を性といい、性に從うことを道といい、道を修めることを教というのである。今、道をもつて教え、性を眞となすならば、道と一體になる。

君が言われた。「太上とは、道の子孫である。道の本源を審かにし、道の根本を洞察した。かくして上清眞人となり、老君の師となつた」。これはつまり太上高聖玉晨大道君のことである。太極左眞人中央黃老君の師である。

君が言われた。「老君とは太上の弟子である。七歳で長生の祕要を知り、かくして太極眞人となつた」。

君が言われた。「太極には四人の眞人がゐる。老君はその左にいて、神虎の符を佩し、流金の鈴を帶び、紫毛の符節を執り、金精の頭巾をかぶつてゐる。出歩く時には、華冠に晨蓋の車、そして三色の雲に乗る」。この二條は、『九眞中經』に基づく。つまり中央黃老君について述べてゐるのである。黃老君は太虛眞人南嶽赤君(赤松子)の師である。裴君は赤君に師事したので、そのそもその始まりを尊んで、その徳と位を述べたのである。



君が言われた。「道に『八素眞經』<sup>16</sup>がある。太上大道君の隱書である。世間に存在している」。

君が言われた。「道に『九眞中經』<sup>17</sup>がある。中央黃老君の祕言である。世間に存在している」。

君が言われた。「道に『太清上經變化七十四方』<sup>18</sup>がある」。

君が言われた。「道に『除六天之文三天正法』<sup>19</sup>がある。世間に存在している」。

君が言われた。「道に『黃氣陽精藏天隱月』<sup>20</sup>がある」。

君が言われた。「道に『三元布經道眞之圖』<sup>21</sup>がある」。

君が言われた。「道に『黃素神方四十四訣』<sup>22</sup>がある」。

君が言われた。「道に『黃書赤界長生之要』<sup>23</sup>がある」。(許長史の書寫のテキスト。杜家<sup>24</sup>のテキストはこの一行を切り取っている)

君が言われた。「道に『赤丹金精石景水母』<sup>25</sup>がある」。

君が言われた。「道に『青要紫書金根衆文』<sup>26</sup>がある」。

君が言われた。「道に『玉清眞訣三九素語』<sup>27</sup>がある」。

君が言われた。「道に『石精金光藏景錄形』<sup>28</sup>がある。世間に存在している」。

君が言われた。「道に『丹景道精隱地八術』<sup>29</sup>がある」。

君が言われた。「道に『白簡素籙得道之名』<sup>30</sup>がある」。

君が言われた。「道に『紫度炎光夜照神燭』<sup>31</sup>がある」。

君が言われた。「これらはみな道の經典である。『黃』『書』(杜家はこの二字を塗りつぶして『經方』に改めている)は世間に所有者が多いが、しかしやはり祕道の事柄である」。(張天師がその(黃書の)書名を採用して、その教化をひろめた。彼の主旨はあらずし(本來の黃書と)一致しているが、ただ事ごとにその方法を増廣している。ここで言及しているのは『黃書赤界三二經』である。涓子が説いた『黃赤内眞』<sup>32</sup>は、今の世の中の天師たちが宣傳しているもので

はない)

- (1) 甄命授 『真誥』卷一九葉一表の「真誥敘錄」に「真誥甄命授第二」とあり、「此卷竝詮導行學、誠厲愆怠、兼曉諭分挺、炳發禍福、分爲四卷」と解説している。
- (2) 眞經 『抱朴子』金丹「或有得方外說、不得其眞經、或得雜碎丹方、便謂丹方盡於此也」。
- (3) 說寶神經云道曰 『真誥』卷九葉六表。
- (4) 此後云我之所師南嶽赤松子 『真誥』卷五葉五表。
- (5) 房中之事 『抱朴子』釋滯「房中之法十餘家、或以補救傷損、或以攻治衆病、或以采陰益陽、或以增年延壽、其大要在於還精補腦之一事耳」。
- (6) 眞誥中有吾昔常恨此、賴解之早耳 『真誥』卷六葉一四表「夫眞者都無情慾之感、男女之想也、若丹白存於胸中、則眞感不應、靈女上尊不降矣、縱有得者、不過在於主者耳、陰氣之接、永不可以修至道也、吾昔常恨此、賴改之速耳、所以眞道不可對求、要言不可偶聽也、…此一條應是裴君言、某書」。
- (7) 元炁 『太平御覽』卷一天部「淮南子曰、道始生虛霏、虛霏生宇宙、宇宙生元氣、有涯垠、清陽者薄靡而爲天、重濁者凝滯而爲地」。

- (8) 太極 『周易』繫辭傳上「是故易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦」、『淮南子』覽冥訓「然以掌握之中、引類於太極之上」、注「太極、天地始形之時也」。
  - (9) 素眞 「元氣論」(『雲笈七籤』卷五六)「夫道德可道不可原、神明可生不可伸、太和可體不可化、天可行不可宣、…是知可道非自然也、可明非素眞也」。
  - (10) 天命謂性… 『禮記』中庸「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」。
  - (11) 太上高聖玉晨大道君 『眞靈位業圖』第二中位「上清高聖太上玉晨玄皇大道君」、注「爲萬道之主」、『雲笈七籤』卷一〇一に上清高聖太上玉晨大道君紀あり。『真誥』卷九葉一五表「太上帝大道玉晨君、常以正月四日二月八日…登玉霄琳房、四眄天下有志節遠遊之心者、子至其日、平旦日出時、北向再拜、亦可於靜中也、自陳本懷所願」。
  - (12) 老君 『眞靈位業圖』第三左位「太極左眞人中央黃老君」、『雲笈七籤』卷一〇一に「中央黃老君紀」あり。
  - (13) 太極眞人 『真誥』卷一四葉七表「受行玉珮金籙經、自然致太極眞人、諺云、服九靈日月華、得降我太極之家、此之謂也」。
  - (14) 太極有四眞人 『清靈眞人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「復北遊詣太極宮、見太極四眞人、四眞人見授神虎符流金火鈴」。
- 『眞靈位業圖』第三左位「太極左眞人中央黃老君、太極左眞人

紫陽左仙公中華公子」。同第三右位「太極右真人西梁子文、太極右真人安度明」。

- (15) 黃老爲太虛真人南嶽赤君之師 『眞靈位業圖』第二左位「左聖南極南嶽真人左仙公太虛真人赤松子」、注「黃老君弟子、裴君師」。

- (16) 八素眞經 道藏中に『上清太上八素眞經』がある。また、この條以降に擧げられる經典名のはほとんどは、『洞玄靈寶三洞奉道科戒營始』卷五上清大洞眞經目および『紫陽真人内傳』に見られる。

- (17) 九眞中經 『無上祕要』卷八七戸解品「四紀篇曰、九眞中經或曰飛行羽經、有之者白日戸解、…右出洞眞瓊文帝章經」。道藏中に『上清九眞中經内訣』『上清太上九眞中經終生神丹訣』がある。

- (18) 太清上經變化七十四方 『道藏關經目錄』『洞眞上清變化七十四方經、三卷、有符」。

- (19) 除六天之文三天正法 『太上三天正法經』『於是太上與後聖九玄上相青童君共序三天正法除六天之文」。

- (20) 黃氣陽精藏天隱月 道藏中に『上清黃氣陽精三道順行經（一名藏月隱日）』がある。

- (21) 三元布經道眞之圖 道藏中に『上清三元玉檢三元布經』がある。

- (22) 黃素神方四十四訣 道藏中に『上清太上黃素四十四方經』が

ある。

- (23) 黃書赤界長生之要 『太眞玉帝四極明科經』卷一「黃書赤界眞一之道、此交接之小術、亦道手之祕事」。

- (24) 杜家 『眞誥』卷二〇葉一表「顧先已寫在樓閣經、粗識眞書、於是分別選出、凡有經傳四五卷、眞誦七八篇、今猶在杜家」。

- (25) 赤丹金精石景水母 『無上祕要』卷三〇經符異名品「洞眞金根經上、上清玉霞紫映内觀上法、一名金精石景水母王胞經、一名採服日根招霞之道、右出洞眞金根經上」。

- (26) 青要紫書金根衆文 道藏中に『洞眞上清青要紫書金根衆經』がある。

- (27) 玉清真訣三九素語 道藏中に『洞眞太上三九素語玉清真訣』がある。『登眞隱訣』卷下「三九素語玉清真訣曰」、注「中品目有三九素語、魏傳目有玉清真訣、三九素語即應是此經也、但未行世、世中有僞者、無此訣也」。

- (28) 石精金光藏景錄形 『無上祕要』卷三〇經文出所品「石精金光藏景錄形神經乃是高聖玉帝所出、…右出玉珮金鑑太極金書」。

- (29) 丹景道精隱地八術 道藏中に『上清丹景道精隱地八術經』『洞眞太上丹景道精經』がある。

- (30) 白簡素錄得道之名 『太眞玉帝四極明科經』卷三「太玄都四極明科曰、玉珮金鑑太霄隱書七聖玄紀廻文九霄白簡青錄得道之名、乃元皇玉帝高聖帝君所修、祕於九天之上、七寶紫映之房」。

(31) 紫度炎光 道藏中に『洞真太上紫度炎光神元變經』がある。

(32) 涓子所說黃赤內眞 『真誥』卷一〇葉六裏「五斗內一、涓子內法、昔所授於峨嵋臺中、本其外守一玄一之屬、莫有逮其蹤者也」。

君曰、「仙道有飛步七元天綱之經、在世」。

君曰、「仙道有七變神法七轉之經」。

君曰、「仙道有大洞真經三十九篇、在世」。

君曰、「仙道有大丹隱書八稟十決」。

君曰、「仙道有天關三圖七星移度」。

君曰、「仙道有九丹變化胎精中記」。

君曰、「仙道有九赤班符封山墜海」。

君曰、「仙道有金液神丹太極隱芝」。

君曰、「仙道有五行祕符、呼魂召魄」。

君曰、「仙道有曲素決辭、以招六天之鬼、在世」。

君曰、「仙道有黃水月華、服之、化而爲月」。

君曰、「仙道有徊水玉精、服之、化而爲日」。

君曰、「仙道有鑲剛樹子、服之、化而爲雲」。

君曰、「仙道有水陽青映、服之、化而爲石」。

君曰、「仙道有赤樹白子、服之、化而爲玉」。

君曰、「仙道有絳樹青實、服之、化爲黃金」。

君曰、「仙道有琅玕華丹、服之、化爲飛龍」。

右此十七條在『靈書紫文』中、竝琅玕丹之所變化也。

君が言われた。「仙道に「飛歩七元天綱之經」<sup>①</sup>がある。世間に存在している」。

君が言われた。「仙道に「七變神法七轉之經」<sup>②</sup>がある」。

君が言われた。「仙道に「大洞真經三十九篇」<sup>③</sup>がある。世間に存在している」。

君が言われた。「仙道に「大丹隱書八稟十決」<sup>④</sup>がある」。

君が言われた。「仙道に「天關三圖七星移度」<sup>⑤</sup>がある」。

君が言われた。「仙道に「九丹變化胎精中記」<sup>⑥</sup>がある」。

君が言われた。「仙道に「九赤班符封山墜海」<sup>⑦</sup>がある」。

君が言われた。「仙道に「金液神丹」「太極隱芝」<sup>⑧</sup>がある」。

君が言われた。「仙道に「五行祕符」があり、魂を呼び魄を招く」<sup>⑨</sup>。

君が言われた。「仙道に「曲素決辭」<sup>⑩</sup>があり、それでもって六天の鬼を招く。世間に存在している」。

君が言われた。「仙道に「黃水月華」<sup>⑪</sup>がある。これを服用すると、變化して月となる」。

君が言われた。「仙道に「徊水玉精」<sup>⑫</sup>がある。これを服用すると、變化して日となる」。

君が言われた。「仙道に「鑲剛樹子」<sup>⑬</sup>がある。これを服用すると、變化して雲となる」。

君が言われた。「仙道に「水陽青映」<sup>⑭</sup>がある。これを服用すると、變化して石となる」。

君が言われた。「仙道に「赤樹白子」<sup>⑮</sup>がある。これを服用すると、變化して玉となる」。

君が言われた。「仙道に「絳樹青實」<sup>⑯</sup>がある。これを服用すると、變化して黄金となる」。

君が言われた。「仙道に「琅玕華丹」がある。これを服用すると、變化して飛龍となる」。

右の十七條は『靈書紫文』<sup>⑧</sup>の中にある。いずれも琅玕丹から變化したものである。

- (1) 飛歩七元天綱之經 『太眞玉帝四極明科經』卷三「太玄都四極明科曰、飛歩天綱躍行七元、白羽黑翮飛行羽經、天關三圖移度七星、凡三訣、太帝君太微天帝君所受登空之道、祕於高靈玉虛紫房之内、侍衛玉女二千四百人、傳於南極上元君太素三元君後世九玄帝君上相青童君、今封一通於瀛洲方丈、舊科七千年一出、若有金名帝錄玉筍青簡骨相合眞之人、七百年内、聽得三傳」。
- (2) 七變神法七轉之經 道藏中に『洞眞上清神州七轉七變舞天經』がある。
- (3) 大洞眞經三十九篇 道藏中に『上清大洞眞經』がある。
- (4) 大丹隱書八稟十決 道藏中に『洞眞太一帝君太丹隱書洞眞玄經』がある。
- (5) 天關三圖七星移度 道藏中に『洞眞上清開天三圖七星移度經』、『上清天關三圖經』がある。

(6) 九丹變化胎精中記 道藏中に『上清九丹上化胎精中記經』がある。

(7) 九赤班符封山墜海 道藏中に『太上九赤班符五帝内眞經』がある。

(8) 金液神丹太極隱芝 道藏中に『太清金液神丹經』がある。『抱朴子』金丹「昇仙之要在神丹也、…一轉之丹、服之三年得仙、二轉之丹、服之二年得仙、三轉之丹、服之一年得仙、…九轉之丹、服之三日得仙、若取九轉之丹、内神鼎中、夏至之後、爆之鼎熱、内朱兒一斤於蓋下、伏伺之、候日精照之、須臾翕然俱起、煌煌既既、神光五色、即化爲還丹、取而服之一刀圭、即白日昇天」。『眞誥』卷五葉一五表「服金丹爲大夫、服衆芝爲御史、若得太極隱芝服之、便爲左右仙公及眞人矣」。

(9) 五行祕符、呼魂召魄 『雲笈七籤』卷五「太上曲素五行祕符」太上五行祕文、與天地同生、…既受其法、天地同根、呼魂招魄、保命役神、修之九年、克登上仙」。

(10) 曲素訣辭 道藏中に『上清曲素訣辭錄』がある。

(11) 黃水月華 『太微靈書紫文琅玕華丹神眞上經』黃水月華丹法を参照。『眞誥』卷一二葉一一表「又遇桐柏眞人、授之以黃水雲漿法、得道」。

(12) 徊水玉精 『太微靈書紫文琅玕華丹神眞上經』徊水玉精丹法を参照。

(13) 鑲剛樹子 注(12)に同じ。

(14) 水陽青映 『太微靈書紫文琅玕華丹神眞上經』水陽青映液法を参照。

(15) 赤樹白子 注(12)に同じ。

(16) 絳樹青實 注(12)に同じ。

(17) 琅玕華丹 『太微靈書紫文琅玕華丹神眞上經』琅玕華丹藥種物如左を参照。

(18) 靈書紫文 『太微靈書紫文琅玕華丹神眞上經』「五老上眞太極左僊公、上啓撰集、爲靈書紫文」。『無上祕要』卷八七尸解品「六紀篇曰、靈書紫文、或曰五老寶經、有之者尸解、右出洞眞瓊文帝章經」。

君曰、「仙道有九轉神丹、服之、化爲白鵠」。〈右在茅司命傳中〉

君曰、「仙道有天皇象符、以合元炁、亦在紫文中」。

君曰、「仙道有白羽紫蓋、以遊五嶽」。

君曰、「仙道有三皇內文、以召天地神靈」。〈右世中雖有而非眞本〉

君曰、「仙道有玉珮金鑑、以登太極」。

君曰、「仙道有神虎之符、以威六天」。

君曰、「仙道有流金之鈴、以攝鬼神」。

君曰、「仙道有素奏丹符、以召六甲」。

君曰、「仙道有金眞玉光、以映天下」。

君曰、「仙道有八景之輿、以遊行上清」。

君曰、「仙道有飛行之羽、以超虛躡空」。

君曰、「仙道有紫繡毛帔、丹青飛帶」。

君曰、「仙道有白羽黑翮、以翔八方」。

君曰、「仙道有翠羽華衣、金鈴青帶」。

君曰、「仙道有曲晨飛蓋、御之、體自飛」。〈在劒經中〉

君曰、「仙道有三十七種色之節、以給仙人」。

君曰、「仙道之妙、皆有方也、能盡此道、便爲九宮真人、不但登仙而已、然道之多方各備、則可知矣」。〈此蓋能爲盡一條之道、便得九宮真人、若各各備具、則爲太極真人矣

君が言われた。「仙道に「九轉神丹」がある。これを服用すると、變化して白鶴<sup>①</sup>となる」。〈右のことは『茅司命傳』に見える〉

君が言われた。「仙道に「天皇象符」<sup>②</sup>があり、それでもって元氣と合一する。やはり、『紫文』中に見える」。

君が言われた。「仙道に「白羽紫蓋」<sup>③</sup>があり、それでもって五嶽を遊行する」。

君が言われた。「仙道に「三皇内文」があり、それでもって天地の神靈を召す<sup>④</sup>」。〈右は世間に存在するとはいえ、眞本ではない〉

君が言われた。「仙道に「玉珮金鑑」<sup>⑤</sup>があり、それでもって太極に

登る」。

君が言われた。「仙道に「神虎之符」があり、それでもって六天をおどしつける<sup>⑥</sup>」。

君が言われた。「仙道に「流金之鈴」があり、それでもって鬼神をおさめとる<sup>⑦</sup>」。

君が言われた。「仙道に「素奏丹符」があり、それでもって六甲の神を召す<sup>⑧</sup>」。

君が言われた。「仙道に「金眞玉光」<sup>⑨</sup>があり、それでもって天下に映え輝く」。

君が言われた。「仙道に「八景之輿」があり、それでもって上清を遊行する<sup>⑩</sup>」。

君が言われた。「仙道に「飛行之羽」<sup>⑪</sup>があり、それでもって虚空を超え大空に昇る」。

君が言われた。「仙道に「紫繡毛帔」「丹青飛帔」<sup>⑫</sup>がある」。



君が言われた。「仙道に「白羽黒翮」<sup>③</sup>があり、それでもって八方へ飛翔する」。

君が言われた。「仙道に「翠羽華衣」「金鈴青帶」<sup>④</sup>がある」。

君が言われた。「仙道に「曲晨飛蓋」<sup>⑤</sup>があり、これを御すると體が自然に飛翔する」。『劍經』中に見える」

君が言われた。「仙道に「三十七種色之節」<sup>⑥</sup>があり、これを仙人に與える」。

君が言われた。「仙道の妙には、みな方法がある。その道を完全なものにすれば、九宮真人となり、ただ登仙がかなうどころのことではないのである。道のさまざまな方法をそれぞれ身に備えるならば、(その結果は)言うまでもない」。(これはつまり、一つの道を完全なものにすれば九宮真人となり、もしおのおのの道すべてを完全に身に備えるならば太極真人となるのである)

(1) 白鶴 『眞誥』卷二葉三表「漢有三茅君、來治其上、時父老

又轉名茅君之山、三君往曾各乘一白鶴、各集山之三處」。

(2) 天皇象符 『皇天上清金闕帝君靈書紫文上經』「其中有生宮、宮內有大君、名桃康、字合延、著朱衣、巾紫簪冠、坐當命門、其三魂神侍側焉、大君常手執天皇象符、以合注元氣、補胎反胞」。同「太微天帝君天皇象符(符文注、一名帝君九迴元五通八開符、若禮祝於別室、當先書此符、藏以錦囊佩之、然後乃得行之)、右天皇象符、以付生宮大君桃康合延、合元上氣、理胞運精、朱書青紙、月旦月望夜半、北向服之、以左手執符、閉氣心祝曰、天帝玄書、皇象靈符、以合元氣、運精反胞、萬年嬰孩、飛仙天樞、生宮大君、披丹建朱、首戴紫簪、與我同謀」。

(3) 白羽紫蓋 『紫陽真人內傳』「乃登玄龍羽野、遇玉童十人九氣丈人、得白羽紫蓋服黃水月華法」。

(4) 三皇內文、以召天地神靈 『抱朴子』遐覽「鄭君本大儒士也、…然弟子五十餘人、唯余見受金丹之經及三皇內文枕中五行記、其餘人乃有不得一觀此書之首題者矣、他書雖不具得、皆疏其名、今將爲子說之、後生好書者、可以廣索也、道經有三皇內文天地人三卷」。

『紫陽真人內傳』「衍門子…乃出龍蹻經以授之、三皇內文以召神靈、以効百鬼」。

(5) 玉珮金鑑 道藏中に『太上玉珮金鑑太極金書上經』がある。

(6) 神虎之符、以威六天 『清靈真人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「北朝四真人、受書爲眞、佩神虎之符、以制嚴六天、授流

金之鈴、以命召衆精、杖青旄之節、以周流九宮」。

(7) 流金之鈴、以攝鬼神 前注を參照。

(8) 素奏丹符、以召六甲 『無上祕要』卷二七上清神符品「太上六甲素奏丹符、甲子素奏丹符…、甲午素奏丹符…、甲戌素奏丹符…、甲辰素奏丹符…、甲申素奏丹符…、甲寅素奏丹符…、右出洞眞七聖元紀經」。同卷九四昇紫晨品「召六甲於五行、役武卒於天丁」。道藏中に『上清瓊宮靈飛六甲左右上符』『上清瓊宮靈飛六甲錄』がある。

(9) 金眞玉光 道藏中に『上清金眞玉光八景飛經』がある。

(10) 八景之輿、以遊行上清 『無上祕要』卷九二昇上清品上「得乘八景雲輿、飛行上清、右出洞眞九眞陽符」。同卷九三昇上清品下「共致八景玉輿、載兆身、飛登上清之宮也、…右出洞眞七十四方變化上經」。

(11) 飛行之羽 道藏中に『洞眞太上飛行羽經九眞昇玄上記』がある。

(12) 紫繡毛帔、丹青飛帔 『雲笈七籤』卷五一玉珮金鑑「靈帝君、…頭建華冠、披紫繡珠帔飛羅丹帔」。『太元眞人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「君棄家獨往、離親樂仙、契闊嶮巖、冬袒山川、今故報盈繡羽紫帔丹青飛帔、使盈從容霄階、攜命玉眞」。

(13) 白羽黑翮 道藏中に『白羽黑翮靈飛玉符』『上清瓊宮靈飛六甲錄』(一名『白羽黑翮隱遊上經』)がある。

(14) 翠羽華衣、金鈴青帶 『雲笈七籤』卷五一太上曲素五行祕符

「父諱青嬰、冠九玄碧寶玄冠、衣翠羽華衣、手執青精保命祕符」。同卷五〇金闕帝君三元眞一經訣「此二人共治泥丸中、竝著赤繡華衣、貌如嬰孩始生之形」。同卷二〇反行法「玄上太微、北極紫蓋、下有太眞、遊翔九外、翠華飛裙、金鈴青帶、腰佩玉光、玄雲奄藹、賜某隱書」。

(15) 曲晨飛蓋 『太元眞人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「君披榛併景、寒凌霜雪、心求明眞、不戰不慄、今故報盈以曲晨寶蓋、瓊幃綠室、使盈遊盼九宮、靜神溫密」。

(16) 三十七種色之節 『太上飛行九神玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「凡行玉清之道、出則諸天侍軒、給玉童玉女各三千人、建三七色之節、駕紫雲飛軒」。

(17) 九宮眞人 『眞誥』卷五葉一五表「崑崙上有九府、是爲九宮、太極爲太宮也、諸仙人俱是九宮之官僚耳、至於眞人、乃九宮之公卿大夫」。

君曰、「今子既至心學道、當以道授子耳、然學者皆有師、我之所師南嶽松子、松子爲太虛眞人左仙公、谷希子爲右仙公、昔太上以德教老子、以得道、松子以道授於我、以得仙、我之得道於松子、今子欲學道、彼必試子、試而不過、是我之恥也、今既語子以得道之方、又

〔悟〕「語」汝以試觀之法、於此試而不過者、亦子之愚也、夫欲試之人、皆意之所不悟、情之所不及者而爲之、子慎之哉。」

君曰、「仙道十二試皆過而授此經、此十二事、大試也、皆太極真人臨見之、可不慎哉。」

君曰、「昔中山劉偉道學仙在嶓冢山、積十二年、仙人試之、以石重十萬斤、一白髮懸之、使偉道臥其下、偉道顏無變色、心安體悅、臥在其下、積十二年、仙人數試之、無所不至、已皆悟之、遂賜其神丹、而白日昇天」。〔此應是漢時人〕

君曰、「昔青鳥公者、身受明師之教、審仙妙之理、至於入華陰山中學道、積四百七十一歲、十二試之、有三不過、後服金鈞、而升太極、太極道君以爲試三不過、但仙人而已、不得爲真人、況俗意哉」。〔青鳥公似是彭祖弟子也〕

君曰、「大洞之道、至精至妙、是無英守素真人之經、其讀之者、無不乘雲駕龍、昔中央黃老君隱祕此經、世不知之也、子若知之、祕而勿傳、又昔周君兄弟三人、竝少而好道、在於常山中、積九十七年、精思無所不感、忽然見老公、頭首皓白、三人知是大神、乃叩頭流血、涕淚交連、悲喜自搏、就之請道、公乃出素書七卷、以與誦之、兄弟

三人俱精讀之、奄有一白鹿在山邊、二弟放書觀之、周君讀之不廢、二弟還、周君多其弟七過、其二弟內意或云仙人化作白鹿、呼周視之、周君不應、周君誦之萬過、二弟誦得九千七百三十三過、周君翻然飛仙、二弟取書誦之、石室忽有石爆成火燒去書、二人遂不得仙、今猶在常山中、陸行五嶽也、子慎之哉。」

君曰、「昔在莊伯微、漢時人也、少時好長生道、常以日入時、正西北向、閉目握固、想見崑崙、積二十一年、後服食、入中山學道、猶存此法、當復十許年後、閉目乃奄見崑崙、存之不止、遂見仙人、授以金鈞之方、遂以得道、猶是精感道應、使之然也、非此術之妙也」。

君曰、「真人隱其道妙、而露其醜形、或衣敗身悴、狀如癡人、人欲學道、作此試人、卒不可識也、不識則爲試不過、汝恆當慎此也、昔漢初有四五小兒、路上畫地戲、一兒歌曰、『著青帶、入天門、揖金母、拜木公』、到復是隱言也、時人莫知之、唯張子房知之、乃往拜之、此乃東王公之玉童也、所謂金母者、西王母也、木公者、東王公也、仙人拜王公揖王母」。

君曰、「昔有傳先生者、其少好道、入焦山石室中、積七年、而太極老君詣之、與之木鑽、使穿一石盤厚五尺許云、『穿此盤便當得道』、其人乃晝夜穿之、積四十七年、鑽盡石穿、遂得神丹、乃升太清爲南

嶽真人、此有志之士也、子其識之、若有此試、慎勿言不能也」。

君曰、「昔有黃觀子者、亦少好道、家奉佛道、朝朝拜叩頭、求乞長生、如此積四十九年、後遂服食入焦山、太極真人百四十事試之、皆過、遂服金丹、而詠大洞真經、今補仙官爲太極左仙卿、有至志者也、非佛所能致、是其中寸定矣」。(此說與傳言真奉佛事亦同)

君曰、「昔毛伯道劉道恭謝稚堅張兆期、皆後漢時人也、學道在王屋山中、積四十餘年、共合神丹、毛伯道先服之而死、道恭服之又死、謝稚堅張兆期見之如此、不敢服之、竝捐山而歸去、後見伯道道恭在山上、二人悲憫、遂就請道、與之茯苓持行方、服之、皆數百歲、今猶在山中、遊行五嶽、此人知神丹之得道、而不悟試在其中、故但陸仙耳、無復登天冀也」。(謝稚堅有三處出、一云與葛玄相隨、一云在鹿迹洞中、一即是此、未詳爲是一人、當同姓名耳)

君曰、「晉初有真人郭聲子、在洛市中作卜師、時劉石張臧四姓竝欲學道、常自歎云、『不遇明師』、明師出而已不覺、皆爲試不過、皆無所得也、常當慎此、有異不覺、便爲試不過也、人有學道之心、天網疏而不失、皆竝試人、汝深思此意慎之也」。

君曰、「昔閻成子少好長生、好學道、四十餘年後入荆山中、積七十

餘歲、爲荆山山神所試、成子謂是真人、拜而求道、而爲大蛇所噬、殆至於死、賴悟之速、而存太上想七星以却之、因而得免、後復爲邪鬼所惑、失其左目、遂不得道而絕山中、子當慎此之試、恆存於師也、猶是成子用志不專、頗有邪心故也」。

君曰、「黃子陽者、魏人也、少知長生之妙、學道在博落山中九十餘年、但食桃皮、飲石中黃水、後逢司馬季主、季主以導仙八方與之、遂以度世」。(此六國時魏、非漢後魏世也)

君曰、「有劉奉林者、是周時人、學道在嵩高山、積四百年、三合神丹、爲邪物所敗、乃行徙入委羽之山、能閉炁三日不息、於今千餘年矣、猶未升仙、猶是試多不過、道數未足故也、此人但服黃運以得不死耳、不能有所役使也」。

君曰、「昔高丘子、殷人也、亦好道、入六景山、積五百二十餘歲、但讀黃素道經、服餌朮、後合鴻丹、以得陸仙、遊行五嶽二百餘年、後得金液以升太清也、今爲中嶽真人」。(此說與劒經序亦略同)

君曰、「爲道當令三關恆調、是根精固骨之道也、三關者、口爲心關、足爲地關、手爲人關、謂之三關、三關調則五藏安、五藏安則舉身無病、昔趙叔期學道在王屋山中、時時出民間、聞有能卜者在市閭

中、叔期往見之、因語叔期曰、『欲入天門、調三關、存朱衣、正崑崙、叔期知是神人、因拜叩頭、就請要訣、因以一卷書與之、是胎精中記、拜受此書、入山誦之、後合神丹而升天、此皆前事之徵者、汝當識此言』。〔三〕關事與黃庭同、竝有說而無法

君曰、「當存五神於體、五神者謂兩手兩足頭是也、頭想恆青、兩手恆赤、兩足恆白者、則去仙近矣、昔徐季道學道在鵲鳴山中、亦時時出民間、忽見一人、着皮袴練褶、拄桃枝杖、逢季道、季道不覺之、數數非一、季道乃悟而拜謝之、因語季道曰、『欲學道者、當巾天青、咏大曆、跣雙白、徊二赤』、此五神之事也、其語隱也、大曆、三皇文是也」。(此即太素五神事也、別有經法)

君曰、「欲使心正、常以日出三丈、錯手着兩肩上、以日當心、心中閒暖則心正矣、常能行之佳、昔有姜伯眞者、學「道」在猛山中、行道採藥、奄值仙人、仙人使平倚日中、其影偏、仙人曰、『子知仙道之貴、而篤志學之、而不知心不正之爲失』、因教之如此、後遂得道」。(定錄目許先生云「姜伯眞之徒」、不知即此姜不)

(1) 俞本が「悟」を「語」に作るのに従う。

(2) 以下、『太平廣記』卷一木公傳および同卷六張子房傳にはば同

文が見える。

(3) この段、『無上祕要』卷四二修學品に同文が見える。

(4) この段、『登眞隱訣』卷中に同文が見える。

(5) 俞本に従って「道」の字を補う。

君が言われた。「今、そなたは心を盡くして仙道を學んでいるから、道をそなたに授けることにしよう。しかし、學ぶ者にはみな師というものがある。私の師は南嶽松子だ。松子は太虛眞人左仙公であり、谷希子<sup>①</sup>が右仙公である。昔、太上は徳を老子に教え、(老子は)それによって道を得、松子は道を私に授け、(私は)それによって仙道を得た。私は仙道を松子から得たのであるから、今そなたが仙道を學ぼうとすれば、彼はきつとそなたを試験するだろう。試験をされて通らなければ、私の恥である。今、私はそなたに仙道を得る方法を語り、さらに試験の方法をも語った。このようにしておいて、試験をされて通らなければ、やはりそなたが愚かなのだ。そもそも試験をしようとする人は、みな心の氣づかないところ、氣持の及ばないところに對して、それを行うものだ。この點によく用心しなさい」。

君が言われた。「仙道の十二回の試験<sup>③</sup>をすべて通ったうえで、この

經を授けられる。この十二の事柄は重大な試験である。どれもすべて、太極眞人がその場で見ている。用心しなければいけない」。

君が言われた。「昔、中山の劉偉道<sup>4</sup>は嶠家山で仙道を學んでいた。十二年の間に、仙人が試験をした。重さ十萬斤の石を一本の白髪でつりさげ、偉道をその下に寝させた。偉道は顔色ひとつ變えず、心も體も安らかに、その下に寝ていた。十二年間にわたって、仙人はしばしば試験をし、あらゆる事が試されたが、偉道は事前にすべてそうと氣づいた。かくて、神丹を賜わって白日昇天した」。(これはきつと漢の時代の人であろう)

君が言われた。「昔、青鳥公<sup>5</sup>は自ら明師<sup>6</sup>の教えを授かり、奥深い仙道の理法を詳しく知り、華陰山中に入つて仙道を學ぶようになった。四百七十一年の間に十二回試験をされ、三回通らなかつた。その後、金液<sup>7</sup>を服用して太極天に昇つた。太極道君は次のように考えた。『試験に三回通らなかつたから、仙人にしかねない。眞人になることはできない』。まして世俗の心を持つ者はなおさらのことだ」。(青鳥公は彭祖の弟子のようである<sup>8</sup>)

君が言われた。「大洞の道は、この上なく精妙であり、無英守素眞<sup>9</sup>人の經典である。これを讀む者は、誰しも雲に乗り龍に駕すること<sup>10</sup>

ができる。昔、中央黃老君はこの經典を隠し祕密にしていたので、世間では誰も知らなかつた<sup>11</sup>。そなたがもしこの經典を知つたなら、祕密にして誰にも傳えてはならぬ。また昔、周君の兄弟三人<sup>12</sup>は、そろつて若い時から仙道を好み、常山にいること九十七年、精神集中の修行をしてあらゆるものと交感できるようになった。すると突然、頭の眞白な老人が現れた。三人はそれが偉い神様<sup>13</sup>であることに氣づき、叩頭して血を流し、涙をさめざめと流し、悲しみと喜びのあまり激しく體を打ち、じきじきに道を請い求めた。老人はそこで絹に書いた書物七卷を取り出し、それを與えて讀誦させた。兄弟三人はともにこれを精讀した。突然、一頭の白鹿が山邊に現れた。二人の弟は書物を放り出してそれを見に行つたが、兄の周君は讀み續けて止めなかつた。二人の弟が歸つてきた時、兄の周君は弟たちより七回多く讀んでいた。二人の弟は内心、『もしかしたら仙人が姿を變えて白鹿になっているのかも知れない』と思い、兄の周君を呼んで様子を見せようとしたが、兄の周君は應じなかつた。周君が一萬回讀誦<sup>14</sup>し、二人の弟が九千七百三十三回讀誦することができた時、兄の周君はひらりと舞いあがつて飛仙となつた<sup>15</sup>。二人の弟が書物を手に取つて讀誦し續けていたところ、石室<sup>16</sup>の中で突然石が爆裂して火となり、書物を焼いてしまった。二人はかくて飛仙となることができず、今もなお常山にあり、陸仙として五嶽を巡っている<sup>17</sup>。そなたは用心しなさい」。

君が言われた。「そのかみの莊伯微<sup>21</sup>は漢の時代の人である。若い時から長生の道を好み、いつも日の入りの時に、西北の方角にまっすぐに向き、目を閉じて拳をしっかり握り、心の中に崑崙山<sup>22</sup>を思い描いた。それを二十一年間続け、その後、服食して中山に入つて仙道を學んだが、やはりまだこの方法を續けていた。さらに十年餘り後、目を閉じるとたちまちにして崑崙山が見えた。なおも止めずにこれを續けていたところ、仙人の姿が現れて金液の方を授けた。かくて仙道を得ることができた。これもやはり、眞心が通じて道が感應し、そのようにさせたのである。この方術がすぐれていたからではない」。

君が言われた。「眞人は道のすばらしさを隠して、醜い形姿を人前にさらすものである。ある時はぼろをまとい體はやつれ、まるで癡人のようである。人が道を學ぼうとすれば、こんなことをして人を試験するのであつて、すぐには（眞人であることを）見分けることができない。見分けることができれば、試験は通らないことになる。そなたは常にこの點に用心しなければならぬ」。

昔、漢の初めのこと、四、五人の子供が路上で地面に線を引いて遊んでいた。一人の子供が歌を唱つた。『青いスカートをはいて、天の門に入る。金母<sup>23</sup>に會釋し、木公に拜禮する』。つまり、これは隠

言であつたのである。當時の人々は誰もそのことに氣づかなかつたが、ただ張子房<sup>24</sup>だけが氣づき、そこでその子供のところへ行つて拜禮をした。それはなんと東王公の玉童<sup>25</sup>だったのである。金母<sup>26</sup>というのは、西王母のことである。木公とは、東王公のことである。仙人は東王公に拜禮をし、西王母に會釋をするというわけである」。

君が言われた。「昔、傅先生<sup>27</sup>という者がいた。若い時から仙道を好み、焦山の石室の中に入つた。七年たつた時、太極老君<sup>28</sup>がやつて來て、彼に木の錐を與え、厚さ五尺餘りの石盤に穴をあけるよう命じ、『この石盤に穴をあけたなら、ただちに仙道を體得することができ』と言つた。その人はそこで晝も夜も穿ち續けた。四十七年たつた時、錐はすりきれて石に穴があき、かくて神丹を得たうえで、太清<sup>29</sup>に昇つて南嶽眞人となつた。これは志ある人士である。そなたはこのことをよく覺えておくように。もしこのような試験があれば、決して『できない』と言つてはならぬ」。

君が言われた。「昔、黃觀子<sup>30</sup>という者がいた。やはり若い時から仙道を好んだ。家は佛道を信奉していた。（黃觀子は）毎朝、朝拜叩頭して、長生を願ひ求めた。このようにして四十九年がたち、その後、服食して焦山に入つた。太極眞人は百四十の事柄で試験したが、すべて通り、かくて金丹を服用して『大洞眞經』を詠んだ。今

は仙官に補任されて大極左仙卿になっている。すぐれた志の人物である。これは佛道によつてもたらされたものではない。彼の心に揺るぎがなかったからである。へこの話は傳含眞が佛道を信奉したことと同じである」

君が言われた。「昔、毛伯道、劉道恭、謝稚堅、張兆期は、いずれも後漢の時代の人であるが、王屋山中で仙道を學び、四十餘年の歲月を重ねて、一緒に神丹を調合した。毛伯道がまずそれを服用して死に、さらに劉道恭が服用して死んだ。謝稚堅と張兆期はこのような有様を見て、神丹を服用しようとはせず、ともに山を棄てて家にもどつた。その後、毛伯道と劉道恭が山の上にいるのを見て、二人は悲しみ驚き、かくてじきじきに道を請い求めたところ、二人に「茯苓持行方」を與えた。二人は茯苓を服用して、どちらも數百歳になり、今もなお山中にいて、五嶽を遊行している。この二人は神丹によつて仙道を體得することを知つてはいたが、試験がその中にひそんでいゝことに氣づかなかつた。だから、陸仙にしかねなかつたのである。もはや昇天できる望みはない」。謝稚堅は三箇所に出てくる。一つには葛玄と連れだつてゐるとあり、一つには鹿迹洞の中にゐるとあり、一つはここである。これらが同一人物なのか、それとも同姓同名の別人なのか、分らない」

君が言われた。「晉の初め、眞人郭聲子が洛陽の市場で占い師をしてゐた。その時、劉、石、張、臧の四氏はそろつて仙道を學びたいと思ひながら、常々、『明師に出會えない』と嘆いてゐた。明師は世に現れてゐるのに、そのことに氣づかなかつたので、いずれも試験に通らず、まったく何も得ることができなかったのである。常にこのことに用心しなければならぬ。變つたことがあるのに氣づかなければ、試験には通らないのである。人に仙道を學ぼうとする心があれば、天の網の目は粗いが取り逃すことはなく、どの人にもきまつて試験がなされるのである。そなたはこのことを深く考え、用心しなさい」。

君が言われた。「昔、閻成子は若くして長生の術を好み、仙道を學ぶのを好んだ。四十年餘り後に荆山の中に入り、七十年餘りがたつて荆山の山神に試験された。閻成子は眞人だと思ひ、禮拜して仙道を求めると、大蛇に咬まれ、あやうく死にそうな目にあつたが、幸いにも速やかにそれと氣づいて、太上道君を存思し、北斗七星を思ひ描いて大蛇を退け、それで命拾ひをした。その後、また邪鬼に惑わされて左の目を失明し、かくて得道できずに山中で死亡した。そなたはこのような試験に用心して、いつも師匠を存思すべきである。やはり、閻成子は志が一途ではなく、いささか邪心があつたからなのである」。



君が言われた。「黃子陽<sup>①</sup>は魏の人である。若くして長生の妙味を知り、仙道を學んで博落山中に九十年餘り住んでいた。ただ桃の皮を食べ、石中の黃水を飲むだけであつた。後に司馬季主に出會い、季主は「導仙八方」を與え、かくて昇仙した」。〈これは六國時代の魏であつて、漢の後の魏の時代ではない〉

君が言われた。「劉奉林<sup>②</sup>なる者がいた。周の時代の人である。嵩高山で仙道を學んで四百年がたち、三度神丹を調合したが、邪惡な物によつて駄目にされた。そこで移つて委羽山<sup>③</sup>に入り、息を止めて三日間呼吸しないでいられるようになった。今では一千年餘りになるが、まだ昇仙していない。これは、やはり試験にさつぱり合格せず、仙道の定めが足りないからである。この人は、ただ黃蓮<sup>④</sup>を服用して不死を得ただけである。(神靈を)召し使うことはできないのである」。

君が言われた。「昔、高丘子<sup>⑤</sup>は殷の人であるが、やはり仙道を好んで六景山に入り、五百二十年餘りの間、ただ『黃素道經』を讀み、朮を服餌していた。後に鴻丹を調合して陸仙となり、二百餘年の間、五嶽を巡っていた。後に金液を手に入れて太清に昇つた。今は中嶽眞人となっている」。〈この話は『劍經』序とまたば同じである〉

君が言われた。「仙道を修めるには、三關をいつも調べておかなくてはならない。これが精を根づかせ骨を固くする道である。三關とは、口が心關であり、足が地關であり、手が人關である。これら三關というのである。三關が調えば五臟は安定し、五臟が安定すれば、全身に病はないのである。

昔、趙叔期は王屋山<sup>⑥</sup>で仙道を學び、しばしば人里に出かけた。占いを善くする者が町中にいるのを聞きつけ、趙叔期は會いに出かけた。そこで(占い師は)趙叔期に語つて言つた。『天門に入ろうと望むなら、三關を調べ、朱衣<sup>⑦</sup>(の神)を存思し、崑崙<sup>⑧</sup>(頭)を正しく治めなさい』。趙叔期は神人だと氣づいて、そこで禮拜叩頭してじきじきに要訣を懇請した。それで(占い師は)一卷の書物を與えた。それが『胎精中記』<sup>⑨</sup>である。この書物を有難く頂戴して、山に入つて讀誦し、後に神丹を調合して昇天した。これはすべて昔の明白な事實である。そなたはこの言葉をよく覚えておかなくてはならない」。〈三關のことは黃庭と同じである。いずれも説明はあるけれども方法はない〉

君が言われた。「五神を體內に存思しなければならない。五神とは兩手、兩足、頭(の神)をいうのである。頭は常に青く、兩手は常に赤く、兩足は常に白いさまを思い描けば、仙人からの距離は近い。

昔、徐季道<sup>69</sup>は鵠鳴山<sup>70</sup>の中で仙道を學び、またしばしば人里に出かけた。突然、一人の人を見かけた。皮の袴と練り絹の袷を着て、桃の枝の杖をついていた。季道とは出會つていたのだが、季道はそうと氣づかず、何度もそのようなことがあつてから、季道はやつと氣づいて挨拶をした。そこで季道に語つて言つた。『仙道を學ぼうと思ふ者は、天青を頭巾とし、大曆を讀み、二つの白を蹈み、二つの赤を繞らせなくてはならない』。これは五神のことである。その言葉は隱微である。大曆とは『三皇文』のことである。へこれは「太素五神」のことである。別に經法が存在する」

君が言われた。「心を正しくさせようと思ふなら、いつも太陽が三丈ほど昇つた時に、兩手を交差させて兩肩の上につけ、太陽(の光)を心臟に當てる。心臟のあたりが暖かくなつてくれば、心は正しくなる。常時行ふことができる。よい。

昔、姜伯眞<sup>71</sup>なるものがいた。猛山の中で仙道を學び、道を歩いて藥草を採取していると、突然仙人と出會つた。仙人は(姜伯眞を)太陽が正中した時にまつすぐ立たせると、その影は片寄つてゐる。仙人は言つた。『そなたは仙道が貴いものだとして、熱心に修行してゐるが、心が正しくないと失敗することが分かつてゐない』。そこでこのように教え、その後、かくて得道した。『定録君は許邁先生を評して「姜伯眞のともがら」と言つてゐる。<sup>72</sup>。ここの姜伯眞のことか

どうかは分からない」

- (1) 谷希子 『紫陽眞人内傳』「乃登都廣、登建木、遇谷希子、受黃氣之法、太空之術、陽精三道之要」。
- (2) 太上以德教老子 『眞誥』卷五葉一裏「老君者、太上之弟子也」。
- (3) 仙道十二試 『紫陽眞人内傳』「眞人周君曰、諸應得仙道、皆先百過小試之、皆過、仙人所保舉者、乃敕三官、乞除罪名、下太山、除死籍、度名仙府、仙府乃十二大試、太極眞人下臨之、上過爲上仙、中過爲地仙、下過白尸解、都不過者、不失尸解也、尸解、土下主者耳、不得稱仙也」。
- (4) 劉偉道 『眞靈位業圖』第四右位「劉偉道」、注「漢時人」。
- (5) 青鳥公 『眞靈位業圖』第四左位「青鳥公」。
- (6) 明師 『抱朴子』勸求「夫人生先受精神於天地、後稟氣血於父母、然不得明師告之以度世之道、則無由免死」。
- (7) 金鈞 『眞誥』卷五葉一一裏「若得金鈞神丹、不須其他術也、立便仙矣」。
- (8) 但仙人而已、不得爲眞人 『眞誥』卷五葉一五表「諸仙人俱是九宮之官僚耳、至於眞人、乃九宮之公卿大夫」。
- (9) 青鳥公似是彭祖弟子也 『抱朴子』極言「又彭祖之弟子、青衣烏公、高丘子不肯來七八人、皆歷數百歲、在殷而各仙去」。

仙傳』彭祖「彭祖者、殷大夫也、姓錢名鏗、帝顓頊之孫、陸終氏之中子、歷夏至殷末、八百餘歲、常食桂芝、善導引行氣、歷陽有彭祖仙室、前世禱請風雨、莫不輒應、常有兩虎在祠左右、祠訖、地即有虎跡、云後昇仙而去」。

- (10) 無英守素真人『登真隱訣』卷上「洞房中有三真、左爲無英公子、右爲白元君、中爲黃老君、三人共治洞房中、此飛真之道、別自有經」。『紫陽真人內傳』「君乃還登常山、石室中齋戒念道、復積九十餘年中、无英君黃老君遂便授之大洞真經三十九篇」。
- 『太上黃庭外景經』中部經第二「『雲笈七籤』卷二二」「子自有之持無失」、務成子注「人人有一、有一不知守素、損本根、愛財寶」。

- (11) 乘雲駕龍『清靈真人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「大洞真經以致於朝靈之道、招神成真人之法也、乘雲駕龍、騰躍玄虛、衣繡羽、佩金真玉光、逍遙太霞、上昇九霄矣」。

- (12) 中央黃老君隱秘此經、世不知之也『洞真高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』「夫大洞之經、乃九天之奇訣、上元太素君金書之首經也、皆中央黃老君隱禁此經、世無知焉、惟太玄有金闕玉名瓊創紫簡、三元有併晨隱錄、丹臺有黃字之人、將是當必爲真人者、乃得受之」。

- (13) 周君兄弟三人『真靈位業圖』第四右位「周君」。同第六左位地仙散位「周君」、注「二人俱讀素書七卷得道」。

- (14) 大神『抱朴子』對俗「彭祖言、天上多尊官大神、新仙者位卑、所奉事者非一、但更勞苦、故不足役役於登天、而止人間八百餘年也」。

- (15) 自搏『神仙傳』劉根「余乃自陳曰、：願見哀憐、賜其要訣、神未肯告余、余乃流涕自搏重請」。

- (16) 素書『晉書』卷四九嵇康傳「康又遇王烈、共入山、烈嘗得石髓如飴、即自服半、餘半與康、皆凝而爲石、又於石室中見一卷素書、遽呼康往取、輒不復見」。

- (17) 誦之萬過『真誥』卷五葉一五表「大洞真經、讀之萬過便仙」。

- (18) 翻然飛仙『抱朴子』對俗「翻然凌霄、背俗棄世」。同金丹「若復欲昇天者、乃可齋戒、更服一兩、便飛仙也」。

- (19) 石室『列仙傳』赤松子「往往至崑崙山上、常止西王母石室中」。

- (20) 陸行五嶽『無上祕要』卷七八地仙藥品「亦能身生光澤、還白童顏、役使千神、得爲地仙、陸行五嶽、遊浪名山、：右出洞真太上智慧經」。

- (21) 莊伯微『真靈位業圖』第四左位「莊伯微」、注「漢時人」。

- (22) 正西北向『真誥』卷二葉五表「吾昔受此法、常向西北存之耳、西北存如小爲易見、可明示如此」、注「西北爲天地之爽、內照之玄門也」。

- (23) 閉目握固『真誥』卷五葉一一表「常以夜半時、去枕平臥、握固放體、氣調而微者、身神具矣、如有不具、便速起燒香、平坐」。

閉目、握固兩膝上、心存體神」。

- (24) 崑崙 『海內十洲記』「崑崙號曰崑崙、在西海之戌地、北海之亥地、去岸十三萬里、…積石園南頭是王母居、…但當心有觀於崑崙也」。

- (25) 道妙 『抱朴子』至理「夫道之妙者、不可盡書、而其近者又不足說」。

- (26) 入天門 『淮南子』原道訓「昔者馮夷、大丙之御也、乘雲車、入雲蜺、游微霧、驚恍惚、…經紀山川、蹈騰崑崙、排闔闔、淪天門、注「排猶斥也、淪、入也、闔闔、始升天之門也、天門、上帝所居紫微宮門也」、『太清真人傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「周宣王時、郊聞採薪之人行歌曰、巾金巾、入天門、呼長精、歛玄泉、鳴天鼓、養泥丸、時人莫能知之、惟老君曰、此活國中人、其語祕矣、斯皆修習無上正真之道也」。

- (27) 金母 『南嶽魏夫人傳』(『太平廣記』卷五八)「於是龜山九虛太真金母、金闕聖君南極元君共迎夫人、白日昇天」。

- (28) 張子房 『真靈位業圖』第四左位「張子房」、『真誥』卷一四葉一六裏「服金丹而告終者、臧延甫張子房墨狄子是也」。

- (29) 東王公 『海內十洲記』「扶桑在碧海之中、地方萬里、上有太帝宮、太真東王公所治處、地多林木、葉皆如桑」、『真誥』卷一四葉一九裏「八滄山高五千里、周市七千里、與滄浪方山相連比、其下有碧水之海、山上有乘林真人鬱池玄宮、東王公所鎮

處也」。

- (30) 玉童 『清靈真人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「至三月、奄有仙人、乘白鹿、從玉童玉女各七人、從天中來下在庭中」。

- (31) 王母 張衡『思玄賦』(『文選』卷一五)「聘王母於銀臺兮、羞玉芝以療飢」。

- (32) 傅先生 『真靈位業圖』第四右位「南嶽真人傅先生」。

- (33) 太極老君 『雲笈七籤』卷三天尊老君名號歷劫經略「天皇氏後而地皇氏興焉、太極老君又授地皇內經十四篇」。

- (34) 太清 『淮南子』精神訓「若此人者、抱素守精、蟬蛻蛇解、游於太清、輕舉獨往、忽然入冥」、『無上祕要』卷四靈山品「太清天中有浮絕空山、三天神王所治、大道真氣之所結、…右出玉真大洞玉經」。

- (35) 黃觀子 『真靈位業圖』第三左位「太極左卿黃觀子」。

- (36) 朝拜 『登真隱訣』卷中「右前至此凡三十七事、竝朝拜攝養施用起居之道」。

- (37) 補仙官 『神仙傳』彭祖「彭祖曰、欲舉形登天、上補仙官、當用金丹」。

- (38) 傅含真奉佛事 『真誥』卷一三葉五裏。

- (39) 毛伯道、劉道恭、謝稚堅、張兆期 『真靈位業圖』第四左位「毛伯道、劉道恭、注「二人王屋山得道」。同第六右位地仙散位「謝稚堅」。同第六左位地仙散位「張兆期」、注「費長房之師」。

- (40) 茯苓 『重修政和證類本草』卷二木部上品「茯苓、味甘、平、無毒、主胸脅逆氣、憂悲、驚邪、恐悸、心下結痛、寒熱、煩滿、欬逆、口焦舌乾、利小便、久服、安魂養神、不飢延年、一名伏菟」。
- (41) 遊行五嶽 『神仙傳』劉根「夫仙道有昇天躡雲者、有遊行五嶽者、有服食不死者、有屍解而仙者」、『紫陽真人內傳』「遊行五嶽、或造太清、役使鬼神、中仙也」。
- (42) 陸仙 『抱朴子』仙藥「昔仙人八公、各服一物以得陸仙、各數百年、乃合神丹金液而昇太清耳」。
- (43) 登天 注(14) 參照。
- (44) 一云與葛玄相隨 『真誥』卷一二葉三表。
- (45) 一云在鹿迹洞中 『真誥』卷一四葉三裏。
- (46) 未詳爲是一人、當同姓名耳 『真誥』卷一四葉四表注「中君答長史問葛玄云、在蓋竹山、恆與謝稚堅相隨、今稚堅乃在此、不知爲去來往還、爲當兩人同姓名也」。
- (47) 郭聲子 『真靈位業圖』第四右位「郭聲子」、注「洛市巾卜」。
- (48) 天網疏而不失 『老子』第七十三章「天網恢恢、疎而不失」。
- (49) 山神 『抱朴子』金丹「若有道者登之、則此山神必助之爲福、藥必成」、『真誥』卷一〇葉二四表「學道慎勿言、有多爲山神百精所試」。
- (50) 邪鬼 『登真隱訣』卷中「邪鬼則天地閒精物魍魎害人者也」。
- (51) 黃子陽 『真靈位業圖』第六地仙散位「黃子陽」、注「一云魏夫人食桃皮師」、『神仙傳』に董子陽として見える。
- (52) 桃皮 『雲笈七籤』卷四一沐浴七事獲七福「五香者、一者白芷、能去三尸、二者桃皮、能辟邪氣」、『真誥』卷九葉一四表「其法用竹葉十兩、桃皮削取白四兩」。
- (53) 劉奉林 『真靈位業圖』第六地仙散位「劉奉林」、注「周時人、服黃蓮」。
- (54) 邪物 『禮記』祭統「及其將齊也、防其邪物、訖其嗜欲、耳不聽樂」。
- (55) 委羽之山 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七) 十大洞天「第二委羽山洞、周迴萬里、號曰大有空明之天、在台州黃巖縣、去縣三十里、青童君治之」。
- (56) 閉炁 『抱朴子』釋滯「予從祖仙公、每大醉及夏天盛熱、輒入深淵之底、一日許乃出者、正以能閉炁胎息故耳」。
- (57) 道數 『上清大洞真經』第三章「七覺承道數、歡熙神風回」。
- (58) 黃蓮 『抱朴子』仙藥「玄中夏方、楚飛廉澤瀉地黃黃連之屬、凡三百餘種、皆能延年、可單服也」、『重修政和證類本草』卷七草部上品之下「黃連、味苦、寒、主熱氣、目痛、背傷泣出、明目、腸澼、腹痛下痢、婦人陰中腫痛、久服、令人不忘、一名王連」。
- (59) 役使 『抱朴子』金丹「元君者、大神仙之人也、能調和陰陽、

役使鬼神風雨」。

- (60) 高丘子 『眞靈位業圖』第四左位「中嶽真人高丘子」。『眞誥』卷一四葉一六表「吞琅玕之華而方營丘墓者、衍門子高丘子洪涯先生是也、…高丘子墓在中山開喜縣、…而不知高丘子時以尸解入六景山、後服金液之末、又受服琅玕華於中山、方復託死、乃入玄州、受書爲中嶽真人、于今在也」。また、注(9)の『抱朴子』極言を参照。

- (61) 服餌朮 『眞誥』卷一三葉一四裏注「既有服餌、使須藥具。『重修政和證類本草』卷六草部上品之上「朮、味苦甘、溫、無毒、主風寒、濕痺、死肌、瘰癧、止汗、除熱、消食、…作煎餌、久服、輕身延年不飢、一名山薊」。

- (62) 劍經序 『眞誥』卷一六葉二三裏を参照。

- (63) 固骨 『雲笈七籤』卷五二・九眞行事訣「口吐白氣、固骨凝筋、白骨不朽、筋亦不泯」。

- (64) 三關者… 『上清黃庭內景經』三關章第十八(『雲笈七籤』卷一一)「三關之中精氣深、九微之內幽且陰、口爲心關精神機、足爲地關生命基、手爲人關把盛衰」。

- (65) 王屋山 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)十大洞天「第一王屋山洞、周迴萬里、號曰小有清虛之天、在洛陽河陽兩界、去王屋縣六十里、屬西城王君治之」。

- (66) 朱衣 『太上黃庭外景經』上部經第一(『雲笈七籤』卷一二)

「黃庭中人衣朱衣」。

- (67) 崑崙 『太上黃庭外景經』上部經第一(『雲笈七籤』卷一二)「子欲不死修崑崙」、注「頭爲崑崙、道治其中」。

- (68) 胎精中記 『上清九丹上化胎精中記經』「凡上學之士、莫不先解身中三關之結、解結之道、又當常以結胎之月、哺養本元、令死節沈消」。

- (69) 徐季道 『眞靈位業圖』第四右位「徐季道」、注「鶴鳴山」。『雲笈七籤』卷一一〇に徐道季の傳あり。

- (70) 鶴鳴山 『神仙傳』張道陵「聞蜀人多純厚、易可教化、且多名山、乃與弟子入蜀、住鶴鳴山、著作道書二十四篇」。

- (71) 太素五神 『雲笈七籤』卷五二・五神行事訣「鶴鳴時、向東平坐、臨目存青炁從日中來、忽入頭泥丸中、泥丸中有兩青煙、復各從目中出、變成二童子如嬰兒、上下青衣、左目名飛靈、在我左、右目名晨嬰、在我右、各吐青炁、灌繞我身、洞徹內外、極念良久、叩齒九通、嚙液九過、微祝曰、…向日平坐、臨目握固、存日中有兩赤氣、來各入手掩中、變成赤童如嬰兒、上下赤衣、左手名按生、在我左手中、右手名方盈、在我右手中、各吐赤炁、灌入我口中、極念良久、叩齒嚙液各九過、微祝曰、…」。
- (72) 姜伯眞 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「姜伯眞」、注「一云在孟山學道」。『雲笈七籤』卷一一一に姜伯眞の傳あり。
- (73) 定錄目許先生云姜伯眞之徒 『眞誥』卷四葉九裏「阿映遂能絕

志山林、…乃翁道遠之疇匹、姜伯眞之徒也」。

君曰、「常以夜半時、去枕平臥、握固放體、氣調而微者、身神具矣、如有不具、便速起燒香、平坐閉目、握固兩膝上、心存體神、使兩目中有白炁如鷄子大在目前、則復故也、五日一行之。」（此卽二十四神中事也）

君曰、「食草木之藥、不知房中之法及行炁導引、服藥無益也、終不得道、若至志感靈、所存必至者、亦不須草藥之益也、若但知行房中導引行炁、不知神丹之法、亦不得仙也、若得金鈞神丹、不須其他術也、立便仙矣、若得大洞真經者、復不須金丹之道也、讀之萬過、畢便仙也、房中之術導引行氣、世自有經、不復一二說之（此謂徒服藥存修、而交接之事不絕、亦不得長生、非言都不爲者、若都不爲、止服藥、皆能得仙、經曰、『得道者皆隱穀蟲之法、而見三尸之術』、夫穀蟲死、則三尸枯、三尸枯、自然落矣、殺穀蟲自有別方、得者祕之。」（此卽蘇傳中初神丸方也、其餘雜法、皆不及此也）

君曰、「人生有骨錄、必有篤志、道使之然、若如青光先生谷希子南嶽松子長里先生墨羽之徒、皆爲太極眞人所友、或爲太上天帝所念者、興雲駕龍以迎之、故不學道而仙自來也、過此以下、皆須篤志也」。

（案此諸人學道、皆有事迹、竝經辛勲、而云「不學自得」、其義未了、墨羽應是墨翟、或是木羽也）

君曰、「然則學道者有九患、皆人之大病、若審患病、則仙不遠也、患人有志無時、有時無友、有友無志、有志不遇其師、遇師不覺、覺師不勲、勲不守道、或志不固、固不能久、皆人之九患也、人少而好道、守固一心、水火不能懼其心、榮華不能惑其志、修真抱素、久則遇師、不患無也、如此則不須友而成、亦不須感而動也、此學仙之廣要言也、汝當思此」。

君曰、「夫喜怒損志、哀感損性、榮華惑德、陰陽竭精、皆學道之大忌、仙法之所疾也、雖還精胎息、僅而補之、內虛已徹、猶非本眞、莫若知而不爲、爲而不散、此仙之要道、生之本業也」。

君曰、「欲得延年、當洗面精心、日出二丈、正面向之、口吐死炁、鼻嚕日精、須鼻得嚏便止、是爲炁通、亦以補精復胎、長生之方也」。

君曰、「食慎勿使多、多則生病、飽慎便臥、臥則心蕩、心蕩多失性、食多生病、生病則藥不行、欲學道者、慎此未服食時也」。

君曰、「式規之法、使人目明、久而徹視、常以甲子之旬取東流清

水、合真丹以洗目、日向清明平旦三七過、常行之佳」。《此事一出二十四神中、彼謂之拂童、而用庚午日中時也》

君曰、「欲爲道者、目想日月、耳響師聲、口恆吐死氣取生炁、體象五星、行恆如跏趺、心存思長生、慎笑節語、常思其形、要道也」。

君曰、「七五之法、常當存之、五者在身、七者在經」。

君曰、「世有下土惡強之鬼、多作婦女、以惑試人、若有此者、便閉恚惡天關之中衡輔之星、具身神、正顏色、定志意、熟視其規中珠子、濁不明者則鬼試也、知鬼試、則思七星在面前、亦可在頭上、以却之、若規中方明者、仙道人也、悟者便拜之、不悟、爲試不過、若遇邪而謂真人、亦是不過之例也、子慎之焉」。《邪正相亂、此最試之難者》

君曰、「飲食不可卒斷、但當漸減之耳、十日令減一升、則半年便斷矣、斷穀自有方、世多有者、不復重說之、世人之食桃棗以補身、不知桃皮之勝也、桃皮別自有方」。

君曰、「斷穀入山、當食白石、昔白石子者、以石爲糧、故世號曰白石生、此至人也、今爲東府左仙卿、黃白石自有方也、白石之方、白石生所造也、又善太素傳、所謂白石有精、是爲白石生也」。《此方

在世》

君曰、「太素傳者、道書也、學此應奉太上老君上清真人、此皓然虛映景中之道、非仙之尊也、老子所謂谷神是也」。

君曰、「王屋山、仙之別天、所謂陽臺是也、諸始得道者、皆詣陽臺、陽臺是清虛之宮也、欲入山者、此山難尙也、下生鮑濟之水、水中有石精、得而服之、可長生」。《此山在河內泌水縣、卽濟水所出之源也》

君曰、「大洞者、神州是也、神州別有三山、三山有七宮、七宮有七變、朝化爲金、日中化爲銀、暮化爲銅、夜化爲光、或化爲山、或化爲水、或化爲石、謂之七變、七變有七經、七經有二十一玉童隨此書、故曰、『大洞真經、讀之萬過便仙』、此仙道之至經也」。

君曰、「閭野者、閭風之府是也、崑崙上有九府、是爲九宮、太極爲太宮也、諸仙人俱是九宮之官〔遼〕《謂應作僚字》耳、至於真人、乃九宮之公卿大夫、仙官有上下、各有次秩、仙有左右府、而有左右公左右卿左右大夫左右御史也、明大洞爲仙卿、服金丹爲大夫、服衆芝爲御史、若得太極隱芝服之、便爲左右仙公及真人矣」。

君曰、「有尸解乃過者、乃有數種、竝是仙之數也、尸解之仙、不得



御華蓋、乘飛龍、登太極、遊九宮也。〔此謂自然得尸解爲地下主者之類耳、非云託化遷變之例也〕

君曰、「陽丹九轉、世人皆有此術、不復說之。〔此謂房中之事耳、陽丹或應作陰丹〕」

君曰、「在人間學生、唯當服藥、子不斷穀、則大洞未可得聞、斷穀之法、世自有方」。

- (1) この段、『登眞隱訣』卷中に同文が見える。
- (2) この段、『無上祕要』卷七修眞養生品に同文が見える。
- (3) この段、『登眞隱訣』卷中に同文が見える。
- (4) この段、『登眞隱訣』卷中に同文が見える。
- (5) この段、『登眞隱訣』卷中に同文が見える。
- (6) この段、『登眞隱訣』卷中に同文が見える。

君が言われた。「いつも夜半に枕を取り去って樂に横になり、拳をしっかりと握って體をゆったりとさせ、氣が調って微かになれば體内神が備わる。もし備わらなければ、すぐに起き上がって焼香し、

樂に坐つて目を閉じ、兩膝の上で拳をしっかりと握り、心に體内神を存思する。兩目の中の卵ほどの大きさの白氣が目の前にあるようにさせれば、もどどおりに恢復する。五日に一度實行せよ。〔これは『二十四神(經)』中の事柄である〕

君が言われた。「草木の藥を服用しても、房中術や行氣や導引(の術)を知らなければ、服藥しても無益であり、結局得道できない。もし眞摯な志が神靈を感動させ、存思したものが必ずやって來るならば、草木藥の藥效は必要ない。もしただ房中や導引や行氣を行うことを知るだけで、神丹の法を知らないなら、やはり仙道を體得できない。もし金液神丹を手に入れたならば、他の道術は必要ない。たゞどこに仙人となる。もし『大洞眞經』を手に入れたならば、もはや金丹の道は必要がない。一萬回讀誦し終われば、すぐに仙人となる。房中術や導引や行氣などは、世間に經典が存在しているので、もう一々説明しない〔これは服藥して道術を實踐するだけで、交接を止めなければ、やはり長生を得られないことを言っているのである。かといって、まったく交接しないと言っているのではないのは、もしまったくしないのなら、ただ服藥するだけで、みな仙人となれることになるからである〕。經に、『仙道の體得者は、みな穀蟲の方法を隠し、三戸の道術を明らかにしている』とある。そもそも穀蟲が死ねば三戸はひからび、三戸がひからびると自然と(體外に)出て

しまう。穀蟲を殺すには、別の處方が存在する。手に入れた者は祕密にせよ。〈これは『蘇林傳』中の「初神丸方」のことである。その他のさまざまな雑多な方法は、すべてこれには及ばない〉

君が言われた。「生まれながらにして骨録<sup>⑧</sup>のある人には、必ず眞摯な志がある。道がするようにさせるのである。青光先生、谷希子、南嶽赤松子、長里先生、墨羽のような輩は、いずれも太極眞人が友とし、あるいは太上天帝が心にかける人々で、雲を湧き起し龍を御して迎えにやってくる。だから仙道を學ばなくても仙人が自然とやってくるのである。これより下の者は、眞摯な志が必要である」。

〔按ずるに、これらの人々の仙道修行については、いずれも事跡が残っていて、そろって辛酸苦勞をなめている。しかるに、「學ばないで自然に得道した」と言っているのは、その意味がまだよく分からない。墨羽とはきつと墨翟<sup>⑨</sup>のことであろう。あるいは木羽<sup>⑩</sup>のことかも知れない〕

君が言われた。「そうであるならば、仙道を學ぶには九つの患いがある。すべて人々にとっての重大な病である。もしこの病を明らかにすれば、仙人と遠く隔たつてはいない。人を苦しめる病とは、志があつても時間がない、時間があつても友人がいない、友人がいても志がない、志があつても明師に出會わない、明師に出會つてもそ

れと覺らない、明師であると覺つても勵まない、勵んでも道を守らない、あるいは志が堅固でない、(志が)堅固でも持續できない。これらすべてが人々にとっての九つの患いである。若い時から仙道を好み、ひたむきな心を固く守り、水火もその心を恐れさせることはできず、榮華もその志を惑わせることはできず、眞理を修め純朴な志を抱く人は、長い時間のうちには明師に出會い、(明師が)いないことを心配する必要はないのである。このようであれば友人を必要とせずに成就し、(神仙との)交感が必要とせずに發動するのである。これは仙道を學ぶための普遍的で緊要な言葉である。そなたはこの言葉をよくかみしめなくてはならない」。

君が言われた。「そもそも喜びや怒りは志を損ない、悲しみや傷み(の氣持)は性を損ない、榮華は徳を惑わせ、交接は精を盡きさせる。これらはすべて仙道を學ぶうえの重大な禁忌であり、仙道の憎むところのものである。還精や胎息<sup>⑪</sup>によつてほんのわずか補つたとしても、内虛の病がすでに浸透してしまつていては、やはり本物ではないのである。(還精や胎息を)知つていても實行せず、實行しても放縱でない方がよいのである。これは仙人となるための重要な道であり、生命の本來の務めである」。

君が言われた。「壽命を延ばしたいと思うなら、顔を洗い心をさつ

ぱりとし、太陽が二丈の高さに上ればそれとまっすぐに向きあい、口から死氣<sup>⑮</sup>を吐き出し、鼻から太陽の精<sup>⑰</sup>を吸い、鼻からくしゃみが出れば止める。これを氣通とよぶ。こうして精氣を補<sup>⑱</sup>胎を恢復させもするのであって、長生の方法である」。

君が言われた。「食事はくれぐれも多くとり過ぎないように用心せよ。多くとり過ぎると病氣になる。腹が一杯になれば、すぐ横にならないように用心せよ。横になれば心がふらふらする。心がふらふらすれば、しばしば本性が失われる。食事を多くとり過ぎると病氣になり、病氣になると藥の運りが悪くなる。仙道を學ぼうと思う者は、まだ服食を行わぬ先に用心するものだ」。

君が言われた。「式規の法は、人の目を明らかにし、長くやっていくうちに徹底的に見通せるようになる。絶えず甲子の日を含む旬日<sup>⑲</sup>に東流する清水<sup>⑲</sup>を汲みあげ、眞丹<sup>⑳</sup>とまぜて目を洗う。毎日、すがすがしい夜明け方<sup>㉑</sup>に二七の十四回やる。絶えず行うのがよい」。(このことは『二十四神經』にも出ている。そちらでは拂童とよび、しかも庚午の日の太陽が正中する時を用いる)

君が言われた。「仙道を實踐しようと思う者は、目には太陽と月を思い描き、耳には先生の聲を響かせ、口からは絶えず死氣を吐き

出して生氣を取りこみ、五星を身にかたどり、歩く時には絶えず空中を散歩するようにし、心には長生のさまをありありと思い描き、笑うことを慎み言葉をはかえめにし、絶えず神の姿を思い描くこと、これが要道である」。

君が言われた。「七五の法は、五が肉體に存し、七が經典に存するのを絶えず存思すべきである」。

君が言われた。「世間では、地上の強惡な幽鬼がしばしば女性に化けて人を迷わせ試すことがある。もしこれが現れたならば、すぐに息を止めて天關の中の衡星と輔星<sup>㉒</sup>とを存思し、體內神を備え、顔つきをきりつとひきしめ、氣持を落ち着かせて、相手の目玉の中の瞳をじっと見つめる。濁<sup>㉓</sup>っていて明るくなければ、幽鬼が試しているのである。幽鬼が試しているのだと氣づいたなら、七星が面前に存在する――または頭上に存在するのもよい――さまを思い描いておい拂う。もし目玉の中(の瞳)が四角で明るければ、それは仙道の體得者だ。そうと氣づけばすぐに拜禮する。氣づかなければ不合格である。もし邪鬼に出會いながら眞人だと思ふようでは、やはり不合格のなりである。そなたは用心するように」。(邪と正とはまぎらわしい。これがとりわけ試験の難儀なところである)

君が言われた。「飲食はにわかには断つわけにゆかぬ。ただ段階的に減らしてゆくべきだ。十日ごとに一升ずつ減らしてゆけば、半年で断てる。穀物を断つにはそれなりに處方がある。世間に多く存在するものについては、ことあらためて繰り返し説くことはしない。世間の人間は桃櫛を食べて體力を補うが、桃皮がまざっていることを知らぬ。桃皮については別に處方がある」。

君が言われた。「穀物を断ち山に入れば、白石を煮て食べるべきである。昔、白石子<sup>⑨</sup>なる者、石を糧としたので、それで世間では白石生とよんだ。これはすぐれた人物である。今は東府の左仙卿<sup>⑩</sup>となっている。白石を煮るにはそれなりに處方がある。白石に關する處方は白石生が發明したものである。(彼は)また『太素傳』<sup>⑪</sup>に通曉した。いわゆる白石に精がある、とは白石生のことである」。(この處方は世間に存在する)

君が言われた。『太素傳』とは道書である。これを學ぶには、太上老君と上清真人にお仕えしなければならぬ。これは純白無垢で澄みきった景中の道<sup>⑫</sup>ではあるが、仙道として尊いものではない。老子のいわゆる谷神<sup>⑬</sup>がそれである」。

君が言われた。「王屋山は仙界の別天である。いわゆる陽臺<sup>⑭</sup>がそ

れである。およそ初めて仙道を體得した者はすべて陽臺にやって来る。陽臺は清虛(小有天)の宮殿である。山に入ろうと思う者にとつて、この山よりすぐれたところはない。麓には鮑濟水が生じ、川の中には石の精<sup>⑮</sup>があつて、それを手に入れて服用すれば長生がかなう」。(この山は河内郡泌水縣にある。つまり濟水が流れ出る源である)<sup>⑯</sup>

君が言われた。「大洞とは神州<sup>⑰</sup>がそれである。神州には別に三山があり、三山には七つの宮殿があり、七つの宮殿には七つの變化がある。朝には變化して金となり、太陽が中天にかかると變化して銀となり、日暮れには變化して銅となり、夜には變化して光となり、あるいは變化して山となり、あるいは變化して水となり、あるいは變化して石となる。これを七つの變化とよぶ。七つの變化には七つの經典があり、七つの經典には二十一人の玉童がこの書物に隨侍する。だから、『大洞眞經』はこれを萬遍讀めばただちに仙人となる』というのであつて、これは仙道の中の至上の經典である」。

君が言われた。「閭野とは閭風の役所<sup>⑱</sup>がそれである。崑崙山の山上に九つの役所があり、それが九宮であつて、太極が太宮である。およそ仙人はすべて九宮の官(遼)〈きつと「僚」の字であろう〉である。眞人はといえば、九宮の公、卿、大夫である。仙官には上下があり、それぞれにランクがある。仙界には左右の役所があつて、左

右の公、左右の卿、左右の大夫、左右の御史がいる。『大洞眞經』に明るれば仙卿となり、金丹を服用すれば大夫となり、さまざまの靈芝を服用すれば御史となる。もし太極の隱芝を手に入れて服用すれば、ただちに左右の仙公および眞人となる」。

君が言われた。「尸解してどうにか合格する者には數種類があり、すべて仙人のうちに數えられる。尸解仙は華蓋の車を馭し、飛龍に乗り、太極に登り、九宮に遊ぶことはできぬ」。(これは自然に尸解を遂げて地下主者となる類の者のことを言っているのである。變化に託して姿を消してしまう仙人の場合について言っているのではない)。

君が言われた。「陽丹の九轉<sup>(4)</sup>については、世間の人間がすべてこの術を心得ているから、ことあらためて説くことはしない」。(これは房中術のことについて言っているのである。陽丹はあるいは陰丹に作るべきなのかも知れない)。

君が言われた。「世俗の中に身を置いて長生を學ぶには、ただひたすら服藥を行うべきである。そなたが穀物を斷たなければ、『大洞眞經』は耳にすることができない。斷穀のやり方については、世間にそれなりに處方がある」。

(1) 身神 『無上祕要』卷五に身神品あり。

(2) 體神 『雲笈七籤』卷九一・七傷「仙眞高逝、邪魔攻身、走作形景、飛散體神」。

(3) 二十四神中事 『太微帝君二十四神回元經』を參照。

(4) 食草木之藥 『抱朴子』金丹「雖呼吸道引及服草木之藥、可得延年、不免於死也、服神丹令人壽無窮已」。同仙藥「仙經曰、雖服草木之葉、已得數百歲、忽怠於神丹、終不能仙」。同極言「不得金丹、但服草木之藥及修小術者、可以延年遲死耳、不得仙也」。

(5) 房中之法及行炁導引 『抱朴子』至理「服藥雖爲長生之本、若能兼行氣者、其益甚速、若不能得藥、但行氣而盡其理者、亦得數百歲、然又宜知房中之術、所以爾者、不知陰陽之術、屢爲勞損、則行氣難得力也」。同微旨「知屈伸之法者、則曰唯導引可以難老矣」。

(6) 感靈 『雲笈七籤』卷四六祕要訣法三天正法祝魔神第十「凡道士隱跡山林、精思感靈」。

(7) 存修 『眞誥』卷一〇葉二二裏「凡存修上法、禮祝之時、皆先叩齒、上下相叩、勿左右也」。

(8) 殺穀蟲自有別方 『紫陽眞人內傳』「又知導引服氣、吞景嚙漿、

- 不復須陰丹內術補胎之益也、然猶三蟲未壞、三尸未死、故導引服氣、不得其理、可先服制蟲細丸、以殺穀蟲、蟲有三名、一名青古、二名白姑、三名血尸、謂之三蟲、在內令心煩滿、意志不開、所思不固、失食則飢、悲愁感動、精志不至、仍以飲食不節斷也、雖復穀斷、人體重滯、奄奄淡悶、所夢非眞、顛倒顛錯、邪俗不除、皆由於蟲在其內、搖動五藏故也、殺之方、用附子五兩、麻子七升、地黃六兩、茱萸根大者七寸、朮七兩、桂四兩、雲芝英五兩、凡七種、先取菰蒲根、煮醱作酒、使清醇重美一斗半、以七種藥咬咀、內器中漬之、亦可不用咬咀、三宿乃出、暴之令燥、又取煎酒汁漬之、三宿又出暴之、須酒盡乃止、暴令燥、內鐵臼中擣之下、細從令成粉、取白蜜和之、令可丸、以平旦東向、初服二丸如小豆、漸益一丸乃可至十餘丸也、治腹內疥實上氣、心胸結塞、益肌膚、令體輕有華光、盡一劑則穀蟲死、蟲死則三尸枯、枯則自然落矣、亦可數作、不限一劑也」。
- (9) 蘇傳中…『玄洲上卿蘇君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)を参照。
- (10) 骨錄 『上清太上帝君九眞中經』卷下「非勤心好眞、宿有飛玄天仙之骨錄者、莫能得而見聞也」。
- (11) 墨翟 『神仙傳』に傳あり。
- (12) 木羽 『列仙傳』に傳あり。
- (13) 不須感而動 『周易』繫辭傳上「寂然不動、感而遂通天下之故」。
- (14) 喜怒損志…『雲笈七籤』卷三三學仙雜忌「夫喜怒哀損志、哀樂

- 害性、榮華感德、陰陽竭精、皆學道之人大忌、仙法之所疾也」。
- (15) 還精胎息 『抱朴子』對俗「仙經曰、服丹守一、與天相畢、還精胎息、延壽無極、此皆至道要言也」。同釋「其大要者、胎息而已、得胎息者、能不以鼻口嚙吸、如在胞胎之中、則道成矣」。
- (16) 死炁 『抱朴子』釋滯「一日一夜有十二時、其從半夜以至日中六時爲生炁、從日中至夜半六時爲死炁、死炁之時、行炁無益也」。
- (17) 日精 『上清黃庭內景經』口爲章第三(『雲笈七籤』卷一一)「口爲玉池太和官」、注「…微祝曰、玉清高上、九天九靈、化液在玄、下入胃清、金和玉映、心開神明、服食日精、金華充盈」。
- (18) 補精 『雲笈七籤』卷七四太上巨勝腴羹五石英法「又雲腴之味、香甜異美、強骨補精、鎮生五藏、守炁凝液、長魂養魄、眞上藥也」。
- (19) 徹視 『抱朴子』仙藥「杼木實之赤者、餌之一年、老者還少、令人徹視見鬼」。
- (20) 甲子之旬 『抱朴子』雜應「又中嶽道士鄒元節食六戊之精、亦大有效、假令甲子之旬、有戊辰之精、則竟其旬十日、常向辰地而吞氣、到後甲復向其旬之戊也」。
- (21) 東流清水 『抱朴子』金丹「受之(黃帝九鼎神丹經)者、以金人金魚投於東流水中以爲約、啖血爲盟」。
- (22) 眞丹 『抱朴子』金丹「石先生丹法、取鳥穀之未生毛羽者、以

眞丹和牛肉以吞之」。

- (23) 平旦 『左傳』昭公五年「日之數十、故有十時、亦當十位、自王已下、其二爲公、其三爲卿」、杜注「日中當王、食時當公、平旦爲卿、雞鳴爲士、夜半爲皁、人定爲輿、黃昏爲隸、日入爲僚、晡時爲僕、日晡爲臺、隅中日出、闕不在第」。

- (24) 此事一出二十四神中 『太微帝君二十四神回元經』を参照。

- (25) 存思 『上清黃庭內景經』脾長章第十五(『雲笈七籤』卷一一)「師父師母丹玄鄉、可用存思登虛空」、『眞誥』卷九葉二四表「清靈君告、存思要法、當覺目觀五星於方面、竝乘芒而下行我」。

- (26) 天關之中衡輔之星 『洞真上清開天三圖七星移度經』卷上「天關者是九天之生門也、治在九天東南角、一名天圖、一名天關、故爲二關也、衆眞之所經、神仙之所歷、學者之所由也」、『登眞隱訣』卷中「若有此者、便閉氣思天關之中衡輔之星」、注「星斗之象、璇衡輔弼、皆在守寸中、杓指前具身神、存守寸明堂三宮及五藏中二十四神等也」。

- (27) 規中方明 『抱朴子』祛惑「又仙經云、仙人目瞳皆方、洛中之見白仲理者、爲余說其瞳正方、如此果是異人也」。

- (28) 斷穀 『抱朴子』雜應「或曰、敢問斷穀人可以長生乎、凡有幾法、何者最善與、抱朴子答曰、斷穀人止可息肴糧之費、不能獨令人長生也」。

- (29) 煑食白石 『抱朴子』雜應「又有引石散、以方寸匕投一斗白石

子中、以水合煮之、亦立熟如芋子、可食以當穀也」。

- (30) 白石子 『神仙傳』に白石先生の傳あり。

- (31) 東府左仙卿 『眞靈位業圖』第四左位「東華左仙卿白石生」。

- (32) 太素傳 『紫陽眞人內傳』「乃退登嶠家山、遇上魏君、受太素傳左乙混洞東蒙之錄」。

- (33) 景中之道 『雲笈七籤』卷九釋靈飛六甲「瓊宮五帝靈飛六甲內文、一名太上六甲素奏丹符、一名五帝內眞通靈之文、一名玉精

眞訣、一名景中之道、一名白羽黑關隱玄上經、靈飛左右六十上符、竝生於九玄之中、結清陽之氣、以成玉文」。

- (34) 谷神 『老子』第六章「谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地根」。

- (35) 陽臺 『清靈眞人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「至立冬之日日中時、陽臺眞人會諸仙官玉女、定新得道始入仙錄之人」。

- (36) 石精 『雲笈七籤』卷八釋石精金光藏景錄形經「石精者妙鐵也、石者鐵之質、精者石之津」。

- (37) 濟水所出之源 『水經注』卷七濟水「濟水出河東垣縣東王屋山、爲沇水」。

- (38) 神州 『眞誥』卷一三葉二表「其第三等地下主者之高者、便得出入仙人之堂寢、遊行神州之鄉」、『雲笈七籤』卷八釋太上神州七轉七變僊天經「神州在天關之北、日月迴度其南、七星輪轉其中央、晝左迴八緯、夜右轉七經、七星運周、天光迴靈、此上皇

紫晨受化之庭、修七轉之法、位登於玉清」。

(39) 七變 『洞真上清神州七轉七變舞天經』：「神州七變舞天經、第

一之變、當先化身爲雲、…第二之變、當化身爲光、…第三之變、當先使其身化爲火精、…第四之變、與氣浮沈、煉身化水、…第五之變、當化身爲龍、…第六之變、當行出有人无之道、解形遁變流景之法、…第七之變、其法至精、縱體空洞、纏絡七星」。

(40) 閭風 『楚辭』離騷「朝吾將濟於白水兮、登閭風而縹馬」、王逸注「閭風、山名、在崑崙之上」、『海內十洲記』：「崑崙山」三角、其一角正北、干辰之輝、名曰閭風巔」。

(41) 公卿大夫 『禮記』王制「天子、三公九卿二十七大夫八十一元士」。

(42) 託化遯變 『太上九丹上化胎精中記』：「『雲笈七籤』卷二九「若靈真託化、含鍊瓊胎、暫經紫戶、運履人道、挺秀自然、曜景觀靈、便騰身九天、非復結精受氣而爲人也」。『雲笈七籤』卷七四太極真人青精乾石餽飯上仙靈方：「…令坐在立亡、能隱化遯變、招致風雨、一劑輒益算一千」。

(43) 陽丹 『雲笈七籤』卷六四王屋真人授陰丹祕訣靈篇「夫陽丹可以上昇、陰丹可以駐壽、陽丹者還丹也、陰丹者還精之術也」。

(44) 房中之事 『抱朴子』微旨「或曰、閨房中之事、能盡其道者、可單行致神仙、并可以移災解罪、轉禍爲福、居官高遷、商賈倍利、信乎、抱朴子曰、…善其術者、則能却走馬以補腦、還陰丹

以朱腸、采玉液於金池、引三五於華梁、令人老有美色、終其所稟之天年」。

君曰、「吾欲說仙之妙、論道之變化、子必祕之、慎識吾言也」。(當謂後二條事)

君曰、「昔有郭崇子者、殷時人也、彭真人之弟子、嘗兄弟四人俱行、爲惡人所擊、傷其左臂、三弟大怒、欲取治之、崇子曰『無用』、笑而各去、此人後仕宦、而崇子譽致之、數數非一、此人乃往謝之、而猶譽不止、其人曰、『我惡人也、不可以受君子之施』、乃自殺、後崇子得道、太極真人以爲有殺人之過、不得爲真人」。(此蓋爲善之過、尙招其弊、況爲惡乎、今時事亦多有類此者、故以爲戒)

「范零子少好仙道、如此積年、後遇司馬季主、季主將入常山中、積七年、入石室、東北角有石「牖」(此作之葉反音、即是大瓮也、或可是石牖、季主出行則語之曰、『慎勿開此』、如此數數非一、零子忽發視、下見其家父母大小、近而不遠、乃悲思、季主來還、乃遣之歸、後復取之、復使守一銅櫃、又使勿發、零子復發之、如前見其家、季主遣之、遂不得道」。(此事乃人不可思議之境、然每當依此、觸類慎之



「積功滿千、雖有過故得仙、功滿三百而過不足相補者、子仙、功滿二百者、孫仙、子無過又無功德、藉先人功德便得仙、所謂先人餘慶、其無志多過者、可得富貴、仙不可冀也」。〔此一條功過之標格也、可不勉乎〕

右道授卷訖此。

右一卷有長史書、又掾書。

君が言われた。「私は仙道のすばらしさについて語り、道の變化について論じようと思う。そなたは必ず祕密にするように。注意深く私の言葉をおぼえておくように」。へきと後の二條のことを言うのであろう。

君が言われた。「昔、郭崇子<sup>①</sup>なる者がいた。殷の時代の人であり、彭眞人の弟子である。ある時、兄弟四人そろって外出したおり、惡漢に襲われ、左腕を負傷した。三人の弟は大いに怒って取りおさえようとしたが、崇子は『放っておけ』と言い、笑ってそれぞれ立ち去った。この男がその後仕官すると、崇子は譽めて官位を與え、そんなことが一度や二度にとどまらなかった。その男はことわりに出かけたが、それでも譽めちぎって止まぬ。その男は『私は惡者です。君

子のお情けを受けるわけにはゆきません』と言って自殺してしまつた。その後、崇子は仙道を體得したが、太極眞人は殺人の罪があるから眞人となることはできぬと考えた」。〔これは思うに、善を行つたことによる罪過ですら弊害を招くというわけである。ましてや惡を行えばなおさらのことだ。今の世の出來事にも、これに類したことが澤山ある。だから戒めとしたのである〕

「范零子は若くして仙道を好んだ。このようにして年を重ね、その後、司馬季主に出會つた。季主はひき連れて常山に入つた。七年がたち、石室に入つたところ、東北の隅に石の「牖」〔これは之葉の反の音に讀む。つまり大瓮である。あるいは石の扉かも知れぬ〕がある。季主は外出するにあたって、『くれぐれも用心してこれを開けてはならぬぞ』と告げた。このようなことが一度や二度にとどまらなかったが、零子がふと開けてのぞいてみると、その下にわが家の父や母や大人や子供が手に取るように見える。そこでもの悲しい氣分になった。季主はもどつて來ると、家に歸らせた。その後またひき取つて、また一つの銅の櫃の見張りをさせ、やはり開けてはならぬと命じた。零子がまたそれを開けてみると、前と同様にわが家が見える。季主は歸らせ、かくて仙道の體得はならなかった」。〔このことは不可思議の境<sup>②</sup>に入るといふものだが、しかしいつもこれを手引きとして、何ごとにつけ用心深くしなければならぬ〕

「功德を積んで千に満ちると、罪過があつてももとより仙人となる。功德が三百に満ちても犯した罪過があい償えぬほどであれば、子が仙人となる。功德が二百に満ちると、孫が仙人となる。子であつて罪過もなく、また功德がなくとも、先祖の功德のおかげで仙人となることができるのは、いわゆる先祖の餘慶<sup>4</sup>というものだ。志がなく罪過の多い者は、富貴となることはできても、仙人となることはおぼつかない」。この一條は功過の大原則である。努力しないでよからうか」

右、道授の巻はここまで。

右の一卷には許長史の書があり、また許掾の書がある。

(1) 郭崇子 『眞靈位業圖』第四右位「郭崇子」、注「殷人」。

(2) 不可思議之境 『注維摩』卷一「不可思議者、凡有二種、一曰理空、非感情所圖、二曰神奇、非淺識所量」。『淨土論註』「如斯近事、世間共知、況不可思議境界者乎」。

(3) 積功滿千 『抱朴子』對俗「或問曰、爲道者當先立功德、審然否、抱朴子答曰、有之、按玉鈴經中篇云、立功爲上、除過次之、爲道者以救人危使免禍、護人疾病、令不枉死、爲上功

也、欲求仙者、要當以忠孝和順仁信爲本、若德行不修、而但務方術、皆不得長生也、行惡事大者、司命奪紀、小過奪算、隨所犯輕重、故所奪有多少也、凡人之受命得壽、自有本數、數本多者、則紀算難盡而遲死、若所稟本少而所犯者多、則紀算速盡而早死、又云、人欲地仙、當立三百善、欲天仙、立千二百善、若有千一百九十九善、而忽復中行一惡、則盡失前善、乃當復更起善數耳、故善不在大、惡不在小也、雖不作惡事、而口及所行之事、及責求布施之報、便復失此一事之善、但不盡失耳、又云、積善事未滿、雖服仙藥、亦無益也、若不服仙藥、竝行好事、雖未便得仙、亦可無卒死之禍矣、吾更疑彭祖之輩、善功未足、故不能昇天耳」。

(4) 先人餘慶 『周易』坤文言傳「積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃」。

(5) 功過 『洞玄靈寶自然九天生神章經』「大運將期、數終甲申、洪流蕩穢、凶災彌天、三官鼓筆、料別種人、考算功過、善惡當分」。

真誥卷之六

甄命授第二

服元紱

紫微夫人（此有據書兩本，雖曰元紱，其實多原大略極論，似乎不自書意也，紫微才豐情綺，動言富逸，牽引始末，恆超理外，其後所譬、深明黃赤之致矣）

夫晨齊浩元、洞冥幽始、八炁靡渾、靈關未理者，則獨坦觀於空漠、任天適以虛峙、於是淳音微唱、和風合起、二明鑒曜、霄翳無待也、擁萌肇於未剖、塞萬源於機上、含生反眞、觸類藏初、爰可矧萬歲以爲「天」，「天」、願嬰札而長和耳、何事體造靈神之眞鄉、心研殊方之假外哉、自形無得眞之具、器無任眞之用者、誠宜步天元之妙攝、推萬精以極妙、尋九緯以挺生、觀晨景之迴照、仰觀煙氣、則靈雲纒虛、俯眄六律、則八風扇威、太無發洞冥之嘯、圓曜有映空之暉、

於是紫霞靄秀、波激嶽顙、浮煙籠（象）「蒙」、清景遁飛、五行殺害、四節交擲、金土相親、水火結隙、林卉停偃、百川開塞、洪電縱橫而咆哮、雷震東西而折裂、天屯見矣、化爲陽九之災、地否閔矣、乃爲百六之會、亢悔載窮於乾極、觀羣龍獲示流血乎坤野、爾乃吉凶互衝、衆示災咎、履坦道者、將幽人貞吉、居肥遯者、亦無往不利、冒嶮巖也、行必興尸、涉於東北、則喪朋而悔至、苟大川之不利、明坎井之沈零矣、此皆人失其眞、物乖我和、遊竟萬端、神鬼用謀、容使天地無常、以百姓爲心、

於是太上眞人愍萬流之鼓動、開冥津以悟賢、遂爾導達百變、攝生

理具、居福德者常全、處危者彫折、御六氣者定壽、服靈芝者神逸、奇方上術、演於清虛之奧、金簡玉札、撰於委羽之臺、窈窕神唱、眞暉合離、歌其章則控晨太微、用其道則揚輪九陔、軒蓋於流霞之陣、眷眄於文昌之臺、或爐轉丹砂之幽精、粉鍊金碧之紫漿、琅玕鬱勃以流華、八瓊雲煥而飛揚、絳液迴波、龍胎隱鳴、虎沫鳳腦、雲琅玉霜、太極元體、三環靈剛、若以刀圭奏矣、神羽翼張、乃披空同之上文、煒燁元始之室、瓊音琅書、發乎三玄之宮、寶紱紆三元之贈、藥珮發丹林之房、上帝獻紫輶之重躍、太眞錫流金之火鈴、神童啓轅、九鳳齊鳴、天籟駭虛、晨鍾零鏗、竦身抑旄、八景浮空、龍輿虎旂、遊扇八方、上造常陽之絕杪、下寢倒景之蘭堂、月妃參駟、日華照容、靈姬抱衾、香煙溢窗、顧眄而圓羅邁矣、何九萬之足稱哉、然後知高仙之道蓋上、尋靈之涂微妙、服御之致合神、吉凶之用頓顯也、自非無英公子黃老玉書大洞眞經三十九章豁落七元太上隱玄者、莫有羣偶於此術矣、復有體神精思、寶鍊明堂、朝適六靈、使五藏生華、守閉元關、內存九眞、三氣運液、而灌溉丹田、亦其次也、

夫丹誠而蔬禱者、亦奚用東隣之太牢哉、乃可加以五雲水桂元根黃精南燭陽草東石空青松柏脂實巨勝茯苓、竝養生之具、將可以長年矣、吾又俱察草木之勝負、有速益於己者、竝未及元勢之多驗乎、且頃以來、殺氣蔽天、惡煙萌景、邪魔橫起、百疾雜臻、或風寒關結、或流腫種痼、不期而禍湊、意外而病生者、比日而來集也、夫元氣則式遏鬼津、吐煙則鎮折邪節、強內攝魂、益血生腦、逐惡致眞、守精衛命、

滄其餌、則靈柔四敷、榮輪輕盈、服其丸散、則百病瘳除、五藏含液、所以長遠視久而更明也、古人名之爲山精之「赤」<sup>③</sup>「卉」、山薑之精、太上導仙銘曰、「子欲長生、當服山精、子欲輕翔、當服山薑」、此之謂也、

我非謂諸物皆當減朮爲益也、且朮氣之用是今時所要、末世多疾、宜當服御耳、夫道雖內足、猶畏外事之禍、形有外充者、亦或中崩之弊、張單偏致、殆可鑒乎、朮「亦」<sup>④</sup>「二」可以長生永壽、二可以却萬魔之枉疾、我見山林隱逸、得服此道、千年八百、比肩於五嶽矣、人多書煩、不能「服」<sup>⑤</sup>「復」<sup>⑥</sup>一二記示之耳、今撰服朮數方、以悟密尚、若必信用、庶無橫暴之災、既及太平、則四炁含融、天緯荐生、災煙消滅、五毒匿形、二辰恆察、萬物自成、於是時任子所運而御、亦無復天傾也、今所言朮、欲令有心取服、遏此災疴耳、

又頃者末學互相擾競、多用混成及黃書赤界之法、此誠有生和合三象匹對之眞要也、若以道交接、解脫網羅、推會六合、行諸節氣、却災消患、結精寶胎、上使腦神不虧、下令三田充溢、進退得度而禍除、經緯相應而常康、敵人執轡而不失、六軍長驅而全反者、乃有其益、亦非仙家之盛事也、嗚呼危哉、此雖相生之術、俱度之法、然有似騁水車而涉乎炎州、泛火舟以浪於溷津矣、自非眞正、亦失者萬萬、或違戾天文、譖害嫉妬、靈根鬱塞、否泰用隔、犯誓愆明、得罪三官、或構怨連禍、王師傷敗、或坑降殺服、流血膏野、或馬力以竭、而求之不已、若遂深入北塞而不御者、亦必絕命於匈奴之刀劍乎、將身死

於外、而家誅於內也、可不慎哉、可不慎哉、我見諸如此等、少有獲益、徒有求生之妄作、常歎息於生生矣、豈若守丹眞於絳宮、朝元神於泥丸、保津液而不虧、閉幽術於命門、餌靈朮以願生、漱華泉於清川、研玄妙之祕訣、誦太上之隱篇、於是高栖于峯岫、竝金石而論年耶、諸侯安得而友、帝王不得而臣也、遠風塵之五濁、常清淨以期眞、優哉悠哉、聊樂我云。(案此後應有朮方相連、而二本竝無、乃別有掾書「二」<sup>⑦</sup>「三」方、似即是此法、今撰取在第三卷中)

右一條有掾書兩本、一黃牋、一碧牋。

- (1) この段、『壙城集仙錄』卷三紫微王夫人に見える。
- (2) 愈本が「天」を「天」に作るのに従う。
- (3) 愈本が「象」を「蒙」に作るのに従う。
- (4) 愈本が「赤」を「卉」に作るのに従う。
- (5) 愈本が「亦」を「二」に作るのに従う。
- (6) 愈本が「服」を「復」に作るのに従う。
- (7) 愈本が「二」を「三」に作るのに従う。

眞誥卷六

甄命授第二

## 服元の序

紫微夫人（これには許掾が書いた二種のテキストがある。「元の序」と名づけられてはいるが、實際にはあれこれと大づかみのポイントを押さえた議論に基づき、自らの考えは書き記さないもののようなのである。紫微夫人は才能豊かで氣持は美わしく、動作や言語も多彩でずば抜けており、ものごとの一部始終をひつつかんで、いつも常識の埒外に超越する。文章後半のお諭しは、黃書赤界の趣きを深く明らかにしている）

そもそも星晨が廣々とした根元<sup>①</sup>と一體の状態にあり、奥深くて小暗い幽玄の始め、八氣は混然渾沌とし、靈妙なる關門<sup>②</sup>もまだ整わないその時には、ひとり坦然として空漠たる世界を見わたし、自然のままの状態に身を委ねつつ虚空に屹立する。その時、淳朴な音樂が微かに鳴り出し、柔らかな風が音とともに湧きあがると、太陽と月とは光り輝き、雲氣のかげりすら自らを落とす場所を持たない。ものが兆すその始まりは天地が分かれる以前にとどめられ、萬物の根源は萬物として生起するはずみを塞がれ、生あるものは眞實の姿にかえり、それらすべて原初の状態にひきこもっている。ここでは一萬歳もの長生が早死にたとえられ、短命<sup>⑦</sup>でありながら永えに調和していることを望み得るのです。その身體を靈妙な神人の小暗き郷に昇らせ、その心を異なる世界の遙かな異境で磨きあげることなど、

なんら必要としません。その身體に眞理を獲得すべき備えがなく、その素質に眞理に身を委ねるはたらきがない者は、天の根元の不思議なステップを蹈み、いくつもの光の精を推しはかつて不思議を窮め、北斗九星を訪ね歩いて生命を大いに延ばし、星晨が遙かに輝くのを見るようにすべきです。もやった大氣を仰ぎみれば、靈妙な雲が虚空にまといつき、（世界を調和させる）六律を見おろせば、八方からの風が威勢よく吹きあおぎ、大いなる虚無は奥深くて小暗いうそぶきを發し、圓い太陽には大空を照らす輝きがあります。

この時、紫色の霞が山頂にたちこめ、波がさかまき山が崩れる。浮かびあがったもやは朦朧として、清らかな光の乗物は飛び去ってしまう。五行が殺し合い、四季がごたごたに入り雜り、金と土が近い親しみ、水と火が對立關係をとり結ぶ。草木は倒れふし、多くの河川は通じまた塞がる。巨大な稻妻は縦横に光って吠えまくり、雷鳴は東西に轟いて折れ裂ける。天に屯<sup>ゆきなやみ</sup>の相が現れるや、陽九の災厄に變化し、地が否<sup>ところ</sup>の相に閉ざされると、いよいよ百六の大厄の時なのです。たかぶる龍は後悔しつつ天の極みまで昇りつめ、群がる龍がつかみあつて大地の荒野に血を流すのが見える。かくして吉と凶とが互いに衝突し、多くの災難が示される。平坦な大道を履み行く者は隱者として正しくかつ吉、俗世間を逃れている者も何事につかまずいことはありません。危険な場所を無謀にもつき進むならば、その前途において必ず死體を車に載せて運ぶことになり、東北の方

角に渡って行くなれば、友人を失って後悔が訪れる。<sup>18</sup> 大河を渡るこの不利益をないがしろにすれば、落とし穴に落ちこんで溺れてしまふことは明白です。<sup>19</sup> これはすべて人々が自らの眞理を喪失し、萬物がわが調和に逆らい、人の心があちこちさまよい、鬼神が計略を運らすからであつて、天地には一定不變の心がなく、民草の心をその心とさせることにもなりましよう。<sup>20</sup>

そこで太上眞人は萬民が浮き足立っているのを哀れみ、小暗き渡し場を開いて賢者を悟らせました。かくて相手を導いてさまざまな變化を遂げさせ、生命を涵養する道理が備えられました。福德に身を置く者はいつも安全だが、危害の地に身を置く者は生命を縮める。六氣を統御する者は長壽を不動にし、靈芝を服食する者は精神がのびやかになる。絶妙な技法や高度な道術が清虛天の堂奥でくりひろげられ、金玉の札に書かれた仙經が委羽山の臺で撰述されると、深遠な神々の歌聲に眞人の輝きが合さりまた離れる。その一章を歌えば星晨の手綱を太微宮にひかえ、その道術を用いれば車は九層の天上にあがり、流れる霞の隊列に車蓋をかざし、文昌宮の臺に目をやる。あるいは爐の中で丹砂の不思議な精氣を變化させ、粉末で金碧に輝く紫色の液體を鍊成すれば、琅玕は勢いよく光彩をふりまき、八瓊は雲のようにきらめいて飛びはね、絳い液體が渦をまき、龍の胎兒がうなり聲をたてる。虎の唾、鳳凰の腦、雲の琅、玉の霜、太極の月體、三年で鑽の實を結ぶ不思議な剛樹。もしこれらを匙をふ

るって調合すると、神人の羽がその翼をひろげて、空同のすぐれた經典をばつと開き、元始天の一室できらきらと輝き、瓊のごとく美しき言葉、琅のごとく清らかな文字が三玄の宮殿から出現する。寶玉の綬で三元君からの贈り物をしばり、蕊の珮は丹林の小部屋に現れ、上帝は一氣に飛びあがる紫色の幌車を獻呈し、太眞は流金の火鈴を賜與する。神童が轅を先導すると九羽の鳳凰が一齊に鳴きだし、天上の音樂が虚空を震わして星晨の鐘がリンゴンと鳴る。體をびんと伸ばして旗を抑えれば、八つの光の乗物は空中に浮かび、龍の車と虎の旗とがふわふわと八方に戯れ、常陽星のてっぺんにまで上昇し、倒景宮の蘭の堂宇に降下して休息する。月の女神が四頭立ての馬車にそえ乗りし、太陽の神がその容姿を照らし、神々しい姫君はかいまきをかかえ、香わしい煙が窗からあふれ出る。ふりむき見れば圓い太陽は遙かかなた、鳳凰が九萬里を一飛びすることとるに足りはしません。かくしてはじめて貴き神仙の道はすべてに冠たれて、不思議を尋ねる方途は微妙、道法を使いこなす趣は神と合致しており、吉と凶とのはたらきは瞬時にして顯著であることが分かるのです。『無英公子黃老玉書』『大洞眞經三十九章』『豁落七元』『太上隱玄』でもない限り、この道術に匹敵するものはありません。また、體内の神をひたすら存思して明堂を大切に鍛え、朝に六靈を調べて五臓に花を咲かせ、元關をしっかりと閉ざして九宮の眞人を體内に保持し、三色の氣によって體液を運らせて丹田を潤す方法は、こ

れに次ぐ道術です。

そもそも眞心をこめて質素な祭祀を行う者は、東隣りの家のよう  
な太平の豪勢な供え物など使わないものとか。だから、五雲<sup>46</sup>、水桂<sup>47</sup>、  
朮根<sup>48</sup>、黃精<sup>49</sup>、南燭<sup>50</sup>、陽草<sup>51</sup>、東石<sup>52</sup>、空青<sup>53</sup>、松脂<sup>54</sup>、柏實<sup>55</sup>、巨勝<sup>56</sup>、茯苓<sup>57</sup>はつ  
け加えてもよい。これらはすべて生命を涵養するための材料で  
あり、あるいは壽命を延ばすこともできるのです。私はまた草根木  
皮の良し悪しをあれこれ觀察していますが、わが身にすばやく効く  
ものといえ、朮の威力が多くの効果があるのにはどれも及びませ  
ん。近ごろ、殺戮の氣が天空を蔽い、不吉な煙が光を塞ぎとめ、邪  
惡な魔物が跋扈<sup>58</sup>して、多くの病氣<sup>59</sup>が入り亂れて到來しています。あ  
るいは風寒の氣<sup>60</sup>が閉ざされてわだかまり、あるいは脚氣<sup>61</sup>がその病根  
を植えつけ、思いがけなくも災禍が集まり、意外にも病氣が起ころ  
といったことが、連日のごとく降りかかって來ます。だが、朮の氣  
こそは惡鬼の渡し場を防遏<sup>62</sup>し、吐き出される煙は邪氣が持つ符節を  
制壓する。かくて體內を強固にし魂を養い、血液を増加させ腦を活  
性化し、惡鬼を追いはいらぬ眞人を招き、精氣を保護し生命を護衛す  
る。その藥餌を攝取すれば、不思議な柔らかなさが身體のすみずみに  
ひろがって、血氣の運りが輕快で充實する。その丸藥や散藥を服用  
すれば、あらゆる病氣はすっかり癒され、五臟は體液に満たされる。  
だから壽命が延びて視力が長もちするうえに、一層はつきり見える  
ようになるのです。古人は朮を「山精の卉<sup>63</sup>」とか「山薑の精<sup>64</sup>」とか

と呼びました。「太上導仙銘」に「そなたが長生きをしたいならば、  
山精を服用すべきである。そなたが輕々と飛翔したいならば、山薑  
を服用すべきである」とあるのは、このことなのです。

私は他の藥物がどれも朮よりも效能がないと言っているのであり  
ません。そもそも朮の氣のはたらきが、今日求められているのであ  
り、末の世は多くの病氣が蔓延しているからこそ使いこなすべきな  
のです。そもそも道が内面に満ち足りていてすら世俗的な災厄が降  
りかかるのを怖れたり、身體が表面的には充實していても内部から  
崩壊するという弊害があつたりします。張毅や單豹のかたよったや  
り方<sup>65</sup>はまことに戒めとすべきです。朮一つには、生命を延ばし壽  
命を永えにすることができます。二つには、あらゆる魔物による不  
當な病氣を退けることができます。私は山林に隱棲して朮を服用す  
る方法をものにし、千年や八百年の者が五嶽にござろと存在する  
のを目にしています。そうした人間は數多く、書きだすのも面倒だ  
から、くだくだと記して示すことはできません。そこで今、朮を服  
用する方法數例を撰し、心中密かに仙道を尊重している者を目覺め  
させるのです。もし堅く信じて行えば、非業の災難には遇わないで  
しょう。太平の御代が到來すれば、四時の氣<sup>66</sup>は融合して天の秩序立つ  
た道は盛んに生じ、災厄の煙は消滅して五つの害毒<sup>67</sup>は姿を隠し、太  
陽と月<sup>68</sup>とはいとも耿々として萬物は自然に成長することになります。  
その時にはそなたの運數にまかせて使いこなしても、早死したりす

ることはないでしょう。今ここで述べている朮とは、仙道を志す者が自ら服用してこれらの災害や病氣を防ぎとめるように、と考えてのものなのです。

また近ごろ、淺學の者たちが互いに騒ぎ立て競いあつて、盛んに「混成」や「黃書赤界」の方法を行っています。こうした方法は、確かに生命あるものが和合し、陰陽二つの存在がびつたりと對になるための眞の要諦<sup>⑦</sup>ではありません。もし道に従つて交接し、俗世の羈絆を逃れ、廣く全世界とリズムを合わせ、節氣<sup>⑧</sup>ごとに氣を運らせ、災いを退け難儀を除き、精氣を結んで胎を大切に保つならば、上は腦神<sup>⑨</sup>に缺けるところがなく、下は三田<sup>⑩</sup>を充實させることができ、進退は正しい節度を得て災いは除かれ、筋目が立つて常に安寧を得ることができるので。人を相手とする場合にもしっかり手綱をとつて方向を失わず、大軍が長驅遠征して一人も缺けることなく凱旋できるといった點では、確かにその効果があるものの、しかし神仙家<sup>⑪</sup>が行う立派な事柄とはされません。ああ、危いことよ。これは、互いに生命を付與しあうための術であり、そろつて超越的な世界に入るための方法ではありますが、氷の車を馳せて炎の島<sup>⑫</sup>を通り、火の船を浮かべてすべてを沈める渡し場<sup>⑬</sup>を渡るのにさも似ています。本當の正しいあり方が貫けぬかぎり、萬人が萬人すべて失敗に歸することとなります。(その結果)あるいは天より下された經文<sup>⑭</sup>に背き、他人を謗り嫉妬して、靈根<sup>⑮</sup>は塞がり、塞がるか開けるかでは大違い、

誓いを破り盟約に違ひ、三官に罪を得ることになります。あるいは怨みを構え災いを招いて、王者の軍も敗北することとなり、あるいは投降者を穴埋めにし降伏者を殺害して、血は流れて原野を染めることとなります。あるいは馬が力盡きても求めることを止めず、もしそのまま北方の塞外の地に深く攻め入つてちゃんと制御を加えなければ、必ずや匈奴の刃に命を落とすことになりましょう。やがて、わが身は邊地で殺され、家族の者たちも家にあつて誅殺されることになるのです。用心しなくてよいでしょうか、用心しなくてよいでしょうか。私はこうした輩が効果を得ることが少く、いたずらに生を求めてでたらめを行い、生に執着し過ぎることの弊害に常々嘆息を漏らしているのを目にしてみました。絳宮<sup>⑯</sup>において丹眞を大切に守り、泥丸<sup>⑰</sup>において元神<sup>⑱</sup>たちに見え、津液<sup>⑲</sup>を保つて缺かさず、奥深い術を命門<sup>⑳</sup>の内に閉ざし、不思議な靈力を備えた朮<sup>㉑</sup>を食べて生命を養ひ、清らかな河邊で華泉に口すすぎ、玄妙な祕訣<sup>㉒</sup>を探究し、太上の隠された書物<sup>㉓</sup>を讀誦せんとして、それがために山中に清らかに住みなし、金屬や石を相手に壽命を云々するのと、どうして比べられましようか。諸侯もこのような人を友とすることはできず、帝王もこのような人を臣下とすることはできません。俗世の五つの汚濁から遠ざかり、常に清淨を保つて眞なる存在を目指す。なんと豊かで優雅なことでしょうか。このようにして、いささか自分自身を楽しませるのです。(按ずるに、この後に朮を服用する處方が續けて書か



れていたはずであるが、二つのテキストにはともにそれがなく、別のところに許掾が書いた（尤についての）三つの處方が記されている。それがこの時傳授された方法のようである。今は第三卷中に書き取ってある。

右の一條には許掾が書いた二つのテキストがあり、一つは黄色い賤紙、一つは碧い賤紙に書かれている。

(1) 浩元 『太上浩元經』「浩元太眞、君子之身、上下三宮、保營精神」。

(2) 靈關 『眞誥』卷八葉九裏「然胤嗣不多、或時彫落、將猶靈關失緯、潛機未鎮耳」。「無上祕要」卷三〇經文出所品「上相青童君曰、三九素語出於九帝三眞命呪之辭、理炁停年、開解靈關、五藏華鮮、右出三九素語玉精眞訣」。

(3) 擁明肇於未剖 『淮南子』俶眞訓「有未始有夫未始有有無者、天地未剖、陰陽未判、四時未分、萬物未生」。

(4) 塞萬源於機上 『莊子』至樂「萬物皆出於機、皆入於機」。

(5) 含生反眞 『顏氏家訓』歸心「含生之徒、莫不愛命、去殺之事、必勉行之」。「淮南子」齊俗訓「今夫王喬赤誦子、吹嘔呼吸、吐故內新、遺形去智、抱素反眞、以遊玄眇、上通雲天」。

(6) 矧萬歲以爲天 『莊子』齊物論「天下莫大於秋毫之末、而大山

爲小、莫壽於殤子、而彭祖爲天」。

(7) 嬰札 『左傳』昭公四年「民不夭札」、杜注「短折爲夭、夭死爲札」。

(8) 步天元之妙攝 『太上飛行九神玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「祝曰、：反行尋生、上步天元、使某飛仙、得入紫門、因又閉氣、左足躡陽明、右足躡陰精」。

(9) 六律、八風 『史記』律書「王者制事立法、物度軌則、壹稟於六律、六律爲萬事根本焉、：律曆、天所以通五行八正之氣、天所以成孰萬物也」、索隱「八謂八節之氣、以應八方之風」。

(10) 五行殺害、四節交擲 『易緯乾鑿度』卷上「變易也者其氣也、天地不變、不能通氣、五行迭終、四時更廢」。

(11) 天屯見矣、：乃爲百六之會 『周易』屯彖傳「屯、剛柔始交而難生、動乎險中、大亨、貞」。「漢書」律曆志上「易九扈曰、初入元、百六、陽九」、孟康注「易傳也、所謂陽九之扈、百六之會者也、初入元百六歲有扈者、則前元之餘氣也、若餘分爲閏也」。「雲笈七籤」卷二劫運「又靈寶天地運度經云、：夫天扈謂之陽九也、地虧謂之百六也」。

(12) 亢悔：流血乎坤野 『周易』乾上九「亢龍有悔、用九、見群龍无首、吉」。同文言「亢龍有悔、窮之災也」。同坤上六「龍戰于野、其血玄黃」。

(13) 履坦道者、將幽人貞吉 『周易』履九二「履道坦坦、幽人貞吉」。

- (14) 居肥遯者、亦無往不利。『周易』遯上九「肥遯、无不利」。
- (15) 冒嶮巇也、行必興戶。『周易』師彖傳「師衆也、貞正也、能以衆正、可以王矣、剛中而應、行險而順」。同六三「師或興戶、凶」。
- (16) 涉於東北、則喪朋而悔至。『周易』坤「利西南得朋、東北喪朋、安貞吉」。
- (17) 苟大川之不利、明坎井之沈零。『周易』訟「利見大人、不利涉大川」。同彖傳「不利涉大川、入于淵也」。同習坎六三「來之坎坎、險且沈、入于坎窞、勿用」。
- (18) 天地無常、以百姓爲心。『老子』第四十九章「聖人無常心、以百姓心爲心」。
- (19) 太上真人。『真誥』卷九葉一裏「太上真人步五星之道」。同葉三表「太上真人撰所施行祕要」。
- (20) 福德。宗炳「明佛論」(『弘明集』卷二)「福德彰於後身、豈能見其所得哉」。『真誥』卷六葉七裏「是故福德之氣恆生於此、害氣重殃還在於彼」。
- (21) 金簡玉札。『無上祕要』卷二二「三界官府品」方諸青宮、右上相青童君治於其內、宮中北殿上有玉架、架上有學仙簿錄及玄名年月日深淺、金簡玉札有十萬篇、領仙玉郎典之、…右出洞眞經及道迹眞迹經」。
- (22) 流霞之陣。『雲笈七籤』卷四三存思三洞法「服御流霞、昇入紫庭」。『壺城集仙錄』卷五嬰母「無英公子黃老玉書大洞眞經齡落七元太上隱玄之道、可致輕蓋、以流霞之輦臨眇乎文昌之臺」。
- (23) 文昌之臺。『史記』天官書「斗魁戴匡六星、曰文昌宮」、索隱「文耀鉤曰、文昌宮爲天府」。『真誥』卷八葉九裏「當今五氣滋曜、常朗文昌之房」。
- (24) 丹砂之幽精、…雲琅玉霜。『抱朴子』金丹「凡草木燒之即燼、而丹砂燒之成水銀、積變又還成丹砂、其去凡草木亦遠矣」。『真誥』卷一二葉三裏「左慈…正得鑪火九華之益」、注「又乞丹砂、合九華丹」。『三洞珠囊』卷三服食品「(登眞隱訣第七)又云、飛琅玕之華、…丹砂幽精金碧紫漿八瓊絳液龍胎鳳腦雲琅玉華」。『漢武帝內傳』「其次藥有八光太和斑龍黑胎文虎白沫、出于西丘」。『上清黃庭內景經』隱藏章第三十五(『雲笈七籤』卷一二)「乃曰琅膏及玉霜」、注「津液精氣之色象也」。
- (25) 太極月醴、三環靈剛。『太微靈書紫文琅玕華丹神眞上經』「穿地廣深七尺、取琅玕華丹、以和徊水如雞子者、種之於塹、復其土、堅築之、三年、其上生樹、其色如棗、高三四尺、其實如鑽、名曰鑽剛樹、食其實、與天相生、上升太極、化形爲雲、一名太極」。
- (26) 元始之室。『元始無量度人上品妙經四注』卷三「三界之上、眇眇大羅、上无色根、雲層義義、唯有元始浩劫之家、部制我界、統承玄都」。
- (27) 瓊音琅書。『無上祕要』卷二七上清神符品「佩此符者、威制天

地、訶叱羣靈、控景駕龍、位司高仙、瓊音既震、則玉華侍側、金真衛兵、千妖喪眸、萬鬼滅形、右出洞真金虎真符。同卷二八·九天生神章品「精研琅書辭、迴轉瓊文章、…右出洞真太霄琅書瓊文帝章」。

(28) 三玄之宮 『紫陽真人傳』「命駕出三玄、流鈴飛漢賓」。

(29) 神童啓轅 『周氏冥通記』卷二「若能思入微、飛龍轅於霞路、奏鳳響於雲衢、神童啓節、玉女侍軒」。

(30) 九鳳齊鳴 『上清後聖道君列紀』「前嘯則九鳳齊唱、後吹則八鸞同聲」。

(31) 天籟 『莊子』齊物論「今者、吾喪我、汝知之乎、女聞人籟而未聞地籟、女聞地籟而不聞天籟夫」。

(32) 龍輿 『無上祕要』卷一九天帝衆真儀駕品「行太清之道、出則五帝侍衛、給玉童玉女各八百人、建五色之節、駕龍輿飛煙、前嘯九鳳、後吹八鸞、白虬啓道、太極參軒、右出洞真八素經」。

(33) 常陽 『雲笈七籤』卷二四北斗九星職位總主「第八輔星、天尊玉帝之星、曰常陽也」。

(34) 倒景 『抱朴子』微旨「若令吾眼有方瞳、耳長出頂、亦將控飛龍而駕慶雲、淩流電而造倒景、子又將安得而詰我」。

(35) 月妃 『壙城集仙錄』卷一聖母元君「老君之生也、天地萬神來集其庭、日童散暉、月妃擲華」。

(36) 日華 『三洞珠囊』卷三服食品「真誥第九云、左採日華、右掇

月根也」。

(37) 尋靈之涂 『真誥』卷八葉六裏「夫索長生者多津、尋靈塗者千百、何必用水爐以盛火、趣價責於三官耶」。

(38) 服御 『真誥』卷二葉一四表注「此竝離合譬喻四人姓名、各詮所宜修行服御事」。『登真隱訣』卷中「右前至此凡九事、竝服御吐納存注煙霞之道也」。

(39) 大洞真經三十九章 『無上祕要』卷九五昇玉宮品「道者三奇、第一之奇、大洞真經三十九章、第二之奇、雌一寶經、第三之奇、太上素靈洞玄大有妙經、此傳已成真人、不傳於始學也、…右出洞真太上素靈太有妙經」。

(40) 豁落七元 『無上祕要』卷三〇經文出所品「洞真金真玉光八景飛經…青真小童名之豁落七元、…右出洞真金真玉光八景飛經」。

(41) 太上隱玄 『無上祕要』卷三〇經文出所品「玉珮以九天魂精九天之上、名曰晨燈、一名太上隱玄洞飛寶章、…右出洞真玉珮金璫太極金書上經」。

(42) 寶鍊明堂 『真誥』卷七葉一表「寶鍊三度、養液和魂」。『登真隱訣』卷上「凡頭有九宮、請先說之、兩眉間上却入三分爲守寸雙田、却入一寸爲明堂宮」。

(43) 五藏生華 『真誥』卷九葉一九裏「男服日象、女服月象、日一不廢、使人聰明朗徹、五藏生華」。

(44) 內存九真 『登真隱訣』卷下「帝君填神混化玄真之道…正坐東

向、臨目、內存身神形色長短大小、呼其名字、還填本宮。』上清黃庭內景經』至道章第七(『雲笈七籤』卷一一)「泥丸九眞皆有房、方圓一寸處此中」。

- (45) 丹田 『抱朴子』地眞「故仙經曰、子欲長生、守一當明、一有姓字服色、男長九分、女長六分、或在臍下二寸四分下丹田中、或在心下絳宮金闕中丹田也、或在人兩眉間、却行一寸爲明堂、二寸爲洞房、三寸爲上丹田也」。

- (46) 夫丹誠而蔬禴者、亦奚用東隣之太牢哉 『周易』既濟九五「東鄰殺牛、不如西鄰之禴祭、實受其福」、注「牛、祭之盛者也、禴、祭之薄者也」。

- (47) 五雲 『抱朴子』仙藥「又雲母有五種、…服五雲之法、或以桂葱水玉化之以爲水、服之一年、則百病除、三年久服、老公反成童子、五年不闕、可役使鬼神、入火不燒、入水不濡、踐棘而不傷膚、與仙人相見」。

- (48) 水桂 『太平御覽』卷六六九服餌上「劉向列仙傳曰、…又彭祖多服水桂雲母」。

- (49) 黃精 『重修政和證類本草』卷六草部上品之上「黃精、味甘、平、無毒、主補中益氣、除風疾、安五藏、久服、輕身延年不饑」、陶弘景注「俗方無用此、而爲仙經所貴、根葉華實皆可餌服、酒散隨宜、具在斷穀方中」。

- (50) 南燭 『重修政和證類本草』卷一三木部中品「南燭枝葉、味

苦、平、無毒、止泄、除睡、強筋、益氣力、久服、輕身長年、令人不飢、變白去老。』三洞珠囊』卷四絕粒品「清虛真人王君內傳云、…向云南燭者仙草也、其樹是木而似草、故號南燭草木也、一名猴藥、一名男續、一名後阜、一名惟那木、一名草木之王、生嵩高少室抱犢雞頭山。』真誥』卷一四葉一表注「(四平山)甚多南燭」。

- (51) 空青 『重修政和證類本草』卷三玉石部上品「空青、味甘酸、寒、大寒無毒、主青盲耳聾、明目、利九竅、通血脈、養精神、…久服、輕身延年不老」。

- (52) 松柏脂實 『重修政和證類本草』卷一二木部上品「松脂、味苦、甘、溫、無毒、主疽…、安五藏、除熱、久服、輕身不老延年、一名松膏、一名松肪」。同「柏實、味甘、平、無毒、主驚悸、安五藏、益氣、…久服、令人潤澤美色、耳目聰明、不飢不老、輕身延年」。

- (53) 巨勝 『重修政和證類本草』卷二四米穀部上品「胡麻、味甘、平、無毒、主傷中虛羸、補五內、益氣力、長肌肉、…久服、輕身不老、…一名巨勝」。

- (54) 邪魔 『上清黃庭內景經』百穀章第三十(『雲笈七籤』卷一一)「百穀之實土地精、五味外美邪魔腥」。

- (55) 百疾 『真誥』卷九葉二裏「除身三尸百疾千惡、鍊魂制魄之道也」。

- (56) 風寒『真誥』卷七葉一五表「衰年體羸、多爲風寒所乘」。『雲笈七籤』卷四〇崇百藥「致魂逝魄喪、不在形中、體肌空虛、精炁不守、故風寒惡炁得中之」。
- (57) 流腫『春秋繁露』五行順逆「如人君簡宗廟、不禱祀、廢祭祀、執法不順、逆天時、則民病流腫水脹痿痺、孔竅不通」。
- (58) 炁氣則式遏鬼津『真誥』卷八葉九裏「炁遏鬼炁、故必無他耳」。『毛詩』大雅民勞「式遏寇虐、無俾民憂」。『三洞珠囊』卷三服食品「(太一洞真玄經)又云、夫炁乃辟塞邪津、氣遏鬼路矣、餐其九餌、則靈心四數、榮衛輕盈、服其煎散、百疾瘳除、可以長生久視也」。
- (59) 攝魂『上清黃庭內景經』肝部章第十一「(『雲笈七籤』卷一一)「垂絕念神死復生、攝魂還魄永無傾」。
- (60) 益血『抱朴子』極言「服食藥物者、因血以益血、而血垂竭者、則難益也」。
- (61) 榮輸『黃帝內經素問』離合眞邪論「經言氣之盛衰、左右傾移、以上調下、以左調右、有餘不足、補瀉於榮輸」。『抱朴子』雜應「其灸法又不明處所分寸、而但說身中孔穴榮輸之名、自非舊醫備覽明堂流注偃側圖者、安能曉之哉」。
- (62) 丸散『抱朴子』極言「不知過之在己、而反云道之無益、故捐丸散而罷吐納矣」。
- (63) 長遠視久『老子』第五十九章「是謂深根固柢長生久視之道」。
- (64) 山精『抱朴子』仙藥「朮一名山薺、一名山精、故神藥經曰、必欲長生、常服山精」。
- (65) 山薑『重修政和證類本草』卷六草部上品之上「朮：一名山薑」。
- (66) 張單偏致『莊子』達生「魯有單豹者、巖居而水飲、不與民共利、行年七十而猶有嬰兒之色、不幸遇餓虎、餓虎殺而食之、有張毅者、高門縣薄、无不走也、行年四十而內熱之病以死、豹養其內而虎食其外、毅養其外而病攻其內、此二者者、皆不鞭其後者也」。
- (67) 四炁『上清黃庭內景經』上有章第二「(『雲笈七籤』卷一一)「四氣所合列宿分」、注「四氣、四時靈氣也」。
- (68) 五毒『抱朴子』遐覽「士欲求長生、持此書入山、辟虎狼山精、五毒百邪、皆不敢近人」。『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「太玄都九氣丈人：伐胞樹於死戶、養胎氣於冥初、濟五毒於常關、定三命於金書」。
- (69) 二辰『真誥』卷八葉一〇裏「太白解體於二辰之中」。
- (70) 混成『老子』第二十五章「有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立不改」。
- (71) 眞要『真誥』卷一二葉一表「夫勤末上徹、精末廣釐、眞要之聘未可豫及也」。
- (72) 節氣『論衡』寒溫「寒溫天地節氣、非人所爲、明矣」。
- (73) 結精實胎『上清黃庭內景經』呼吸章第二十「(『雲笈七籤』卷

- (74) 腦神 『上清黃庭內景經』至道章第七(『雲笈七籤』卷一一)「腦神經根字泥丸」。
- (75) 三田 『上清黃庭內景經』黃庭章第四(『雲笈七籤』卷一一)「三田之中精氣微、嬌女窈窕翳膏腴」。
- (76) 仙家 『真誥』卷一六葉五裏注「故當多不隸三官、頗得預於仙家驅任矣」。
- (77) 炎州 『十洲記』「炎州在南海中、地方二千里、去北岸九萬里」。
- (78) 溺津 『無上祕要』卷二〇仙歌品「超濯溺津際、容與天刃溪、右出太上真人八素陽歌九章」、『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「玄洲有三溺之津、非飛仙而莫越也」。
- (79) 天文 『真誥』卷七葉六表「華僑漏泄天文、妄說虛無」、『抱朴子』遐覽「鄭君言、符出於老君、皆天文也」。
- (80) 靈根 『真誥』卷七葉一表「體標高運、味玄咀眞、呼引景曜、凝靜六神、煥領八明、委順靈根、寶鍊三度、養液和魂」、『太上黃庭外景經』上部經第一(『雲笈七籤』卷一一)「玉池清水灌靈根、…靈根堅固老不衰」。同中部經第二「象龜引氣至靈根」。
- (81) 妄作 『老子』第十六章「知常曰明、不知常、妄作凶」。
- (82) 朝元神於泥丸 『上清黃庭內景經』膽部章第十四(『雲笈七籤』卷一一)「能存威明乘慶雲、役使萬神朝三元」、『真誥』卷一〇葉二〇裏「下灌玉液、上朝泥丸」、『上清黃庭內景經』至道章第七(『雲笈七籤』卷一一)「至道不煩決存眞、泥丸百節皆有神、髮神蒼華字太元、腦神經根字泥丸、…一面之神宗泥丸、泥丸九眞皆有房、方圓一寸處此中」。
- (83) 津液 『真誥』卷一〇葉一八表「夫學生之道、當先治病、不使體有虛邪及血少腦減津液穢滯也」、『太上黃庭外景經』下部經第三(『雲笈七籤』卷一一)「津液醴泉通六府、隨鼻上下開兩耳」。
- (84) 命門 『太上黃庭外景經』上部經第一(『雲笈七籤』卷一一)「上有黃庭下關元、後有幽闕前命門」。同下部經第三「沐浴華池生靈根、三府相得開命門」。
- (85) 靈朮 陸機「招隱士」(『陸士衡文集』卷五)「嘉卉獻時服、靈朮進朝飧」。
- (86) 玄妙之祕訣 『老子』第一章「玄之又玄、衆妙之門」、『真誥』卷七葉一三裏「安可以告玄妙哉」。同卷九葉一七表「此太洞祕訣、以傳於始涉津流者矣」。
- (87) 隱篇 『三洞珠囊』卷九老子爲帝師品「玉帝七聖玄紀云、…列七紀於上錄、明刻書於隱篇」。
- (88) 諸侯安得而友、帝王不得而臣 『後漢書』列傳七三王霸傳「天子有所不臣、諸侯有所不友」。
- (89) 優哉悠哉 『毛詩』小雅采芣「優哉游哉、亦是戾矣」。

(90) 乃別有據書三方 『眞誥』卷一〇葉四表裏を參照。

方諸青童見告曰、「人爲道亦苦、不爲道亦苦、惟人自生至老、自老至病、護身至死、其苦無量、心惱積罪、生死不絕、其苦難說、況多不終其天年之老哉、爲道亦苦者、清淨存其眞、守玄思其靈、尋師轉軻、履試數百、勤心不墮、用志堅審、亦苦之至也、視諸侯之位如過客、視金玉之寶如磚石、視絢綺如弊帛者、始可謂能問道耳」。

方諸青童君曰、「人之爲道能拔愛欲之根者、譬如撥懸珠、一一撥之、會有盡時、稍去外惡、會有盡時、盡則得道矣、又近喻牛負重行泥中、疲極不敢左右顧、趣欲離泥以蘇息、道士視情慾、甚於彼泥中、直心念道、可免衆苦、亦得道矣」。(謹案上相都無降嘏事、唯有此二告及歌詩一首、恐未必是楊君親所瞻奉受記也)

西城王君告曰、「夫人離三惡道得爲人、難也、既得爲人、去女爲男、難也、既得爲男、六情四體完具、難也、六情既具、得生中國、難也、既處中國、值有道父母國君、難也、既得值有道之君、生學道之家、有慈仁善心、難也、善心既發、信道德長生者、難也、既信道德長生、值太平壬辰之運爲難也、可不勵哉」。(三惡道者、生不得作人、得作鳥獸蟲畜之三惡也)

太上問道人曰、「人命在幾日間」、或對曰、「在數日之間」、太上曰、「子未能爲道」、或對曰、「人命在飯食之間」、太上曰、「子去矣、未謂爲道」、或對曰、「在呼吸之間」、太上曰、「善哉、可謂爲道者矣、吾昔聞此言、今以告子、子善學道、庶可免此呼吸、弟子雖去吾(教)〔謂應作校字、皆猶差懸也〕千萬里、心存吾戒、必得道矣、研玉經寶書、必得仙也、處吾左側者、意在邪行、終不得道也、人之爲道、讀道經行道事者、譬若食蜜、遍口皆甜、六腑皆美而有餘味、能行如此者、得道矣」。(上宰亦無降嘏事、有此及服日月芒事耳)

太虛真人南嶽赤君告曰、「人有衆惡、而不自悔、頓止其心、罪來歸己、如川歸海、日成深廣耳、有惡知非、悔過從善、罪滅善積、亦得道也、夫人遇我以禍者、當以福往、是故福德之氣恆生於此、害氣重殃還在於彼、此學道之行也」。

又告曰、「惡人害賢、猶仰天而唾、唾不滄天、還滄己」(刑)(凡刑字皆應作形)、逆風揚塵、塵不滄彼、還灌其身、道不可毀、禍必滅己」。

太虛真人曰、「飯凡人百、不如飯一善人、飯善人千、不如飯一學道者、寒栖山林者、益當以爲意」。(赤君亦無復別授事)

紫元夫人告曰、「天下有五難、貧窮惠施、難也、豪富學道、難也、制命不死、難也、得見洞經、難也、生值壬辰後聖世、難也、

我昔問太上、何緣得識宿命、太上答曰、『道德無形、知之無益、要當守志行道、譬如磨鏡、垢去明存、即自見形、斷六情、守空淨、亦見道之眞、亦知宿命矣』。

又曰、「念道行道信道、遂得信根、其福無量也」。

紫微夫人告曰、「爲道者、譬彼持火入冥室中、其冥即滅而明獨存、學道存正、愚癡即滅而正常存也、財色之於己也、譬彼小兒貪刀刃之蜜、其甜不足以美口、亦即有截舌之患」。

玄清夫人告曰、「夫人係於妻子寶宅之患、甚於牢獄桎梏、牢獄桎梏會有原赦、而妻子情慾、雖有虎口之禍、有此一異手寫本、無此十九字、恐是脫漏、己猶甘心投焉、其罪無赦、情繫於人也、猶執炬火逆風行也、愚者不釋炬火必燒手、貪欲患怒愚癡之毒、又闕此十五字、於辭有不應爾、貪嗔癡、所謂三毒、處人身中、不早以道除斯禍者、必有危殆、愚癡者火燒手之謂也、爲道者猶木在水、尋流而行、亦不左觸岸、亦不右觸岸、不爲人所取、不爲鬼神所遮、又不腐敗、吾保其入海矣、人爲道、不爲穢慾所惑、不爲衆邪所誑、精進不疑、吾保其得道矣」。

南極夫人曰、「人從愛生憂、憂生則有畏、無愛即無憂、無憂則無畏、昔有一人夜誦經甚悲、悲至意感、忽有懷歸之哀、太上真人忽作凡人、徑往問之、『子嘗彈琴耶』、答曰、『在家時嘗彈之』、真人曰、『絃緩何如』、答曰、『不鳴不悲』、又問『絃急何如』、答曰、『聲絕而傷悲』、又問『緩急得中如何』、答曰、『衆音和合、八音妙奏矣』、真人曰、『學道亦然、執心調適、亦如彈琴、道可得矣』、愛慾之大者、莫大於色、其罪無外、其事無赦、賴其有一、若復有二、普天之民莫能爲道者也、夫學道者、行陰德莫大於施惠解救、志莫大於守身奉道、其福甚大、其生甚固矣、有人惡我者、我不納惡、惡自歸己、將禍而歸身中、猶〔景〕〔謂應作影子〕響之隨形聲矣」。

右衆靈教戒所言。

按此三男眞〔三〕女眞、竝高眞之尊貴者、降集崑崙、恐此是諸降者敘說其事、猶如秋分日瑤臺四君吟耳、非必親受楊君也。

(1) この段、『無上祕要』卷七修真養生品に類似の文が見える。

(2) この段、『無上祕要』卷四二修學品に見える。

(3) この段、前半は『無上祕要』卷七修真養生品に類似の文が見



える。

- (4) この段、前半が『無上祕要』卷四二修學品に見える。
- (5) 以下、『無上祕要』卷四二修學品に見える。
- (6) 意をもつて「二」の字を「三」の字に改める。

方諸青童君が告げられた。「人たるもの、道を修めることも苦し<sup>①</sup>く、道を修めずにいるのも苦しい。そもそも人は、誕生から老年に至り、老年から病に至り、あれこれ身體に氣を使つてもやがて死に至る。こうした苦しみは量り知れない。心に惱み罪を重ねて、生死を繰り返す。その苦しみは筆舌に盡くしがたい。ましてや、大多數の者は天から與えられた壽命を全うできぬのであるから、なおさらのことである。また、道を修めることも苦しいと言うのは、清淨を保つて自らの内にある眞を守り、玄を大切にして靈なる存在に心を寄せ、師を尋ね求めては苦難の生活を忍び、數百回の試験をくぐり抜け、いささかの怠りの心を起すことなく、堅固かつ明らかに心ばせを貫く。こうしたことは、まことに苦しみの極みなのである。諸侯の位をあたかも過ぎゆく旅人のように見なし、金玉の寶物をあたかも瓦礫のように見なし、練り絹や綾絹をあたかも破れた白絹のようにみなす者であつて、はじめて道を問うことができると評してよいのである」。

方諸青童君が言われた。「人が道を修めることによって愛欲の根を抜き取ることができるのは、あたかも玉簾の珠を取りはずし、一つ一つ取りはずしてゆけば、必ずすべて取りはずし終わる時が来るようなものであつて、外的な惡を少しづつ除いてゆけば、必ずすべてがなくなる時が来る。すべてがなくなれば道が得られるのである。また卑近な例を取れば、牛が重荷を負つて泥道を行く時、疲勞困憊しても右顧左眄することなく、ひたすら（前に進んで）泥から逃れて息をつこうとするように、道士は情欲を牛が泥の中で苦しむ以上に難儀なものだとみなすのである。ひたすらな心で道を思念することによって、さまざまな苦しみを免れることができ、道を得ることもできるのである」。(謹んで按ずるに、上相君が降臨して誥授されたことはまったくない。ただこの二つのお告げと詩歌一首とが遺されているだけなのであるが、恐らくは必ずしも楊君が親しくお目にかかつて授けられた記録ではないのであろう)

西城王君が告げられた。「そもそも人たるもの、三惡道を離れて人間として生まれることができるのは、困難なことである。人間として生まれることができたにしても、女にならず男となれるのは、困難なことである。男になれたとしても、六情と四肢が完全に具足するのは、困難なことである。六情が具足しても、中國の地に生ま

れることができるのは、困難なことである。中國に居られたとしても、道を備えた父母や國君に生まれあわすのは、困難なことである。道を備えた主君に生まれあわせ、道を學ぶ家に生まれることができるとしても、思いやりと正しい心を持つことは、困難なことである。正しい心が育ったとしても、道德と永遠の生命とを信じて、太平が到來する壬辰の運にめぐりあわせることは、困難なことなのである。勵まなくてよいものであろうか。〈三惡道とは、生命を受けても人間となることができず、鳥や獸や蟲や家畜といった三つの醜いものになることである〉

太上道君が道人たちにたずねられた。⑨「人の生命は幾日ぐらゐのものであろうか」。ある者が答えた。「數日の間でございます」。太上道君が言われた。「おまえには道を修める資格はない」。またある者が答えた。「人の生命はご飯を食べる間でございます」。太上道君が言われた。「おまえはあつちに行け。道を修めているとは申せぬ」。またある者が答えた。「一呼吸の間でございます」。太上道君が言われた。「すばらしい。道を修めている者だと申せよう。私はかつて次のような言葉を聞いたことがある。いまそれをおまえに聴かせよう。おまえがちゃんと道を學ぶならば、この一呼吸の間のように短い生命を解脱することができるのである。弟子たちは、たとえ私か

ら千萬里を「教」⑩(きつと「校」の字であらう。どちらも隔たるという意味である) たつていたとしても、心に私の戒をしつかり守っておるならば、必ず道を得ることができるのである。玉經や寶書⑪をよく研究すれば、必ず仙を得ることができるのである。私のすぐ側にいる者でも、邪な行いに心が向いておれば、あくまで道を得ることはできないのである。人が道を修め、道經を讀み、道に従った行いをする時、ちょうど蜜をなめるようなもので、⑫口の中全體が甘くなり、五臟六腑にもおいしさがしみわたって、しかも餘味があるようなものである。このように修業することができず、道が得られないのである。⑬(上宰(西城王君)にも楊羲に降臨したという事實がなく、この記事と日月の光芒を服するという記事が遺されているだけである)

太虛真人南嶽赤君(赤松子)が告げて言われた。「さまざまの惡行のある人が、自らそれを悔いることなく、その心のままに居坐っておれば、罪がやがておのれに歸ってくる。それはちやうど河の流れが海に歸し、日ごとに深く廣くなつてゆくのと同じことである。惡行があつても自らの非をわきまえ、過ちを悔いて善に従うならば、罪は帳消しになり善が積み重なつて、やはり道が得られるのである。他人が自分にひどい仕打ちをした時にも、⑭溫かい心で報いなければならぬ。そのようにすることによって、福德の氣が常に自分の方

に生じ、害氣と大きなまがごととは、かえって他人の方に巡って行くのである。これが道を學ぶ際に取るべき行いである」。

また告げられた。「惡人がすぐれた人物を損なおうとするのは、あたかも天に向かつて唾を吐けば、唾は天を汚しはせずにかえって自らの「刑」<sup>17</sup>の字はすべて「形」の字に作るべきである」を汚すことになり、風に逆らつて塵をかき上げれば、塵は相手を汚さずにかえつて自分の身に降りかかるようなものである。道は謗つてはならない。その災いは必ずおのれを滅ぼすこととなる」。

太虚眞人が言われた。「普通の百人に食事をふるまうよりも、一人の善人に食事をふるまう方がよろしい。善人千人に食事をふるまうよりも、一人の道を學ぶ者に食事をふるまう方がよろしい。山林にひっそりと隠栖している者に對しては、それ以上に心を用いて大切にせねばならない」。(南嶽赤君についてもこれ以外の誥授の記事はない)

(南極) 紫元夫人が告げて言われた。「この世には五つの困難があります。貧窮でありながら人に恵みを施すことの困難。富豪でありながら道を學ぶことの困難。生命を制して不死を得ることの困難。『大洞眞經』<sup>18</sup>を見ることの困難。壬辰後聖の世に生まれあわすことの困難です。

困難です。

私はその昔、太上君にどのようにしたら宿命を知ることができるのかをおたずねしました。すると太上君はお答えになりました。『道徳は無形であり、それを知ったところで何の益にもならない。必ず志を堅守し道を蹈み行ふべきである。たとえて言えば鏡を磨くようなもので、汚れが取れば光が現れ、自ずから姿を見られるようになる。六情を斷ち、空淨を守れば、道の眞理を見てとれようし、宿命を知りましょう』。

また言われた。「道を念じ道を行ひ道を信すれば、信仰の根本が確立されて、その福德は量り知れません」。

紫微夫人が告げて言われた。「道を修めるとは、たとえば燈燭を持つて暗闇の部屋に入れば、たちどころにその暗闇が消滅して光明のみが存するようになります。道を學び正しい心を保持すれば、愚癡はただちに消滅して、正見が常存するようになります。財産や女色の自己に對する關係は、ちようど小兒が刀の刃に付いた蜜を貪りなめるようなもので、その甘さは口に美味いどころか、かえつて舌を切る恐れがあります」。

玄清夫人が告げて言われた。「そもそも人間が妻子や立派な家宅に

繋ぎ留められていることの憂いは<sup>(26)</sup>、牢獄や桎梏よりも甚だしいのです。牢獄や桎梏には必ず許される時がありますが、妻子や情欲は、たとえ虎に食い殺されるという災禍<sup>(27)</sup>が待っているとしても〈別の手になる寫本があつて、この十九字(「牢獄桎梏・虎口之禍」)を缺いている。多分脱漏であろう〉、それでもなお喜んで身を投じてしまい、その罪は許されることがありません。情欲が人間に災いするさまは、あたかも炬火を持ったまま風に逆らつて歩くようなものです。愚者は炬火を手放さずに必ず手を焼くことになります。貪欲・悲怒・愚癡の害毒は<sup>(28)</sup>〈またこの十五字(「不釋炬火・愚癡之毒」)を缺き、文辭が對應していないところがある。貪・瞋・癡はいわゆる三毒である〉人の身中に住みついています。早く道を修めてこの禍いを除かなければ、必ず危険が生じます。これが愚か者が火で手を焼くということなのです。道を修める者は、木片が川の中にあるようなもので、流れに沿つて下つて行き、左の岸にも觸れず、右の岸にも觸れず、人に取られることもなく、鬼神に遮られることもなく、また腐敗することもなければ、私はそのような木は必ず海に流れこむと保證しましょう。人が道を修めて穢れた欲望に惑わされることがなく、もろもろの邪惡な存在に誑かされることもなく、精進して<sup>(29)</sup>疑いを抱かなければ、私はそのような人は必ず道を得られると保證しましょう。

南極夫人が言われた。「人は愛欲から憂苦を生じ、憂苦が生ずれ

ば畏れが現れます。愛欲がなければ憂苦は生じませんし、憂苦がなければ畏れは生じません。昔、ある一人のおとこが夜中に經典を讀誦<sup>(30)</sup>して、大變悲しい氣持になりました。悲しみが極まつて心が動き、突然、家を懷しみ歸りたいという悲哀の心が生じました。太上眞人はたちまち凡人に姿を變えてただちにその男のところに行つて質問されました。『あなたは琴を弾いたことがありますか?』家にいた時に弾いたことがあります。『絃が緩んでいる時はどうですか?』『鳴らないので悲しくはありません。』『絃がびんと張っている時はどうでしょう?』『音がキンキンとして悲しい氣持になります。』『緩急が調和している時はどうでしょう?』『あらゆる音が調和し、八種類の音色<sup>(31)</sup>がすばらしい音楽を奏でます。』すると眞人は言われました。『道を學ぶこともまた同じなのです。心を堅く執り守つて調和させ、琴を弾く時のようにすれば、道は得られるのです。愛欲の大きなもの、女色に過ぎるものはありません。その罪はこの上なく大きく、その行爲は決して許されません。一つの愛欲であればまだしものこと、もしさらに二つもあることになれば、天下の民は誰一人として道を修めることができないのです。そもそも、道を學ぶものにとつて、人知れず德行を積むには恵みを施して相手を救済することが最上であり、志はこの一身を堅守し道を信奉することより重要なものではありません。その福は甚だ大きく、その生は甚だ強固となるのです。自分を憎む者がいても、自分がその憎しみを受け入れな

ければ、その憎しみは自ずからもとのところへともどります。しかも、禍いをひき連れてその身にもどつて行くことは、ちやうど「景」〈きやうと〉「影」の字であろう。や響きがその體や聲について行くようなものです。<sup>37)</sup>

以上は、神靈たちの教誡の言葉。

按ずるに、この三人の男性の眞人と三人の女性の眞人は、いづれも位の高い眞人の中でも特に地位の高い方々で、お降りになることは極めて稀である。恐らくこれらは降臨された方々がそのことを説かれたのであつて、秋分の日に瑤臺の四人の眞君が詩を吟詠されたのと同じようなものであらう。必ずしも親しく楊君に誥授されたものではない。

(1) 人爲道亦苦…『四十二章經』第三十五章「佛言、人爲道亦

苦、不爲道亦苦、惟人自生至老、自老至病、自病至死、其苦無量、心惱積罪、生死不息、其苦難說」。

(2) 守玄『抱朴子』地眞「玄一之道、亦要法也、…守玄一、復易於守眞一」。『眞誥』卷一〇葉二表「守玄白之道、常且旦坐臥任意、存泥丸中有黑氣、存心中有白氣、存臍中有黃氣、三氣俱

生、如雲氣覆身」。

(3) 視諸侯之位如過客…『四十二章經』第四十二章「佛言、吾視諸侯之位如過客、視金玉之寶如礫石、視麝素之好如弊帛」。

(4) 人之爲道能拔愛欲之根者…『四十二章經』第四十章「佛言、人爲道能拔愛欲之根、譬如摘懸珠、一一摘之、會有盡時、惡盡得道也」。

(5) 牛負重行泥中…『四十二章經』第四十一章「佛言、諸沙門行道、當如牛負行深泥中、疲極、不敢左右顧、趣欲離泥以自蘇息、沙門視情欲、甚於彼泥、直心念道、可免衆苦」。

(6) 歌詩一首 卷三葉四表の詩を指す。

(7) 人離三惡道得爲人、難也…『四十二章經』第三十六章「佛言、夫人離三惡道、得爲人難、既得爲人、去女即男難、既得爲男、六情完具難、六情已具、生中國難、既處中國、值奉佛道難、既奉佛道、值有道之君難、生菩薩家難、既生菩薩家、以信心三尊值佛世難」。郗超「奉法要」(『弘明集』卷一三)「反十善者、謂之十惡、十惡畢犯、則入地獄、…則或墮畜生、…則墮餓鬼、其罪若轉少而多陰私、情不公亮、皆墮鬼神、雖受微福、不免苦痛、此謂三塗、亦謂三惡道」。

(8) 六情『眞誥』卷六葉八裏「斷六情、守空淨、亦見道之眞、亦知宿命矣」。『白虎通』情性「六情者何謂也、喜怒哀樂愛惡謂六情、所以扶成五性、性所以五、情所以六者何、人本含六律五行

之氣而生、故內有五藏六府、此情性之所由出入也。

- (9) 太上問道人曰：『四十二章經』第三十七章「佛問諸沙門、人命在幾間、對曰、在數日間、佛言、子未能爲道、復問一沙門、人命在幾間、對曰、飯食間、佛言、子未能爲道、復問一沙門、人命在幾間、對曰、呼吸之間、佛言、善哉、子可謂爲道者矣。」「牟子理惑論」(『弘明集』卷二)「又誣云、道人聚斂百姓、大構塔寺、華飭奢靡、費而無益云云」。
- (10) 玉經寶書 『無上祕要』卷七六咽雲牙品「此玉經上訣、致五老之道」。『眞誥』卷一四葉一三裏「季主讀玉經、服明丹之華、挹扶晨之暉」。同卷九葉二二裏「行此道、亦不妨行寶書所服日月法也」。
- (11) 處吾左側者：『四十二章經』第三十八章「佛言、弟子去離吾數千里、意念吾戒、必得道、在吾左側、意在邪、終不得道、其實在行、近而不行、何益萬分耶」。
- (12) 譬若食蜜：『四十二章經』第三十九章「佛言、人爲道、猶若食蜜、中邊皆甜、吾經亦爾、其義皆快、行者得道矣」。
- (13) 上宰 『登眞隱訣』卷中「明堂內經開心辟妄符、王君撰用、注「王君、上宰總眞也」。
- (14) 服日月芒事 これに關する西城王君のお告げは、卷九葉二二裏「葉二三表に見える」。
- (15) 人有衆惡：『四十二章經』第四章「佛言、人有衆過而不自

悔、頓止其心、罪來歸身、猶水歸海、自成深廣矣、有惡知非、改過得善、罪日消滅、後會得道也」。

- (16) 人遇我以禍者：『四十二章經』第五章「佛言、人遇吾以爲不善、吾以四等慈護濟之、重以惡來者、吾重以善往、福德之氣常在此也、害氣重殃反在于彼」。
- (17) 惡人害賢：『四十二章經』第七章「佛言、惡人害賢者、猶仰天而唾、唾不汚天、還汚己身、逆風扬尘、塵不汚彼、還汚于身、賢者不可毀、過必滅己也」。
- (18) 飯凡人百：『四十二章經』第九章「佛言、飯凡人百、不如飯一善人、飯善人千、不如飯持五戒者一人、飯持五戒者萬人、不如飯一須陀洹、…」。
- (19) 天下有五難：『四十二章經』第十章「佛言、天下有五難、貧窮布施難、豪貴學道難、制命不死難、得覩佛經難、生值佛世難」。同第十一章「有沙門問佛、以何緣得道、奈何知宿命、佛言、道無形、知之無益、要當守志行、譬如磨鏡、垢去明存、即自見形、斷欲守空、即見道眞、知宿命矣」。
- (20) 洞經 『眞誥』卷一〇葉八裏「執詠洞經三十九章」。
- (21) 後聖 『元始無量度人上品妙經四注』卷四「右別至人剋得爲聖君金闕之臣」、李少微注「聖君者金闕後聖太平李眞君也、諱弘、來劫下爲人主、故預稱後聖君也、尹氏玄中記曰、太上老君常居紫微宮、一號天皇大帝、一號太乙天尊、一號金闕聖君、

天地萬物莫不由其造化焉。」

- (22) 念道行道信道：『四十二章經』第十七章「佛言、一日行常念道行道、遂得信根、其福無量」。

- (23) 信根 『無上祕要』卷三五授度齋辭宿啓儀品「某等宿命因緣、生值道化、玄真啓拔、得入信根、：右出金籙經」。「梁安寺釋迦文佛像銘」(『藝文類聚』卷七七)「信根有五、覺枝云七」。

- (24) 爲道者：『四十二章經』第十四章「佛言、夫爲道者、譬如持炬火入冥室中、其冥即滅而明猶在、學道見諦、愚癡都滅、得無不見」。

- (25) 財色之於己也：『四十二章經』第二十章「佛言、財色之於人、譬如小兒貪刀刃之蜜、甜不足一食之美、然有截舌之患也」。

- (26) 人係於妻子寶宅之患：『四十二章經』第二十一章「佛言、人繫於妻子寶宅之患、甚於牢獄桎梏銀鑊、牢獄有原赦、妻子情欲、雖有虎口之禍、己猶甘心投焉、其罪無赦」。

- (27) 虎口之禍 『莊子』盜跖「疾走料虎頭、編虎須、幾不免虎口哉」。

- (28) 情累於人也：『四十二章經』第二十三章「佛言、愛欲之於人、猶執炬火逆風而行、愚者不釋炬、必有燒手之患、貪婬恚怒愚癡之毒、處在人身、不早以道除斯禍者、必有危殃、猶愚貪執炬自燒其手也」。

- (29) 貪欲恚怒愚癡之毒 『大智度論』卷三一「我所心生故、有利益我者生貪欲、違逆我者而生瞋恚、此結使不從智生、從狂惑生

故、是名爲癡、三毒爲一切煩惱之根本」。

- (30) 爲道者：『四十二章經』第二十五章「佛言、夫爲道者、猶木在水尋流而行、不左觸岸、亦不右觸岸、不爲人所取、不爲鬼神所遮、不爲迴流所住、亦不腐敗、吾保其入海矣、人爲道、不爲情欲所惑、不爲衆邪所誑、精進無疑、吾保其得道矣」。

- (31) 精進 『眞誥』卷二三葉五裏「其一女眞是傳禮和、禮和是漢桓帝外甥侍中傳建女也、北地人、其家奉佛精進」。

- (32) 人從愛生憂：『四十二章經』第三十一章「佛言、人從愛欲生憂、從憂生畏、無愛即無憂、不憂即無畏」。

- (33) 昔有一人夜誦經甚悲：『四十二章經』第三十三章「有沙門夜誦經甚悲、意有悔疑、欲生思歸、佛呼沙門問之、汝處于家、將何修爲、對曰、恆彈琴、佛言、絃緩何如、曰不鳴矣、絃急何如、曰聲絕矣、急緩得中何如、諸音普悲、佛告沙門、學道猶然、執心調適、道可得矣」。

- (34) 八音 『尚書』舜典「二十有八載、帝乃殂落、百姓如喪考妣、三載四海遏密八音」、孔傳「八音、金石絲竹匏土革木」。

- (35) 愛慾之大者：『四十二章經』第二十二章「佛言、愛欲莫甚於色、色之爲欲、其大無外、賴有一矣、假其二、普天之民無能爲道者」。

- (36) 普天之民 『孟子』萬章上「詩云、普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣」。

(37) 影響之隨形聲 『漢書』卷五六董仲舒傳「夫善惡之相從、如景鄉之應形聲也」。

(38) 男眞、女眞 『真誥』卷一九葉五表「其餘男眞、或陪從所引、或職司所任」。同卷一葉四裏「右十五女眞東向坐」。

(39) 秋分日瑤臺四君吟 『真誥』卷三葉八表「葉九裏を参照」。

三見易遷、再云「可待、要乃起東山屋舍、且可」<sup>①</sup>「籬」護之耳、問其故、未見答、問衆靈云、「我或爾耶」、未詳此意、欲識之。  
〈此一條楊君自記、是論長史事〉

數遊心山澤、託景仙眞者、靈氣將愍子之遠樂、山神將欣子之向化、是故百疾不能干、百邪不得犯、屢燒香左右者、令人魂魄正、而恆聞芳風之氣、久久乃覺之耳、覺之則入道、入道則得仙、得仙則成眞。  
〈從前卷有待歌詩十篇接戒來至此凡八紙、竝更手界紙書、後截半行書字、即是楊書淨觀天地行、此前當竝有楊續書、後人更寫別續之耳、所以前脫三十四字、楊所書、今未知何事〉

靜觀天地念飛仙、靜觀山川念飛仙、靜觀萬物念覆載慈心、常執心如此、得道也、人生者如幻化耳、寄寓天地間少許時耳、若攝氣營神、苦辛注眞、將得道、久道成則同與天地共寓在太無中矣、若洞虛體無、

則與太無共寄寓在寂寂中矣、能洞寂者、則視之不見、聽之不聞、死生之根易解、久長之年易尋、尋之可得、解之可久。

<sup>③</sup>夫可久於其道者、養生也、常可與久遊者、納氣也、氣全則生存、然後能養至、養至則合眞、然後能久、登生氣之二域、望養全之寂寂、視萬物玄黃盡假寄耳、豈可不勉之哉、氣全則辟鬼邪、養全則辟百害、入軍不逢甲兵、山行不觸虎兇、此之謂矣。

學道之心、常如憶朝食、未有不得之者也、惜氣常如惜面目、未有不全者也、然面目亦有毀壞者、猶氣亦有喪失、要人之所惜、常在於面目、慮有犯穢、次及四肢耳、若使惜氣常爲一身之先急、吾少見其枯悴矣。〈案此所云氣、蓋是房中精氣之氣、非呼吸之氣〉

人隨俗要求華名、譬若燒香、衆人皆聞其芳、然不知薰以自燭、燭盡則氣滅、名立則身絕、是故高人晒而遠之、遂爲清淨。

生之爲物、譬日月天地、此四象正與生生爲對、失生則四象亦滅、非四象之滅、生滅之也、若使常生、則四象常存、非四象之常存、我能常生故也、常生亦能生於無景、何四象之足計哉、災遘禍生、形壞氣亡、起何等事耶、似由多言而不守一、多端而期苟免耳、是以玄巢頹枝以墜落、百勝喪於一敗矣、惜乎通仙之才、安可爲豎子致弊也。



〔賢子致弊、蓋爲膏肓之患不除、借取晉景公之夢、不爾則是別有小兒事也〕

南嶽夫人所言。

鴻鷺對南旅、以遐扇揚翮、在於十百之野、彼鳥自謂足矣、然鷓鴣歎其眇邈、大鵬哂鴻鷺之〔指〕〔謂應作咫字〕尺耳、苟安其安、而是非自足、故三鳥不相與議焉、何譏之乎。

紫微言。

右八條竝楊書。

(1) 俞本が「離」を「籬」に作るのに従う。

(2) 以下、ほぼ同文が『無上祕要』卷一〇〇洞冥寂品に見える。

(3) この段、ほぼ同文が『無上祕要』卷一〇〇洞冥寂品に見える。

これまで三度易遷夫人にお目にかかったが、二度までも「待っているがよい。必ず東山に齋室を立てて、ひとまずきちんと整えておくのですよ」と仰せられた。そのわけをおたずねしたが、まだお答

えない。他の眞仙がたに、「私がひよつとしてそうなんでしょうかとおたずねした。その意味がまだよく分からないので、知りたいものである。この一條は楊君が自分でメモしたものであるが、許長史のことを論じているのである」

しばしば山澤に心を遊ばせ、眞仙の世界に身を託そうとすれば、靈妙な氣がそなたの遠遊の樂しみをいつくしみ、山神がそなたの教えに向かうとする行爲をよみする。それ故、あらゆる病魔もそなたを侵すことはできず、あらゆる邪惡な存在もそなたを犯すことができない。しばしば身邊で燒香すれば、その人の魂魄を正しくし、常に芳しい風の香りをかいでいれば、長い間にははつと眞理を悟れる。悟れば道の世界に參入し、道の世界に參入すれば仙人となれ、仙人になれば眞人となれる。〔前卷の有侍の歌詩十篇から上の教戒を経てここまでは全部で八紙。いずれも書き手が代わつて野線を引いた紙に書かれている。その後の半行の文字が切り取られ、すぐに楊君の書寫した「淨觀天地」の行となっている。その前もきつと楊君の書寫の續きがあるべきであるが、後人があらためて書寫する際に別々につなげたのである。だから前に三十四字を脱落している。楊君が書いたことは、今もって何であつたか分からない〕

靜かに天地を見て飛仙を思念し、靜かに山川を見て飛仙を思念し、

靜かに萬物を見て天地の覆載の慈しみの心<sup>⑤</sup>を思念する。常にこのように心を堅固に執り持つていれば、道を得ることができる。人生は幻<sup>⑥</sup>のようなものに過ぎない。天地の間に、ほんの短い間、假に身を寄せているだけなのだ。もし氣を養い神を養い、艱難辛苦して眞心を注いでゆけば、やがて道を得ることができよう。久しくして道が完成すれば、天地とともに太無の中に住むことができる。もし虚無を悟り體得すれば、太無とともに寂々たる世界の中に住むことができる。寂々たる世界を悟れた者は、その姿を視ても見えず、その聲を聴いても聞こえない<sup>⑦</sup>。生死の根は解きやすく、長久の壽命は求めやすい。求めれば得られ、解ければ久しく生きることができる。

そもそも、道に久しく身を置くことができるのは養生の術である。常に久しくともにつきあうべきものは納氣の法である。氣が完全であれば生が保たれ、そのうえではじめて養生が完全になる。養生が完全になれば、そのうえではじめて眞と合一<sup>⑧</sup>し、そのうえではじめて永えになれる。生と氣の二域に登り、全き生命を養う寂々たる世界を望んで、萬物天地はすべて假の宿りに過ぎぬと見なせるようになる。努め勵まずにおられようか。氣が十全であれば鬼邪を避け、養生が完全であれば百害を避けることができる。軍隊に入つては武器に傷つけられる禍に遇わず、山に分け入つては虎や犀に出會わない<sup>⑨</sup>というのは、このことを言つたものである。

道を學ぼうという心が常に朝食を思うように切實でありながら、道を得られない者がいたためしはない。氣を惜しむことが常に面目を惜しむように切實でありながら、氣を全うできない者がいたためしはない。しかし、面目もやはり壞れることがあるように、氣もやはり失われることがある。要するに、人々が惜しむのは、いつも面目であるのであつて、それが穢されて、やがて四肢に及ぶことを恐れるのである。もし、氣を惜しむことを常に一身の最も緊急の事柄とするならば、私はその肉體が枯れ萎むのを見ることはないだろう。  
〔按ずるに、ここという氣とは思ふに房中術の精氣の氣であつて、呼吸の氣のことではない〕

人が世俗に従い華やかな名聲を求めるのは、たとえれば香を焚くようなものです。人々は誰しもその芳しさをかくけれども、香り草は自然に燃えてゆき、燃え盡きると香氣もなくなってしまうことに氣づきません。名聲が確立すればわが身は滅びる。だから、すぐれた人はあざ笑つてそれを遠ざけ、清らかになつてゆくのです。

生というものは、たとえれば日月や天地のようなものです。この四つのは、ちょうど生を營むことと對をなしています。生を失えばこの四つのもも滅びますが、四つのももが滅びたのではなく、

生がそれを滅ぼしたのです。もし永遠に生きているのであれば、四つのもも永遠に存続しますが、四つのもものが永遠に存続するのではなくて、自分が永遠に生存できるからなのです。永遠に生存できれば、形象のない境地に生まれることもできます。四つのもものなどものの数ではありません。災禍が生じて、肉體が壞れ氣が亡びるのは、何事に起因するのでしょうか。口先ばかりで事に專念できず、達者なばかりで一時逃れを期待することによるもののようにです。だから、不思議な鳥の巢も枝が朽ちることによって墜落し、百度勝ちながら一度の敗戦ですべてを失うのです。残念なことです、仙道に精通できる才能を持ちながら、童子（の姿に化けた病邪）によって害をもたられようなことがあってよいものでしょうか。〈童子が害をもたらず〉とは、思うに膏肓の間に入った病は取り除くことができないということで、晉の景公の夢の故事を借用したのであらう。そうでなければ、別に小兒にまつわる事があるのであらう。

南嶽夫人が言われた言葉。

鴻や鷺が南に向かって旅する時は、遙かに羽ばたかんとして舞い上がり、幾十幾百の野原を行くが、かの鳥たちは、満ち足りていると自ら思いこむ。しかし、鵠や鳩は目がかすむほどの遙かさに感嘆するが、大鵬は、鴻が飛び上がったのが「指」へきつと「咫」の字で

あらう。尺ほどの僅かな距離に過ぎないとあざ笑う。それぞれの安逸を安逸としながら、相手の自足をあげつらっている。だから、この三種の鳥たちは互いに議論しあうことはない。非難することはいきないのです。

紫微夫人のお言葉。

右の八條は、いずれも楊羲の書。

- (1) 易遷 『眞誥』卷八葉二表注「易遷即掾母、亡後得入易遷宮、因呼爲號」。同卷二〇葉九表「（許長史諡）妻同郡陶威女、名科斗、興寧中亡、即入易遷宮受學」。
- (2) 託景 陸機「行思賦」（『藝文類聚』卷二七）「越河山而託景、眇四載而遠期」。
- (3) 靈氣 郭璞「遊仙詩」（『文選』卷二一）「燕昭無靈氣、漢武非仙才」。『眞誥』卷一〇葉八表「人臥室宇、當令潔盛、盛則受靈氣、不盛則受故氣」。
- (4) 百邪 『抱朴子』登涉「其次即立七十二精鎮符、以制百邪之章及朱官印包元十二印、封所住之四方、亦百邪不敢近之也」。
- (5) 入道 『眞誥』卷二〇葉一三裏「僞忿患、遂入道、於鬼事得息、漸漸眞仙來游」。

- (6) 成真 『登真隱訣』卷上「竝有寶經以傳已成真人者、未得成真、非所聞也」。
- (7) 靜觀天地念飛仙：『四十二章經』第十六章「佛言、觀天地念非常、觀山川念非常、觀萬物形體豐熾念非常、執心如此、得道疾矣」。
- (8) 覆載慈心 『莊子』天地「夫子曰、夫道覆載萬物者也、洋洋乎大哉」、『禮記』中庸「舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月所照、霜露所降、凡有血氣者、莫不尊親、故曰配天」、『法華經』譬喻品「若人精進、常修慈心、不惜身命、乃可爲說」、『抱朴子』微旨「然覽諸道戒、無不云欲求長生者、必欲積善立功、慈心於物、恕己及人、仁逮昆蟲」。
- (9) 幻化 『列子』周穆王「窮數達變、因形移易者謂之化、謂之幻、…知幻化之不異生死也、始可與學幻矣」。
- (10) 營神 『真誥』卷八葉一三表「愚愚相隨、安知修真之本、營神養性鎮守之法」。
- (11) 視之不見、聽之不聞 『老子』第十四章「視之不見名曰夷、聽之不聞名曰希、搏之不得名曰微、此三者不可致詰、故混而爲一」。
- (12) 死生之根 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「太素秀樂禁上天、帝龍羅覺長」、李少微注「但三界之人、生死之根未斷、陰陽之炁猶存、故有壽盡之數」。
- (13) 合真 『抱朴子』名實「所以體道合真、嶮然特立」、『真誥』卷一〇葉二〇裏「太一鎮生、三炁合真」。
- (14) 玄黃 『周易』坤文言「夫玄黃者天地之雜也、天玄而地黃」。
- (15) 辟鬼邪 『抱朴子』遐覽「凡爲道士求長生、志在藥中耳、符劍可以卻鬼辟邪而已」、『真誥』卷一五葉四裏「夜中亦可微讀之、亦云辟鬼邪」。
- (16) 入軍不逢甲兵、山行不觸虎兇 『老子』第五十章「善攝生者、陸行不遇兇虎、入軍不被甲兵」。
- (17) 犯穢 『真誥』卷一三葉一六裏注「兼以此地福重、不欲宣廣、使人濫住、致有犯穢故也」。
- (18) 精氣 『管子』水地「人、水也、男女精氣合而水流形」。
- (19) 呼吸 『上清黃庭內景經』呼吸章第二十(『雲笈七籤』卷一一)「呼吸元氣以求仙、仙公公子已可前」。
- (20) 人隨俗要求華名：『四十二章經』第十九章「佛言、人隨情欲求華名、譬如燒香、衆人聞其香、然香以熏自燒、愚者貪流俗之名譽、不守道真、華名危亡之禍、其悔在後時」。
- (21) 多言而不守一 『老子』第五章「多言數窮、不如守中」、『莊子』在宥「天地有官、陰陽有藏、慎守女身、物將自壯、我守其一、以處其和、故我修身千二百歲矣、吾形未常衰」。
- (22) 爲賢子致弊 『左傳』成公十年「晉侯夢大厲、…公疾病、求醫于秦、秦伯使醫緩爲之、未至、公夢疾爲二豎子曰、彼良醫也、懼傷我、焉逃之、其一曰、居肩之上膏之下、若我何、醫

至、曰、疾不可爲也、在胃之上膏之下、攻之不可、遠之不及、藥不至焉、不可爲也、公曰、良醫也、厚爲之禮而歸之」。

(23) 鴻鸞對南旅：『莊子』逍遙遊の冒頭を踏まえる。

古之至人獨秉靈一之符、玄覽委順之化、明坦途而合變、捫冥樞以齊物、故自然之表、則存之而不論、域領之內、則論之而不議矣、

昔玄風浪絕、埃氣彌氛、弘猶淪喪、澆偽滋起、馳驟之徒、替眞於崖分之外、躁兢之羣、鑿利於形名之肆、擅智生流蕩之患、希求致矜伐之累、乖常適於所適、離至當於非當矣、名身孰親、道家良〔鑑〕〔謂應作箴字〕、履淹者、守一之至戒、良可歎息。

六月八日夜、保命告許長史。

知以無涯傷性、心以欲惡蕩眞、豈若守根淨沖、栖研三神、所以彌貫萬物、而玄同鏡寂、泯然與泥丸爲一、而內外均福也、可示虎牙。

南嶽夫人言。

促催進散、不可令河上有事。〔散似是朮散、河上、水官也〕

保命言。

不修道德、及學道無成、則肇功之徒不相逮也、自頃未見有日進之

人矣、學志故自少也〔七世之德、本鍾於學者、若不學則非復所賴、故以爲戒〕、徒攝上道而不勲者、故下鬼耳〔下鬼謂下解主者鬼〔師〕〔帥〕耳、不必是鄭宮之鬼也、經中亦云如此、在官無事、夷眞內鍊、紛錯不穢其聰明、爭兢不交於胸心者、此道士之在官也。〕

秀玄栖標者、雖山河崩潰而不眇、志道存眞者、雖寒熱飢渴猶不護、此一往之至也、精散八虛、魂遊萬涂、或因風以投閒、或挾魍以結痼、將一切撥之而勿耳矣、昔之道非今道也、靈覺苟殊、百隙其如予何、章聞之、亦足以檢樸矣。

右九條竝楊書。

(1) 意をもつて「師」を「帥」に改める。

昔の至人はただ獨り靈一の符を手を持ち、すべてを滞りなく遂げさせる造化のはたらきを深く洞察し、平坦な大道をはつきり認識して變化と一體となり、奥深い造化のからくりの要をつかんで萬物を等しく見なした。だから、自然の外の事柄はそのままにして論及せず、この世界の内の事柄は論及してもあれこれ議論しなかったのだ。

ある。

昔、奥深い風氣が減び、俗塵に汚れた風氣が蔓延し、廣大な謀り事は姿を隠して見えなくなり、輕薄な僞りがはびこるようになった。せわしく駆けまわる輩は自分を越えた營みの中で眞實を廢れさせ、慌しく競いあう人々は、形と名の場で利益を貪った。さかしらを好き勝手にはたらかせて齒止めがきかぬ弊害を生じ、(富貴を)希求して傲慢さという患いを招き、心になうものを追い求めて永遠なるものに背を向け、あるべからざるあり方に耽つて最もあるべきあり方から離れた。「名聲とわが身とはどちらが切實であらうか」とは、道家のすぐれた「鐵」へきつと「箴」の字であらう言である。濁つた俗世界に踏み入ることは、守一にとつての至上の戒めである。まことに嘆息すべきことである。

六月八日の夜、保命君が許長史に告げられた。

知恵は無際限であることによつて本性を損ない、心は欲したり嫌たりすることによつて眞實を亂すものです。それよりは、根本を清らかで虚かな境地に守り、三丹田の神を住ませ鍊磨する方がずっとよい。それによつて、萬物をあまねく見通し、深く他者と同化して心は鏡のように靜まり、ひっそりとして泥丸(の神)と一體となれば、内も外も等しく幸いに満ちるのです。これを許虎牙に示す方がよい。

南嶽夫人のお言葉。

急いで散藥を服用せよ。河上(の司命神)に仕事をさせてはならない。「散藥」とは荒散であるようだ。「河上」とは水官である。保命君のお言葉。

道德を修めず、また道を學んで成就しない場合には、功業を始めた祖先の徳はまだ及んでこない。近ごろは、日々進歩する人がいるのを見かけない。道を學ぼうという志がもともと少いのである。七世の祖先が立てた徳は、本來、道を學ぶ者に集まるものである。もし學ばなければ、もはや頼みとはなくなる。だから戒めたのである。ただ上道を手にするだけで努力しない者は、もともと下鬼なのだ。「下鬼」とは、下戸解を遂げて地下主者や鬼帥となつた者のことである。必ずしも酆宮の鬼ではない。經典の中でも、やはりそのような言っている。官位に就いていても無事、眞實に對して心を穩やかにして内に自らを鍊磨し、複雑に入りくんだ俗事も自分の聰明さを穢すことなく、人々との競い合いも胸中をよぎらないようにすれば、それこそ、道を學ぶ人士が官位にある場合のあり方なのである。

奥深い道の世界に抜きん出て高い境涯に住んでいる者は、たとえ

山河が崩壊しても振り向かうとはしない。道に志して眞實を心がけている者は、たとえ暑さ寒さや飢え渴きに出くわしても身を護ろうとはしない。これこそ、ひたすら邁進する者の極みである。もし精神が八方の虚空に散亂し、魂がさまざまの道へと浮遊すれば、(邪鬼が)あるいは風に乗って間隙につけこんだり、あるいは物怪を攜えて病を起したりすることがあるが、今やそのような一切を拂いのけてものともしない。昔の道は今の道とは異なっていたのである。不思議な悟りそのものが異なっているのだから、もろもろの隙を窺う者もわれわれをどのようにできようか。(神々に)上奏すれば、そいつらを捕えて打ちのめすことができよう。

右の九條はいずれも楊羲の書。

- (1) 玄覽委順之化 『老子』第十章「載營魄抱一、能無離乎、專氣致柔、能嬰兒乎、滌除玄覽、能無疵乎」。『莊子』知北遊「性命非汝有、是天地之委順也」。
- (2) 明坦途 『莊子』秋水「明乎坦塗、故生而不說、死而不禍、知終始之不可故也」。
- (3) 冥樞 『雲笈七籤』卷一〇「太上道君紀」「清齊空山、靜思神眞、合慶冥樞、蕭朗自然、擁觀萬化、俯和衆生」。

- (4) 自然之表：『莊子』齊物論「六合之外、聖人存而不論、六合之內、聖人論而不議」。
- (5) 乖常適於所適 『莊子』寓言「惡乎其所適、惡乎其所不適、天有曆數、地有人據、我惡乎求之」。
- (6) 離至當於非當 『莊子』德充符「審乎无假而不與物遷、命物之化而守其宗也」、郭象注「明性命之固當、任物之自遷、以化爲命而無乖迕、不離至當之極」。
- (7) 名身孰親 『老子』第四十四章「名與身孰親」。
- (8) 履淹 『眞誥』卷七葉一三表「虎牙慎不可復履淹」。『登眞隱訣』卷中「若履淹穢及諸不潔處、當洗浴解形以除之」。
- (9) 無涯 『莊子』養生主「我生也有涯、而知也无涯、以有涯隨无涯、殆已、已而爲知者、殆而已矣」。
- (10) 欲惡 『莊子』則陽「陰陽相照相蓋相治、四時相代相生相殺、欲惡去就於是橘起、雌雄片合於是庸有」。
- (11) 三神 『眞誥』卷九葉四裏「祝曰、左玄右玄、三神合眞、左黃右黃、六華相當」。『上清黃庭內景經』隱影章第二十四(『雲笈七籤』卷一二)「三神之樂由隱居」、注「三神、三丹田之神也」。
- (12) 玄同 『老子』第五十六章「塞其兌、閉其門、挫其銳、解其分、和其光、同其塵、是謂玄同」。
- (13) 河上、水官也 『眞誥』卷一二葉五裏「又有北河司命、主水官考、此職常領九宮禁保侯」。

(14) 七世之德 『真誥』卷一六葉一二表「先世有功在三官、流逮後嗣、或易世鍊化、改氏更生者、此七世陰德、根葉相及也」。

(15) 下鬼謂下解主者鬼帥耳 『雲笈七籤』卷四五祕要訣法明正一錄第三「經云、生無道位、死爲下鬼」。『真誥』卷七葉七裏「地下主者、解下道之文官、地下鬼帥、解下道之武官、文解一百四十年一進、武解二百八十年一進、武解、一解之下者也」。同卷七葉七表注「得下解法、受書爲鬼帥耳」。

(16) 鄴宮之鬼 『真誥』卷一五葉一表「羅鄴山在北方癸地、山高二千六百里、周迴三萬里、其山下有洞天在、山之周迴一萬五千里、其上其下竝有鬼神宮室、山上有六宮、洞中有六宮、輒周迴千里、是爲六天鬼神之宮也」。

(17) 內鍊 『真誥』卷九葉一九表「祝曰、大明育精、內鍊丹心、光暉合映、神眞來尋」。

(18) 紛錯 『真誥』卷八葉八裏「高齡之無德久矣、鬼訟之紛錯積矣」。

(19) 其如予何 『論語』述而「子曰、天生德於予、桓魋其如予何」。

(20) 章聞 『真誥』卷八葉五表「且其家福德強、章聞累疊、皆被上御、事已散、尋蒙追遣之、其病雖篤、無所憂」。

夫眞者都無情慾之感、男女之想也、若丹白存於胸中、則眞感不應、靈女上尊不降矣、縱有得者、不過在於主者耳、陰氣之接、永不可以

修至道也、吾昔常恨此、賴改之速耳、所以眞道不可對求、要言不可偶聽也、有匹則不眞、外併則眞假、眞假之迹、斷可見也。

此一應是裴君言、某書。

哭者亦趣死之音、哀者乃朽骨之大患、恐吾子未悟之、相爲憂耳、極哀者則淫氣相及、來子雖善於〔耳〕<sup>①</sup>爾曹、當索張者何。

定錄君所戒。

右一條楊書、後被割不盡。

穆惶恐言、逢遇玄運、得聞宗告、每事將順、啓悟胸心、仁應纏綿、仰感罔極、至於始終之分、天然定理、樂生惡亡、人情常感、哭泣之哀、奔臨之制、內以敘情、外以順禮、賢庶所守、莫之虧也、穆內雖修道、外故俗徒、未能披褐山栖、帶索獨往、不得不敘順情禮、允帖內外、一旦違之、既恩情未忍、亦懼傷之者至矣、

夫人之言、宛而附情、弘道長教、可謂遠矣、輒當奉遵告敕、使哀不至傷、哭不過慟、栖道任適、不敢有違、謹白。〔此是答右英書本、今闕所授事、非謂前中君所告趣死之音者、而亦應相關涉也〕

右一條掾爲書。

(1) 俞本に從い衍字とみなす。



そもそも眞實とは、情欲という心の動きや男女にまつわる想念がまったくないことである。もしも丹や白の思いが胸中に残っていれば、眞實の感應は起こらず、靈妙な仙女や尊貴な神々は降臨しないであらう。たとえ何かを得たとしても、地下主者として存在するに過ぎない。陰氣と交われば、永遠に至上の道を修めることはできないのである。私は昔いつもこのことを残念に思っていたが、幸いにも早く改めることができた。だから、眞實の道は二人竝んで求めることはできず、要諦の言葉は二人竝んで聞くことはできないわけである。つれあいがあれば、眞實でなくなり、世俗の者と一緒になれば、眞實もまがいものになってしまう。眞實とまがいものとは、はつきりと見てとれるのだ。

この一條はきつと裴君のお言葉であらう。某の書。

哭泣は死に赴く者の聲であり、哀悼は骨を朽ちさせる大きな患いである。そなたはまだ氣づいていない恐れがあるから、心配してやっているのだ。哀しみが極まると、淫亂な氣が到來する。來子はそなたによくしてくれたが、そなたは張さんをどうするつもりなのか。定録君が戒められたもの。

右の一條は楊羲の書。この後の部分は裂かれていて完全ではない。

穆、恐れながら申し上げます。不思議なめぐりあわせに遭遇し、根本のお告げを聞くことができました。事ごとに受け入れ易く、胸中をはつと目覺めさせてくれます。慈しみ深いご加護は心に纏わりつき、感嘆の氣持は極まりありません。けれども、生死の分は自然として決定された道理であり、生を願ひ死を厭うのは人情の變わらぬはたらきです。哭泣して哀悼することや、はせ參じて葬儀に臨むきまりは、内にはそれでもつて感情を表現し、外にはそれでもつて禮に従うことになり、賢者庶人すべての遵守すべきことであり、それを缺く者はおられません。穆は内には道を修めておりますが、外はい變わらず俗人です。粗末な布の服を着て山中に住み、荒繩を帶として隱逸することはまだできません。(内には)感情を表わし(外には)禮に従い、家族の者をしつくりさせないわけにはまいりません。一旦、これに違背すれば、恩愛の情は忍ぶことができず、そのうえ、おのれの心の恐れ哀しみは頂點に達します。

夫人のお言葉はねんごろで私の氣持にびったり寄り添い、道を廣め教えを伸ばすこと、深遠というにふさわしいものです。すぐにもお告げを仰ぎかしこみ、哀悼しても自分を傷つけるまでには至らず、哭泣しても哀しみを過ごさないようにいたします。道の世界に住まい、眞にふさわしいあり方に身を委ねるということにも、あえて違つたりはいたしません。謹んで申し上げます。(これは右英夫人に答え

た書簡のテキストである。今では誥授した事柄を缺いている。前條の(定録)中君が告げた、「死に赴く者の聲」そのものことではないけれども、やはり關連しているはずである。

右の一條は許掾が書寫をした。

(1) 丹白存於胸中 『眞誥』卷二葉二表「夫眞人之偶景者、所貴存乎匹偶、相愛在於二景、雖名之爲夫婦、不行夫婦之迹也、是用虛名以示視聽耳、苟有黃赤存於胸中、眞人亦不可得見、靈人亦不可得接、徒劬勞於執事、亦有勞於三官矣」。

(2) 陰氣 『眞誥』卷一〇葉二三表「祝曰、：翹翹豕氣、陰氣相徊、陵我四肢、干我盛衰」。『辯正論』卷六氣爲道本「黃精經云、流丹九轉、結氣成精、精化成神、神變成人、陽氣赤、名曰玄丹、陰氣黃、名曰黃精、陰陽交合、二氣降精、精化爲神、精神凝結、上應九天」。

(3) 來子 『眞誥』卷二〇葉一三表「有云來子雖善於爾者、即長史後母也」。

(4) 仰感 『眞誥』卷八葉一〇表「靈草摩玄方、仰感旋曜精」。

(5) 始終 『後漢書』列傳五五張奐傳「通塞命也、始終常也」。

(6) 披褐山栖、帶索獨往 「廬山慧遠法師答桓玄勸罷道書」(『弘明集』卷一〇)「沙門去棄六親之情、毀其形骸、口絕滋味、被褐

帶索、山棲枕石、永乖世務、百代之中、庶或有一髻髻之間」。  
許詢「雜體詩」(『文選』卷三一)「遭此弱喪情、資神任獨往」、  
李善注「淮南王莊子略要曰、江海之士、山谷之人、輕天下細萬物而獨往者也、司馬彪曰、獨往、任自然不復顧世」。

(7) 弘道 『論語』衛靈公「子曰、人能弘道、非道弘人」。

(8) 哀不至傷、哭不過慟 『論語』八佾「子曰、關雎、樂而不淫、哀而不傷」。同先進「顏淵死、子哭之慟、從者曰、子慟矣、曰、有慟乎、非夫人之爲慟而誰爲」。

# 眞誥卷之七

## 甄命授第三

體〔已〕(此一子後人僂益)標高運、味玄咀眞、呼引景曜、凝靜六神、煥領八明、委順靈根、寶鍊三度、養液和魂、假使衝風繁激、將不能伐我之正性也、絕飆勃譎、焉能迴己之清淳耶、爾乃空冲自吟、虛心待神、營攝百絕、栖澄至眞、當使憂累靡干於玄宅、哀念莫擾於絳津也、淡泊眇觀、顧景共歡、於是至樂自鎗零聞於兩耳、雲璈虛彈平空軒也、口挹香風、眼接三雲、俯仰四運、日得成眞、視盼所涯、皆已合神矣、

夫眞人之得眞、每從是而獲耳、不眞而強眞、亦於此而顛覆也、復使愆痾填籍、憂哀塞抱、經營常累、憑惜外道、和適羣聽、求心俗老、忽發哀音之「兮」<sup>1</sup>（此作奚胡音、猶今小兒啼不止謂爲咳呌也）、長悼死沒以悲逝、必精滅神離、三魂隕炁、邪運空閒、魄告魍魎、乘我虛陣、造遣百祟、何可握生道以奔於死房、陶靈風而踐於尸室、擲己吉象、投之凶穢乎、已聞高勝而故由豫、屢觀明科而「未」<sup>2</sup>釋疑、遂羅洿上章、使臭染隱書、四極擊鼓、三官尋鈔、誓信云何而忘、太初於焉而遊、神虎奮爪、毒龍效牙、八方誠曠、「遏」<sup>3</sup>（謂應作曷字）處而逃、身謝之後、方悟清僚之可羨、言者之不虛矣、且哀聲亂眞、干忤正炁、明君胡不常處福鄉、於此振衣而歸室乎。

正月十一日夜、安妃告。〈此一條是寅年正月九華告楊君相譏誚之事、故南眞後復有所論也、楊書〉

眞人歸心於一正、道炁標任於永信、心歸則正神和、信順則利貞兆、此自然之感對、初無假於兩際也、夫惑生是非、嫌遺疑似、潛滯於中、抱閒心裏、外握察觀之炁、內有緼結之晒、遺初覺於建始、乖玄梯而密猜者、有如此徒、我見其敗、未見其立矣、蓋有懷而懼者、豈獨一人哉。

二月三十日夜、南嶽夫人告許長史、可以示同炁而墮惑者。〈此是授長史、〈今〉<sup>3</sup>「令」說喻楊君勿疑九華之事也、楊書〉

故望洪濤之暨天、則知其不起乎洿池之中矣、觀玄翰之汪濊、則知其不出乎章句之徒也。《紫微言》

衆藻集而龍章成、羣聲會而雲韶諧、辛酸備則嘉味和耳。《中候夫人答》、〈此二辭乃出抱朴子外篇博喻中、後復有此例、當是衆眞借取以譬而用之、猶如所稱周易毛詩中語耳〉

彼人何如梁伯鸞乎。《中候言》、〈彼人當是指長史也〉

梁氏德狹也、此子蕭條氣遠甚矣、夫垂蔭萬畝者、必出峻極之嶺、滔天振岑者、必發板桐之源、洪哉積陰德之賢、有似邪人也。《紫微答》、〈邪則幽國、以比周大王也、自蔭以下至板桐之源、亦是博喻中語、唯改襄陵作振岑〉

彼愈北而聰明愈閉。《右英言》

聰者貴於理《道》<sup>5</sup>「遺」音於千載之外、而得興亡之迹矣、逸驕逍遙於太荒之「衣」<sup>7</sup>「表」、故無羈絡之憂、靈羽振翅於玄圃之峯、以遺羅絙之患、何其識吉凶哉。《保命仙人答》、〈此復是博喻兩篇合爲今語、而改機弄作羈落、靈鶴作靈羽、單羅作羅絙耳〉

尋飛絕影之足、而不能騁逸於呂梁、凌波泳淵之屬、而不得陟峻攀危、彼子誠可才異也、安能內攝哉、輔機者欲仁人也、德欲茂矣、繁林鬱蒼、則羽族雲萃、玄淵浩汗、則鱗羣競赴、若其宅心者衆、將何事於近。《紫微言》

右八條楊書、又有掾寫。

- (1) 以下、『雲笈七籤』卷八九經告および卷九二衆眞語錄に見える。
- (2) 俞本に従って「未」の字を補う。
- (3) 意をもって「今」の字を「令」の字に改める。
- (4) 以下、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩序に見える。
- (5) 意をもって「道」の字を「遺」の字に改める。
- (6) 以下、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩序に見える。
- (7) 俞本が「衣」を「表」に作るのに従う。
- (8) 以下、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩序に見える。

眞詰卷七

甄命授第三

あなたの身體は〔已〕<sup>すでに</sup>へこの一字は、後の者が付け加えたのである。すぐれためぐりあわせを示しており、玄を味わい眞をかみしめ、(日月の)きらめく光を呼吸<sup>①</sup>し、身中の六神をやすらかに静め<sup>②</sup>、八方に輝きわたる光明<sup>③</sup>を内におさめ、靈根を自然のなりゆきにまかせ、三たび大切に鍊成し、津液を養い三魂を調えた<sup>④</sup>。たとえ突風が激しくたたきつけても、自分の正しいもちまえを損なうことはできまいし、つむじ風が吹きつのも、自分自身の清淳さを變えられはすまい。さすれば、からりとこのびやかに自ら吟じ、心を虚しくして神を待ちうけ、もろもろの營みを絶ちきる心を養い、至高の眞理の境に身を置いて心を澄ませ、くさぐさの憂いも心の奥深い住み家を損なうことなく、哀しみの思いも絳<sup>あか</sup>い津液をかき亂すことのないようにせねばなりません。淡泊とした態度で遙かかなたを眺め、景<sup>ひかり</sup>を顧みてともによるこぶ。そうなると、至上の音楽がポロンポロンと鳴り響いて二つの耳にとどき、雲璈が人氣のない窗邊で音もなく演奏されるのです。口に香わしい風を吸い、眼に紫青赤の三素雲を見つめれば、わずかの間にうつろう四季の運りのうちに、日に日に眞人となつてゆくことができ、見わたす限りすべて神と合致するのです。そもそも眞人が眞理を獲得するのは、いつもこのようにして獲得

するのです。眞理でないのに眞理だとこじつけても、そこでつまづいて倒れるだけのこと。またもし罪や病が次々と重なり、憂哀の情が胸に滿ちあふれ、世俗の累にいつも追いたてられ、外道にすがつて心を引かれ、大衆の好みに調子をあわせ、俗人や老人たちに取り入ろうとし、突然「兮<sup>けい</sup>兮<sup>けい</sup>」これは「奚<sup>けい</sup>胡<sup>こ</sup>」という發音で、今日、子供が啼きやまないのを「咳<sup>き</sup>ゐ<sup>い</sup>」というようなものである」という哀しげな聲を發して、いつまでも死没した者を悼みその長逝を悲しむならば、必ず精神は滅離し、三魂は氣を損ない、邪がそのすき間に入りこみ、七魄は魍魎に告げ知らせ、わが陣營がからっぽなのに乘じて、さまざまの祟りを作り出すのです。どうして生の道を手に握ったまま死の部屋にかけこみ、靈妙な風に吹かれて屍の部屋に足を踏み入れ、自分の吉象を投げ捨てて、それを凶穢の中に投ずることなどできましようか。すでに立派な教えを聞きながらもまた疑いをまにぐずぐずし、しばしば神明の科戒を目にしながらもまだ疑いとかず、そこで上章を連ね汚し、有難い太上の隱書を穢すことになります。四極の眞人たちは太鼓を打ち鳴らし、三官は矛を取り出して、「誓いの言葉をどうして忘れ、太初の世界に遊ばないのか」と責める。神虎は爪を怒りたせ、毒龍は牙をむきだす。八方にひろがるこの世界はなるほど廣大だが、「過<sup>と</sup>」へきつと「曷<sup>ど</sup>」の字であらうにも逃れることはできない。自分の死後はじめて、清らかに身を處する同僚たちが羨むべき存在であり、忠告してくれた者の言葉が嘘

でなかったと悟るのです。そのうえ哀しみの聲は眞理を亂し、正氣に逆らいます。あなたはどうしてもずつとこの福地におらず、ここから衣をふるって自宅に歸ろうとなさるのですか。

正月十一日の夜、安妃のお告げ。この一條は、寅年（太和元年、三六六）の正月、九華安妃が楊君に告げて相手をそしったこと。だから南眞が後でまた論じているのである。楊羲の書

眞人は心を一なる正しさに歸し、道氣は永えに信ずるという態度の中に表されます。心が歸一すれば身中の正神がなごみ、信ずること素直であれば正しきになうというきざしが現れる。これは自然の感應なのであって、二者對立の立場をかりることはまったくないのです。そもそも惑いの心が是非の判斷を生み、疑いの氣持がまぎらわしさを生み出します。それらは心中に密かにたまつてゆき、心のうちにわだかまるのです。外にはこざかしく觀察する氣を握り、内にはからみ結ばれた冷笑をうかべ、當初修行を始めた時の覺悟を忘れ、玄に至る階梯からかけ離れて密かに猜疑する。こういった輩がいるのですが、私は彼らの失敗を見たことがあつても、ものになつたためしを見たことがありません。思うに、心にかけていながら心配なのは、決して一人だけではないのです。

二月三十日の夜、南嶽夫人が許長史に告げられた。氣を同じくしながら惑いに落ちこんでいる者に示すがよいというわけである。へこ

れは許長史に授け、楊君に九華安妃を疑わぬようにと説諭させられたことである。楊羲の書

かくて天までとどく大波を眺めれば、それがちっぽけな池の中には起たぬことが分かります。廣く深いすばらしい文章を見れば、それが一章一句にこだわる輩からは生まれぬことが分かります。《紫微夫人のお言葉》

さまざまの文様が集まって龍の文様が出来あがり、さまざまの聲が合わさって雲間の音楽がハーモニーを完成し、辛味や酸味が備われば美味が調和されるのです。《中候夫人のお答え》。《この二辭は、『抱朴子』外篇の「博喻」に基づくのであり、後にもやはりこのような例がある。きつと眞人たちが借りてきてたとえとして用いたのであり、『周易』や『毛詩』中の語と稱するようなものである》

あの人は梁伯鸞<sup>20</sup>に比べてどうでしょう。《中候夫人のお言葉》。  
《あの人は、きつと許長史を指しているのであらう》

梁氏は徳が狭い。この方はさっぱりとしていて、氣は遙か遠くまでひろがっています。そもそも萬畝もの地に陰を垂らす巨大な木は、必ず險しくそそりたつ嶺に生じ、天までみなぎり嶺をゆるがす(「振

岑」洪水は、必ず板桐の山に水源を發します。たいしたものですね、陰徳を積んだ賢者は。かの邠の人に似たところがあります。《紫微夫人のお答え》。《邠はつまり幽の國で、それでもって周の大王にたとえたのである。「萬畝もの地に陰を垂らす」から「板桐の山に水源を發す」までは、やはり「博喻」中の語。ただ「丘に登る(「襄陵」)を改めて「嶺をゆるがす(「振岑」)としただけである》

あの人は正しい道に背けば背くほど、耳目のはたらきはいよいよ閉ざされます。《右英夫人のお言葉》

耳のさとい者はひとえに残された言葉を千年の後にさらいして、興亡の迹を理解します。駿馬は大荒の地<sup>23</sup>のかなたでのんびりと遊び、それで手綱でつなぎとめられる(「羈絡」)心配がないのです。靈鳥(「靈羽」)は玄圃の峰で羽ばたいて飛びまわり、それで網にからめとられる(「羅紲」)心配がないのです。なんとまあ吉凶を知っていることでしょう。《保命仙人のお答え》。《これまた「博喻」の兩篇を一つに合せて今この語に直したのであって、「機杼」を改めて「羈絡」とし、「靈鵲」を「靈羽」とし、「罩羅」を「羅紲」としているのである》

飛鳥を追いかけて光を絶ちきるほどの駿馬も、呂梁の淵<sup>25</sup>ではそのス

ビードを發揮できません。波をしのぎ淵を泳ぎまわる魚たちも、險しくきりたった嶺に登ることはできません。あの方は確かにすばらしい才能といえましょう。だが、どうして内に眞を養うことができましょうか。機要を補佐するには仁人が必要です。徳が盛んであつてほしいのです。鬱蒼と茂る林には鳥たちが雲のごとく集まつて來、廣々とひろがる深い淵には魚たちがきそつてやつて來ます。もし心を寄せる者が多いのであれば、つまらぬことに努める必要はありません。《紫微夫人のお言葉》

右の八條は楊羲の書。また許掾の寫しがある。

- (1) 呼引景曜 『太一帝君太丹隱書』(『雲笈七籤』卷四四)「下達洞門、上到玄鄉、混合三五、遊息天京、呼引日月、變化雌雄」。
- (2) 凝靜六神 『上清黃庭內景經』玄元章第二十七(『雲笈七籤』卷一二)「六神合集虛中宴」、注「六神六丁六府等諸神、俱在身中、身中虛空則晏然而安樂、不則憂泣矣」、『雲笈七籤』卷三五禁忌篇「凡人不得北首而臥、臥之勿留燈、令魂魄六神不安多愁」。
- (3) 八明 『太微帝君太一造形紫元內二十四神回元經』(『雲笈七籤』卷三一)「玄流朱精、生光八明、身神衆列、竝來見形、徹

視萬里、中達九靈」。

- (4) 和魂 『眞誥』卷一〇葉二裏「和魂鍊魄、合體大神」。
  - (5) 正性 『洞玄靈寶定觀經』(『雲笈七籤』卷一七)「五者鍊形爲氣、名曰眞人」、注「得本元氣、故曰鍊形爲氣、正性無偽、故曰眞人」。
  - (6) 眼接三雲 『眞誥』卷九葉一一表「夜臥、先急閉目、東向、以手大指後掌、各左右按拭目就耳門、使兩掌俱交會於項中三九過、存目中當有紫青絳三色氣出目前、此是內按三素雲、以灌合童子也、陰祝曰、眼童三雲、兩目眞君、…」。
  - (7) 外道 『老君清淨心經』(『雲笈七籤』卷一七)「邪魔外道、道能降伏」。慧通「駁顧道士夷夏論」(『弘明集』卷七)「夫外道淫奔、彌齡積紀」。
  - (8) 魍魎 『登眞隱訣』卷中「邪鬼則天地間精物魍魎害人者也」。
  - (9) 吉象 班固「幽通賦」(『文選』卷一四)「既訊爾以吉象兮、又申之以炯戒」。
  - (10) 由豫 『周易』豫九四「由豫、大有得、勿疑、朋盍簪」。
  - (11) 上章 『晉書』卷八〇王獻之傳「未幾、獻之遇疾、家人爲上章、道家法應首過、問其有何得失」。『隋書』經籍志四「而又
- 有諸消災度厄之法、依陰陽五行數術、推人年命書之、如章表之儀、并具贊幣、燒香陳讀、云奏上天曹、請爲除厄、謂之上章」。
- (12) 四極 『元始無量度人上品妙經四注』卷四「阿陀龍羅四象吁

員、李少微注「四者四極之宮、謂東華南極西靈北真也、四極真人主生死命籍」。

(13) 神虎 『紫陽真人內傳』「神虎俠洞門、靈狩衛太室」。

(14) 毒龍 『雲笈七籤』卷四七道士被天魔所試即誦拂魔呪「毒龍奮爪、金頭橫吞」。

(15) 福鄉 『真誥』卷一三葉九表「後有郭四朝、又於其處種五果、又此地可種奈、所謂福鄉之奈、以除災厲」。

(16) 正神 『周氏冥通記』卷二「緣前身有忠朴之心、故得爲正神所使」。

(17) 利貞 『周易』乾「乾、元亨利貞」。

(18) 章句之徒 揚雄「解嘲」(『文選』卷四五)「當其事也、章句之徒、相與坐而守之、亦無所患」。

(19) 猶如所稱周易毛詩中語耳 たとえば『周易』は『真誥』卷二葉一八裏、『毛詩』は『真誥』卷七葉七裏に見える。

(20) 梁伯鸞 『後漢書』列傳七三逸民梁鴻傳「梁鴻字伯鸞、扶風平陵人也、……」。

(21) 板桐 『楚辭』哀時命「璧瑤木之檀枝兮、望閭風之板桐」、王逸注「板桐、山名也、在閭風之上」。

(22) 周大王 『毛詩』豳風七月「釋文」「豳者、戎狄之地名也、夏道衰、后稷之曾孫公劉自邠而出居焉、其封域在雍州岐山之北、原隰之野、於漢屬右扶風郿邑、周公遭流言之難、居東都、思公

劉大王爲豳公、憂勞民事、以比紆己志、而作七月鴟鴞之詩」。

(23) 太荒 『山海經』大荒西經「大荒之中、有山名曰大荒之山、日月所入」。

(24) 尋飛絕影之足 『抱朴子』博喻篇に基づく。

(25) 騁逸於呂梁 『莊子』達生「孔子觀於呂梁、懸水三十仞、流沫三十里、鼃鼃魚鼈之所不能遊也」。

(26) 繁林藹薈 『抱朴子』博喻篇に基づく。

有道者皆當深研靈奧、栖心事外、但思味勤篤、糟粕餘物、亦足自了耳。《桐柏真人言》

夫清淨未若東山、養真未若幽林、栖形景而虛上、遠風塵之網纏、於是榮辱之羅、何足以羈至士耶。(右二條楊書)

有道者は、誰しも靈妙な奥義を深く追求し、俗界の外に心を住まわせなければならぬ。ただ一心不亂に仙道を思い味わい、その他の物を糟粕と見なせば、それだけで十分だ。《桐柏真人のお言葉》

そもそも清淨な場所は東山にしくはなく、眞を養うには幽玄な林



にしくはない。身體を虚空に住まわせ、俗塵のしがらみから遠ざかれれば、かくて榮譽や恥辱の網は、<sup>①</sup>至士をつなぎとめることができようか。〈右の二條は楊羲の書〉

(1) 至士 『雲笈七籤』卷五九太无先生服氣法「但仙人至士、功行未滿、尙不能致、況凡俗人乎」。

夫金玉山積、猶非我也、祛懸之檐往矣、猶非己也、榮冕之盛陳矣、猶非貴也、采艷之芬華矣、猶非眞也、能消而蕩之、則淫吝之心亡也、鄙滯之門閉矣、尙眞之覺漸也、「千」〈謂應作阡字〉陌之情見矣、如其不爾、四者皆成内賊之害、外爲驩兜之患不去、吝之不散、無所復營措於其間矣、亦無事趣、當爾也。〈戒長史也、此三字本朱書、亦應是右英夫人言也〉

<sup>②</sup>爲道者實有勤苦、斯人也可謂必得之矣。〈右二條長史據書

(1) この段、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩序に見える。

そもそも金玉が山のように積まれたとしても、<sup>①</sup>我とは關係がないし、泥棒が箱を擔いで行つたとしても、<sup>②</sup>自分とは關係がない。立派な冠をかぶつた人が盛んに整列したとしても、貴くはなく、あでやかな美女が飾りたてたとしても、眞ではない。それらをきれいさっぱり消滅させることができれば、淫欲や吝嗇の心はなくなり、卑しい凝滯の門は閉ざされ、眞を尊ぶ自覺がめばえ、「千」〈きつと「阡」の字であろう〉陌のようにきちんと秩序だった氣持が現れます。もしそうでなければ、右の四者はいずれも内面を損なう害となり、外は驩兜のような患い<sup>③</sup>となつて去りません。吝嗇の氣持が散じないと、そこに手の打ちようがなく、何の意味もありません。まったくそのとおりなのです(「當爾也」)。〈許長史を戒めたもの。この三字は本來朱書されていた。これもまたきつと右英夫人の言葉であろう〉

道を修める者は、まことに勤勉かつ刻苦、このような人にして、必ず道を得ることができると言えよう。〈右の二條は、許長史と許據の書〉

(1) 金玉山積 『老子』第九章「金玉滿堂、莫之能守、富貴而驕、

自遺其咎」。

- (2) 肱肭之櫓往矣 『莊子』肱肭「將爲肱肭探囊發匱之盜而爲守備、則必攝緘膝、固局鐻、此世俗之所謂知也、然而巨盜至、則負匱揭篋擔囊而趨、唯恐緘膝局鐻之不固也」。

- (3) 驩兜之患 『尚書』舜典「惟刑之恤哉、流共工于幽州、放驩兜于崇山」。

① 夫學道者當得專道注眞、情無散念、撥奢侈、保冲白、寂然如密有所觀、熙然如潛有所得、專專似臨深谷、戰戰如履於氷炭、始得道之門耳、猶未得道之室也、所謂爲難者學道也、所謂爲易者學道也、寂玄沈味、保和天真、注神栖靈、耽研六府、惜精閉牝、無視無聽、此道之易也、即是不能行此者、所以爲難、許侯研之哉、斧子學之哉。  
〈右右英所道令疏〉

② 彼君勤其事者、有獲福者多也。〔墮〕〔謂應作隋字〕之者禍敗積矣。

③ 《范帥言、不知道誰》、《應是鬼帥范疆矣》

右二條有掾書。

- (1) この段、『無上祕要』卷四二修學品および『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊真人許長史詩序に見える。

- (2) 以下の二句、前條の注文となっているが本文とみなす。

- (3) 以下の二句は原注とみなす。

そもそも道を學ぶ者は、道と眞に專念すべきであつて、氣持を散らしてはいけない。奢侈をはらいのけ、純粹無垢の心を保ち、ひっそりと何かを見つめるように靜かに、密かに何かを得たように心をやわらげ、深い谷に臨む時のように慎重に、氷や炭火を履む時のように戰々兢々としても、やっと道の門に入ることができるだけで、まだ道の私室にまで入ることはできないのです。③ いわゆる「難しいのは道を學ぶこと」であり、いわゆる「容易なのは道を學ぶこと」なのです。靜かにひっそりと玩味し、天與の純眞さを保持して、神靈に心を注ぎ住まわせ、六つの臟腑③を一心に磨き、精氣を惜しんで性欲を閉ざし、視もせず聴きもしない。これが道を學ぶ容易な場合です。もしもこれらを実行することができない者にとつては、難しいゆえんです。許侯(謚)はこれを磨きましたか。許斧子(翻)はこれを磨きましたか。〈右は右英夫人が述べて書きつけさせられたもの〉かの君がそのことにつとめるならば福を得ることが多いであらう。

それを「墮」へきつと「隋」の字であらうにすれば、禍敗が積まれるのだ。《范帥の言葉》。一體誰のことを言っているのか分からない。《范帥とはきつと鬼帥の范疆であらう》

右の二條は許掾の書がある。

(1) 專事似臨深谷、戰戰如履於氷炭 『毛詩』小雅小宛「惴惴小心、如臨于谷、戰戰兢兢、如履薄氷」。

(2) 得道之門、未得道之室 『論語』先進「子曰、由之瑟、奚爲於丘之門、門人不敬子路、子曰、由也升堂矣、未入於室也」。

(3) 六府 『雲笈七籤』卷六一谷神妙氣訣「內者見外、外者知內、內五行六府五藏、肺爲玉堂宮向書府、心爲絳宮宮元陽府、肝爲清冷宮蘭臺府、膽爲紫微宮無極府、腎爲幽致宮太和府、脾爲中和宮太素府、謂之六府」。『眞誥』卷九葉一九裏「五藏生華、魂魄制鍊、六府安和、長生不死之道」。

(4) 鬼帥范疆 『眞誥』卷七葉七表「青絹三十尺」、注「酬鬼帥范疆近執戮百惡、滅訟散禍、有功」。

昔因華氏累白書敬、靈道高邈、音響冥絕、仰瞻九霄、注心罔墜、

矜遠不遺、特蒙酬告、雲華斐暢、玉音繁發、誘導恂恂、啓悟丹至、披覽欣欣、五情悅懌、某志好有年、未獲「ム」(「ム」二字、別本作剋遂、恭黨幽晦、始觀天日、靈眞「ム」(「ム」二字、別本作微字、疑非) 請、訓誨交湊、剋已補過、思釋鄙滯、夙興勤惕、悟寐自厲、庶幾積誠、卒獲微感、玄運既會、奉覲有期、(「想」) 疑長此一字、良爲「ム」(「ム」二字、別本作延仰、生染迷俗、沈溺塵味、不達上眞、謂道盡此、決欲習性以靜之、損「ム」(「ム」二字、四字朱書) 以寶之、非爲色欲「ム」(「ム」二字、多、而患在難「ム」(「ム」二字、至於水火之戒、氷炭之喻、朗然照豁、敬承清規、務損之又損之、「ム」(「ム」二字、謂應是以字) 至於死灰也、歎覺悟之不早、恨知機之將晚、用火之言、其旨頗微、思之觸類、良追愧悚。

昔憑賴華氏、每輒獎勵、願其有成、得見陶冶、而耽味華競、蹈道不篤、恆欲與共清閑、使意盡言苦而已、趣向不同、密言難遇、然喟喟之懷、要欲獻其丹款矣、不審故可復有冀不。(此二書長史答先因通華僑意、似酬前書、而又言用火之言、此授今闕)

右二條ム書。

昔、華氏(僑)を通じて何度も書簡を差し上げました。神靈の道

は高遊<sup>②</sup>、そのお言葉は遙かにかけ離れています。九天のかなたを仰ぎみ、心を集中させ張りつめておりましたところ、憐れみをかけられてお見すてなく、わざわざ言辭を頂戴いたしました。そのお言葉はあやなす雲のように美しく、きらめく玉の音のように清らかで、恂々とお導き下さり、眞心こめて啓發して下さいました。拜讀して心は浮き立ち、五情が喜びに溢れました。某は道<sup>それ</sup>を志向してから何年にもなりますが、いまだ「ムム」二字を缺失している。別本は「剋遂」に作っているを獲ておりません。閉ざされた闇の世界にかしこまっておりましたところ、始めて太陽を目にすることができ、靈眞が「ム」(ここに一字を缺失している。別本が「微」の字に作るのは、恐らくは間違っている)請し、訓誨がこもこも集まりました。おのれの欲望にうちかち過失を補い、いやしい凝滞の氣持をとかんとし、朝早くに起きて勤めつつしみ、寝ても寤めてもわが身を勵まし、このような眞心を積み重ねることを願っておりましたところ、ついに密かな感應を得ることができたのです。玄運にめぐりあわせたからには、拜謁する機会<sup>④</sup>がありましよう。「想」(疑うらくは、この一字は衍字であろう)まことに「ムム」二字を缺失している。別本は「延仰」に作っているをなして、生まれながらにして迷俗に染まり、塵昧のなかに沈溺して、上眞の域に達せず、道はここで盡きてしまったと思っておりました。これからは必ず性を習いとして鎮靜させ、「ム」(一字を缺失している。四字(「損□以寶之」)は

朱書されているを減らして寶とします。色欲が「ム」(一字を缺失している)多であるためでなく、患いは難「ム」(一字を缺失している)にあります。水火の戒、氷炭の喩は、明々白々はつきりしております。清らかな教えにつつしんで従いつつ、減らした上にまた減らしていった<sup>⑥</sup>、「ム」(きつと「以」の字であろう)心をつめたき灰に至らせるように努力します。もっと早くに目覺めなかつたことを歎き、機微を知る機会<sup>⑦</sup>が手遅れになりそうなのが残念です。用火の言は、その趣旨はやや微妙です。あれこれ考えると、まことに今さらながら慚愧にたえません。

昔、華氏(僑)を頼りとしていた時には、いつも勵ましを受け、道が成就されて陶冶されることを願っておりましたのに、浮華な競争に耽溺し、道を履み行うことが十分ではありませんでした。つねに清閑をともし、意を盡くして言葉<sup>⑧</sup>をねんごろにさせたいと思うばかりです。目的とするところは同じでなく、内密の言葉に出會うことは難しいのですが、しかしながら渴仰の氣持でもって、必ず眞心を獻じたいのです。もとよりまだ希望はかなうのでしょうか。(この二書は許長史が先に華僑を仲立ちにしていた意について答えたものである。前書に應酬したものらしい。さらに「用火の言」と言っているが、この語授は今缺けている)

右の二條は某の書。

(1) 昔因華氏累白書敬『真誥』卷一九葉三裏「衆眞未降楊之前、已令華僑通傳音意於長史、華既漏妄被黜、故復使楊令授、而華時文迹都不出世」。

(2) 靈道高邈『真誥』卷七葉一二裏「靈道高虛、肉人未達眞法」。

(3) 剋己補過『論語』顏淵「顏淵問仁、子曰、克己復禮爲仁、一日克己復禮、天下歸仁焉」、『周易』繫辭傳上「无咎者、善補過也」。

(4) 奉觀『真誥』卷一七葉一八裏「比行奉觀、楊義頓首頓首」。

(5) 損之又損之『老子』第四十八章「爲學日益、爲道日損、損之又損、以至於無爲」。

(6) 至於死灰『莊子』齊物論「形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎」。

(7) 知機『周易』繫辭傳下「子曰、知幾其神乎、…幾者動之微、吉之先見者也」。

茅小君去五月中失日有言云、華僑漏泄天文、妄說虛無、乃今華家父子被考於水官。

華僑之失道、由華騎之佞亂、破壞其志、念華團華西姑者、三官因之以試觀、試遂不過、僑於是得有死罪、故名簡早削奪、尋輸頭皮於水官也、可密尋彼家有此人名不、是誰者。〔此前竝是酬問華氏事、不知是子年丑年耳〕

許朝者暴殺新野郡功曹張煥之、又枉煞求龍馬、此人皆看尋際會、比告訴水官、水官逼許斗、使還其丘墳、伺察家門當衰之子、欲以塞對解逼、示彼訟者耳、是斗亡月亡日其應至矣、君自受命、當能治滅萬鬼、羅制千神、且欲視君之用手耳、欲令無他者、宜以此日詣斗臺、叱攝煥等、制敕左官、使更求考代、震滅爭源也、可勿宣此、當言我假威於君矣、不知君宜往試攝滅之耳、滅鬼之迹、事中暫應爾。

六月十六日夜、小君授書此。〔此令楊君爲長史家攝過家訟也、許朝先爲南陽郡、故得殺新野人、而此三人事不出周魴詰先生中、當是四十三條限也、斗爲仙品、而猶被水官之逼者、是喪服中殃氣尙相關涉故也〕

紙三百《酬鬼帥王延近報錄書以杵宗會、有功》

油三斗《酬鬼帥傳晃近與功曹使者令勢威照鬼形、使不得暴》

青絹三十尺《酬鬼帥范疆近執》<sup>①</sup>〔戮〕百惡、滅訟散禍、有功

銀叉三枚《酬鬼帥梁衛近防護疾者、招魂安神、使家訟不行、有殊功》

右四條詭、以六月十三日小茅君假作玉斧之形、以夢告於虎牙、使令夫婦明驗此四種詭、以酬四帥之禽鬼者、何以不復憶此可餘問(餘問謂令與同勿慙慙耳、非使此四鬼帥、本亦道家之祭酒也、得下解法、受書爲鬼帥耳)、既有酬詭、後長爲己用心也、所以夢假於玉斧之形者、虎牙魂魄未得通接仙真故也、玉斧清淨藻潔、久齋濯魄、心近於仙、故假象以通夢也、通夢而猶不悟、可謂信之不篤、或悟而忘其詭、可謂篤而不思。

夫詭誓者、悉皆受命密交、慎不可令人知、外書云「我聞有命、不可以示人」乎。《毛詩》<sup>②</sup>《揚》「揚」之水篇云、「我聞有命、不可以<sup>③</sup>古」<sup>④</sup>「人」、當謂此也

六月三十日夜、小君授書、密密示之。

眞司科云、「有用力於百鬼、聘帥御於天威者、宜須此詭、地下主者、解下道之文官、地下鬼帥、解下道之武官、文解一百四十年一進、武解二百八十年一進、武解、一解之下者也」、夫心動於事慾、兼昧於

清正、華目以隨世、而畏死以希仙者、皆多作武解也(此武解之目、世中諸人多有相類、宜服五飲丸、去水注之氣、可急合、不但治疾而已、亦以住白而有氣色也。

六月二十三日夜、南嶽夫人告。《長史素患淡飲、比來疾動、故有此告、五飲丸即是世中者耳》

精合五飲丸、當大得力、且可自靜息乎。《范安遠所言》

語許長史、「無所憂、不煩此詭、可還之」。《右保命君語許侯「勿憂嗣伯之詭、且還之」

右右英夫人語。

小君曰、「我二人吏兵、恐宜詭謝、獻以體上之密寶、不爾、小子後不肯復爲爾用力也、許厚之徒也、許狂子所賴在其弟、許牙所賴在其父、佳事不可忘也、惡事不可忘也、<sup>⑤</sup>「又」爲寶密、關達機密、銀亦爲次寶也、其今多情彌精耳、後勿復數爾、勞損其神」。

右小茅君授所言。

許賤者、戴石子之女也、爲讎家薛世等所殺、又世殺賤抱小兒阿寧、賤今在水官、與兒相隨、骸骨流漂、亦訟在三官、求對考今生人也、寧見殺時、頭先患瘡、瘡流面目。《檢譜不見戴賤、當是婦人不顯名也》

七月二日夜、小君授書。

其夕長史亦得「夢」。〈此夢字也、眞書多如此〉

死生之機、得失之會、蓋更切耳、何不遠存玄味、耽虛標流乎、求之近應、應愈賒也、此亦人失之路耳、想體尙高韻、不細求之於毫末矣。

七月二十六日夜、紫微夫人授作、令與許長史。〈右從小茅君來凡十八條、楊書〉

- (1) 俞本が「載」を「戮」に作るのに従う。
- (2) 意をもつて「楊」の字を「揚」の字に改める。
- (3) 俞本が「古」を「告」に作るのに従う。
- (4) 意をもつて「又」の字を「叉」の字に改める。

茅小君は去る五月中のある日に言われた。「華僑は天界の文書を漏洩し、ありもせぬことを妄説したので、<sup>①</sup>今では華家の父子は水官で考罰を受けている」。

華僑が道を失ったのは、華騎が小さかくもたくらんで僑の志氣

を破壊し、華團と華西姑に心を向けさせたからである。三官がそのために試験を課したが、その試験に合格しなかった。華僑はそこで死罪を得て、そのために名札がとつくの昔に剝奪されてしまった。ついで頭皮を水官に送ったのである。密かに彼の家にこれらの人の名があるかどうか、これは誰であるかを尋ねるがよい。〈これと前條とは、ならびに華氏のことを問うたのに應酬している。これが子年（興寧二年、三六四）のものか丑年（興寧三年、三六五）のものは分らない〉

許朝<sup>②</sup>は新野郡の功曹の張煥之を虐殺した。また求龍馬を罪もないのに殺した。これらの人はみな機會を見つけて、さきごろ水官に告訴した。水官は許斗を脅迫して、その墳墓にもどり、一家の中でまさに衰死せんとしている子供を伺察させることとした。怨みを塞ぎ切迫した氣持を解消してやろうと、訴訟を起こした者たちに示すのである。許斗は某月某日にきつとやって来るだろう。君は命を受けたのだから、萬鬼<sup>③</sup>を取りおさえて滅亡させ、千神<sup>④</sup>を一網打盡にすることができよう。しばらく君のお手並みを拜見しよう。何事もないようにしたいのなら、この日に許斗の墓に出かけて、張煥之たちを叱りつけるがよい。左官<sup>⑤</sup>に制敕して、あらためて考罰の身がわりを求め、紛争の種を絶滅させてやろう。口外してはならぬが、その時には私が君に威力をかけてやったと言うのだ。君が出向いて取りお

さえ滅ぼすことを試みるのが適當かどうかは分からぬが、鬼を滅ぼす<sup>⑥</sup>やり方は、このような事態の中ではしばらくこうする他はないのだ。

六月十六日の夜、茅小君が授け、これを書きとらせられた。これは楊君をして許長史の一家のために冢墓の訴訟をくい止めさせようとしたのである。許朝は先に南陽郡の長官であつたので、新野郡の人を殺すことができた。しかし、これら三人の事は、周魴が先生(許邁)を詰問した中<sup>⑦</sup>には見えない。きっと(みだりな處刑)四十三條のうちにあるのに違いない。許斗は仙品であるのに、水官に脅迫されているのは、喪服中の殃氣がまだなお互いに影響しあうからである<sup>⑧</sup>。

紙三百枚《鬼帥の王延<sup>⑨</sup>が近ごろ簿録のことを知らせて、一族に集まる崇りをたたきのめすことに功勞があつたのに酬いる》

油三斗《鬼帥の傳晃<sup>⑩</sup>が近ごろ功曹使者と一緒に強い威光で鬼の姿を映し出して、亂暴をはたらかないようにしてくれたことに酬いる》

青絹三十尺《鬼帥の范疆が近ごろ多くの惡を退治し、訴訟や禍いを消滅させることに功勞があつたのに酬いる》

銀のかんざし<sup>⑪</sup>三本《鬼帥の梁衛が近ごろ病人を守って、抜け出た魂を呼びかえし<sup>⑫</sup>、心を落ち着けさせ、冢墓の訴訟が行われないようにすることにことのほか功勞があつたのに酬いる》

右の四條の禮物は、六月十三日に小茅君が許玉斧の姿をかりて夢の中で許虎牙に告げ、夫婦に明朝この四種類の禮物を獻納して、鬼を捕えてくれた四人の鬼帥に酬いるようにさせたのである。どうしてこのことを深く思わずに他人を相手としてよからうか(他人を相手としてよからうかとは、自分に味方させてよろこぶこと)をいう。この四人の鬼帥を使役するわけではない。四人の鬼帥はやはり元來道家の祭酒であつた。下戸解の法を得て辭令を授かつて鬼帥になつたのである。功勞に酬いる禮物を贈つたからには、これからはずっとわれわれのために心をかけてくれるであらう。夢の中で許玉斧の姿をかりたわけは、許虎牙の魂魄がまだ仙人や眞人と直接通じることができないからである。許玉斧は心清うから人格は高潔、久しく齋戒して魂魄を清め、仙人に近い心を持っているので、その姿をかりて夢の中で通じたのである。夢の中で通じたのにまだ悟らないのは、信心が篤くないというべきだし、悟っていてもその禮物のことをうっかり忘れてしまうのは、信心は篤いが思慮に缺けるといふべきである。



そもそも誓約の禮物は、いずれも命を受けて密かにとり交わすものであつて、他人に知られないように慎重にすべきである。外典に「私は命があることを聞いてはいるが、人には知らせられない」というではないか。『毛詩』揚之水篇に「私はそういう命のあることを聞いてはいるが、人には告げられない」とあるのが、きつとこのことであらう。

六月三十日の夜、小茅君が授けて書かせ、内密に示された。

眞司科のきまりに、「多くの鬼をおさえつけ、天の威光を自由自在に制御するには、この禮物を用いるがよい。地下主者は、下道で尸解して文官となつた者であり、地下鬼帥は、下道で尸解して武官となつた者である。文解は百四十年ごとに一段階昇進し、武解は二百八十年ごとに一段階昇進する。武解は尸解の最初のランクの中の下のものである」とあります。いったい世俗の欲に心を奪われつつも、清らかな正しさを玩味し、華美を求めて世俗に身をまかせながらも、死を畏れて登仙を願う者は、ほとんどが武解となるのです（このような武解の評価に、世俗の人間の中には當てはまる者が多い）。五飲丸を服用して、水の崇りの氣を除くがよい。とり急ぎ調合しなさい。病氣が治るばかりか、肌はいつまでも白く、顔色がよくなります。六月二十三日の夜、南嶽夫人のお告げ。〈許長史は淡飲の持病があり、近ごろ發作が起つたので、このお告げがあつた。五飲丸は世

俗のものである〉

五飲丸を精妙に調合すれば、大いに效きめがあり、おまけに靜かに憩うこともできるのだ。〈范安遠の言葉〉

許長史にこう告げられましたよ。「心配することはない。この禮物は必要ない。返してよろしい」と。〈右は、保命君が許侯に、「嗣伯の禮物のことは心配するな。ひとまず返しなさい」と言つたのである〉

右は右英夫人のお言葉。

茅小君が言われた。「私の吏卒二名には、謝禮として身につけていゝる祕密の寶物を獻上するのがよからう。さもないと、あいつらは今後もう二度とそなたのためにはたらいはくれまい。許厚と同じ穴のむじなだ。許狂子が頼りにしているのは弟だし、その許虎牙が頼りにしているのは父の許長史だ。よいことは忘れてはいけなしいし、悪いことも忘れてはいけなしい。かんざしは祕密の寶で、機密を伝えてくれるものであつて、銀製のものでも金製のものに次ぐ寶物である。今は氣持を澤山表せば表すほどよい。だが、今後はそんなことをしばしばするな。精神を損なうだけだ」。

右は小茅君が口授して言われた。

許賤というのは、戴石子の娘である。かたきの薛世たちに殺され、そのうえ薛世は許賤が抱いていた子供の寧ちゃんまで殺した。許賤は今水官で子供と一緒にだが、屍はただよって流れ、また三官に訴えて今生きている者に報いとして考罰を加えることを求めている。寧は殺された時、以前から頭に瘡を患っていて、その瘡が顔にひろがっていった。〈家譜を調べてみても、戴賤は見當たらぬ。きつと女性の名を明らかにしないからであらう〉

七月二日の夜、小茅君が授けて書きとらせられた。

その夕、許長史もまた「夢」〈これは「夢」の字である。眞人の書にはこのようなが多い〉を見た。

生死の機微や得失のめぐりあわせは、けだし一層切實なものです。どうして玄妙な境地に遙かに心をかけ、虚空に沈潜して仲間たちの間に姿を際立たせようとしなのですか。卑近な事柄にしろしを求めると、しるしは遠のくばかりであって、これまた失敗に落ちこむ道です。高遠な調べをわがものとして尊び、こせこせと此事を追いかめまいに心がけなさい。

七月二十六日の夜、紫微夫人が授けて作り、許長史に與えさせられた。〈右の「小茅君」からのおよそ十八條は楊羲の書

(1) 華僑漏泄天文、妄說虛無 『眞誥』卷二〇葉一四表「而僑性輕躁、多漏說冥旨、被責、仍以楊君代之」。『周氏冥通記』卷三

「昔有楊許者、楊恆有神眞往來、而許永不得見、所以爾者、許心徒勤謙、猶欲想未除、故不得見、楊位亦不大於許、其神凝志安、萬邪不能干其正、華綺不能亂其心、故受語於楊、令以示許也、爾今得見吾等、亦如楊之用行耳、凡此事莫輕示人、吾昔與裴清靈去來華僑處、受其言語、令以示許、僑宿本俗民、性氣虛疎、不能隱祕、告其一法、迴而加增、逢人不問愚賢、輒敢便說之、如此既多、便迴受於楊耳、僑乃流沈河水、身沒異方、得脫以來、始十四年耳、今猶在鬼伍、晝夜辛勤、諸如此事、可不慎乎、爾勿示人此事也」、注「楊許及華僑事、皆出眞誥中也」。

(2) 許朝 『眞誥』卷四葉一〇裏に見える。

(3) 萬鬼 『眞誥』卷九葉一〇表「紫微夫人喻曰、披華蓋之側、延和天真、入山澗之谷、填天山之源、則虛靈可見、萬鬼滅身」。

(4) 千神 『眞誥』卷一〇葉九表「千神百靈、併手叩頤」。

(5) 左官 『雲笈七籤』卷四〇太玄都中宮女青律戒「土犯被考左官、死入地獄三塗之中、萬劫還生不人之道」。

(6) 滅鬼 『眞誥』卷九葉一〇裏「按而祝曰、開通天庭、使我長生、徹視萬里、魂魄返嬰、滅鬼却魔、來致千靈、上升太上、與

日合併、得補真人、列象玄名」。

- (7) 許朝先爲南陽郡 『眞誥』卷二〇葉一二裏「有云許朝者、卽長史叔、南陽也」。

- (8) 周勣誥先生中 『眞誥』卷四葉一〇表に見える。

- (9) 仙品 『無上祕要』卷八七尸解品「司命東卿君曰、夫尸解者、形之化也、本眞之練蛻也、軀質之遁變也、五屬之隱適也、雖是仙品之下第、而其稟受所承亦未必輕矣、…右出洞眞藏景錄形神經」。

- (10) 王延 『眞誥』卷七葉一〇裏「八月六日中、當有一人著平上幘、

多髭鬚長長爾、著紫皮袴褶、將黃娥來、此人是鬼帥王延也、延自爲人作益、爲將娥見人耳」。

- (11) 傅晃 『眞靈位業圖』第六右位「傅晃」。

- (12) 功曹使者 『眞誥』卷九葉一三表「正一平經曰、閉氣拜靜、使百鬼畏懼、功曹使者龍虎君可見與語、謂能精心久行之耳」。

- (13) 銀叉 『眞誥』卷一八葉九表「小君卽言釵所以導達開通、自可用也、…新婦銀釵亦可用、良無、便當用釵」。

- (14) 招魂 『楚辭章句』招魂「故作招魂、欲以復其精神、延其年壽」。

- (15) 毛詩揚之水篇 『毛詩』唐風揚之水「揚之水、白石粼粼、我聞有命、不敢以告人」。

- (16) 眞司科 『雲笈七籤』卷八六地下主者「太微金簡玉字經云、尸解地下主者、按四極眞科、一百四十年乃得補眞官、於是始得飛

華蓋駕羣龍登太極遊九宮也、夫至忠至孝之人、…」。

- (17) 地下主者… 『眞誥』卷一三葉一表「地下主者、復有三等、鬼帥之號、復有三等、…鬼帥武解、主者文解、俱仙之始也、…其

一等地下主者、散在外舍、閑停無業、不受九宮教訓、不聞練化之業、雖俱在洞天、而是主者之下者、此自按四明法、一百四十年、依格得一進耳、一進始得步仙階、給仙人之使令也」。

- (18) 文官、武官 『太元真人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「明日迎官來至、文官則朱衣素帶數百人、武官則甲兵牙旗器械曜日」。

- (19) 淡飲 『眞誥』卷一八葉二裏「比更告、茶一薄」、注「直注行

下云茶一薄、未正可解、當爲寄與掾也、茶則是茗、掾患淡飲所須、兼亦以少麻也」。

- (20) 范安遠 『眞誥』卷二四葉一四裏「范安遠適云、湛子不事齊、齊師伐之、春秋傳曰、湛无禮也」。

『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「范安遠」。

- (21) 勿憂嗣伯之詭 『眞誥』卷二〇葉七表「第五某、卽長史也、…第七確字義玄、小名嗣伯」。同卷二〇葉一三表「有云勿憂嗣伯之詭者、卽長史弟小名也」。

- (22) 我二人吏兵… 『眞誥』卷一八葉九表「吾近日疏與汝說二君應

有詭、其夕卽有誥云、吾二人吏兵、若無功詭、後小子不復爲人使」。

(23) 體上之密寶 『眞誥』卷一八葉八裏「若欲得體上所寶玩者爲好」。

(24) 許厚 『眞誥』卷二〇葉一二裏「華新婦者牙妻也、似云名厚、卽所謂許厚」。

(25) 許狂子 『眞誥』卷二〇葉一二裏「有云許狂子、似是揆小名也」。

七月二十七日禺中、許主簿華侯當入靜中、爾時無復所有、爲防未然耳。

近不得以疾篤告者、我慎法之故、且世人知未病之困、必泄三官之禁、則累加漏身、增療絕疾、今何乃用憂之甚耶、名身誰親、蓋宜思之。

縱令以小代大、<sup>(1)</sup>「於」父何如、大小俱來、於母何如、哀自己身、訟自家人耳、三官自有成事、憂惋亦無所解、自非齊達於内外者、將不得不懼悸。

今月六日是赤孫絕日、先處事耳、今雖停放、無所復畏、然四帥逆已關之於都禁、至日爲能遣尸殺使者看望之、雖弗復慮矣、至日父母

將入靜中、靜中疾發、亦無苦也、我其日亦當視汝。

右三事小茅君說。〈右三條人書〉

(1) 意をもって「如」の字を「於」の字に改める。ちなみに、俞本はこの部分を缺格としている。

七月二十七日の晝前<sup>(1)</sup>に許主簿と華侯<sup>(2)</sup>は靜室に入るべきだ。その時には何事も起こらないが、禍いを未然に防ぐためだ。

近ごろ病氣がひどいことを告げることができなかったのは、私がきまりを慎重に守っていたからである。かつまた世俗の者は發病前にその病苦を知ってしまうと、必ず三官のおきてを漏らすことになり、そうなると、禍いが煩惱深き身にいよいよ加わることになり、命とりの病が一層惡化する。今どうしてそんなにひどく心配するのか。名譽と身體とどちらが切實なものか。このことを心すべきである。

たとえ子供(赤孫)を大人(虎牙)の身がわりにしても、父として

は一體どうなのか。大人と子供とが一緒にやって来るようなことになれば、母としては一體どうなのか。衰弱は自分の身體から始まり、訴えは家族から起こることになる。三官では事柄はすでに決まっています、憂え恐れたところで何の解決にもならない。ひとしく内外の事情に通じていない限りは、びくびくしないわけにはゆかぬのだ。

今月の六日は赤孫<sup>③</sup>がこの世を去る日であるから、あらかじめ準備をしないさい。今では赦免されて、何の心配もないが、四人の鬼帥<sup>④</sup>があらかじめすでに都禁<sup>⑤</sup>に報告してしまっている。當日、あるいは尸殺使者を遣して様子を見に來させるであろう。もう懸念するに及ばぬが、當日は父母が連れて静室に入りなさい。静室で發作が起きて、氣に病むことはない。私もその日、そなたの様子をじっと見ているはずである。

右の三條のことは、小茅君が言われた。〈右の三條は某の書

(1) 禺中 『淮南子』天文訓「日出于暘谷、…至于桑野、是謂晏食、至于衡陽、是謂隅中」。

(2) 許主簿華侯 『眞誥』卷二〇葉一二裏「許主簿者牙位也、…華侯華書吏者、牙婦弟也」。

(3) 赤孫 『眞誥』卷二〇葉九表「中男名聯字元暉、少名虎牙、…子赤孫字玄眞、篤實和隱、郡主簿功曹、年七十四亡」。

(4) 都禁 『眞誥』卷一六葉一三表「齊桓公今爲三官都禁郎、主生死之簡錄」。

八月六日、父母將赤子入靜燒香、北向陳乞於二君、爾時自當有所見、所見萬無所苦也、其日中時、當有前日碧衣介華袴人來在靜前立徘徊者、小君也、可就請乞也。

八月六日中、當有一人著平上幘、多髭鬚長長爾、著紫皮袴褶、將黃娥來、此人是鬼帥王延也、延自爲人作益、爲將娥見人耳、娥其日或當被縛、華書吏其日當內井上助主人耳、日中當來、須臾去也、故宜力上風注家訟章於却氣毒之來往也、三過如此、考者匿矣、夫散翳布考、皆因人之不陳、疾者懼焉、則精胎內戰、是故疾痼流發、非唯一身而已、今所以令上章者、亦以遏虎牙之盈縮耳。

范中候所道如此。〈范中候名邈、卽是撰南眞傳者〉

許厚當謝詭南眞夫人吏兵、告大章如此。

右小君。

以小代大、復請何爲、當啓太上停之、何如。  
右小君。

牙亦爾耶、勿慙慙、演小子耳、許牙何豫乎、焉敢復相追爾。

娥與厚有水火之書、吾近承南眞命、推縛盡執也、小鬼頭不制服、豈足憂、亦許長史用心之所剋也。

右小君。

許厚自是其丈人所責、責亦至也、責不以家事往來之實經意、意亦當得之也、云何每爾、此自家長之教忌、不豫我也、重謝斗、當必釋耳。

范帥頃者以其不詭、乃欲不復豫事、我不聽之、今無爲也、詭當一須疾愈送。

斗恆渴而飲不可飲、食多困故而不可食、子婦不經心、亦不可不令知、死丈人之責耶、故宜以家事爲勤、爲爾不已、或能致之於丈人宇下受教耶。

八月二日夜、小君授書此、使示斧。〈右十條楊書〉

八月六日に父母が赤子を連れて靜室に入って焼香し、北を向いて二君にお願いする。その時、自ずと目に見えるものがあるはずである。目に見えるものがあっても、まったく氣に病むことはない。その日の正午に、きつと前日の碧の上着を着て飾りの付いた袴をはいた人物が靜室の前にやって來て立ち、歩き回ることだろう。それが小茅君である。その人をお願いするがよい。

八月六日の正午に、きつと一人の男が現れるであろう。平上幘をかぶり、豊かな髭が長々としていて、紫の皮の馬乗り袴をつけ、黃娥を連れてやって來る。その人が鬼帥の王延である。王延は自ら人に利益をもたらそうと、そのため黃娥を連れて來て人に會わせるのである。黃娥はその日、ひよつとすると縛られているかも知れない。華書吏はその日、内井のそばで主人を助けるであろう。正午にやって來て、すぐに歸って行くだろう。必ず努めて毒氣が漂うのを退けるために風注冢訟章を上るがよい。三回このようにすれば、考罰を加える者は隠れてしまう。そもそも惡氣をばらまき考罰を加えるのは、すべて人々がちゃんと申し上げないからである。病氣の者が恐れれば、精胎が身中でおのき、そのために宿痾の發作が起ころの

は、ただ一人だけに限ったことではないのである。今、上章を行わせるのは、虎牙がそわそわびくびくするのを斷ち切るためでもある。范中候がこのように言った。《范中候、名は邈。つまり『南眞傳』を著した人である》

許厚は南眞夫人の吏卒に禮物を捧げ、このように上章いたしますと告げなければならない。

右は小茅君（のお言葉）。

子供（赤孫）を大人（虎牙）の身がわりにして、そのうえ何をしようとするのか。太上に申し上げて止めさせてやろう。どうだ。

右は小茅君（のお言葉）。

虎牙もまたそんなことをするのか。そう慌てるな。黄演はつまらぬ奴だ。許虎牙に何の關わりがあるのか。どうしてまたそなたを追捕したりするのか。

黄娥と許厚に關しては水官火官の文書が届いている。私は近々南眞の命令を受けて、縛りあげてことごとくつかまえてやろう。小鬼の頭領が服従しなくても何の心配もいらない。これも許長史がよく氣を配っているからだ。

右は小茅君（のお言葉）。

許厚は舅に叱責されており、譴責は極めて厳しい。家事や人づきあいに心をかけぬことを叱責されているのだ。その氣持は當然分かるはずだ。どうしていつもそうなのか。これは家長が教え戒めることであつて、私には關わりのない事だ。重ねて許斗に謝罪すれば、きつと許されるはずだ。

鬼帥の范疆は、近ごろ禮物のお供えがないので、これ以上この事に關わらないように望んでいる。私は許さないのだが、今となつてはどうしようもない。禮物はひたすら病氣が治るのを待つて送るべきだ。

許斗はいつも喉が渴いていて、飲もうとしても飲むことができない。食べようとしても苦しいばかりで、食べることができない。息子の嫁が留意しないからで、知らせないわけにはゆくまい。死んだとしても、それは舅が叱責したからだろうか。だから家事に勵み、そのようにして止めないのがよい。（そうすれば）あるいは舅の家で教えを授けてもらえることになるのではなからうか。

八月二日の夜、小茅君が授けてこれを書きとらせ、許玉斧に示させられた。〔右の十條は楊羲の書〕

- (1) 平上幘 『眞誥』卷二七葉一一表「復有三人、皆錦衣平上幘」。
- (2) 黃娥 『眞誥』卷二〇葉一三表「有云黃娥者、卽長史娥掾婦母也、出適黃家、故曰黃娥、本名娥皇」。同卷二〇葉七裏「副有四女」、注「第二女名娥皇、正生、出適同郡建康令黃演」。
- (3) 風注冢訟章 『眞誥』卷一〇葉一四裏「今當爲攝制冢注之氣、爾旣小佳、亦可上冢訟章、我當爲關奏之也」。『赤松子章曆』卷一「解釋三曾五祖塚訟章」。
- (4) 精胎 『雲笈七籤』卷五二方諸洞房行事訣「九星太精北極眞君、益我精胎、強我三魂」。
- (5) 演小子 『眞誥』卷二〇葉一三表「有云演小子耳者、卽娥皇壻黃演也」。
- (6) 水火之書 『眞誥』卷二三葉四表注「道家常呼三官者是此也、而消魔經云、岱宗又有左火官右水官及女官、亦名三官、竝主考罰」。
- (7) 小鬼 『眞誥』卷一〇葉一〇裏「辟尸千里、去却不祥、敢有小鬼、欲來見狀」。
- (8) 家長 『玄都律文』制度律「家長罰算三百日、戶口皆各罰二紀」。

(9) 斗 『眞誥』卷二〇葉一三表「有云易遷夫人及斗者、卽掾母陶科也」。

許長史所使人盜他家狗六頭、於長史竈下蒸羹共食之、長史何以不檢校、使臭腥之氣薰染肴飯、旣食而步上道、亦已犯眞人之星也。

有一白犬、俗家以許禱土地鬼神、云何令人盜烹之、土地神言許長史教之使爾、不言小人盜自爾也、密尋之、爾在宇下而不覺、恐方有此、此亦足以爲一病、宜慎。

八月六日夜、茅小君授以與許長史。

亦宜有辭詣南嶽夫人、乞疾病得愈之意、又宜辭詣保命定錄二君、辭旨當令如南嶽夫人、疾者自當告乞於玄師、不爾不差。

易遷昨來道此、〔別省〕。〔此二字題紙背〕

右四條楊書。

許長史的使用人がよその家の犬六匹を盗み、長史の家の竈の下で



蒸し焼きにして、みんなで一緒に食べた。長史はどうして取り調べないのか。生臭い氣をご飯に染み着かせてしまった。それを食べてしまったうえで上道を歩んでも、もうすでに北斗真人星<sup>①</sup>を犯しているのだ。

一匹の白犬がいて、世俗の家ではそれで土地の鬼神を祭るつもりをしていた。どうして人に盗ませて煮させたのだ。土地の鬼神は許長史が教えてそうさせたのだと言い、小人ばらが盗んで自分でそうしたのだとは言っていない。密かに調べてみよ。そなたは同じ屋根の下にいながら氣づかなかつた。多分そういうことがあつたのだらう。これも一つの疵とするのに充分である。注意するがよい。

八月六日の夜、小茅君が授けて許長史に與えられた。

また南嶽夫人のもとに文章を届けて、病氣が癒えるようにとの望みをお願いするがよい。それから、保命と定録の二君にも文章を届けるがよい。文章の内容は南嶽夫人のものと同様にすべきである。病氣の者は、玄師<sup>③</sup>である南嶽夫人にお願いするのが當然である。そうでなければ治らない。

易遷夫人が昨日やって来てこう言われた。「別省」〈この二字は、紙背に書かれている〉

右の四條は楊羲の書。

(1) 眞人之星 『雲笈七籤』卷二北斗九星職位總主「眞人星、天之司空、主神仙、上總九天高眞、中監五嶽靈仙、下領學道之人、眞仙之官莫不隸焉」。

(2) 一病 『玄都律文』百病律「惡生好殺是一病」。

(3) 玄師 『眞誥』卷一九葉五裏「南眞是玄中之師、故楊及長史皆謂爲玄師」。

男生許玉斧辭、玉斧以尸濁肉人、受聖恩濟拔、每賜敕誡、實恩隆子孫、常仰銜靈澤、永賴天蔭、

玉斧以驚鈍頑下、質性難訓、雖夙夜自厲、患於愆失、此夕夢悟、尋思此意、皆玉斧罪責、慙懼屏營、無地自厝、靈道高虛、肉人未達眞法、唯執心守敬、脩行寶祕而已、

或恐靈旨高遠、誠喻幾微、玉斧頑闇、不能該悟、如此之罪、日月臻積、違法犯誡、亦當千萬、神母仁宥、輒復原赦、故今日憂惶深重、肝膽破碎、唯「哲」〈謂應作折字〉骨思愆、無補往過、連陳啓煩多、希請非所、兼以愧怖、

玉斧歸誠乞誓、以今日更始、當洗濯心誠、盟於天地、靜守形骸、軌承訓誨、乞原父穆兄虎牙小大罪考、玉斧不修、乞身自受責、原赦大小、若神母遂見哀愍、許玉斧思愆補過、舉家端等受恩、是永觀三光、受命更生、謹辭。〔此〔與〕是虎牙病時掾與南眞辭也、掾自書本〕

(1) 「與」は衍字とみなす。

男子の許玉斧申し上げます。玉斧は汚れた肉體を持つ身でありながら、神仙の憐れみと救済を受け、いつも戒めを頂戴して、誠に子や孫にまで大いなるご恩を賜わり、常に仰いでは神靈の恵みをかみしめ、永えに天の恩恵を頼りとしております。

玉斧は愚鈍頑迷、持つて生まれた性格は論じ難く、日夜努力しておりますものの、過ちを犯すのではないかと心配しております。この夕、夢の中でお告げがあり、その意味をよく考えてみますに、すべて玉斧の罪咎、恥じ入り恐れてただおろおろするばかり、身を置くべき場所もございません。神靈の道は高邁、私はまだ眞實の教えに到達しておりません。ただひたすら一心に敬仰の氣持を守り、修行して大事に保つてゆくばかりです。

あるいはまた、神靈の教えは遙かに遠く、戒めやお諭しは微妙、

愚かな玉斧にはことごとくは理解できないのではないかと恐れております。このような罪は月日とともに積み重なり、教えに違い戒めを犯すことも何千何萬になりましたが、神母(魏夫人)はお情け深くもいつもお許し下さいます。かくして、今日では恐れ憂える氣持が幾重にも重なり、かくして肝臓や膽囊も張り裂けんばかりです。ただ骨を「哲」へきつと「折」の字であろうき過ちを反省しても、過去の罪咎を埋め合わせる術もありません。しきりにくだくだしたことを申し上げ、場違いなことを請い願ひ、重ねがさね恐れ恥じ入っております。

玉斧は誠の心に立ちもどり誓を立て、今日からあらためて出直します。必ず心の誠を洗い清めて天地に誓ひ、靜かに肉體を守つてお教えのとおりに従います。どうか、父許穆と兄許虎牙の大小の罪過をお許し下さるようお願いします。玉斧は至らぬ身ではありますが、どうかわが身に責めを引き受け、一家の者をお許し下さるようお願いします。もし神母が憐れみの氣持を催され、玉斧が罪を反省して過ちを贖うことをお許し下されば、一家を擧げてひとしく恩愛を授かりましょう。そうすれば永えに日月星の三光をはつきりと見て、生命を授かつて蘇りましょう。謹んで申し上げます。(これは許虎牙が病氣の時に、許掾が南眞に差し出した文辭である。許掾の自筆のテキストである)

- (1) 尸濁 『洞真太上說智慧消魔真經』卷一眞藥玄英高靈品「蓋夫病者、一以試心誠、二以下尸濁、三以消不正、四以練塵穢」。
- (2) 夢悟 『上清黃庭內景經』務成子注敍(『雲笈七籤』卷一一)「審可傳者、亦將得夢以告悟、臨時之宜、亦玄解於心矣」。
- (3) 寶祕 『抱朴子』金丹「而有道者自寶祕其所知、無求於人、亦安肯強行語之乎」。
- (4) 神母 『眞誥』卷一八葉三裏注「神母應是南眞夫人」。
- (5) 思愆 『雲笈七籤』卷四五祕要訣法避忌第四「或遭疾病、唯思愆悔過、不得怨咎」。
- (6) 罪考 『眞誥』卷一五葉三表「要受事之日、罪考吉凶之日、當來詣此第一天宮耳」。

虎牙慎不可復履淹及見人之新淹者、三元驚喪、多喜殺人。

八月二十四日、南眞告。

學道者常不能慎事、尙自致百病、歸咎於神靈、當風臥濕、反責他於失覆、皆癡人也、安可以告玄妙哉。

保命告牙。〈右二條有掾書〉

虎牙は用心して不淨の上を歩いたり、新たに不淨となった者を見てはならない。三元の神が驚いて逃げ去ってしまい、しばしば人を殺したがる。

八月二十四日、南眞のお告げ。

仙道を學ぶ者は、常におのごとを用心深く行えないですら、わが身に多くの病を招く。それなのに神靈に罪を着せるのは、風に當ったり濕った所で横になりながら、あべこべにふとんを着せてくれなかったと他人を責めるようなもの。(これらは)すべて愚か者である。どうして玄妙な教えを告げられようか。

保命君が許虎牙に告げられた。〈右の二條は許掾の書がある〉

(1) 當風臥濕 『抱朴子』道意「當風臥濕、而謝罪於靈祇、飲食失節、而委禍於鬼魅」。

須臾自吟曰、「朝華煥晨井、九蓋傾青雲、前此珪璋庸、不識萬流椿、解落儻欬頃、寅客何必人」。〈或云是誠、誠則能改〉

右英晚而言曰、「見形之子、守分業於儒墨、栖沈之客、步玄辭而詠虛、彼人自可晚曉耳」。

許伯兄弟復有心乎、恐皮耳、試復一悟忌其微路耳。

九月二十八日、茅保命告。

可成與不、極此舉。

定錄君說此。

違內負心、三魂失眞、眞既錯散、魄乘其間、夫爲道者、當使內外鏡徹、宮商相應、靈感於中、神降於外、信不虛也、映昔亦如此、諸人陶其心、今已消也、夫須人陶而改者、故下通耳、所以懃懃、期不令在此、近亦粗具。《右小君言》

世事非所期、時運何足聞、有道自當見、中路莫不煩、吾欲因楊問、便自知、乃作此。《右清靈〔言〕》<sup>①</sup>

有聞於邪、而邪悉爲之踊也、非病也。

右安九華語。

念不宜多、多則正散、正散而求不病、猶開門以捍猛敵。《右紫微語》

治自當差、無苦。

保命君言。

何以至喪家。

保命君言。

欲服符飲水、使卽愈、不欲者當與。

定錄君語。

尋自差。

保命君語。

多有所道、甚云云、觀當乙二、第七無慮也。《此一行楊君與長史書

語耳》

戲言猶耳、許長史勿笑此、落廓不束、高下失常、定之勿疑、若不加意、勿單用此、慎示人、慎示人。

一句保命告長史。《又》<sup>②</sup>〔右〕十四條人書

(1) 愈本に従つて「言」の字を補う。

(2) 愈本が「又」を「右」に作るのに従う。

まもなく自ら次のように吟じられた。「朝もやが大空の井戸にきらきらと輝き、九つの車の車蓋が青空の雲のところに傾いている。以前に資質のある者として登用され、知らないうちに何萬年もの歳月が流れた。たちまちのうちに地上に降つて車を止めんとするが、寅客<sup>②</sup>(許虎牙)は必ずしも目指す相手ではない」。へあるいは、これは戒めであるという。戒めれば、改めることができる」

右英夫人がおかれて言われた。「世俗の人間は、自分の仕事として儒墨の業を守るが、幽玄に身を置く人は、奥深い言葉の中に歩を進めて虚空に歌う。あの人はやがては悟るでしょう」。

許伯(許嗣伯)兄弟は熱心な氣持があるようだ。しかし、うわべだけでも知れない。試しに、奥深いことを忌み慎むようにちよつと氣づかせてやろう。

九月二十八日、茅保命君のお告げ。

成し遂げることができるかどうかは、この行動ひとつにかかっているのだ。

定録君がこれを言われた。

内なる心に背けば、三魂がその眞を失う。眞が錯亂し分散すれば、七魄がその隙につけ入る<sup>③</sup>。そもそも道を修める者は、内と外が鏡のように透徹し、宮と商の音があい應じるようにしなければならない。神靈が人の心に感應し、神々が外に降臨するというのは、本當に嘘ではないのである。映(許適)も昔はこのようであつたが、人々が彼の心を陶冶して、今ではもう惡心が消散してしまつた。そもそも人が陶冶するのを待つて改める者は、もとより仙界の低い位しか得られないのだ。ねんごろに教え諭すのは、こんなところに身を置くことを願わないようにさせるためだ。近くまた、あらましを述べよう。《右は茅小君のお言葉》

「世俗の事柄は願うところではなく、時の運りもどうして聞くに値しましょう。道を得れば自ずと見えてきます。修行の道中は煩雜なもの」。私は楊羲を通じて質問しようと思いましたが、自然に分かつたので、この詩を作りました。《右は清靈夫人のお言葉》

邪氣に隙を見せると、邪氣<sup>④</sup>はそのために踊りあがります。(これ

は)病氣ではありません。

右は九華安妃のお言葉。

心に思うことが多いのはよくない。多ければ正氣が散逸してしまいます。正氣が散逸してしまつて病氣にならないことを求めるのは、ちよど門を開け放つて猛々しい敵を防ぐようなものです。《右は紫微夫人のお言葉》

治まれば、自然に病氣は治る。心配はない。

保命君のお言葉。

一家破滅にまで到ることはないだろう。

保命君のお言葉。

符を服し水を飲もうとするならば、ただちに治してやろう。そうしない場合は、治すに値するだろうか。

定録君のお言葉。

まもなく治るだろう。

保命君のお言葉。

神仙たちが多くのことを言われました。甚だ澤山あります。お目にかかつて詳しく申し上げます。第七(許嗣伯)のことは心配ありません。この一行は楊君が許長史に與えた手紙の言葉である。

ちよつと冗談を言つただけだ。許長史よ、これを笑つてはいけない。野放圖でしまりがなく、上下整つていないが、心を定めて疑わないようにせよ。もし注意を拂わないのであれば、ただこれだけを用心することはするな。決して人に見せてはならぬぞ。決して人に見せてはならぬぞ。

この一句は保命君が許長史に告げられたもの。右の十四條は某の書きつけがある。

(1) 珪璋庸 『禮記』聘義「以珪璋聘、重禮也、已聘而還珪璋、此輕財而重禮之義也、…珪璋特達、德也」。

(2) 寅客 『眞誥』卷二〇葉一二裏「有云寅獸白齒者、是虎牙也、亦直云寅獸者、亦云寅客、亦云許虎許牙也」。

(3) 魄乘其間 『雲笈七籤』卷五四說魂魄「魄者陰也、常欲得魂不歸、魂若不歸、魄即與鬼通連、魂欲人生、魄欲人死、魂悲魄笑曰、歸無我舍、五鬼侵室、三魂絶而不歸、即魄與五鬼爲徒、令人遊夢恠惡、謂之遊魂、身無主矣、令人行事昏亂、耽睡好眠、

災患折磨、求添續不可得也」。

(4) 邪炁 『抱朴子』金丹「凡小山皆無正神爲主、多是木石之精、千歲老物、血食之鬼、此輩皆邪炁、不念爲人作福、但能作禍」。『眞誥』卷九葉二三表「臨食上、勿道死事、勿露食物、來衆邪炁」。

(5) 服符飲水 『抱朴子』雜應「其服諸石藥、一服守中十年五年者、及吞氣服符飲神水輩、但爲不飢耳、體力不任勞也」。

(6) 觀當乙二 『眞誥』卷一七葉一四表「奉觀乙二、謹白」。

(7) 第七 『眞誥』卷一八葉二表「公明日當復南州與大司馬別、大司馬勅二十六發也、第七似不從征」、注「第七似是掾叔小名嗣伯者、爲尙書郎」。

衰年體羸、多爲風寒所乘、當深頤養、晏此無事、上味玄元、栖守絳津、體寂至達、心研內觀、屏彼萬累、蕩濯他念、乃始近其門戶耳、若憂累多端、人事未省、雖復憩靈空洞、存心淡泊、纏綿亦弗能達也、漁陽田豫曰、「人以老馳車輪者、譬猶鐘鳴漏盡、而夜行不休、是罪人也」、以此喻老嗜好行來屑屑、與年少爲黨耳、若今能誓不復行者、則立愈矣、如其不爾、則疹與年階、可與心共議耶。〈田豫字國讓、漁陽雍奴人、有幹略、爲并州刺史、遷衛尉、年老求遜位、與司馬宣王書曰、「年過七十而以居位、譬猶鐘鳴漏盡、而夜行不休、是罪人也」、年八十二亡、引此語以勸長史、令去官也〉

藥四丸、日服一。

行來宜詳、前後已累言之矣。

右三條楊書。

年老いて體が弱ると、風と寒さにつけねられることが多くなる。よく養生をして、無事の境地に安らぎ、玄元<sup>①</sup>の道を大切に味わい、絳津液<sup>あか</sup>をしつかりと守らなければならない。體は至高の状態にひっそりと静まり、心は内觀の法を磨き、もろもろの煩わしさを退け、雜念をきれいに洗い流してこそ、始めてその門戸に近づくのだ。もし、あれやこれやと憂いわずらい、俗事を省かないのであれば、たとえ精神を虚無の世界に憩わせ、心を淡泊に保ち、(道の世界に對して)纏綿たる思いを持っていたとしても、到達することはできない。漁陽の田豫は、「人が年老いて車を走らせ(て宮仕えする)のは、たとえば、鐘が鳴り漏刻の水が盡きながら夜の外出を止めないようなもの、これは罪人である」と言った<sup>②</sup>。これによって、年老いながら、こせこせと往來して若者と仲間になるのを好むことにたとえたのである。もし今もう出歩かないと誓えるならば、(病氣は)たちど

ころに治る。もしそうでなければ、持病は年とともに悪化する。自分の心とよく相談してみなさい。〔田豫、字は國讓、漁陽雍奴の人。すぐれた才幹を持ち、并州刺史となり、衛尉に遷った。年老いて官位を退くことを求め、司馬宣王に書翰を送つて言った。〕七十歳を越えながら官位に腰を据えているのは、たとえば、鐘が鳴り漏刻の水が盡きながら夜の外出を止めないようなもの、これは罪人である。八十二歳で亡くなった。この言葉を引いて許長史の心を動かし、官を去らせようとしたのである〕

藥が四丸ある。一日に一丸ずつ飲みなさい。

(官界との)往來はよくよく考えるように。このことは、すでに何度も重ねて言った。

右の三條は楊羲の書。

(1) 玄元 『上清黃庭內景經』玄元章第二十七(『靈寶七籤』卷一

二)「玄元上一魂魄鍊、一之爲物巨卒見」。

(2) 漁陽田豫曰…『三國志』卷二六田豫傳を參照。

夢惡者、明日當啓太上、一以正魂魄、二以〔所〕〔折〕除不祥。

奉道之家、當精治靜舍。

右二條△〔書〕<sup>②</sup>。

(1) 愈本が「所」を「折」に作るのに従う。

(2) 愈本に従つて「書」の字を補う。

悪い夢を見た時は、翌朝、太上に申し上げなければならない。一つには魂魄を正すため、二つには不祥をくじき除くためである。

道を信奉している家は、靜舍<sup>②</sup>をきちんと整えなければならない。

右の二條は某の書。

(1) 夢惡者、明日當啓太上 『眞誥』卷九葉一六表「數遇惡夢者、…



速啓太上三元君。

(2) 靜舍 『眞誥』卷一一葉一〇表「此山上下左右亦有小平處、可堪靜舍」。『陸先生道門科略』「奉道之家、靖室是致誠之所、其外別絕、不連他屋、其中清虛、不雜餘物、開閉門戶、不妄觸突、灑掃精肅、常若神居」。

禮年七十懸車、懸車者、以年薄虞淵、如日之仄、體氣就損、神候方落、不可復勞形軀於風塵、役方寸於外物矣、許長史既至此時、始可隱逸耶、還親華陽之館、修乎黃老之業、北河之命方旌、遷擢之華亦顯、豈不快哉、今此疾方愈也、不足憂也、雖爾慎接於紛紛之務、經緯人事之寒熱矣、於今乃未可動脚、動脚人當言爾畏鬼（北河之命、即易遷所聞寶氏之言、似有所疑）「擬」者也、

此年六月、憂長史不佳、非重疾也、今年許家鬼注小起、雖爾無可苦、保命及范中候已爲申陳之、右帥晨許肇亦深以爲意、無所憂也、去留之會、死生之事、三官祕禁、不宜外示、今所以道此者、蓋以（皮）（謂應作彼字）人已聞至道於胸心也、且可官身、未宜去位、可去可罷、方更相示也。

右夜荀中候言此、故書以示。

人家有疾病死喪衰厄光怪夢錢財滅耗、可以禳厭、唯應分解家訟

墓注爲急、不能解釋、禍方未已。

右保命答許長史。

(1) 俞本が「疑」を「擬」に作るのに従う。

禮のきまりでは、七十歳で官職を退くことになっている<sup>①</sup>。官職を退くのは、年が虞淵に迫り、日が西に傾くような状態になると、身體の氣は損なわれ、精神のはたらきも衰えて、もはや體を世俗の塵の中で疲れさせ、心を外界の事物の中でくたくたにさせることができなくなるからである。許長史はその時になって、はじめて隱逸すればよいであろう。（その時に、茅山に）歸って華陽の館に親しみ、黃老の業を修めれば、北河司命の命令ははっきりと表され、華ばなしい拔擢の榮譽が顯らかにされるであろう。なんとすばらしいことではないか。今のこの病氣はすぐに治る。心配することはない。しかし、ごたごたした雑務に接し、官界の浮き沈みに身をやつすのは、慎まなければならぬ。今はまだ行動を起こすべきではない。行動を起こせば、人はあなたが鬼を恐れていると言うに違いない。（北河司命の命令とは、易遷夫人が聞いた寶氏の言葉であって、（仙官に）「擬するところがあるようだ」というもののことである）

今年の六月、長史の具合が悪いのを心配したが、重病ではなかった。今年、許家では幽鬼の祟りが少し起こった。しかし、心配することはない。保命君と范中候がすでにあなたのためにこのことを申し述べた。右帥晨の許肇も深く氣にかけているので、心配はいらない。去留の定め、死生ことは、三百の祕密事項であり、外部に示してはいけないことになっている。今、このことを言ったのは、「皮」へきつと「彼」の字であろうの人は、すでに胸の中にすぐれた道の教えを聞いているからである。とりあえずは、官界に身を置いたまままでいなさい。位を去らない方がよろしい。位を去ってやめるべき時には、あらためて指示する。

右は夜に荀中候が言ったので、書きつけて示した。

人家に病氣や弔いごと、衰禍や厄病、不思議な光の出現、夢のお告げ、それに財産がなくなるなどの事態が生じた時には、おほらいをして鎮めるがよい。ひたすら冢墓の訴訟や祟りを解くことを急務とすべきである。それを解くことができなければ、禍いは終わらない。

右は、保命君が許長史に答えられたもの。

(1) 禮年七十懸車 『白虎通』致仕「臣年七十懸車致仕者、臣以執

事趨走爲職、七十陽道極、耳目不聰明、跛踰之屬、是以退老去、避賢者路、所以長廉遠恥也、懸車、示不用也、致事者、致其事於君、君不使退而自去者、尊賢者也、故曲禮曰、大夫七十而致仕、王制曰、七十致政」。

(2) 年薄虞淵 『淮南子』天文訓「日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、是謂晨明、登于扶桑、爰始將行、是謂朏明、…至于悲泉、爰止其女、爰息其馬、是謂縣車、至于虞淵、是謂黃昏、至于蒙谷、是謂定昏、日入于虞淵之汜、曙于蒙谷之浦、行九州七舍、有五億萬七千三百九里、禹以爲朝晝昏夜」。

(3) 如日之仄 『周易』離九三「日昃之離、不鼓缶而歌、則大耋之嗟、凶」、注「處下離之終、明在將沒、故曰日昃之離也、明在將終、若不委之於人、養志无爲、則至於耋老有嗟、凶矣、故曰、不鼓缶而歌、則大耋之嗟凶也」。

(4) 華陽之館 『眞誥』卷一一葉五裏「大天之內有地中之洞天三十六所、其第八是句曲山之洞、週迴一百五十里、名曰金壇華陽之天」。

(5) 黃老之業 『後漢書』列傳七三逸民矯慎傳「少好黃老、隱避山谷、因穴爲室、仰慕松喬導引之術」。

(6) 北河 『眞靈位業圖』第六左位「北河司命保禁侯桃俊」。『眞誥』卷一二葉五裏「定錄官寮…又有北河司命、主水官考、此職常領九宮禁保侯、禁保侯職主領應爲種民者」。

(7) 易遷所聞寶氏之言『真誥』卷一二葉一〇表「我聞、易遷中人寶氏言云、北河司命禁保侯、似有所擬、想當審爾」、注「寶氏即瓊英也、似有所擬者、當是長史、故中君受云、北河司命方驗也」。同卷一二葉三表「易遷中有高業而蕭條者有寶瓊英韓太華劉春龍、…寶瓊英者寶武妹也、其七世祖有名峙者、以藏枯骨爲業、以活死爲事、故祚及於英身矣」。

(8) 鬼注『真誥』卷一〇葉一二表「流風結病、注鬼五飛、烟烟家氣、陰氣相徊」。『登真隱訣』卷下「若注氣鬼病、當作擊鬼章」、注「謂家有五墓考訟、死喪逆注之鬼來爲病害、宜攻擊消散」。

(9) 右帥晨許肇『真誥』卷一六葉五裏「許肇今爲東明公右帥晨、帥晨之任、如世間中書監」。

(10) 祕禁『抱朴子』雜應「仙人入瘟疫祕禁法、思其身爲五玉」。

(11) 荀中候『真誥』卷一五葉九表「蓋鬼神之事、不足示於世也、荀公言也」、注「荀公即是荀中候、既隸司命、統諸鬼官、故究知之」。

(12) 衰厄『登真隱訣』卷下「儀云、無上元士君…」、注「自非高眞玄挺、皆有年命衰厄」。同卷下「若有急事上章…」、注「人家衰禍厄病、皆由冢訟」。

(13) 光祿『吳書』(『三國志』卷四六孫堅傳注)「堅世任吳、家於富春、葬於城東、冢上數有光怪、雲氣五色、上屬于天、曼延數里、衆皆往觀視、父老相謂曰、是非凡氣、孫氏其興矣」。

(14) 禳厭『三國志』明帝紀「癸丑、有彗星見張宿」、注「漢晉春秋曰、史官言於帝曰、此周之分野也、於是大脩禳禱之術以厭焉」。

#### 真誥卷之八

##### 甄命授第四

遊精罔象、誠不可信、然多勞多事、多念多端、所以損神喪眞、擾競三關、遂當以此害明德也、故令許君之徒、含景內魄、若抑四者、研虛注靈、則仙可冀。

##### 定錄告。

除治爾床席左右令潔靜、理護衣被者、使有常人、常燒香使冷然不雜也、南嶽上眞當數看出內、便料理起居、可使草及木瓜耳、手自先有風患、是以今風氣之本至耳、多云針灸佳益、使人無憂(此易遷令告長史也、草及木瓜當是理衣下人名也)、

可迎黃民來出、民奴既欲來、又云、其月末左右、當小小疾患、迎來在此、則疾患除也、當部分護靜屋以爲急、并欲得一室可栖息處、今年欲取草、當爲民奴留之、草今年自有本命厄、非欲取也、令其乞符自保而帶之。

臥床後孤有懸風、可安北面下一〔彰〕(謂應作障字)、亦可以床著  
近北壁下、勿使虛懸、晨夕當心存拜靜、心存行道也(身既有疾、不  
能拜起、故令心存不替)、斧有霍亂疾、勿使冷食、此兒常不大宜住  
此、今日無他耳。

右易遷一夕再來、四更中獨來道此、先初來又與保命俱。(此似在縣  
下所授、令掾還山、使黃民歸家也、易遷即掾母、亡後得入易遷宮、  
因呼爲號、前所呼亦皆是也)

斧、學道如穿井、井愈深而去、土愈難運出、自當披其心、正其行、  
乃得見泉源耳、有人說中候言如此、可令知之(李中候名遵、即撰茅  
三君傳者、人學道、譬如萬里行、比造所在、寒暑善惡、草木水土、  
無不經見也、亦試在其中也、頃數聞人道此、始乃悟之耳、彼君念想  
殊多、〔渠〕(謂應作詎字)能成遠志不、平昔時常多所恨、始悟人難  
作而善不可失云、學道者除過責此、審爾當勉。

右易遷夫人所道。

① 山嶽氣擾、則強禽號於林、川瀆結滯、則龍虬慘於澤、此自然象也、  
故豪盛微覺、將類獸告其駭浪、玄數纖兆、而號咷微乎治亂矣、斯蓋  
山川之盈縮、非人事之吉凶、若墳附丘山、誠與汧岫等波、苟趣舍理

乖、則吹萬之用不同也、非靜順無以要謙、非虛栖無以冥會、是故死  
生之幾、吉人不復豫、苟思之無邪、不爲禍害。

五月十四日、右英夫人答〔孔辭〕(後人黯作謝安字、孔氏、孔默  
也、云似是孔嚴兄弟、長史父先爲嚴從兄坦前鋒都督、是討沈充時、  
既有因緣、故得此也)虎頃大號墓下事。

自未得和神靜形、俯頤幽精者、疾源或與年而積耶、若未能用交餘  
之途者、將奚促促於藥。

定錄仙人答孔求乞藥方。

想早葬兄、今注煙速消、雖不辦妨於生者、要欲得極物、時寧三泉、  
使凶氣泯靜也。

小兒疾方、行當示。

五月十七日夜、保命仙君所言、答〔△〕(△一字被剪除、疑猶是孔  
字)所問疾患者。(右從禮年來凡十九條、竝有掾書)

(1) この段、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊真人許長史詩序  
に見える。

眞詰卷八

甄命授第四

物怪の類など、信じることはできないが、しかし、多勞、多事、多念、多端であると、精神を損ない眞の道を失つて、心足手の三關をかき亂し、かくてそのために明德を損なうこととなる。それ故、許君の徒には眞の光を心の内に抱かせるのだ。もし多勞、多事、多念、多端の四者を抑制して虚無を磨き神靈に心を集中すれば、神仙となることが期待できよう。

定録君のお告げ。

そなたの寢臺の周圍をきちつと整えて清潔にし、衣服の類を整頓するには、決まった人間にやらせない。絶えず焼香し、さっぱりと亂雑でないようにさせるように。南嶽上眞の魏夫人が必ずや何度も見にやつて來て出入りされるから、寢食などの世話は草と木瓜にやらせない。手に以前から風患<sup>③</sup>があつたから、今度は風氣の本<sup>④</sup>がやつて來るのです。針灸がよく効き、何の心配もないとしばしばいわれます（これは易遷夫人が許長史に告げさせたもの。草と木瓜とは、身のまわりの世話をする召使いの名に違いない）。

黃民を迎えにやつて來させなさい。黃民がやつて來る氣になると、また（易遷夫人が）次のように言われた。月末頃にちよつとした病氣にかかるはずだが、ここに迎えて來させておけば、その病氣も癒えるでしょう。手はずを整えて靜屋を大切に護ることを急務と心がけねばなりません。あわせて、ゆつたりと憩える一部屋がほしいものです。今年には草を召し取ろうと思つていたが、黃民のために留めておくことにします。草は今年が本命の厄年ですが、召し取るのは止めにします。お符をもらつてしつかりと身につけるようにさせなさい。

寢臺の後に簾が掛かつているだけだから、北面に「彰」<sup>びやう</sup>（へきつと「障」の字であらう）を一枚置きなさい。あるいは寢臺を北の壁にびつたりとつけてもよろしい。簾を掛けただけではいけません。朝夕に心の中で靜室で拜禮するさまを存思し、心の中で行道するさまを存思しなければなりません（身體が病氣にかかつているので、拜禮したり立ち上がったりすることができない。それ故、心の中で存思して怠らぬようにさせるのである）。玉斧には霍亂の疾があるから、冷たいものを食べさせてはなりません。この子はずつとここに留まるのはよくありませんが、今は差しさわりはありません。

右は易遷夫人が一晩に二度やつて來られた。四更の刻に一人でやつ

て来てこれを言われた。以前、最初にやって來られた時は保命君と一緒にであつた。これは句容縣下で授けた言葉のようである。許掾山にもどらせ、許黃民を家に歸らせたのである。易遷夫人とは、許掾の母である。亡くなった後に易遷宮に入ることができたので、このように呼びならわすのである。以前にこのように呼んでいるのも、すべてそうである。

玉斧よ、道を學ぶのは井戸を掘るようなものです。井戸は深く掘れば掘るほど、土を運び出すのが難しくなります。心を開き行いを正しくしてこそ、ようやく地下の水脈という眞理をうかがうことができるのです。李中候がこのように言ったとある人が言っています。この旨知らせるのがよろしい(李中候、名は遵。すなわち『茅三君傳』の撰者である)。人が道を學ぶのは、たとえば萬里の長旅をするようなものです。目的地に到達するまでには、暑さや寒さ、善氣や惡氣、草木や山川など、あらゆる經驗をしなければなりません。試練はまさにその中にあるのです。近ごろ、しばしばある人がこのように話すのを聞いて、ようやくにして理解できました。あの人は雑念がとりわけ多いから、〔渠〕<sup>はたして</sup>「きつ」と「詎」の字であろう。遠大な志を達成できるでしょうか。かつては常に遺憾に思うことが多かったのですが、やっと人間となることは難しく、善は失ってはならぬ<sup>①</sup>ということに氣づいたとか。道を學ぶ者は災禍を除いてこのこ

とを責務とするのです。この點をはつきりさせ努力しなければなりません。

右は易遷夫人の言われたもの。

山嶽の氣が亂れると、禽獸どもが林で吠えたてる。河川の流れが停滞すると、龍や虬が沼澤でなげき悲しむ。これは自然の現象なのです。かくして、豪氣雄壯な動物は密かに感知して、同類の獸どもが大浪のような變動を豫告し、玄妙なることわりがわずかにきざすと、叫びたてて世の治亂を明らかにするのです。これは思うに自然界の消長變化であつて、人間の吉凶に關わるものではありません。墳墓が丘山にくつついているから、谷川や峰と波長が合うのですが、もし身の處し方を誤れば、萬物に生氣を吹きこむ自然のはたらきが同調しなくなる。靜順でなければ謙讓の徳にかなうことはできず、虛心に暮らすのでなければ冥々の内での神仙との會合はかないません。それ故、死生のきざしなど、善人は關知しないし、もし思いに邪念がなければ、禍害が生ずることはないのです。

五月十四日、右英夫人が「孔」氏の「辭」(後人が「孔辭」の二字を)塗りつぶして「謝安」の字に作っている。孔氏とは孔默<sup>②</sup>である。これは孔嚴兄弟のことのようだ。許長史の父は以前に孔嚴の從兄の坦のもとで前鋒都督であつた。それは沈充を討拔した時のことである。このような因縁があるので、このお告げを得たのである。

に虎が近ごろ墳墓の下で大いに吠えたところの答えたもの。

精神を和らげ肉體を静め、幽玄な精氣を養うことのいまだにできない者には、病氣の原因が年とともに積み重なってゆくことであろう。すぐに効果が現れるものと現れないものの兩者をうまく使いこなせぬような者が、薬の服用に懸命になって何になろう。

孔黙が薬の處方を求めたのに定録仙人が答えたもの。

思うに早く兄を葬ることです。今や祟りの氣はとくに消え、生者を妨害することはないけれど、きつと棺桶などの葬具をほしがっているに違いない。その時には、黄泉を鎮め、凶邪の氣をおとなしくさせるのだ。

子供の病氣の處方は、やがて示すであろう。

五月十七日の夜、保命仙君が言われたもの。「ム」へ一字が切り取られている。恐らくは「孔」の字であろうがたずねた病氣についてお答えになったもの。右の「禮のきまりでは、七十歳で官職を退くことになっている（禮年……）」からのあわせて十九條は、すべて許掾の書がある。

(1) 遊精罔象 『周易』繫辭傳上「精氣爲物、遊魂爲變」。張衡「東京賦」(『文選』卷三)「殘變魑與罔像、殭野仲而殲游光」、薛綜

注「罔象、木石之怪」。

(2) 南嶽上眞 『眞誥』卷一葉四表「上眞司命南嶽夫人」。

(3) 風患 『北史』卷一六魏臨淮王曄傳「(孫孚)後遇風患、手足不隨、口不能言、乃左手畫地作字、乞解所任」。

(4) 風氣 『顏氏家訓』終制「先有風氣之疾、常疑奄然」。

(5) 部分護靜屋 『登眞隱訣』卷下「初向再拜」、注「此當正靜屋、中央安一方机一香爐一香匱」。

(6) 本命厄 『登眞隱訣』卷下「北向朝太微天帝君、從本命日爲始」。

(7) 拜靜 『眞誥』卷九葉一二裏「閉炷拜靜、百鬼畏憚」。『登眞隱訣』卷下「初向再拜」、注「凡旦夕拜靜竟、亦又還經前、更燒香、請乞衆眞」。

(8) 霍亂疾 『漢書』卷六四上嚴助傳「夏月暑時、歐泄霍亂之病相隨屬也」。

(9) 此似在縣下所授 『眞誥』卷一七葉一七裏「義曰、別紙事覺憶有此……」、注「又注此并書、竝似在縣下時、非京都也」。

(10) 善不可失 『左傳』隱公六年「君子曰、善不可失、惡不可長」。

(11) 吹萬之用不同 『莊子』齊物論「夫吹萬不同、而使其自己也、咸其自取」。

(12) 吉人 『周易』繫辭傳下「吉人之辭寡、躁人之辭多」。

(13) 思之無邪 『論語』爲政「子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」。

(14) 孔默 『眞誥』卷一九葉一〇裏「至義熙中、魯國孔默崇信道、爲晉安太守、罷職、還至錢塘」。「宋書」卷六九范曄傳等に見える。

(15) 長史父先爲嚴從兄坦前鋒都督：『眞誥』卷二〇葉六表「尙第二子、名副、字仲先、庶生、卽長史之父也、：後爲寧朔將軍、與孔坦討沈充、封西城縣侯」。

(16) 交賒之途 『抱朴子』至理「豈能棄交修賒、抑遺嗜好、割目下之近欲、修難成之遠功哉」。

(17) 藥方 『續漢書』百官志三「太醫令一人、六百石、本注曰、掌諸醫、藥丞方丞各一人、本注曰、藥丞主藥、方丞主藥方」。

(18) 三泉 『史記』秦始皇本紀「穿三泉、下銅而致梓」。

(19) 凶氣 『三國志』卷二九方技管輅傳「此二人、天庭及口耳之間、同有凶氣、異變俱起、雙魂無宅」。

遵懃心香火、有情向藥、故有言消磨之愈疾、謂其將聞斯而請命耶  
仙眞竝呼藥爲消摩、故稱消摩經也、誦之亦能消疾也、

應南趨而北騁、既心口違矣、夫捐齊以如茶、哂九成而悅北鄙者「捐

齊至此、亦是抱朴博喻中語、我知其無識和音之聽鑒也、當永爲吉人、爰及母奴、然所起是學而不思、浚井不渫、蓋肉人之小疵耳、無乃此也、今事結水禁、猶有可申、若許長史能於靜中若救之者、則一門全矣、亦是師主祭酒之宜請而爲德惠乎。

五月二十日夜、右英作、與長史。〈劉遵祖善譚說、殷浩向庾亮稱之、後一會、談論殊不合、遂名之爲羊叔子鶴、於是失名

劉遵心故爲修耳、何不令其母服大遠志丸。

七月七日夜、紫微夫人告。

即啓「可得疏方不」、良久答言、「世間自有、可尋索密用」、保命君問紫微曰、「此方用牛黃銀屑者非、若是者、小爲難合」〈此卽今大鎮心丸也、先以水銀摩銀屑使消、故爲難合、紫微答、但領頭。〉右三條楊書

陸納兄弟、清眞淳一、有姜伯子之風、知欲有遠志、欣然、其祖父有陰德、當慶流七世、知陸荀子自誓乞苦齋一年、欲受經、(卿自)〈此二字後人僞益、非眞〉更量之、劉遵乃有好心、早自知。

保命答許長史。〈陸納兄名始、竝有德行、祖名英、仕吳、丹陽郡太守、荀子當是人小名、不詳是誰、納爲尙書令、太元二十年亡〉



虞昭爲其「兄子」〔此二字後人難易作先人字、本猶可識事、文書牽連、身被攝繫、方未已、殆欲無理、賴其在世粗有功德、且其家福德強、章聞累疊、皆被上御、事已散、尋蒙追遣之、其病雖篤、無所憂、許侯爲之甚至、密相示。

保命答許長史。

庾道季身處陽官貴勢、不能順天用法、憤憤慢信、心形不同、自少及長、善功無一、積惡不改、其罪目已定、今臨命、方欲修德以自濟免、徒費千金之用、不亦晚乎。

保命答許長史。〔庾肅字道季、亮第二子也、幼有才辭文義、升平中爲丹陽尹、表除諸「侯」〔役〕六十餘事、太和初爲領軍、如此行迹、不似爲惡、恐是聞戒修善、故得申遂〕

郗回父無辜戮人數百口、取其財寶、殃考深重、〔惋〕〔謂應作怨字〕主恆訟訴、天曹早已申對、回法應滅門、但其修德既重、一身免脫、子孫豈得全耶、回當保其天年、但仙道之事、去之遠矣。

太元真人答許長史。〔郗回父鑒、清儉有志行、不應殺掠如此、或是初過江時、擺併所致、不爾則在京時殺賊有濫也、鑒年七十餘乃終、即得爲鄭宮職、右從陸納來四條有甲手寫〕

(1) 『晉書』卷七三庾肅傳が「侯」を「役」に作るのに従う。

劉遵(祖)は一心に焼香し、藥についてとても熱心である。もとより「消摩は疾病を癒す」という言葉がある。思うに、このことを聞いて指圖を請うたのであろう〔眞仙たちはみな藥のことを消摩と呼ぶ。だから「消摩經」と稱する。この經典を唱えようと、疾病を消し去ることができるのである〕。

南に趣くべきであるのに北に駆け出し、心と口先とがばらばらになつてしまつた。かの甘菜を捨てて苦菜を食らい、九成の音樂をあげ笑つて亡國の北鄙の音樂を好む者〔甘菜を捨てて〕からこゝでもまた『抱朴子』博喻篇中の語である〕は、美しく調和した音樂を聞き分ける耳を持たぬ者であると分かる。永えに道を實踐する善人となつて、母親にまで福を及ぼさねばならない。しかし、やつてゐることはといへば、學んでもよく思いを運らさず、井戸をさらつても土をかき出さず、これは肉體を持った人間のささやかな缺點である。そんなことがあつてはならない。今、水官で事件になつてゐるのだから、まだ申し立てができる。もし許長史が靜室中でかりに彼を救ふことができれば、一門は安泰であらう。これはまた師主や祭酒が神にお願いして福德を及ぼすことなのであろう。

五月二十日の夜、右英夫人がお作りになり、許長史に與えられた

もの。〈劉遵祖は談論が巧みであった。殷浩は庾亮に彼のことを譽めそやした。その後會合した際、彼の談論はまったくの期待はずれであったので、羊叔子(祐)の鶴とあだ名された。かくて名聲を失ってしまったのである〉

劉遵(祖)は内心ではもともと道を修めようと思つてゐる。どうして母親に大遠志丸を服用させないのであろうか。

七月七日の夜、紫微夫人のお告げ。

その場で、「書きつけの處方が得られるでしようか」と申し上げると、やがて「世の中にちゃんとある。探し求めて密かに用いるがよろしい」と答えられた。保命君が紫微夫人にたずねられた。「此の處方は牛黃と銀屑を用いるのではありませんか。そうだとすれば、少しく調合が難しいのです」〈これはつまり今の太鎮心丸である。まず水銀で銀屑を柔らかに融かす。そのために調合が難しいのである〉。紫微夫人のお答えは、ただうなずかれるだけであつた。〈右の三條は楊羲の書

陸納兄弟は高潔にして醇篤、姜伯子のような風格をそなえている。彼らが高遠な志を抱こうとしてゐることが分かり、喜んでゐる。彼らの祖父には陰德があつた。その餘慶は七代後まで及ぶに違ひない。

陸荀子が自ら誓いをたて、精進潔齋を一年間行つ旨誓願してゐることを知つたので、經典を授けようと思う。〔卿自〕〈この二字は後の人が勝手に付け足したものであり、眞跡ではない〉はもう一度よく考えてみよ。劉遵(祖)がなかなか立派な心を持つてゐることは前々から分かつてゐた。

保命君が許長史に答えられた。〈陸納の兄の名は始、兄弟そろつてともに立派な行いがあつた。祖父の名は英、吳に仕えて丹陽郡の太守となつた。荀子とはきつとある人の幼名であらうが、誰であるのかは分からない。陸納は尙書令となり、太元二十年(三九五)に亡くなつた〉

虞昭はその「兄子」〈この二字を後の人は塗りつぶして「先人」の字に改めているが、元のテキストはまだ識別できる〉の事件のために、裁判沙汰にまきこまれて、身柄を拘束された。今はまだ決着がついてはいないのだが、理不盡なことにならうとしてゐる。しかし、幸いにも彼は世の中にあつていささか功德を施しており、かつまたその一族の福德は強力だ。上章が何度も繰り返されて、いずれも太上君の裁定を受けてゐる。事件が決着し次第、やがて追つて釋放されるだろう。彼の病氣は重くはあるが、心配することはない。許侯はひとかたならず彼の面倒を見てゐる。だからこつそり教えるのだ。保命君が許長史に答えられた。

庾道季<sup>⑬</sup>は自ら現世の高位高官に就いておりながら、天道に従って法を運用することができなかった。ふらふらと落ち着かず信仰を馬鹿にし、内面と外見とがばらばらだ。幼い時から大人になるまで、立派な功德は何ひとつなく、悪行を積み重ねては改めないものだから、その罪名は早くも決定してしまつた。今、臨終の時にあたつて、はじめて徳を修めて免罪済度されようと、千金の無駄金を使おうとしているが、手遅れではあるまいか。

保命君が許長史に答えられた。〈庾鯀、字は道季、亮の第二子である。幼い時から文才があり、文學、學問にすぐれた。升平年間に丹陽郡の長官となり、もろもろの力役六十餘事を廢止する上奏を行い、太和の初めには領軍將軍となつた。こうした行狀からすれば、悪行をなしたようには思われない。恐らくは訓戒を聞き入れ善行を修めた結果、無事に命を延ばすことができた〉

郗(方)回の父親は罪もないのに數百人の民を殺戮し、その財産を奪つた。罪科は極めて重い。「愧」(きつと)「怨」の字であろう)に思う當事者たちが訴え續けたので、天上の役所はとつくの昔に報いとしての罰を申し渡した。回は律法上、一門斷絶となるべきところであるが、彼は徳を修めることひとかたならず、その身だけは免れるであろう。だが、子孫は無事ではいられない。回はきつと天壽を

全うするであろう。しかし仙道という大事からは、ずいぶん隔たつている。

太元真人が許長史に答えられた。〈郗回の父の鑒は清廉ですぐれた行いがあり、これほどの殺戮掠奪を行うはずはない。もしかすると江南に渡つてきた當初、けじめをつけるために引き起こしたのかも知れない。そうでないとすれば、京口にいた時にみだりに逆賊を殺戮したのであろう。鑒は七十餘歳で死ぬと、すぐさま鄧都宮の官職を手に入れた。右の陸納以下の四條は某甲の筆による寫しがある〉

(1) 香火 『登真隱訣』卷下「百靈交會、在此香火前」。

(2) 消磨之愈疾 『搜神記』卷一「(杜蘭)香曰、消魔自可愈疾、淫祀無益」。道藏中に『太上護國祈雨消魔經』『太上洞神天公消魔護國經』『太上說紫微神兵護國消魔經』『洞真太上說智慧消魔眞經』がある。

(3) 捐齊以茹荼、晒九成而悅北鄙 『抱朴子』博喻「抱朴子曰、捐荼茹蒿者、必無識甘之口、棄瓊拾礫者、必無甄珍之明、薄九成而悅北鄙者、吾知其不能格靈祇而儀翔鳳矣、舍英秀而杖常民者、吾知其不能敘彝倫而臻升平矣」。

(4) 學而不思 『論語』爲政「學而不思則罔、思而不學則殆」。

(5) 劉遵祖：『世說新語』排調「劉遵祖少爲殷中軍所知、稱之於

庾公、庾公甚忻然、便取爲佐、既見、坐之獨榻上、與語、劉爾日殊不稱、庾小失望、遂名之爲羊公鶴、昔羊叔子有鶴、善舞、嘗向客稱之、客試使驅來、氈氍而不肯舞、故稱比之、注「徐廣晉紀曰、劉爰之字遵祖、沛郡人、少有才學、能言理、歷中書郎宣城太守」。

- (6) 大遠志丸 『重修政和證類本草』卷六草部上品之上「遠志、味苦、溫、無毒、主欬逆、傷中、補不足、除邪氣、利九竅、益智慧、耳目聰明、不忘強志、倍力、…久服、輕身不老」、陶弘景注「…遠志亦入仙方藥用」。

- (7) 牛黃 『重修政和證類本草』卷一六獸部上品「牛黃、味苦、平、有小毒、主驚癇寒熱、熱盛狂瘵、除邪逐鬼」。

- (8) 銀屑 『重修政和證類本草』卷四玉石部中品「銀屑、味辛、平、有毒、主安五藏、定心神、止驚悸、除邪氣、久服、輕身長年」、陶弘景注「…今醫方士鎮心丸用之、不可正服爾、爲屑、當以水銀研令消也」。

- (9) 陸納兄弟 『晉書』卷七七に傳あり。

- (10) 姜伯子 『真誥』卷四葉九裏「姜伯眞之徒也」。

- (11) 慶流七世 『上清太上八素眞經』「夫鬼可以學仙、如人可以學道、七世立德、故慶流子孫、令致神仙也」。

- (12) 庾道季 『晉書』卷七三に傳がある庾蘇。

- (13) 陽官貴勢 『登眞隱訣』卷下「若急事上章、當用朱筆題署」、

注「三天曹得此朱署、即奏聞、猶如今陽官、赤標符爲急事也」。

- (14) 罪目 『雲笈七籤』卷八二遊稚川記「每以庚申日、條列人罪目、奏于上天」。

- (15) 表除諸役六十餘事 『晉書』卷七三庾蘇傳「升平中、代孔嚴爲丹楊尹、表除重役六十餘事」。

- (16) 郗回父 郗回とは郗愔、字は方回のこと。その父は郗鑒。ともに『晉書』卷六七に傳がある。

- (17) 殃考 『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷三守一品「殃考酷毒、悔无所追」。

- (18) 天曹 『登眞隱訣』卷下「多則正氣差吏兵厭事」、注「天曹尋檢簿目相違、便爲罪責」。

- (19) 得爲鄴宮職 『真誥』卷一五葉六裏「(羅鄴山)南門亭長、今用周撫代郗鑒」。

平凝夷質、淵通妙靈、神造重絕、栖眞攝生、太玄植簡、太素刊名、金庭內曜、玉華外瑩、朱軒四駕、嘯命衆精、騁龍玄州、飛雲浮眞、必能上友逸臺之公、下監御于太清矣。

八月十七日夜、紫微王夫人授、令因許長史示郗。

希遐遠曜、冥響凝玄、蕭浪上韻、耽夢遯眞、仰飛霄霧、俯散靈根、

飛步四覺、內觀七緣者、則必有丹書秀簡帝房之錄、玄聲八振、栖身五嶽、於是灌胎朝元、吐納六液、從容三道、誨此景福、上可以策軒空洞、下可以反華變黑矣、若形羈榮羅、鼓輪華園、乘波適物、鳴簪風塵、外有謀道之名、內有百憂來臻者、適足勞天年以聘思、終歸骸於三官耳、齋之不專、徒悟而無益、可謂意不盡言乎。

蓋行眞炁、當吐三納四、乘七吞九、今吸之不足、躡之失序、神漏汭源、精亡胎擾、雖休糧日挹、而莫知道與年喪矣、欲階此渡也、其未接乎、夫索長生者多津、尋靈塗者千百、何必用水爐以盛火、趣償責於三官耶。

右中君言、因許長史示郗。

紫微夫人云、「郗若得道、乃當爲太清監也、若能聞要道而勤者、當至此格、若不專篤而守迷行外舍道法者、則都失也」。〈紫微前語與太元殊乖、而如此所云、當是迷不能勤乎要道、司命顯其終迹故也〉

情不餘念者、道乃來耳、郗回猶未足以論至道耶。《小君》

郗綜婦丁淑英者、有救窮之陰德、又遇趙阜之厄而不言、內慈自中、玄感皇人、故令福逮於回、使好仙也、綜墓在東平、淑英今爲朱陵嬪、

數遊三上、司命亦令聽政焉。〈此二人當是回之曾祖也、外書不顯〉

郗羅與薛春華至垂心於門宗、初不以生人爲事、然訟者多、但不能咸制之耳、每見諫考訴者、甚慙至也、時節宜祠之耶、此二人郗家之福鬼。〈外書亦無此二人、不知是何親〉

郗雄與閭屈女不相當、負石之役、于今未了、喜擊犯門宗、心常殺絕、此二人是郗家之禍鬼、郗〔△〕〈贖除此名不可識 與殷武姬被考、以燒殺朱奢李賤以致災也、其無後、亦求代逮、又與高豐相扇、甚助馬頭之訟石公、未便可得佳、恐不止耳、亦何趣欺其婦耶、省來慙慙、試爲掩正之。〉<sup>①</sup>亦無此諸△

右保命答許長史。

小君說言、郗鑒今在三官爲劉季姜所訟、爭三德事、周馬頭在水官訟其婿、引理甚苦、郗朗伊香之二人、今爲牙女子奇求此。

范師昨受江羅辭。

郗相今爲大曹吏所逮、其婦〔形〕〔邢〕嬰桃受事未了、方索代人於此家。

此自是旁聽小君之言語耳、不令書之、爲自疏識以示耳。〈此二十二

字是楊君自記、與長史

高齡反化晚、而祭酒弱、道氣不交、靈助無主、是以羣邪纏玄、急行其禍、奚不宗生生乎、於我助之有緣、其婦言亦急、家事當須了之、非他得豫。

今六天之橫縱、而太平之微薄、靈不足以助順、適足以招羣奸、所以神光披越、而邪乘正任矣、高齡之無德久矣、鬼訟之紛錯積矣。

許長史〈黃氏〉「民」贅作掾字將欲理之耶、若翻然奉張諱道者、我當與其一符使服之、如此、必愈而「謫」〈此謫字也〉矣、不然、往詣水官、所謂嗚呼哀哉〈張諱即天師名也、楊不欲顯疏也〉、邪氣入體、鬼填胸次、其將迴惑於邪正、必不能奉正一於平氣耶、如此、吾治疾之方、殆不可得。〈正一平氣即天師祭酒之化也〉  
彼往、其子亦去、何一身之永逝乎。

八月十九日夜、保命君密語許長史。

冢訟尤甚、恐亦未已、齡曾鑿敗古人碑銘之文以自顯焉、陰賊於鬼神、〔弊〕〈謂應作蔽字〉善以自標、訴者誠多事、以此爲首先。

八月二十四日夜、保命告。

欲取謝奉補期門郎、而今已有兼人、北帝故權停之耳、近差王允之兼行得代、奉若服朮酒、可未便恭命也、高書亦可服朮、其家家訟亦爲紛紛、朮遇鬼炁、故必無他耳。

范中候言此。〈謝奉字弘道、會稽人、仕至吳郡丹陽尹吏部尚書、王允之、敦同堂弟王舒子、有智幹、爲〔河〕<sup>④</sup>南中郎將江州、遷衛將軍會稽、封番禺侯、年四十七、謚〔忠〕<sup>⑤</sup>侯、高書即謂齡也、期門郎、鄴都中官、而記中不見此職、惟有脩門耳〉

從平凝來凡十四條有掾寫。

- (1) この句は陶注とみなす。
- (2) 俞本が「形」を「邢」に作るのに従う。
- (3) 意をもつて「氏」の字を「民」の字に改める。
- (4) 「河」は衍字とみなす。
- (5) 『晉書』王允之傳により「中」の字を「忠」の字に改める。

穩やかな性質を平穩に保ち、眞靈と奥深く交信する。精神を天界のかなたへと至らせ、上眞の世界にくつろいで生命を養う。すると、太玄宮に名札が立てられ、太素宮に名前が刻まれる。金庭館<sup>①</sup>がその

内に輝き、玉華宮がその外にきらめく。朱色の四頭立ての車に乗り、あまたの精靈<sup>②</sup>に號令をかける。神龍を玄州目にかけて疾驅させ、飛雲は小暗い空に浮遊する。必ずや上は御殿に住む貴人を友とし、下は太清天を統御できることでしょう<sup>③</sup>。

八月十七日の夜、紫微王夫人が授け、許長史を通じて郤回に示させたもの。

かそけく遙かなものが遠くに輝き、神祕の響きは玄空に凝縮する。高き調べの中をさびさびとさすらい、夢の間に間に上眞の世界へと逃れ棲む。ふり仰いで雲霧を飛ばし、俯しては靈根をふりまく。四段階の悟りへの道を軽々と踏み歩き、七種類の因縁をその身中に觀想する者には、朱書された立派な札が天帝のいます一室<sup>④</sup>の記録としてきつと立てられるはずだ。玄妙な音楽が八方に奏でられ、その體を五嶽に憩わす。そこで、仙胎に潤いを與え元神に拜謁し、六種の靈液を出し入れする<sup>⑤</sup>。根本の三道<sup>⑥</sup>にくつろいで、この大きな幸せを人に教える。上はがらんとした大空に車を走らせることができ、下はつややかな顔の輝きを取りもどし<sup>⑦</sup>頭髮を黒々と變化させることができるのだ。一方、形骸を虚榮の網に縛り付け、榮華の園を車輪の音高く往來し、時流に乗り世情におもねって、俗塵の中で權勢を誇り、世間的には道を探求する者との名聲を得てはいても、心中には幾多の憂いがおし寄せてくるような人間は、ただ天壽を浪費して

思慮を四散させ、結局はその形骸を三官のもとに歸してしまっただけだ。潔齋を行っても専一でなければ、悟りは無意味で効果はない。わが氣持は言葉では表現しきれない<sup>⑧</sup>、と言わねばならぬ。

思うに、眞氣を運らせるには、三元の靈氣を吐き四時の靈氣を取り入れて、七星を繋ぐ道筋に乗り九辰の精氣を呑みこまなければならぬ<sup>⑨</sup>。しかし今、吸引の分量は足りず、歩行の順序はばらばら、神氣が根源のところで漏れ出し、精氣は失せて仙胎は亂れる。穀物の攝取を絶ち<sup>⑩</sup>日々に精氣を汲み取ろうとも、道が年とともに失われてゆくことに氣づかない。仙界へのこの渡し場に梯子を架けてやろうと思っているのに、まだ近づいて來ないのか。そもそも長生を探求するには多くの渡し場があり、靈界への道を尋ねる手段も千、百と數知れぬ。どうしてまた、氷の火桶に火種を盛るようなことをしてしまい、ひたすら三官で罪を償う<sup>⑪</sup>羽目に陥ろうとするのか。

右は中茅君のお言葉。許長史を通じて郤回に示されたもの。

紫微夫人が言われた。「郤はもし道を體得すれば、その時にはきつと太清天の監督となるはずです。肝要の道を聞いてそれにいそしむことができる類の人間は、きつとこうした地位に到達する。だが、もし専心篤實でなく、間違いを墨守したまま在家の道術を行うよう

な者は、すべてがおじゃんになつてしまふのです」。(紫微夫人の右の言葉は、太元真人のとはひどく違つてゐる。しかしこで言われていることのようにとすれば、きつと郗回は間違つたまま肝要の道にいそしむことができなかったのに違ひない。司命君は彼の末路を明示したわけである)

心に雑念のない者にこそ、道は訪れるのだ。郗回はまだともに究極の道を論ずるには足りぬな。《小茅君のお言葉》

郗綜の妻の丁淑英<sup>(13)</sup>には、困窮している者を救ふといつた陰徳があり、また趙阜による災厄に見舞われながらもそのことを口外しなかつた。内なる慈愛がにじみ出て、阜人<sup>(14)</sup>を深く感じ入らせた。だからその福徳が回にまで及び、仙道に興味を持たせることとなつたのだ。綜の墓は東平郡にある。淑英は今では朱陵洞天の貴嬪となり、しばしば三天の上を遊覧している。司命君も天界のまつりごとを任せている。(この二人はきつと郗回の曾祖父母なのであらう。世俗の書物には明らかではない)

郗瞿と薛春華とは一門宗族に對してとても氣を配っている。もとよりこの世の人間のことに關わりたくはないのだけれども、それでも訴える者が多く、すべてを制止できないだけなのだ。告訴人を諫

める場面などいつも目にしているが、とても眞剣だ。季節ごとに祭つてやるのがよからう。この二人は郗家の福の神である。(世俗の書物にはこの二人のこともない。どういつた血縁關係にあるのかは分らない)

郗雄と閻屈女とは折り合いが悪かつた。石を背負う苦役<sup>(15)</sup>は今もまだ終わつていない。一門宗族に好んで崇りを加え、いつも根絶やしにしてやろうとの心を抱いている。この二人は郗家の疫病神だ。郗「ム」(この名は黒く塗り消されていて識別できない)と殷武姬とは考罰を受けている。朱奢や李賤を焼き殺した廉で災厄を招いたわけだ。跡継ぎがいけないのに身がわりを求められている。また(郗雄は)高豐と一緒に騒ぎ立て、(周)馬頭が石公を訴えているのに大層助勢している。まだすんなりとはうまくゆかぬ。恐らくまだ止まないことだろう。どうしてあんなにむきになつて石公の妻までを騙そうとするのだろうか。上章を讀んだところ大層ひたむきなもので、試みにもみ消して事態を正してやろう。(やはり(世俗の書物には)これら諸人のこともない)

右は保命君が許長史に答えられたもの。

小君がおっしゃられるには、郗鑒は今三官において劉季姜から訴



えられ、三徳のことで争っている。周馬頭は水官において増を訴えているが、理窟をつけることはなはだ厳しいものがある。郷朗と伊香の二人は、現在、虎牙の娘の子奇のためにこのお告げを求めている。

鬼帥の范疆が昨日江羅に授けた言葉。

郷相は今、大曹吏に捕らえられており、その妻の刑嬰桃もその處分がいまだ完了しておらず、今やその身がわりになる者を郷家から捜しているところだ。

これは小茅君の言葉を小耳にはさんだものである。これを書きとらせはしなかったが、あなたのために私自ら書き記して示すのである。〈この二十二字（此自是：以示耳）は楊君が自ら記し、許長史に與えたものである〉

高齢は正しい教化にたち返ることが遅れ、しかも祭酒の力が弱かったために、道氣は身體に通じず、神靈の助けも當てにすることができなかつた<sup>19</sup>。だからもろもろの邪鬼が玄眞にまとわりつき、せっかちにその禍いを行おうとするのだ。どうして生を營むことに努めなかつたのであろうか。私が高齢を助けようとするのはそれなりのわけがあるのであり、彼の妻の言葉もせつばつまっている。家庭内の事件をまず片付けるべきである。他人が關與できることではない。

今や六天の惡氣が跳梁して、太平の氣は微薄となっており、神靈もそれを助け順調ならしめることはできず、ただ多くの邪惡を招くだけの結果となっている。それ故、神光は散りぢりになって、邪氣が正氣の位置につけ入るのである。高齢は徳のないこと久しきにわたり、幽鬼の訴狀がごたごたと積み重なっている。

許長史〈黃氏は黒く塗りつぶして「掾」の字に作っている〉はこれを治めようと思っているのか。もし高齢が翻然と思ひなおして張諱<sup>ながし</sup>の道を奉ずるならば、私はその一枚の符を與えて服用させるであらう。そのようにすれば、きつと病は癒えて〔<sup>きつぱり</sup>〕。〈これは「豁」の字である〉するであらう。さもないと水官のもとに赴き、「嗚呼、哀しいかな<sup>20</sup>」ということになるであらう。〈張諱〉とは天師の名である。楊羲はそれをはつきりと記すことを望まなかつたのである。邪氣が體內に入り、惡鬼が胸をうめると、邪正のいずれを取るかに迷うようになる。そうなると平氣の状態において正一の道を奉ずること<sup>21</sup>とはきつとできなくなるのではないか。そのようであるならば、私の病を癒す處方も恐らく手に入れられなくなるであらう。〈正一平氣とは天師道の祭酒の教化である〉

彼が冥界に行けば、その子だつて行くのである。まさか彼の一身だけが永逝するのではあるまい。

八月十九日の夜、保命君が密かに許長史に告げられたもの。

冢墓の訴訟はとりわけ甚だしく、恐らくまだ止むことはないだろう。高齡は以前、古人の碑銘の文章を削り取って自らを顯彰した。鬼神をさいなみ痛めつけ、善を「弊」(やぶ)「きつ」と「蔽」の字であらうすることによって自分を高くもち上げたのである。訴えはまことに多事にわたっているが、まず何よりもこのことが筆頭だ。

八月二十四日の夜、保命君のお告げ。

謝奉を召し取り、(鄴都宮の)期門郎に補任しようと思ったが、今すでにその職を兼ねる人ができたので、北帝はかりに中止しただけだ。近々王允之<sup>22</sup>を遣わして、兼ねてその職を行わせ代わりとする。謝奉がもし朮酒<sup>23</sup>を服用すれば、すぐさま命に従わねばならぬということはあるまい。高耆<sup>24</sup>だって朮を服用すればよい。高耆の家の冢墓の訴訟もごたごた多いが、朮が鬼氣をさえぎる。だからきつと何事もあるまい。

范中侯がこのことを言った。(謝奉<sup>24</sup>、字は弘道、會稽の人。仕えて吳郡太守、丹陽の尹、吏部尚書に至った。王允之は王敦の同堂弟の王舒の子である。智慧才幹があつて南中郎將、江州刺史となり、衛將軍、會稽内史に遷り、番禺縣侯に封ぜられた。四十歳で亡くなり、忠侯と諡された。高耆<sup>25</sup>とは高齡のことである。期門郎は鄴都の官で

あるが、『鄴都記』にはこの職は見えず、ただ修門郎があるだけである<sup>26</sup>。

「穠やかな性質を平穩に保ち(平凝夷質)」のところからすべて十四條は、許掾の寫しがある。

(1) 金庭 『眞誥』卷三葉三表「寫我金庭館、解駕三秀畿」。

(2) 衆精 『抱朴子』對俗「寒溫風濕不能傷、鬼神衆精不能犯」。

同金丹「以丹書門戶上、萬邪衆精不敢前」。

(3) 下監御于太清 『眞誥』卷八葉七表「郗若得道、乃當爲太清監也」。同卷五葉七裏「乃升太清爲南嶽真人」。『抱朴子』對俗「或可以翼亮五帝、或可以監御百靈」。『上清明堂元眞經訣』「上補司命、監御萬靈」。

(4) 帝房 『無上祕要』卷二〇仙歌品「萬仙朝帝房、香煙乘虛生」。

(5) 吐納六液 『眞誥』卷一〇葉二〇表「眞人道士常吐納咽味、以和六液」。『無上祕要』卷七六咽雲牙品「雲牙者、五老之精氣、太極之霞煙、故採暉景之鋒、以充六液之和、…右出道迹經」。

(6) 三道 『眞誥』卷一四葉一八裏「化成三道、日月爲隣」。『雲笈七籤』卷二劫運「上清八景飛經云、大劫之周、三道虧盈、二氣合離、理物有期」。

- (7) 反華 『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「是以帝一上景、攝煙連衆、長契虛運、反華自然矣」。
- (8) 意不盡言 『周易』繫辭傳上「子曰、書不盡言、言不盡意」。
- (9) 吐三納四、乘七吞九 『上清黃庭內景經』上有章第二(『雲笈七籤』卷一一)「四氣所合別宿分」、注「四氣、四時靈氣也、列宿、三景也」。同章「七液洞流衝臚間」、注「臚間、兩眉間、謂額也、七液者謂四氣三元結成靈液」。同靈臺章第十七「七曜九元冠生門」、注「七曜、七星、配人之七竅、九元、九辰、配人之九竅、廢一不可、故曰生門」。同呼吸章第二十「三氣右徊九道明」、注「三氣謂三丹田之氣、右徊言周流順緒、調和陰陽、則四關九竅通流朗徹而無病也」。
- (10) 休糧 『真誥』卷九葉一八表「清齋休糧、存日月在口中」。『太清中黃真經』食氣玄微章第二(『雲笈七籤』卷一三)「要子將心運守之」、注「太元經曰、凡休糧諸門甚多、學道至近」。
- (11) 償責 『太上洞玄靈寶業報因緣經』卷二受罪品「今日捉得你、須還我昔債、…後生爲牛馬、爲人償宿債」。
- (12) 不專篤而守迷行外舍道法者 『真誥』卷一〇葉六表「何謂精耶、專篤其事也」。班固「答賓戲」序(『文選』卷四五)「專篤志於儒學、以著述爲業」。『真誥』卷九葉一四表「至於世間符水祝漱外舍之近術、皆莫比於此方也」。同卷一九葉一二表注「此當是道法應宜、而眞妙不可廣布」。
- (13) 與太元殊乖 『真誥』卷八葉五裏の記述を指す。
- (14) 丁淑英 『眞靈位業圖』第五左位散位「朱陵嬪丁淑英」。
- (15) 救窮 『真誥』卷一二葉七表「恤死救窮」。同卷一二葉九裏「北河司命亦治在洞天之中、與張激子對局」、注「張範字公儀、…好賑救窮乏、家無餘財」。
- (16) 皇人 『抱朴子』地眞「見天真皇人於玉堂、…請問眞一之道、皇人曰、…」。
- (17) 負石之役 『真誥』卷一六葉一一裏「男言之、務光之行有似矣」、注「務光辭湯讓、而負石投河」。『無上祕要』卷九七上清品下「五犯、七祖父母己身被考左右三官、罰以刀山火鄉二十四獄、萬劫乃得還充下鬼負石之役」。
- (18) 受事未了 『真誥』卷一五葉三表「人初死、皆先詣紂絕陰天宮中受事、或有先詣名山及泰山江河者、不必便徑先詣第一天、要受事之日、罪考吉凶之日、當來詣此第一天宮耳」。
- (19) 靈助無主 『真誥』卷一五葉九裏「人臥室宇、當令潔盛、潔盛則受靈炁、不盛則受故炁、故炁之亂人室宇者、所爲不成、所作不立、一身亦耳、當洗沐澡潔、不爾无翼矣」、注「故炁、皆謂鬼神塵濁不正之炁、此等皆承人爲惡、既靈助無主、道豈可議也」。
- (20) 嗚呼哀哉 『禮記』檀弓上「魯哀公誄孔丘曰、…嗚呼哀哉、尼父」。
- (21) 奉正一於平氣 『登眞隱訣』卷下「若急事上章、當用朱筆題」。

署、注「謂卒有暴疾病及禍難憂懼急事、請後天昌君等上章乞救解者、當朱書太清玄都正一平炁係天師某治炁祭酒臣某」。

(22) 王允之 『晉書』卷七六に傳あり。

(23) 朮酒 謝靈運「山居賦」(『宋書』卷六七)「苦以朮成、甘以播熟、注「朮、朮酒、味苦、播、播酒、味甘、竝至美、兼以療病、播治癰核、朮治痰冷」。

(24) 謝奉 『搜神記』卷一〇および『世說新語』雅量篇注の『晉百官名』に見える。

(25) 高著 『晉書』卷七一高崧傳「子著、官至散騎常侍」。

(26) 惟有脩門耳 『眞詰』卷一五葉六裏「南門亭長、今用周撫代鄒鑒、一門有二亭長、輒有四修門郎、一天門凡八修門郎也、門郎爲天門亭長下官、此是北帝門也」。

〔天〕「夫」觀物適任、内順明靈、託性命於高眞、委形氣於神攝者、亦剋疆以永遐、迴秋齡以保眞、今德匠既擬神杖信、澄心密靜、圓順廣敬、固天祐焉、然胤嗣不多、或時彫落、將猶靈關失緯、潛機未鎮耳、當今五氣滋曜、常朗文昌之房、三星結華、每煥璇衡之内、是以玄潤胎萌、遂其流根矣、

我案九合内志文曰、「竹者爲北機上精、受氣於玄軒之宿也」、所以圓虛内鮮、重陰含素、亦皆植根敷實、結繁衆多矣、公試可種竹於内

北宇之外、使美者游其下焉、爾乃天感機神、大致繼嗣、孕既保全、誕亦壽考、微著之興、常守利貞、此玄人之祕規、行之者甚驗。

六月二十三日、中候夫人告公。〔孝武〕〔王〕〔壬〕戌生、此應是辛酉年、而後又云「上相座動」、後以臨登極、乃是後午未年、此爲大懸

靈草應玄方、仰感旋曜精、〔洗洗〕〔似草〕〔竹〕〔作〕言邊、應說詵字、即毛詩蠡斯羽詵詵兮宜爾子孫之義也〕繁茂萌、重德必克昌。紫微夫人作。

福和者當有二子、盛德命世。〔福和似是李夫人賤時小名也、今晉書名俊容、二子即孝武并弟道子也〕

同夜中候告。〔右三條楊書、又據寫〕

(1) 俞本が「天」を「夫」に作るのに従う。

(2) 『晉書』孝武帝紀により「王」の字を「壬」の字に改める。

(3) 俞本が「竹」を「作」に作るのに従う。

そもそも萬物を觀ては自然に委ね、内には明靈に従い、生命を高眞に託し、形氣を神靈の支配のままに委ねる者は、やはり限りある

命を克服して永生し、老齡を回らして眞氣を保つ。今、徳高き師匠<sup>①</sup>は精神を集中して眞心をたよりとし、心を澄ませて細やかにして靜謐、圓滿に従順で敬虔の限りを盡くしているから、きつと天の助けがあることだろう。けれども跡継ぎは少く、時には命を落したり、あるいは靈關が秩序を失い、内にひそめる機がまだ安定していないのであろう。今しも、五氣は輝きを増して、常に文昌の部屋を明らかに照らし、三星は華を結んで、常に璇衡の内を輝かしている。それ故、玄胎が潤い萌して、かくてその根に流れることになるう。

私が按ずるに、『九合内志文』には次のように言っている。「竹は北斗の神の上精であつて、氣を玄軒の宿に受けている」。だから圓く<sup>まる</sup>て虚で、内部は水々しく、土の中ではあくまで白く、根を張つて實を結ぶと、ふさふさとたわわである。公よ、試みに竹を宮中の北の屋敷の外に植え、美人をその下に遊ばせてごらんない。そうすれば天は北斗の神を動かして、大いに跡継ぎがもうけられることになりましょう。妊娠中はつつがなく、誕生の後も長壽となられましょう。微妙なものが顯著となつて興くるのは、いつも「貞に利ろし<sup>②</sup>」という態度を守るからです。これは玄人の祕密のきまりであつて、これを行う者は、大層效驗があるでしょう。

六月二十三日、中候夫人の公に對するお告げ。〈簡文帝の子の孝武帝は壬戌（隆和元年、三六二）の生まれだから、このお告げはきつと辛酉の年（升平五年、三六一）のものであろう。この後にま

た「上相の座が揺れ動いた」とある。その後（簡文帝は）即位することになったのだが、それは後の庚午（太和五年、三七〇）と辛未（咸安元年、三七二）の年のことであり、そうするとずいぶんかけ離れてしまうことになる〉

靈しき草は北の方の屋敷をおおい、願いが通じて北斗の神の（すぐれた）精氣が運ることになりました。

「洗洗」〈章書體で言邊に作っているように思われる。きつと「洗洗」の字であらう。すなわち『毛詩』の「螽斯の羽は洗洗とおびた<sup>③</sup>だしい。あなたの子孫もそのように榮えよう」との意である〉としてこんもりと萌し、

厚い徳（を備えた子孫）がきつと大いに榮えることになりましたう。

紫微夫人の作。

福和にはきつと二人の男の子が生まれ、立派な徳を備えて一世に秀でることでしょう。〈福和とは李夫人が卑賤であつた頃の幼名のようである。今、『晉書』によれば名は俊容、二人の男の子とは孝武帝ならびにその弟の（會稽文孝王）道子のことである〉

同夜、中候夫人のお告げ。〈右の三條は楊羲の書、また許掾の寫しがある〉

(1) 德匠 『眞誥』卷八葉一〇裏「德匠既疑、玄範自天、安危之事、未宜問也」。

(2) 玄人 『周氏冥通記』卷一注「若欲傳寫、亦應先關告衆眞及玄人」。同卷二「周生一何奇、能感玄人轍」。

(3) 中候夫人告公 『眞誥』卷一九葉三表「又按中候夫人告云、令種竹北宇、以致繼嗣、又云、福和者當有二子、盛德命世、尋此是簡文爲相王時、以無兒所請、於是李夫人生孝武及會稽王、孝武崩時、年三十五、則是壬戌年生、又在甲子前二歲」、注「福和應是李夫人私名也、于時猶在卑賤」。

(4) 孝武 『晉書』孝武帝紀を參照。

(5) 後又云上相座動 『眞誥』卷八葉一一表「天子有憂、上相座動、今聊作識、密以相示」。『晉書』天文志上「太微、天子庭也、五帝之坐也、十二諸侯府也、其外蕃、九卿也、…東蕃四星、南第一星曰上相、…所謂四輔也、西蕃四星、…第四星曰上相、亦曰四輔也、東西蕃有亡及動搖者、諸侯謀天子也」。

(6) 毛詩… 『毛詩』周南螽斯「螽斯羽詵詵兮、宜爾子孫振振兮」、毛傳「螽斯、蚣蝋也、詵詵、衆多也」、鄭箋「凡物有陰陽情慾

者、無不妬忌、維蚣蝋不耳、各得受氣而生子、故能詵詵然衆多、后妃之德、能如是則宜然」。

(7) 今晉書… 『晉書』卷三二孝武文李太后傳「孝武文李太后諱陵容、本出微賤、始簡文帝爲會稽王、有三子、俱夭、…其後諸姬絕孕將十年、…會有道士許邁者、…帝從容問焉、答曰、…當從鷹謙之言、以存廣接之道、帝然之、…又數年無子、…時后爲宮人、…帝以大計、召之侍寢、…遂生孝武帝及會稽文孝王鄱陽長公主」。

德匠既疑、玄範自天、安危之事、未宜問也、公傾注甚至、所以未相酬者、豫事難論耳、頃天氣激逸、陰景屢變、太白解體於二辰之中、愆勃於紫房之下、王者惡焉、天子有憂、上相座動、今聊作識、密以相示。〈有〉<sup>①</sup>「右」此及識有掾寫、在掾自記修事後、共紙、尋眞綜迴文、令難解耳、今拘連相取、又別疏出之、其授之時、維當道其辭、楊君後自更錯義、皆是說晉代之事、竝有明徵也

相欺豈妙道要吾知之天祕能  
有術金之萬尋師疾逆除惡子  
自之制夷遂平世天命乘驅寶  
奇龍者慕可悲眞聞世復思宜

神熙逆歷有數在茲基無不無  
兵隆誰定帝紘室來之皇憤地  
先卒兒必虧金紛異五亂德天  
火數失期座當變見遠凶匠制  
規三由匠足不慮憂危撥保封  
寸莫其測源劉知向有明施者  
三五瑞天之代隆換迭相運推  
精氣神妙二參儀慎凡傳人賢

精氣神妙參二儀、慎傳凡人賢者施、封天制地無不宜、子能寶祕天  
知之、吾道要妙豈相<sup>②</sup>「欺」、自有奇神先兵規、火寸三五天瑞之、  
隆代迭換運相推、明匠保德慎無思、驅惡除逆疾尋<sup>③</sup>「思」、「師」、萬金  
之術龍之熙、隆數卒三失由兒、莫測其源劉向知、有凶撥亂皇復基、  
乘天命世遂平夷、制逆者誰必定期、匠不足慮憂遠危、五世之間眞可  
悲、篡歷有數帝座虧、當見變異紛<sup>④</sup>「紛」、「紘」來、金室在茲。

枕麝香一具於頸間、辟水注之來、絕惡夢矣、常存三關佳也。

右英告公。〈凡云公者、皆簡文帝爲相〉<sup>⑤</sup>「主」「王」時也

右一條楊書。〈五字朱書

- (1) 愈本が「有」を「右」に作るのに従う。
- (2) 回文に従い「期」を「欺」に改める。
- (3) 回文に従い「思」を「師」に改める。
- (4) 回文と愈本に従い「紛」を「紘」に改める。
- (5) 愈本が「主」を「王」に作るのに従う。

徳高き師匠が精神を集中させれば、玄妙なる規範は天から降るが、  
(その將來が)安らかか危いかについては、まだ問うべきではありま  
せん。公は十二分に心を傾けているのに、まだお答えしないわけは、  
將來の事は前もって論じることが難しいからです。近ごろ天の氣が  
激しく動き、月の光はしばしば變化し、太白(金星)は日月の二辰  
の中で姿を消したかと思うと、軌道をはずれて紫宮の下に突如現れ  
ました。王者はこのような異常現象を憎むものです。天子には憂う  
べきことが起こり、上相の座が揺れ動いたことについて、今かりそ  
めに未來記を作つて、密かにそなたに示しましょう。〈右のこの箇所  
と未來記とは許掾の寫しがあり、許掾が自分で道術<sup>⑥</sup>を書き記した  
後に、同じ紙に書かれている。眞理を探つて回文に取りまとめ、理  
解し難くさせているのである。そこで今(回文のままに)ずるずる  
と取り出し、また別に謎解きをして書き出してある。そもそもこの  
未來記を授けた時には、きっと次の言葉のままに述べ傳えたのであ

り、楊君が後に自分であらためて意味が分からないように錯綜させたのである。すべて晉代の事柄を説いたものであり、いずれも明らかな證據がある。

(回文は省略)

精氣は神妙にして天地のはたらきに參入する。凡人に伝えることにはくれぐれも用心して賢者に施しなさい。天を封じこめ地を制するには何事も宜し。あなたが大切に秘め保つことを天はご存知です。私の道は肝要至妙、欺くことがありません。自ずからすぐれた神が現れて戦争の企てを先導する。火が三正五行の際にちらつと燃え立つのは天の瑞祥。隆んなる世は次々と交替して推移していくのです。すぐれた師匠は徳を保持して慎んで思いわずらってはなりません。惡逆を驅除して速やかに師を尋ねなさい。萬金の値の術は龍の輝き。やんごとなき御身の壽命は三のつく年で終わり、しくじりはその子から始まる。その源は測り知れぬが、劉はあらかじめ知っている。凶徒は現れるが鎮壓され、皇祚は元に復歸する。天命に乗じた名だたる人物が伐ち平らげる。反逆を制壓する者が誰であるかは必ず決まっている。師匠は思いわずらうまでもないのに、遠い將來の危險を心配している。五世の間は本當に哀れなことよ。王朝の曆數を奪うには定めがあつて天の太微帝座が缺け、きつと變異が次々

と起るのを見ることになりました。金徳の王朝(である晉室)の未來はここにおいて…。

麝香<sup>⑥</sup>一具を首の間に枕として置いて、水の祟りがやって來るのを避け、惡夢<sup>⑦</sup>を斷つ。常に三關を存思すればよろしい。

右英夫人の公へのお告げ。〈すべて「公」と言うのは、いずれも簡文帝が相王であつた時代のことである〉

右の一條は楊羲の書。〈回文の「五」の字は朱書されている〉

(1) 修事 『眞詰』卷一〇葉二裏「今又重鈔可修事出此耳」。同卷

一五葉三表注「此法已重抄在第三篇修事中耳」。

(2) 尋眞綜迴文 『眞詰』卷九葉六表「且耳目是尋眞之梯級、綜靈之門戶」。『文心雕龍』明詩「至於三六雜言、則出自篇什、離合之發、則明於圖讖、回文所興、則道原爲始、聯句共韻、則柏梁餘製、巨細或殊、情理同致、總歸詩圃、故不繁云」。

(3) 奇神 『眞詰』卷一七葉二表「若夫奇神儵詭、恢譎無方、…」。

(4) 三五 『後漢書』列傳二〇下郎顗傳「臣聞天道不遠、三五復反」、注「春秋合誠圖曰、至道不遠、三五而反、宋均注云、三、三正也、五、五行也、三正五行、王者改代之際會也、能於此際



自新如初、則通無窮也」。

(5) 隆數卒三 『晉書』簡文帝紀「咸安二年七月己未」是日、帝崩于東堂、時年五十三」。

(6) 麝香 『政和重修證類本草』卷一六獸部上品「麝香、味辛、溫、無毒、主辟惡氣、殺鬼精物、溫瘧、蠱毒、痢瘕、去三蟲、久服、除邪、不夢寤魔寐」。

(7) 惡夢 『眞誥』卷九葉一六表「數遇惡夢者、一曰魄妖、二曰心試、三曰尸賊、厭消之方也、…而造爲惡夢之氣、則受閉於三關之下也、三年之後、唯神感旨應、乃有夢也、夢皆如見將來之明審也、略無復惡占不祥之想矣」。

太元真人告許長史。〈此後非眞說〉

我嘗見南陽樂子長、淳朴之人、不師不受、順天任命、亦不知修生之方、行不犯惡、德合自然、雖不得延年度世、死登福堂、練神受氣、名實帝錄、遂得補修門郎、位亞仙次、緣天資有分、亦由先世積德、流慶所陶、若使其粗知有攝生之理、兼得太上一言之訣、如此求道、無往不舉矣、夫人所以不盡年壽、中多天過、涉世者或遭刀兵之難、致榮祿不終、祚胤不長、志道之人、雖有一生之心、鑽求匪懈、徒復遭遇眞文、耽玄精微、慕尚者衆、得升騰者稀、經非不妙、靈豈無感、

愚愚相隨、安知修真之本、營神養性鎮守之法、世人積小以來、形中傷犯者多、帝一不治、百神驚散、考試萬端、所謂荒城之內、荆棘生焉、無妙術以自導、修道以求仙、貪榮慕貴、多垂成而敗、皆由喪眞犯氣、愚瞽罔昧、豈識此機耶、致奪年減算、萬事不成、以此求生、去生遠矣、虛自苦耳、太上有玄機之道、煥落七神枕中之要、此道微妙哉、初不傳於下挺愚俗之人、有此道者、帝一治於玄宮、萬神守備、與天同心、案訣謹而修之、登山越海、萬試不干、修仙升度、所欲從心、斯豈虛言耶、卿父子玄機邈世、理妙接眞、故可榮神之仙才、而爲衆眞所稱、非吾獨所稱舉、故當與卿同編仙錄、無復理外之嫌、亦已諮啓卿、故令知乃心。

受用金龍玉魚、此不可闕、所以爾者、詣太上前、昭靈亦當粗具、近所寫神虎符、意嫌不精、可更書爲善。

卿前所道相王事、頃面郗回、亦知有好心、但所得少耳、自當保其天年也。

見謝所作傳未易功、乃能序述聖迹、賞解作奇、此是天發其心、昨亦已見司命君、大以爲佳、冥中自當報之有緣、其子孫若知醺靈獄、祈天眞、降應必也、豈虛言哉、謝家一門、唐承之世、繁林蔚然、甚可欣也、安石先對所鍾如何、具如近面、不足宣。

眞人西城王君答許侯。

右四條別一手書、陸修靜後於東陽所得、不與諸迹同、辭事僞陋、不類眞旨、疑是後人所作、樂子長非受五符者、唐承卽列紀所云四十六丁亥之期。

太元眞人の許長史へのお告げ。へこれ以後は眞人の説ではない。

私はかつて南陽の樂子長<sup>①</sup>に會つたことがある。純朴な人で、特定の師承關係はなかつた。天命に隨順してはいたが、長生の術<sup>②</sup>を知つてゐるわけではなかつた。その行いは惡を犯さず、その徳は自然に合致してゐた。延年昇仙<sup>③</sup>して、死後に福堂に登ることではできなかったが、神を鍊成<sup>④</sup>し氣を攝取して、天帝の名簿に名前を登録され、かくて修門郎に補任され、仙人に次ぐ位に就くことができた。天生の資質にその分があり、また先祖が功德を積んだおかげで、その餘慶によつて育まれた結果なのである。もし彼があらまし養生の理法があることを知り、そのうえ太上の一言の口訣<sup>⑤</sup>をいただいて、このようにして仙道を追求していたならば、何事もうまく行かなかつたはずはあるまい。そもそも人が天壽を全うせず、途中でしばしば夭折するわけは、世間と交渉を持つ者は、あるいは戦亂の災難に遭遇し、

名聲や官位も最後まで全うされず、血筋も長くは續かないことになるからである。また仙道に志す人は、生涯をかける決心で、たゆまず研鑽に努めるけれども、いたずらに眞文に出會い、奥深い眞理に浸り精通するだけで、仙道を思慕する者は多いが、昇仙できる者は數少い。經典は精妙ならざるはなく、神靈は必ず感應するもののだが、愚者が次々とあとを斷たず、仙道修行の根本や、神を保ち性を養つて生を鎮守する方法を知ることがない。世俗の人間の中には、小さいことを積み重ねて身體を損なう者が大勢いる。帝一<sup>⑥</sup>があるべきところに治まらなければ、(身中の)百神<sup>⑦</sup>は驚いて散りぢりになり、あらゆる試験を課されることになる。いわゆる、廢墟の城市の中に荆棘が生える、というものである。精妙な道術によつて自己をコントロールし、道を修行して昇仙を希求することがなければ、榮華を貪り富貴を慕い求めても、今一步のところで失敗することが多いだろう。すべて眞を喪失し氣を損なつたからである。凡愚で眞理の見えない蒙昧な輩に、どうしてこのからくりが認識できようか。年壽を奪われすり減らされて、何事も成功しないようになる。そのようなやり方で長生を求めても、長生とは程遠く、虚しく自分を苦しめるだけだ。太上には玄機の道と北斗七星の七神<sup>⑧</sup>を輝かしくわが身に降らせる枕中の祕要<sup>⑨</sup>がある。この道は微かな妙なるかな。下等な天分しか持たぬ凡愚世俗の人間には決して傳へはしない。この道を備える者は、帝一<sup>⑩</sup>が玄宮を治め、萬神が(持ち場を)守備す

るようになり、天と心を同じくする。祕訣を按じ謹んで修行すれば、山に登り海を渡るにあたって、あらゆる試練が犯すこともなく、仙道を修めて昇仙<sup>19</sup>し、欲するところは思うがまま。これはどうして虚言であろうか。

そなたの父子は玄妙な機根が世に傑出し、眞理の精妙なはたらきによって眞人たちに交わった<sup>20</sup>。もとより榮えある精神の仙才であり、あまたの眞人の稱賛するところであつて、私ひとりだけが稱賛し推舉するのではない。だから、そなたのためにみんな一緒に仙人名簿に登録することになろう<sup>21</sup>。そこからはずされる恐れはあるまい。すでにそなたのことについて相談し申し上げたので、私の心を知らせるのだ。

傳授の際には、金龍と玉魚を用いることを缺かしてはならない。そのわけは、太上の前にまかり出るにあたって、昭靈夫人がやはり當然そのことをあらまし具申ししているであらうから。最近書寫した「神虎符」は、大雑把なのが氣にくわぬ。書き改めて完善にしておきなさい。

そなたが以前語った相王のことで、最近都回に會つたが、やはり立派な心の持ち主だと分かつた。ただ、體得しているところがもの足りぬ。天壽を全うすることはするだろう。

謝の著わした傳を見たが、たいした勞作だ。聖人たちの事跡をなかなかよく敘述し、出來榮えは秀逸である。これは天がその心を發揮させたのである。先日またすでに司命君にお目にかかつたが、すばらしいと稱賛されていた。冥界からきつと報われる機縁ができたのだ。その子孫がもし靈嶽を祭り<sup>22</sup>、天真に祈ることを知るならば、應報が降ることは必定である。どうしてこれが虚言であらうか。謝家一門は、唐承の世に鬱蒼と茂る林のように繁榮することだろう。甚だ喜ばしいことである。安石に先祖の報いがどのように集まるか、そのことは近く會つて詳しく述べよう。ここでは述べられぬ。

眞人の西城王君が許侯に答へられたもの。

／右の四條は別の一人の筆になるものであり、陸修靜<sup>23</sup>が後に東陽で手に入れたものである。もろもろの他の筆跡と異なり、文章も内容も作爲的でお粗末だ。眞人の言葉<sup>24</sup>には似つかない。恐らくは後世の人間の僞作であらう。樂子長は『五符』を授かつたその人物ではない。唐承とはすなわち『列紀』に言う四十六丁亥の期<sup>25</sup>のことである。

(1) 南陽樂子長 宋文明『通門論』(ペリオ二三五六號)「太上洞玄靈寶天文五符經序」：昔夏禹例出靈寶經中衆文爲此卷、藏勞盛

山陰、樂子長於霍林仙人邊得、遂行人間」。

- (2) 修生之方 『漢書』卷一〇〇上敘傳上「桓生欲借其書、(班)嗣報曰、若夫嚴子者、絕聖棄智、修生保真、清虛澹泊、歸之自然、獨師友造化、而不爲世俗所役者也」。

- (3) 死登福堂 『元始無量度人上品妙經四注』卷四「阿陀龍羅四象吁員」、李少微注「玉名人於帝錄、生死度於南宮、四極給自然之羽車、七祖歡遊於福堂也」。

- (4) 練神 『紫陽真人內傳』「守一鍊神、雖非上真之道、亦是中真地仙之好事」。

- (5) 名賓帝錄 『登真隱訣』卷中「灌漑中嶽、名書帝錄」。

- (6) 先世積德 『真誥』卷一六葉一六裏「不圖先世之多愆、殃流子孫、結書刊於帝簡、運沈逮於後昆、享年不永、遂沒命於長梁之津」、『周氏冥通記』卷二「周生修功積德、可謂不負其志乎」。

- (7) 一言之訣 『老君太上虛無自然本起經』(『靈寶七籤』卷一〇)「人爲道但守一不移、而不作功德、譬若人生在家未嘗出入、不能見道路也、愚者雖守道、不作功德、亦不能得道也、故老君作道經、復作德經、使忠信者奉行之、假令但守道、便可得遂、聖人但作一言之訣、何須並作諸經云耶」。

- (8) 天過 『真誥』卷一五葉一一表注「人命便无定限、一切皆是天過耳」。

- (9) 遭遇真文 『靈寶七籤』卷一〇一太上道君紀「洞玄本行經云、…

值遇真文、得今太上之任」。

- (10) 養性 桓君山「新論形神」(『弘明集』卷五)「老子用恬憺養性、致壽數百歲」。

- (11) 帝一 『上清大洞真經』第二十七章「帝一保身、五老衛神」。

- (12) 百神 『真誥』卷一〇葉一二裏「四肢百神、九節萬靈」。

- (13) 荒城之內、荆棘生焉 『老子』第三十章「師之所處、荆棘生焉、大軍之後、必有凶年」。

- (14) 修道以求仙 『論衡』道虛「夫修道求仙、與憂職勤事不同」。

- (15) 奪年滅算 『抱朴子』對俗「行惡事、大者司命奪紀、小過奪算」。

- (16) 七神 『上清大洞真經』第三十四章「七神回帝席、五老飛玉輶」。

- (17) 枕中之要 『漢書』卷三六劉向傳「上復興神僊方術之事、而淮南有枕中鴻寶苑祕書、書言神僊使鬼物爲金之術、及鄒衍重道延命方、世人莫見」。

- (18) 下挺 『真誥』卷一三葉一八表「易遷云、鄧夫人語之、解此則得仙、此仙之要言、易遷不解此、許侯可解注之」、注「此碣文乃粗可領解、皆上道中事、但下挺者無由究知之、故令長史解釋、亦或試以戲之耳」。同卷一八葉一〇裏「此道高邈、非是吾徒所得聞也、亦由下挺稟淺、未由望也」。

- (19) 升度 『真誥』卷一〇葉一八裏「子所以不得升度者、以子身有大病」。

- (20) 接真 『真誥』卷一八葉一二裏「苟能攝妙觀、吐納可長年」、

注「據既未接眞、故假夢以通旨」。

- (21) 編仙錄 『周氏冥通記』卷二「右一條二十四日晝寢夢所受記、書兩青紙」、注「爾名上仙錄已七十餘年」。

- (22) 受用金龍玉魚 『太平御覽』卷六七九道部「八術神虎隱文曰、欲受八術隱文者、齎金龍玉魚、盟誓而受之、受大洞眞經亦用此」。

- (23) 醮靈嶽 『五嶽眞形神圖記』(『雲笈七籤』卷七九)「建武七年、乃徵道士郭憲、…從駕南郊、委以祭事、遍醮五嶽」。

- (24) 唐承之世 『眞誥』卷一三葉一八表「隱居今所安經昭靈臺前、欲立小石碣子、刻書華陽頌十五篇、皆讚述此山洞內外事、庶以標誠靈府、永垂遠世、而未辦作石、今且載其文於此曰、…號期行當滿、亥數未終丁、迨乃承唐世、將賓來聖庭、右機萌」。

- (25) 安石 謝安、字は安石のこと。『晉書』卷七九に謝安傳あり。

- (26) 陸修靜 『道學傳』陸修靜傳を参照。

- (27) 眞旨 『眞誥』卷一九葉七裏「又按衆眞辭旨、皆有義趣」。

- (28) 列紀所云四十六丁亥之期 『上清後世道君列紀』「唐承之年、積數有四十六丁亥之間」。

眞誥卷之九

協昌期第一

經曰「行事時、北向執隱書而爲之」者、謂始學眞妙、未涉微遠、不解星位之首向、不識玄斗之指建、故當北向執書以漸求之耳、若既解書意、識星轉之隨時、自宜隨斗所指、按而存步、如此則無有常向、不爲皆向北也、夫一切北向、自爲始學者耳、恐此將可以意通觸類、不足復問邪。〈此答長史諮飛步經中北向執書意也〉

太上眞人步五星之道、以致五星降室、閉氣上綱、當先呼五星星夫人名字、畢乃越綱蹈星、謂始上綱、便頓住呼名字、呼名字、畢乃越綱蹈星耳、若每至星上、得復重心呼所至星處之名字、益其佳也、若其煩重難常、但可案舊而行耳、昔鬱沙公北里子長陵老人、皆案此法而得升天、不以煩難爲辭也、所謂治生者矣、商販之汲汲、豈憚險難哉、所期唯錢貨而已耳、若使求道者常如買販之用心、亦有何不得仙耶、但惜初學者皆言專心盡懃至而後漸懈縱、有亦似車之將故而百節緩落、又似負重之牛造遠足蹇、夫學者之所患、而爲得者之所笑、皆如此輩事耳、苟能心研內鏡者、是爲感發乎神、將有靈人發子之蒙、攜辰景之輿矣。〈此答諸步五星法也、經圖唯言隨綱往還、又有一法云越綱蹈星、今即是訣此事也、獎戒之言、實爲切至〉

五星圖、布常同南也、以太白位在西、歲星位在東、案而施之、所以爾者、五星隱伏、縱橫無常、不如北斗列象恆在、故一以定位於五方、

不得隨星之所在也。〈此答諸施安五星圖也、經中無旨訣、所以宜問〉

三八景二十四神、以次念之、亦可一時頓存三八、亦可平旦存上景、日中存中景、夜半存下景、在人意爲之也、若外身幽巖、屏絕人事、內念神關、攝眞納氣、將可平旦頓存三八景、二時又各重存一景、益當佳也、但人間多事、此煩難常行耳、事不得常、爲益自薄、〔昔〕西城王君桐柏上眞、皆案此道也、案苞玄玉錄白簡青經云、「不存二十四神、不知三八景名字者、不得爲太平民、亦不得爲後聖之臣」。〈此答諸二十四神經中修存之意、亦是祕訣、右此四訣事、今有長史所寫本、不知此因楊謬何眞、若非東卿、則紫微南眞也〉

- (1) この段、『太上飛步五星經』に見える。
- (2) この段、『太上飛步五星經』に見える。
- (3) この段、『太上飛步五星經』に見える。
- (4) この段、『太上飛步五星經』に見える。
- (5) 愈本に従つて「昔」の字を補つ。

眞誥卷九

協昌期第一

經典に、「實修する際には、北を向き隱書を手に持つて行ふ」とあるのは、眞仙界の靈妙な事柄<sup>(3)</sup>を學び始めたばかりで、まだ微妙深遠な域には達せず、星の位置がどちらを向いているのか分からないし、玄妙な北斗星の柄の指す方向が見分けられぬため、それで北を向いて隱書を手に持ち、段階を踏んで探求すべきだというのである。もし隱書の意味が理解され、星の轉回が時間に應ずることが分かるようになれば、當然、北斗星の指す方向に應じて、それに基づいて存思し歩行すればよい。このようになれば、決まった方向があるわけではなく、いつも北を向くわけではない。そもそもひとまずかりに北を向くのは、初心者のためなことなのだ。恐らくこのことはあらゆる場合に當てはめればよいのであつて、これ以上たずねる必要はないだろう。〈これは、許長史が『飛步經』の中に「北を向いて隱書を手に持つ」とある意味についてたずねたのに答えたものである〉

太上眞人の五星<sup>(5)</sup>を歩行する道術は、それによつて五星が靜室に降つて來るようにする。息を閉じて綱に上り、まず五星と五星の夫人の名と字<sup>(6)</sup>と呼び、呼び終つたうえで綱をまたいで星を蹈む、と。つまり、始めて綱に上つた途端に、びたつと止まつて名と字と呼び、名と字と呼び終つたうえで綱をまたいで星を蹈むのである。もしある星の上によつて來るたびに、やつて來た星の名と字とをも

う一度繰り返し心の中で呼ぶならば、その效能はきつとすばらしい。もし面倒で絶えずやるのが難しければ、以前の方法に基づいて行えばよい。昔、鬱沙公、北里子、長陵老人たちはすべてこの方法に基づいて昇天がなかったのであり、大儀で厄介だということ言い逃れはしなかった。いわゆる生を治めるといふものだ。商賣人はあくせくと一心不亂、危険困難にもおじしたりするだろうか。彼らが目當てとするところは、ひたすらお金だ。もし仙道探求者が絶えず商賣人のように心をはたらかせるなら、いったい仙道が體得できないわけであろうか。ただ残念なのは、初學者が誰しも心を專一にして努力の限りを盡くしますと口にしながら、その後になって次第にずるけることだ。まるで車がおんぼろになろうとしてあらゆる關節にがたが来るようなもの、また重い荷物を背負った牛が遠方まで出かけて足がなえるようなものだ。そもそも修行者にとつての困った點、そして（仙道）體得者から笑ひものにされるのは、すべてこのような輩のことなのだ。もし心の中で内面の鏡に磨きをかけることができる者は、つまり神に感應を起こさせるのであって、神靈があなたの蒙昧を開いてくれ、朝日の光の車に乗せてくれることもあるだろう。（これは、五星を歩行する方法についてたずねたのに答えたものである。經圖<sup>⑧</sup>ではただ「綱に従つて往きつもとどりつする」とあるだけであるが、さらに一つの方法があつて、「綱をまたいで星を踏む」とあり、今ここではつまりそのことについて奥儀を與えたので

ある。勵ましと戒めの言葉はまったくもつて切實である

五星圖は、ひろげる際にはいつも決まって南向きにする。太白星を西に位置させ、歳星を東に位置させ、それに基づいて數く。そのようにするわけは、五星は隠れひそみ、あちこち動きまわつて一定せず、北斗星の並び方がいつも一定しているようなわけではないからである。それでいつも五方の位置を固定するのであり、星の所在に應じて變えることはできないのである。（これは、五星圖の數き方についてたずねたのに答えたものである。經文中にはずばりとした奥儀<sup>⑨</sup>を缺いているので、たずねるのがよいのである）

（上景、中景、下景）三景のそれぞれ八神、あわせて二十四神<sup>⑩</sup>を順をおつて思念する。一時に三八二十四神すべてを一氣に存思してもよいし、平旦に上景の神を存思し、日中に中景の神を存思し、夜半<sup>⑪</sup>に下景の神を存思してもよい。人それぞれ思いどおりにやればよいのである。もし深山幽谷に侘び住まいして世間ときっぱり交渉を絶ち、心中に神の守る關所<sup>⑫</sup>を思念して眞を養い氣を取りこもうとする場合には、あるいは平旦に三八景二十四神を一氣に存思し、そのうえ（日中と夜半の）二時にそれぞれ繰り返し一景（の八神）を存思するのがよい。その效能はきつとすばらしいであらう。ただ俗世間にはごたごたが多く、こんな煩雜なことは絶えず決まつて行ふの

は難しい。何事も絶えず決まってやれぬなら、效能は薄いというものだ。昔、西城王君王方平や桐柏上眞王子喬はすべてこの道術に基づいてやったのである。『苞玄玉錄白簡青經』につきのように言う。「二十四神を存思せず、三八景の名と字とを知らぬ者は、太平の民となることはできぬし、後聖の臣となることもできぬ」。これは『二十四神經』に(名と字の)存思を實修するとある意味についてたずねたのに答えたものであつて、やはり祕密の奥儀である。右のこれら四條の奥儀のことは、今日、許長史が書寫したテキストが存在する。楊羲がいかなる眞人にたずねたのに基づいているのかは分からない。もし東卿司命君でなければ、紫微夫人か南眞であらう。

(1) 協昌期 『眞誥』卷一九葉一表の「眞誥敍錄」に「眞誥協昌期第三」とあり、「此卷竝修行條領、服御節度、以會用爲宜、隨事顯法」と解説している。

(2) 經曰：『洞眞上清太微帝君步天綱飛地紀金簡玉字上經』「行事時、皆向北執書而爲之也、亦可按文視星、不必闇誦而作也」。

(3) 眞妙 『眞誥』卷一六葉一二裏「不復承受三官之號令矣」、注「微微小業便可與之比肩、況乃眞妙者乎」。

(4) 玄斗之指建 『太上飛行九晨玉經』「龍飛尺素之訣、隱諱口口之中、列帛華晨之下、羊膺禮天以招眞、則玄光曲照于盟場、九

晨下降於靈宇、夫人懽悅於寢席、玄斗記名於隱書、有知此道存之、便足以免大劫之會、度洪災於甲申也」。同「九晨玄圖金簡文曰、修飛步九晨之道、亦當依步天綱之日、兼而行之、益求飛天之速、玄斗屢鑒也」。『漢書』律曆志「衡權者、其在天也、佐助旋機、斟酌建指、以齊七政、故曰玉衡」。

(5) 五星 『說苑』辯物「所謂五星者、一曰歲星、二曰熒惑、三曰鎮星、四曰太白、五曰辰星」。

(6) 五星星夫人名字 『太上飛步五星經』葉二表裏二裏にかけて名字を擧げる。

(7) 治生 『上清黃庭內景經』治生章第二十三「雲笈七籤」卷一「治生之道了不煩、但修洞玄與玉篇」。

(8) 經圖 『漢武帝內傳』(『太平廣記』卷三)「其後帝以王母所授五眞圖靈光經、及諸經圖、皆奉以黃金之箱、封以白玉之函、以珊瑚爲軸、紫錦爲囊、安著柏梁臺上」。

(9) 旨訣 『五嶽眞形神仙圖記』(『雲笈七籤』卷七九)「是以三五傳用至今、但後人善少、得之偏頗、或時遇值、旨訣不明」。

(10) 三八景二十四神 『太微帝君二十四神回元經』を参照。

(11) 平旦、日中、夜半 『左傳』昭公五年「日之數十、故有十時、亦當十位、自王已下、其二爲公、其三爲卿」、杜注「日中當王、食時當公、平旦爲卿、鷄鳴爲士、夜半爲早、人定爲興、黃昏爲隸、日入爲僚、晡時爲僕、日昃爲臺、隅中日出、闕不在第、尊



王公、曠其位」。

(12) 神關 『洞真上清神州七變七轉舞天經』「黃庭玉景、調理五藏、通暢神關、誦之萬遍、亦得飛騰」。『真誥』卷一七葉一表「蕭叔華門、研神保形、和魂夷炁、守養神關者、豈可以與夫坐華屋擊鍾鼓饗五鼎艷綺紈者同日而論之哉」。

(13) 太平民 『洞真太上說智慧消魔真經』卷五變化品「智慧上士習此三術、…代見太平之君、名人爲種民之錄」。

(14) 修存 『登真隱訣』卷上「修之者神仙、不修者以壽死矣」、注「若所得之法常能修存、則諸空宮之中亦隨事受神、非但丹田中一帝君也」。

太上真人撰所施行祕要〈長史寫本有題如此、此猶是衆眞授說經中所可修用還童反白諸要事、令長史施行之耳、非成事一卷經也〉

① 太素丹景經曰、「一面之上、常欲得兩手摩拭之使熱、高下隨形、皆使極匝、令人面有光澤、皺班不生、行之五年、色如少女、所謂山川通氣、常盈不沒、

先當摩切兩掌令熱、然後以拭兩目、畢又順手摩髮、(二而)〈謂應作如字〉理櫛之狀、兩臂亦更互以手摩之、使髮不白、脈不浮外」。

右一條出丹景經中卷。〈此經未出世、是下眞品目〉

② 大洞眞經精景案摩篇曰、「臥起、當平炁正坐、先叉兩手、乃度以掩項後、因仰面視上舉項、使項與兩手爭、爲之三四止、使人精和血通、風氣不入、能久行之、不死不病、畢又屈動身體、申手四極、反張側掣、宣搖百關、爲之各三、此當口訣〈此運動應有次第法用、故須口訣、益亦能經鳥伸之術也〉、

③ 臥起、先以手巾若厚帛拭項中四面及耳後、使圓匝熱溫溫然也、順髮摩項、若理櫛之、無數也、良久、摩兩手以治面目、久行之、使人目明、而邪氣不干、形體不垢(礙)〈此應作膩字〉生穢也、都畢、乃咽液二十過、以導內液」。

右一條出大洞精景經上卷。〈亦未出世、非三品目〉

④ 消魔上靈經曰、「若體中不寧、當反舌塞喉、漱漏咽液、亦無數、須臾、不寧之病自即除也、當時亦當覺體中寬軟也」。

右一條出消魔上靈經中。〈亦未出世、非三品目、應是智惠七卷中事〉

右前三條不顯誰之所授。

(1) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞官要玉訣』(ベリオ二

五七六號)、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品、孫思邈「攝養枕中方」(『靈寢七籤』卷三三)などに見える。

(2) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品、孫思邈「攝養枕中方」などに見える。

(3) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品、孫思邈「攝養枕中方」などに見える。

(4) この段、『西王母寶神起居經』、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品などに見える。

太上眞人撰の實踐すべき秘密の要諦(許長史書寫のテキストにはこのような題がある。これはやはりさまざまの眞人たちが經典中の實修して用いるのがよい還童反白(童兒のような姿となり白髪をもとにもどす術)に關するいろいろな要諦の事柄を口授し、許長史に實踐させたのである。既存のまとまった一巻の經典ではない)

『太素丹景經』に言う。「顔面全體をいつも兩手でさすりこすつて熱くさせるのが望ましい。高いところ低いところ、すべて全體に満遍なくする。顔に光澤が生じ、皺やしみがでなくなり、五年間行

うならば、乙女のような色つやになるであらう。いわゆる山と川との間に氣が通い、絶えずみずみずしくしておたれないというものである。

まず兩方の掌をさすりあわせて熱くさせ、そのうえで兩方の目をこする。それがすめば、さらに手の動くままに髪をさすり、髪に櫛をいれて調える(而へきつと「如」の字であらう)くする。兩腕もやはり更互に手でさする。髪の毛は白くならず、脈が外に浮くようなことがなくなるであらう。

右の一條は『丹景經』の中巻に出る。(この經典はまだこの世には出現していない。下眞のランクのもの)

『大洞眞經』精景按摩篇に言う。「起床の際、息を調えて正坐し、まず兩手を組んだうえで移動させて項の後を覆う。そこで顔をあお向け、上を見つめて項をもち挙げ、項を兩手にぐいぐい押しつける。これを十二回やって止める。精氣が調和し血行がよくなり、風の氣は侵入せず、久しく行うならば死ぬことも病氣になることもなくなるであらう。それがすめば、さらに體を屈伸させ、手を四方一杯に伸ばし、後にそり横に引っぱり、あらゆる關節を十分にぶらぶらさせる。これをそれぞれ三回やる。これには口傳の奥儀がなければならぬ(この運動にはきつと順序を踏んだやり方があるのであり、だから口傳の奥儀が必要なのだ。效能はやはり熊經鳥伸(熊がぶら下

がり鳥が足を伸ばすかたち」の術といったところである。

起床の際、まず手ぬぐいかもしくは厚手の絹布で項のあたり一面と耳の後をこすり、圓く満遍なくぼかぼかと暖かくなるようにさせる。髪の毛を撫でつけて項をさすり、髪に櫛を入れて調えるようにするが、決まった回数はない。しばらくしてから、両手をさすって顔の手入れをする。久しくこれを行なうならば、目がよく見えるようになって邪氣は侵さず、體が垢や「癰」へこれはきつと「膩」の字であろうで汚れることがなくなるであろう。すべてが終わったうえで唾を二十回呑みこみ、それによって體内の津液を導く。

右の一條は『大洞精景經』の上巻に出る。やはりまだこの世には出現していない。(上眞・中眞・下眞の)三つのランクのものではない。

『消魔上靈經』に言う。「もし體調が不快なら、舌をそらして喉を塞ぎ、じわじわと唾を呑みこむがよい。やはり決まった回数があるわけではない。たちまちにして不快の病は自然にとり除かれるであろう。ただちに體がゆったりとほぐれた氣分にもなるであろう」。

右の一條は『消魔上靈』敍に出る。やはりまだこの世には出現していない。三つのランクのものではない。きつと『智慧消魔經』七卷の中のことなのであろう。

右の前三條は誰が授けたものなのかを明らかにしない。

(1) 施行 『抱朴子』極言「或問曰、古者豈有無所施行而偶自長生者乎。」「眞誥」卷二〇葉二裏「陸既敷述眞文赤書人鳥五符等、教授施行已廣」。

(2) 修用 『周氏冥通記』卷三「蒙賜玄眞經、即應修用。」「眞誥」卷一九葉一〇表「據於宅治寫修用」。

(3) 還童反白 『雲笈七籤』卷六〇幼眞先生服內元氣訣法飲食調護訣「有服氣一年通氣、∴日服千嚥、不足爲多、返老還童、漸從此矣。」「眞誥」卷三葉六表「交袂雲林字、浩軫還童嬰」。『太上靈寶五符序』卷中「眞人長生去三戸延年反白之法」。

(4) 成事 『論語』八佾「成事不説、遂事不諫、既往不咎」。

(5) 摩拭 『雲笈七籤』卷六四王屋眞人口授陰丹祕訣靈篇「且宜摩拭手足、揔擽筋節、既自當精炁流布、散入肌膚、百關通利、其在茲乎」。

(6) 面有光澤 『後漢書』列傳七二下方術王眞傳「王眞年且百歲、視之面有光澤、似未五十者」。

(7) 色如少女 『太上靈寶五符序』卷上「華子期者、∴忽遇角里先生、乃授之仙隱靈寶方、∴案合服之、日更少壯、色如少女」。

(8) 山川通氣 『周易』說卦傳「天地定位、山澤通氣、雷風相薄、

- 水火不相射」。
- (9) 摩切兩掌令熱 『雲笈七籤』卷五一玉珮金璫「摩兩掌令熱、拭額二七過、…」。
- (10) 脈不浮外 『黃帝內經素問』陰陽應象大論「按尺寸觀浮沈滑濇、而知病所生以治」、注「浮沈滑濇、皆脈象也、浮脈者、浮於手下也…」。
- (11) 此經未出世 『真誥』卷一九葉九裏「伏尋上清真經出世之源、…」。
- 甄鸞『笑道論』道經未出言出三十一(『廣弘明集』卷九)「案玄都道士所上經目、取宋人陸修靜所撰者、且云、上清經一百八十六卷、一百一十七卷已行、始清已下四十部六十九卷未行於世、檢今經目、竝云見在、乃至洞玄經一十五卷、猶隱天宮、今檢其目、竝注見在」。
- (12) 下真品目 『上清太上八素真經』「夫上真之道有七、太上之道有三、中真之道有六、下真之道有八、上真之道、列篇目于左、…」。
- (13) 臥起 『抱朴子』極言「是以善攝生者、臥起有四時之早晚、與居有至和之常制」。
- (14) 平炆正坐 『登真隱訣』卷中「當平氣正坐」、注「定氣令呼吸徐微也」。
- (15) 風氣 『史記』卷一〇五倉公傳「所以知齊王太后病者、臣意診其脈、切其太陰之口、溼然風氣也」。『真誥』卷九葉四裏「風氣惡疫、伏匿四方」。
- (16) 申手四極 『登真隱訣』卷中「申手四極」、注「仰舉兩手於頭上極力散向兩邊、從前乃復俱向後、仍反張也」。
- (17) 反張側掣 『登真隱訣』卷中「反張側掣」、注「當先偃腰反張、仍又合手隨身、縱口左右、側掣掉之」。
- (18) 宣搖百關 『登真隱訣』卷中「宣搖百關」、注「當後行動、振奮體脚、手臂膝脛皆令通市」。
- (19) 口訣 『抱朴子』明本「金簡玉札、神仙之經、至言之要、又多不書、登壇歆血、乃傳口訣」。『真誥』卷九葉一八裏「明堂玄真自有經、經亦少耳、大都口訣、正如此而行之」。
- (20) 運動 『太清中黃真經』九仙真炁章第十「由子運動呼吸生」。同「神炁若足、呼吸運動、興雲起霧、自然得隱化、無滯無碍也」。
- (21) 熊經鳥伸 『莊子』刻意「吹呬呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣、此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也」。
- (22) 垢膩 『淨住子淨行法門』善友勸獎門(『廣弘明集』卷二七下)「若有衣裳服翫、鮮華充備、又有尺布不全、垢膩臭雜」。
- (23) 咽液 『上清黃庭內景經』至道章第七(『雲笈七籤』卷一一)「舌神通命字止倫」、注「咽液以舌、性命得通、正其五味、各有倫理」。
- (24) 三品 『無上祕要』卷四二修學品「凡學當從下上、案次而修、不得越略虧天科條、經有三品、道有三真、三皇內文天文大字九天之錄黃白之道、亦得控轡玄霄、遊涉五嶽、故爲下品之第」。

『眞誥』卷一二葉三裏注「凡此諸人、術解甚多、而仙弟猶下者、竝是不聞三品高業故也」。

(25) 漱漏 『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』卷下「漱漏玉池、津液自生」。

(26) 智惠七卷 『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷一眞藥玄英高靈品「智慧經一名太素洞經、或名素慧傳、凡有七卷、藏於玉清之闕高上虛皇丹房之裏矣」。

消魔經上篇曰、「耳欲得數按抑其左右、亦令無數、令人聰徹、所謂營治城郭、名書皇籍」。

又曰、「鼻亦欲得按其左右、唯令數、令人炁平、所謂灌溉中嶽、名書帝錄」。

右此二條法、方丈臺昭靈李夫人出用。(此云消魔上篇、亦應同是前限)

(1) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』(ペリオ二五七六號)、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品

などに見える。

『消魔經』上篇に言う。「耳はその左右を何度もおさえるのが望ましい。やはり決まった回数があるわけではない。耳がすかすかとよく聞こえるようになるであろう。いわゆる城郭を修治してその名が上皇の名簿に記されるといふものだ」。

また言う。「鼻もその左右をおさえるのが望ましい。ただ頻繁にやる。息が調うであろう。いわゆる中嶽に水を注いでその名が天帝の祕文に記されるといふものだ」。

右のこの二條の方法は、方丈臺の昭靈李夫人が出だして用いているもの。(ここに『消魔(經)』上篇といっているのも、やはり同じく前條の範圍内のものであろう)

(1) 皇籍 『雲笈七籤』卷三〇・九眞中經天上飛文「祝曰、自元太

君、來坐肺中、身披龍衣、黃晨華冠、左把皇籍、右執靈篇」。

(2) 灌溉中嶽 『上清黃庭內景經』肺部章第九(『雲笈七籤』卷一「外應中嶽鼻齊位」、注「中嶽者鼻也、又爲臍也」。同天中章

第六「天中之嶽精謹修」、注「天中之嶽謂鼻也、一名天臺、消魔經云、鼻欲數按其左右、令人氣平、所謂澆灌中嶽、名書帝錄」。

- (3) 名書帝錄 『上清黃庭內景經』上觀章第十六(『雲笈七籤』卷一一)「三魂自寧帝書命」、注「眞道既成、名書帝錄」。

① 太上錄淳發華經上案摩法、常以生氣時、咽液二七過、畢、按體所痛處、向王而祝曰、「左玄右玄、三神合眞、左黃右黃、六華相當、風氣惡疫、伏匿四方、玉液流澤、上下宣通、內遣水火、外辟不祥、長生飛仙、身常體強」、畢又咽液二七過、常如此則無疾、又當急按所痛處二十一過。

右一條滄浪雲林宮右英王夫人所出。②「錄」淳經亦未出世、非三品目。

- (1) この段、『西王母寶神起居經』、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品、『上清三眞旨要玉訣』(ベリオ二五七六號)、『擬眞迹』(ベリオ二七三三號)、『雲笈七籤』卷三三導引などに見える。

- (2) 愈本が「錄」を「錄」に作るのに従う。

『太上錄淳發華經』上の案摩法。常に生氣の時に、唾を十四回吞みこみ、吞みこみ終わったら、體の痛むところを按摩し、王氣の方向に向かつて次の呪文を唱える。「左玄右玄、三神は眞を合し、左黃右黃、六華<sup>②</sup>はあい當たる。風濕の氣や惡疫は、四方に隠れひそみ、玉液は光澤を流し、上下は開通し、内には水火の難を追ひ拂い、外には不祥の禍いを退け、長生を得て飛仙となり、身體は常に強健となる」。唱え終わったら、さらに十四回唾を吞みこむ。いつもこのようにしていれば、病氣にかかることはない。また、急場の際には痛むところを二十一回按摩する。

右の一條は滄浪雲林宮の右英王夫人の出されたもの。『錄淳經』もまだこの世には出現していない。三品のランクのものではない。

- (1) 向王 『孟子』公孫丑下「天時不如地利、地利不如人和」、趙注「天時謂時日支干五行王相孤虛之屬也」。『白虎通』五行「五行所以更王何、以其轉相生、故有終始也、木生火、火生土、土生金、金生水、水生木、是以木王火相土死金囚水休、王所勝者死、囚故王者休、木王火相何、以知爲臣、土所以死者、子爲父報讎者也」。『登眞隱訣』卷上「上元六符中元五符下元五符：朱書、平旦向王、日吞一符」。

- (2) 六華 『上清黃庭內景經』上有章第二(『雲笈七籤』卷一一)

「灌溉五華植靈根」、注「五華者、五方之英華、即氣也」。

<sup>①</sup>丹字紫書三五順行經曰、「坐常欲閉目內視、存見五藏腸胃、久行之、自得分明了了也」。〈此經中眞品目〉

<sup>②</sup>石景赤字經曰、「常能以手掩口鼻、臨目微炁、久許時手中生液、追以摩面目、常行之、使人體香」。〈此經非三品目〉

<sup>③</sup>紫度炎光內視中方曰、「常欲閉目而臥、安身微氣、使如臥狀、令傍人不覺也、乃內視遠聽四方、令我耳目注萬里之外、久行之、亦自見萬里之外事、精心爲之、乃見百萬里之外事也、又耳中亦恆聞金玉之音、絲竹之聲、此妙法也、四方者總其言耳、當先起一方、而內注視聽、初爲之、實無彷彿、久久誠自入妙」。〈此經下眞品目〉

<sup>④</sup>太上天關三經曰、「常欲以手按目近鼻之兩腎、閉炁爲之、炁通輒止、吐而復始、恆行之、眼能洞觀」。〈此經、下眞品目云太關三圖、疑關圖字〉

右四條玄師所敕用。〈玄師即南眞夫人、此四經竝未出世〉

(1) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』(ベリオ二五七六號)、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品、『雲笈七籤』卷三三導引などに見える。

(2) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品などに見える。

(3) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品などに見える。また『洞眞太上紫度炎光神元變經』葉三表、葉五裏がこの部分と内容的に對應する。

(4) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品、『雲笈七籤』卷三三導引などに見える。

『丹字紫書三五順行經』に言う。<sup>①</sup>「坐つて、常に目を閉じて内視し、五藏腸胃を存思觀想する。<sup>②</sup>これを久しく行つていると、自ずから(五藏腸胃の形が)はつきり明瞭に見られるようになる」。〈この經は中眞のランクのものである〉

『石景赤字經』に言う。「常に手で口と鼻とを覆い、わずかに目を

開けて呼吸を微かにする。久しくたつと、手のひらに液體を生ずるので、そこで顔面と目とをこする。常時これを行っていると、體に香氣を生じさせることができる。〈この經は三品のランクのものではない〉

『紫度炎光内視中方』に言う。「常に目を閉じて臥し、體を安靜にし呼吸を微かにして、睡眠時のような状態にするが、周りの人間には氣付かせないようにする。それから、内視して遙かに四方の音を聞き澄まし、おのれの耳目を萬里の外に傾注させる。久しくこれを行えば、やはり自ずから萬里の外が見えるようになる。一心にこれを行えば、百萬里の外のことも見えるようになる。また、耳の中ではいつも金玉や絲竹の音が聞こえるようになる。これはすぐれた方法である。四方というのは、まとめて表現したに過ぎない。當然、まず一方から始めて、視覺聽覺を内面に集中させるのである。始めた當初はまったく何のきざしもないが、長いことやっているとも、まこと自ずから靈妙な状態に入る。〈この經は下眞のランクのものである〉

『太上天關三經』に言う。「常に手で鼻に近い方の兩目尻を按摩する。呼吸を止めながらこれを行い、氣が通じたらいったん中止し、息を吐いてからまた始める。いつもこれを行っていると、目が何で

も見通せるようになる。〈この經は、下眞のリストでは「天關三圖」とある。恐らく「圖」の字を缺落したものであろう〉

右の四條は玄師が實修するように教えられたもの<sup>⑤</sup>。〈玄師とは南眞夫人のことである。この四經はいずれもまだこの世に出現していない〉

(1) 丹字紫書三五順行經 『紫陽真人内傳』「乃登陽洛山、遇幼陽君、受青要紫書三五順行」。

(2) 閉目内視 『太上黃庭外景經』上部經(『雲笈七籤』卷一二)「洗心自治無敗洩」、注「敬重天地、遠避嫌疑、閉目内視、思神往來、不與物雜、行不敗洩」。『莊子』列禦寇「賊莫大乎德有心而心有睫、及其有睫也而内視、内視而敗矣」。『紫陽真人内傳』「乃瞑目内視、良久、果見洞房之中有二大神、无英白元君也」。

(3) 存見 『無上祕要』卷九四昇太空品「瞑目握固、存見日中五色流霞皆來接一身、下至兩足、…右出洞眞靈書紫文」。

(4) 臨目 『雲笈七籤』卷四五祕要訣法臨目訣第十四「臨目、目欲閉而不閉、欲開而不開、令幽顯相關、存注審諦、今人入靖及呈章、可依此法」。

(5) 敕用 『登眞隱訣』卷中「右紫微王夫人所敕用」。



清靈真人說寶神經（長史寫本亦題如此、此指是前一事之目耳、其後竝衆真雜說、標題有前後之異、猶是真誥之例、今人皆別呼寶神經、寶神經豈得下教耶、此唯是一片鈔耳）

夫注心道眞、玄想靈人、冥冥者亦具監其意也、若外難未披、假詠兼存、實復未能迴西榆之年、還發玄童矣、苟耽玄篤也、志之慙也、縱令牙彫面皺、頂生素華者、我道能變之爲嬰、在須臾之間耳、但問志之何如爾、老少之學無所在也、吾往即其人也。（說此諸事、皆是令告長史也）

求道、要先令目清耳聰爲事主也、且耳目是尋眞之梯級、綜靈之門戶、得失繫之而立、存亡須之而辦也、今鈔徑相示、可施用也。（此謂寶神經中要徑之事、故云鈔徑）

道曰、<sup>①</sup>「常以手按兩眉後小穴中三九過、又以手心及指摩兩目權上、以手旋耳行三十過、摩唯令數、無時節也、畢輒以手逆乘額上三九過、從眉中始、上行入髮際中、口傍咽液、多少無數也、如此常行、目自清明、一年可夜書、亦可於人中密爲之、勿語其狀、

眉後小穴中爲上元六合之府、主化生眼暉、和瑩精光、長珠徹重、

保鍊目神、是真人坐起之上道、一名曰真人常居內經、真諺曰、『子欲夜書、當修常居』矣、真人所以能旁觀四達、使八霞朗朗者、寔常居之數明也、

目下權上是決明保室、歸嬰至道、以手旋耳行者、探明映之術也、旋於是理開血散、皺兆不生、目華玄照、和精神盈矣、夫人之將老、鮮不先始於耳目也、又老形之兆、亦發始於目際之左右也、以手乘額上、內存赤子、日月雙明、上元歡喜、三九始眉、數畢乃止、此謂手朝三元固腦堅髮之道也、頭四面以兩手乘之、順髮就結、唯令多也、於是頭血流散、風濕不凝、

都畢、以手按目四眚二九過、覺令見光分明、是檢眼神之道、久爲之、得見百靈（凡修行此道及卷中諸雜事、竝甚有節度、悉以別撰在登眞隱訣中、今不可備皆注釋）、

歎而行之、使手不離面乃佳、以成真人、猶不廢也、欲行此道、皆盟金爲誓、金之多少、在人盡誠而設耳、不徒爾苟行而已、眞官曰、『欲聞起居、金爲盟書』、謂非其人而不傳授也、此道出太上寶神經中、此經初不下傳於世也、當來爲眞人者、時有得者、反白之要、事盡於此。（盟信既定無科、謂受此宜用金銀二雙）

（1）この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』（ペリオ二五七六號）、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品、『靈寶七籤』卷三

三導引などに見える。

(2) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』などに見える。

(3) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品などに見える。

(4) この段、『上清三眞旨要玉訣』に見える。

清靈眞人が『寶神經』を説かれたもの<sup>①</sup>の許長史の寫本にもまたこのように題されている。これは、最初の記事の題目を示しているのである。その後の記事は、いずれも衆眞の雜説である。標題は(内容)前後で相違があるが、やはり眞人のお告げ文の例である。今人はみなとりたてて『寶神經』と呼んでいるが、『寶神經』がこの世の俗人に教示されようはずはない。これは、ただ一片の抜き書きに過ぎない。

そもそも心を道の眞理<sup>③</sup>に傾注し、思いを靈妙な眞人に深く寄せていけば、冥々の世界<sup>④</sup>にある者も、つぶさにその心意を見てとる。もし、世俗の困難を拂いのけもせずに、かりそめの詠嘆の氣持があわせて残っているならば、人生の日暮れがたの齡を轉回させて、髪の毛の童子の姿に立ちもどることなどまことではしない。いやしく

も、奥深い眞理にどつぷりと身を沈め、ひたむきに志しているならば、たとえ齒は抜け落ちて顔に皺が生じ、頭頂に白髪を生やした老人であっても、わが道術は須臾の間に嬰兒の姿に變えることができるのだ。ただ、志の如何を問題にするだけのこと。年若い學ぼうが若くして學ぼうが、そんなことには關わりはない。私はかつてはそういう人間だったのだ。(これらのことを説いたのは、すべて許長史に告げさせるためである)

仙道を求めるには、何よりもまず、目をはっきりとさせ耳を聴くさせることが肝心である。かつ、耳と目は眞仙を追求するための梯子であり、神靈を總べる門戸である。得失はこれに繋がって成り立ち、存亡はこれ wait 分かれるのだ。今、その近道を拔粹して示すので、實行するがよい。(これは『寶神經』中の肝心かなめの近道を言ったものである。故に「その近道を拔粹して」と言ったのである)

道が言われた。「常に手で兩眉の後ろの小穴の中を二十七回按摩し、また手のひらと指とで兩目と頬骨の上をこすり、手で耳たぶをくるりと撫でる動作を三十回行う。こする回数は多くするのが肝要で、いつ行かうか決まった節目はない。終わったら、手で額の上を二十七回逆撫でする。その際、眉の中間から始めて、次第に上って

髪が生え際に入る。口では同時に唾を呑みこむが、決まった回数はなく、何度も行ふ。このように常に行っていると、目が自然と澄みはつきりとしてきて、一年で夜中にものを書くことができるようになる。これは人中で密かに行つてもよいが、その様子を話してはならない。

眉の後ろの小穴の中は、上元六合の府であり、目の輝きを生み出し、澄んだ光を程よく輝かせ、瞳を育み澄ませ、目神を保養錬磨することをつかさどる。これは、眞人が常住坐臥に行うすぐれた道術で、一名『眞人常居内經』ともいう。眞人の諺に、『そなたが夜でも書きものができるようになりたいなら、『常居』を實修すべきです』とある。眞人があまねく四方の隅々まで觀察し、八色の霞をあかかか輝かせられるのは、まことに『常居』のことわりがはつきりしているからだ。

目の下、頬骨の上は、決明（眼神）の居室であり、嬰兒にもどる最上の道である。手で耳たぶをくると撫でるのは、すぐれた視力を得る道術である。くると撫でると、そこで腠理が開通して鬱血が散じ、皺が生ぜず、目華（瞳）が玄妙な光を放ち、精氣が調和されて神氣が充實する。そもそも人が老いよとする時は、耳と目から衰えが始まらない者はない。また、身體老化のきざしは、やはり目尻の左右から始まる。手で額の上を撫で上げ、内に赤子を存思すれば、日月がともに輝き、上元君が歡喜する。これを二十七回行う

が、眉から始める。規定の回数をこなしたら止める。これを手で三元君に朝謁し、腦を固くし頭髮を堅くする道術という。頭の四面は兩手で撫で上げ、頭髮に沿つてもどりのところまでやる。回数は多ければ多いほどよい。こうすると、頭の血が流通擴散し、風濕の氣が凝結しない。

すべて終わつたら、手で目の四隅を十八回按摩し、まざまざと光がはつきり見えるようにする。これは眼神を拘束する道術である。久しくこれを行っていると、多數の神靈を見ることができるようになる（おおよそ、この道術および卷中のもろもろの雑多な事柄を實修するには、いずれも決まったやり方が澤山ある。それについては、すべて別に『登眞隱訣』の中に書いておいた。今そのすべてを細かに注釋することはできない）。

勤めてこれを行い、手を顔面から離さないようにするのがよい。眞人となつても、なお止めはしないのだ。この道術を行おうとする者は、みな黄金を誓いの品として用いる。黄金の多少はその人の眞心を盡くして用意できるだけを準備する。漫然といひ加減にしてはならない。眞官が『起居』を聞いたかつたら、黄金で誓書を作れ』と言ふのは、その資格のない者には傳授してはならないという意味だ。この道術は『太上寶神經』から出ている。この經はまったく世間には傳えられていない。將來眞人となるべき者の中に、時として手に入れる者があろう。若がえりの要點はこれに盡きる。』（誓約の

捧げ物に一定の決まりがない以上、これを授かるには黄金の輪を二對用いるべきである<sup>(23)</sup>」

(1) 清靈真人說寶神經 『眞誥』卷一葉六表「清靈真人說寶神經云云」、注「抄此修行事、出在第三卷中、不復兩載」。同卷一葉七表「又云、寶神經是裴清靈錦囊中書、侍者常所帶者也、裴昔從紫微夫人授此書也、吾亦有、俱如此、寫西宮中定本」。同卷一葉八表「又按起居寶神及明堂夢祝、述敘諸法十有餘條」。

(2) 下教 『登眞隱訣』卷下「正」真人三天法師張諱告南嶽夫人人口訣、注「此既是天師所掌任、夫人又下教之限、故使演出示世、以訓正一之官」。『眞誥』卷一九葉五表「南眞自是訓授之師、紫微則下教之匠、並不關儔結之例」。

(3) 道眞 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「上无復祖、唯道唯身」、薛幽棲注「眞文之質、即道眞之體爲文、故云唯道爲身也」。

(4) 冥眞 『登眞隱訣』卷中「明勸道之至、生不可失矣」、注「夫修道乃不患多、但使得其次序、不至亂雜耳、所謂非冥冥之無眞、行冥眞之無序矣」。

(5) 牙彫面皺 『太上除三尸九蟲保生經』「上尸彭琚小名阿呵、在頭上、拔人泥丸丹田、令人頭重、眼昏冷淚、鼻中清涕、耳聾齒落、口臭面皺」。『玄洲上卿蘇君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)

「三尸者一名青古、拔人眼、是故目暗面皺、口臭齒落、由是青古之氣穿鑿泥丸也」。

(6) 施用 『登眞隱訣』卷中「右前至此凡三十七事、竝朝拜攝養施用起居之道」。

(7) 手心 『眞誥』卷一〇葉八裏「鼻中隔之際、名曰山源、…進手心以掩鼻」。

(8) 夜書 『抱朴子』仙藥「桃膠以桑灰汁漬服之、百病愈、…昔道士梁須、年七十乃服之、轉更少、至年百四十歲、能夜書、行及奔馬」。『眞誥』卷一四葉七裏「霍山中有學道者鄧伯元王玄甫、受服青精石飯吞日丹景之法、用思洞房已來、積三十四年、乃內見五藏、冥中夜書」。

(9) 上元六合之府 『登眞隱訣』卷上「却入三寸爲丹田宮」、注「亦名泥丸宮、左有上元赤子帝君、右有帝卿、凡二神居之」。『上清黃庭內景經』上有章第二(『雲笈七籤』卷一一)「出日入月呼吸存」、注「九眞中經曰、夜半生氣、或鷄鳴時、正坐閉氣、存左目出日、右目出月、兩耳之上爲六合高臆、令日月使照一身…」。『上清太上九眞中經絳生神丹訣』「存日月之象在魂房六合、魂房六合在兩目外之上角、小仰高空之中、…直入一寸方九分、名曰魂房六合之府」。

(10) 目神 『太微帝君二十四神回元經』「目神名虛監生、字道童、形長三寸六分、衣五色」。『上清黃庭內景經』至道章第七(『雲

笈七籤』卷一一「眼神明上字英玄」。

- (11) 理開血散 『黃帝內經素問』舉痛論「寒氣客於腸胃之間、膜原之下、血不得散、小絡急引、故痛、按之則血氣散、故按之痛止、寒則腠理閉、氣不行、故氣收矣、暑則腠理開、榮衛通、汗大泄、故氣泄」。

- (12) 和精 『上清太上帝君九真中經』卷上「祝曰、桃君記符、太一七陳、和精寶血、理液固筋、使我上昇、得爲飛仙」。

- (13) 赤子 『上清大洞真經』第二十五章「八景照泥丸、朗然洞房中、嬰兒爲赤子、混離生玉容」。また、注(9)の『登真隱訣』を参照。

- (14) 朝三元 『上清黃庭內景經』膽部章第十四「雲笈七籤』卷一一「能存威明乘慶雲、役使萬神朝三元」。

- (15) 風濕不凝 『抱朴子』對俗「古之得仙者、寒溫風濕不能傷、鬼神衆精不能犯」。『真誥』卷九葉九表「櫛頭理髮、欲得多過、通流血氣、散風濕也」。

- (16) 按目四眚 『養生延命錄』導引按摩篇「平旦以兩手掌相摩令熱、熨眼三過、次又以指搔眼四眚、令人目明」。

- (17) 百靈 『元始無量度人上品妙經四注』卷一「亦是魔王內諱、百靈之隱名也、非世之常辭」。

- (18) 勤而行之 『老子』第四十一章「上士聞道、勤而行之、中士聞道、若存若亡、下士聞道、大笑之」。

- (19) 盟金爲誓 『太上九真明科』「玄都上品第一篇目、大洞真經雌一

寶經太上素靈大有妙經三奇之章高上玉皇寶篇祕在九天之上、案科傳授之法、皆對告齋百日、分金鈕爲盟、玄都上品第二篇曰、傳大洞真經三十九章於後學者、誓以上金十兩、纏鈕爲盟」。

- (20) 眞官 『紫陽真人內傳』「仇公見告云、術識盡此、不能使子白日升天、上爲眞官也」。『登真隱訣』卷上「其玄丹宮經亦眞官司命君之要言、四宮之領宗矣」。

- (21) 非其人而不傳授 『抱朴子』金丹「按黃帝九鼎神丹經曰、黃帝以傳玄子、戒之曰、此道至重、必以授賢、苟非其人、雖積玉如山、勿以此道告之也、受之者以金人金魚投於東流水中以爲約、啖血爲盟、無神仙之骨、亦不可得見此道也」。

- (22) 盟信 『無上祕要』卷三四法信品「受太上素靈大有玉篇九真明科、案科齋上金三兩、丹一兩、詣師以爲盟信、右出洞真四官內神寶名玉訣經」。『真誥』卷九葉一二表「傳行以青金爲誓、然後乃施行耳」、注「又用盟信、兼有青帛、令亦宜依准立格、乃得受傳耳、謂青可二十尺、金鑽二雙」。

- (23) 受此宜用金鑽二雙 『無上祕要』卷三四法信品「凡受玄丘大真書隱文者、金環以爲誓心不洩之約、右出洞真曲素訣辭經」。同「凡受大洞真經三十九章、當啓鑽割繩、乃得傳之、節度如左、紫金爲環、環徑一寸、截破一環、分爲兩半、經師及弟子當

各帶一半、終身佩之、青絲爲繩、繩長九尺、各割半以纏繞縛此半環、又合帶之、青錦一尺八寸、各分半爲囊、以盛此金半環及青絲繩、分環各畢、弟子三拜受經、右出洞真大洞真經」。

紫微夫人喻書如左。〈紫微是承裴君說寶神經畢、仍復更接論寶神事如此、則裴所說亦同此夕〉

夜臥覺、常更叩齒九通、咽液九過、畢、以手按鼻之邊左右上下數十過、微呪曰、「太上四明、九門發精、耳目玄徹、通眞達靈、天中玄臺、流炁調平、驕女雲儀、眼童英明、華聰晃朗、百度眇清、保和上元、徘徊九城、五藏植根、耳目自生、天臺鬱素、柱梁不傾、七魄澡鍊、三魂安寧、赤子攜景、輒與我并、有敢掩我耳目、太上當摧以流鈴、萬凶消滅、所願必成、日月守門、心藏五星、眞皇所祝、羣響敬聽」。

臥覺、輒按祝如此、勿失一臥也、眞道雖成如我輩、故常行之也、但不復臥、自坐爲之耳、此太上寶神經中祝辭上道也、令人耳目聰明、強識豁朗、鼻中調平、不垂津液、四響八徹、面有童顏、制魂錄魄、却辟千魔、七孔分流、色如素華、眞人起居之妙道也、所以名起居者、常行之故也、畢又咽液九過、摩拭面目令少熱以爲常、每欲數也、

興寧三年歲在乙丑、六月二十三日夜、喻書此、其夕先共道諸人多有耳目不聰明者、欲啓乞此法、即夜有降者、即仍見喻也。〈此楊君自

記也、長史年出六十、耳目欲損、故故〔有〕諮請、楊不欲指斥、託云諸人耳」

又告云、「道士耳重者、行黃赤炁失節度也、不可不慎」。〈此蓋指戒長史也〉

右一條清靈言。

櫛頭理髮、欲得多過、通流血氣、散風濕也、數易櫛、更番用之也、亦可不須解髮也。

右一條紫微夫人言。

太極綠經曰、「理髮欲向王地、既櫛髮之始而微祝曰、『泥丸玄華、保精長存、左爲隱月、右爲日根、六合清鍊、百神受恩』、祝畢、咽液三過、能常行之、髮不落而日生、常數易櫛、櫛之取多而不使痛、亦可令侍者櫛取多也、於是血液不滯、髮根常堅」。

右一條安九華所告令施用。〈此二條皆駐白止落之事、亦是令答示長史也〉

紫微夫人喻曰、「披華蓋之側、延和天真、入山澗之谷、填天山之源、則虛靈可見、萬鬼滅身、所謂仰和天真、俯按山源也。〈華蓋一名華庭也〉、

天眞是兩眉之間、眉之角也、山源是鼻下人中之本、側在鼻下小入谷中也、華庭在兩眉之下、是徹視之津梁、天眞是引靈之上房、旦中暮恆咽液三九過、急以手三九陰按之以爲常、令致靈徹視杜遏萬邪之道也、一日三過行耳」《紫微夫人言、人有卒病垂死者、世中凡醫唯知針人中、不知針山源谷中、此太謬也》《本注、從此注起、是楊接長史書也》、

按而祝曰、「開通天庭、使我長生、徹視萬里、魂魄返嬰、滅鬼却魔、來致千靈、上升太上、與日合井、得補真人、列象玄名」、

楚莊公時《此即春秋時楚莊王也》、市長宋來子恆洒掃一市、久時有一乞食公入市、經日乞、恆歌曰、「天庭發雙華、山源彰陰邪、清晨按天馬、來詣太眞家、真人無那隱、又以滅百魔」、恆歌此乞食、一市人無解歌者、獨來子忽悟、疑是仙人、然故未解其歌耳、乃遂師此乞食公、棄官追逐、積十三年、此公遂授以中仙之道、來子今在中嶽、乞食公者、西嶽真人馮延壽也、周宣王時史官也、手爲天馬、鼻下爲山源。六月二十七日夜、喻書此。《楊接書訖此》

(1) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』(ペリオ二五七六號)、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品と共通する表現が多い。

(2) この呪文、『雲笈七籤』卷四七祕要訣法修行呪詛訣に『太上寶

神經』の文として見える。

(3) これ以下、同文が卷一葉六表に見える。

(4) 俞本が「故」を「有」に作るのに従う。

(5) この段、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品に見える。

(6) この段、『上清三眞旨要玉訣』、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品に見える。

(7) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』に見える。

(8) この呪文、『雲笈七籤』卷四八按天庭法に見える。

(9) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』に見える。

紫微夫人のお諭しの書き付けは以下のごとくである。《紫微夫人は、裴君が『寶神經』について説き終わるのを受けて、ひき續き寶神のことを次のように論じた。とすれば、裴君が『寶神經』について説いたのも、同じくこの夜のことであった》

夜、寢ていて目が覺めた時には、必ずもう一度、九回叩齒し、唾を九度呑みこみ、そのうえで、手で鼻のまわり、左右上下を數十回按摩し、小聲で次の呪文を唱える。《太上はよもを照らし、九つの門から精氣が發散される。耳目は奥深い領域まで貫き、眞なる存在、靈なる存在にまで通達する。天の中央に位置する玄妙なる臺は、氣

を流通させて調子が調い、嬌女と雪儀、眼童と英明、目と耳は輝かしくほがらかに、百度は遙かに澄みきっている。上元を保持して調和させ、九つの城をへ巡る。五臓はしっかりと根を下ろし、耳目はそれぞれに生命力を保っている。天中の臺は白くこんもりとそびえ、その柱や梁は傾くことがない。七魄は洗われ精鍊されて、三魂は安寧である。赤子は景と連れ立って、いつも私とともにある。私の耳目を曇らせようなどとする者があれば、太上が流金の鈴でもって打ち砕くであらう。すべての凶事は消滅し、願いごとは必ず達成される。日と月とが門を守り、心には五つの惑星を藏しているのだ。(これは)眞皇の呪する呪文だ。もろもろの雑音を立てる者どもよ、つつしんで聴け。

寝ていて目が覺めた時には、いつもこのように按摩をし呪文を唱えて、一度たりとも缺かすことがあつてはなりません。眞の道が完成し、われわれのような存在になつても、あい變わらず常にこれを實行しています。ただ(神仙になると)もう横になることがなくなるので、坐ったままこれを行うのです。これが『太上寶神經』中に見える祝辭となくとについてのすぐれたやり方です。人の耳や目をよくきくようにし、記憶力を増して頭腦明晰に、鼻の調子が調つて、鼻水を垂らすこともなく、四方八方に響きわたつて、顔色は子供のようになり、自らの魂魄をしっかりと制御し繋ぎ留めて、千の魔物を追い拂い、七つの孔のそれぞれに氣が流通して、白い花のような肌の

色となる。眞人起居のすぐれたやり方なのです。「起居」と名付けられているのは、常々これを行うからなのです。終われば、さらに唾を呑みこむこと九度、顔面を摩擦して、いささかほてりぎみになるまで拭うのを常とする。なるべく數多くやるのが望ましい。

興寧三年、乙丑の歲(三六五)の六月二十三日の夜、諭してこれを書かせられた。この夕、これに先立って、人々の中には耳がよく聞こえず目がよく見えない者が多いので、申し上げてそのための方法を教えていただくことと話してあったところ、早速その夜、降臨される方があつて、その場で諭されたのである。(これは楊君が自ら記録したものである。許長史は六十歳を過ぎて耳と目が衰え始めていたので、問い求めたのである。楊君は(許長史の名を)名指しにしたくなかつたので、假に「人々」と言つたのである)

また、お告げがあつた。「道士でありながら耳がよくきかない者は、黃赤の氣の術を行つて、そのきまりを間違つているのである。用心しなくてよいものだろうか」。これは思うに直接に許長史を戒めたものであらう

右の一條は清靈眞人のお言葉。

櫛を入れて髪をとかすことは、多すぎるぐらいなのがよろしい。血氣を流通させ、風濕を發散させることができます。何度も櫛を取



り替えて、代わる代わる用いるのです。必ずしも結つてある髪を解かなくともよろしい。

右の一條は、紫微夫人のお言葉。

『太極綠經』に言う。「髪を整えるときには、王氣の方角を向くのが望ましい。髪を櫛けずり始める時、小聲で次の呪文を唱える。『泥丸には玄い華が咲き、精氣を保持して長生を得る。左は隱月であり、右は日根である。六合は清らかに精鍊され、もろもろの神たちはそのおかげを蒙っている』。呪文が終われば、三度唾を呑みこむ。いつもこれを行うことができれば、髪は抜け落ちることなく、かえつて日ごとに生えてくる。

いつもしばしば櫛を取り替える。櫛けずる回数なるべく多く、しかし痛くはならぬ程度にする。侍者に櫛けずらせて回数をかせいでも差し支えない。このようにすれば、血液は滞らず、毛根はいつもしっかりしている」。

右の一條は、安九華（九華安妃）が告げ知らせて、實行するようになされたもの。〈以上の二條は、いずれも髪が白くなり抜け落ちるのを防ぐことについて。これらもまた許長史に答えて示したもの〉

紫微夫人が諭して言われた。「華蓋の傍を開き、天真を招いて調和させ、山中の谷間に入って、天山の源を塞げば、天上の神靈を目に

見ることができ、すべての鬼がその姿を隠す。これが、上方では天真を調和させ、下つては山源をおさえると言われるものです（華蓋は華庭ともいう）。

天真とは、兩眉の間の、眉のかどつこのことです。山源とは、鼻の下、人中の本のところ、鼻の下に位置して、いささか谷中に入ったところです。華庭は、兩眉の下にあって、すべてを見通せるようになるための渡し場です。天真は、神靈を招きよせるための上等の部屋です。朝と日中と暮れ方とに、いつも唾を二十七回呑みこむと、急いで手でこれらの箇所を二十七回密かに按摩すること常怠らず行う。神靈を招きよせ、すべてが見通せ、もろもろの邪惡なものを防ぎとめる方途なのです。一日に三度行えばよろしい」

《紫微夫人のお言葉。急病にかかり死にかかっている人がいる時、世間のぼんくらな醫者たちは、人中に鍼を打つことだけは知っていても、山源、谷中に鍼を打つことは知らない。これは大いなる誤りである》〈これは元來の注。この注以後の部分は、楊羲が許長史の書後に書き繼いだものである〉。

（これを行うときには）按摩をしつつ、次の呪文を唱える。「天庭を開通して、我に長生を得さしめ、萬里のかなたを徹視して、魂魄は嬰兒に返り、鬼を滅ぼし魔を退けて、もろもろの神靈を招きよせ、太上のもとに昇つて、太陽と一つになり、眞人の位に補任され、天上に神仙としてのわが名が書き連ねられんことを」。

楚の莊公の時代のこと（これは、春秋時代の楚の莊王のことである）、市場の長であった宋來子は、いつも市場中を掃除していた。そうしたことを久しく續けていたところ、一人の乞食おやじが市場に入ってきて、何日も物乞いを續け、いつもこう歌うのであった。「天庭に二つの華が開き、山源は隠れた邪惡なものを明らかにする。清らかな朝に天馬の手綱を執り、太眞の家にやって来て目通りをする。眞人は姿を隠そうにもそのすがなく、また一方、これによつてもろろの魔を滅ぼすのだ」。いつもこの歌をうたいながら乞食をしていた。市場の人々は誰一人としてこの歌の意味が分からなかった。ただ宋來子だけは、ふと氣がついて、仙人ではないかと疑つたが、しかしあい變わず、その歌の意味は分からなかった。そこで、そのままこの乞食おやじを師として、官を捨ててそのあとを追いかけた。十三年がたったところで、このおやじが中仙の道<sup>②</sup>を授けてくれた。宋來子は、今は中嶽にいる。この乞食おやじは、西嶽眞人の馮延壽<sup>③</sup>である。周の宣王の時代の史官であつた。手を天馬となし、鼻の下を山源となす。

六月二十七日の夜、諭してこれを書かせられた。（楊羲が續けて書いた部分は、ここで終わる）

(1) 夜臥覺……『眞誥』卷一〇葉一五表「夜臥覺、存日象在疾手中、

握之使日光赤芒從臂中逆至肘腋間」。同卷一〇葉一二表「若每遇此夢者、臥覺、當正向上三琢齒而祝之曰、…」。

(2) 叩齒 『眞誥』卷一〇葉二三表「凡上清叩齒咽液法、皆各有方、先後有次、不得亂雜、使眞靈混錯也、夫叩齒以命神、咽炁以和眞、納和因六液以運入、制神須鳴鼓而行列矣」。

(3) 微呪 『眞誥』卷九葉一七表「臥覺、當摩目二七、叩齒二七遍、而微呪曰、…」。

(4) 九門 『眞誥』卷九葉一一裏「陰祝曰、…保利雙闕、啓徹九門、百節應響、朝液泥丸」。『登眞隱訣』卷上「微祝曰、紫戶青房、有三大神、…使我思感、通達靈關、出入利貞、上登九門、即見九眞、太上之尊」。

(5) 天中玄臺 『上清黃庭內景經』天中章第六（『雲笈七籤』卷一）「天中之嶽精謹修」、注「天中之嶽謂鼻也、一名天臺」。

(6) 嬌女雲儀 『上清黃庭內景經』若得章第十九（『雲笈七籤』卷一一）「雲儀玉華俠耳門」、注「雲儀玉華、鬢髮之號、言耳居其間」。『雲笈七籤』卷五〇・三一九宮法「於是赤子帝君乃命兩耳神嬌女雲儀、使引進之、故人覺耳鳴者、外使入也、雲儀時扣磬鐘、以聞九宮、使知外人來入、令警備也、磬鐘者是今耳鳴之聲音也」。

(7) 眼童英明 『眞誥』卷九葉一一裏「陰祝曰、眼童三雲、兩目眞君、英明注精、開通清神」。『上清黃庭內景經』膽部章第十四

- 『雲笈七籤』卷一一「主諸氣力攝虎兵、外應童童鼻柱間」。
- (8) 日月 『上清黃庭內景經』至道章第七(『雲笈七籤』卷一一)「眼神明上字玄英」、注「目喻日月」。
- (9) 眞皇 『雲笈七籤』卷八釋三十九章經第十九章「中央黃老君、三元之眞皇也」。
- (10) 制魂錄魄 『眞誥』卷一〇葉二一表「此名爲帝君鍊形拘魂制魄之道、使人精明神仙、長生不死」、『抱朴子』至理「逍遙成己、燕和飲平、拘魂制魄、骨填體輕」。同論仙「魂魄分去則人病、盡去則人死、故分去則術家有拘錄之法、盡去則禮典有招呼之義」。
- (11) 七孔 『列子』仲尼「雖在八荒之外、近在眉睫之內、來于我者、我必知之、乃不知是我七孔四支之所覺、心腹六藏之所知」、『黃庭玉經註』(『修身十書』卷六〇)「七孔已通不知老」、注「頭面七孔精神門」。
- (12) 保精 『雲笈七籤』卷三三攝養枕中方·行氣「凡欲求仙、大法有三、保精引氣服餌、凡此三事亦階淺至深、不遇至人、不涉勤苦、亦不可卒知也、然保精之術、列敘百數、服餌之方、略有千種」。
- (13) 髮根 『太上黃庭外景經』中部經第二(『雲笈七籤』卷一一)「選以還丹與玄泉」、注「上昇泥丸、鍊治髮根」。
- (14) 披華蓋之側 『眞誥』卷二葉五表「紫微夫人喻曰、披華蓋之側云云」、注「此事出在第三卷中」、『登眞隱訣』卷上「守一眞人須洞房爲華蓋」、注「光儀覆廡、以成其通」、『上清黃庭內景經』天中章第六(『雲笈七籤』卷一一)「眉號華蓋覆明珠、九幽日月洞空無」。
- (15) 虛靈 『上清黃庭內景經』務成子注敘(『雲笈七籤』卷一一)「又當先求感應、推訊虛靈者、乃佳也」。
- (16) 萬鬼滅身 『登眞隱訣』卷上「因三呼三君名字、叩齒九通、則千妖伏息、萬鬼滅形也」。
- (17) 山源是鼻下人中之本 『眞誥』卷一〇葉八裏「以左手第二第三指躍兩鼻孔下人中之本、鼻中隔孔之內際也、鼻中隔之際、名曰山源、山源者一名鬼井、一名神池、一名邪根、一名魂臺也」。
- (18) 杜遏萬邪之道 『眞誥』卷一〇葉九裏「不眞者所以生邪氣、爲眞者所以遏萬邪」。
- (19) 天庭 『登眞隱訣』卷上「凡頭有九宮、又有天庭宮、上清眞女居之」。
- (20) 玄名 『無上祕要』卷二·三界宮府品「方諸青宮、右上相青童君治於其內、宮中北殿上有玉架、架上有學仙簿錄及玄名年月日深淺、金簡玉札有十萬篇、領仙玉郎典之、右出洞眞經及道迹眞迹經」。
- (21) 天馬 『眞誥』卷九葉一一表「手爲天馬」、『雲笈七籤』卷八四尸解次第事迹法度「忽見太一以天馬來迎於寢臥之前、於是上馬顧見、所抱劍已變成我之死尸在彼中也、天馬者古光騰黃之

獸也」。

(22) 中仙 『紫陽真人傳』「遊行五嶽、或造太清、役使鬼神、中仙也、或受封一山、總領鬼神、或遊翔小有、羣集清虛之宮、中仙之次也」。

(23) 西嶽真人馮延壽 『眞靈位業圖』第四右位「西嶽真人馮延壽」。  
『眞誥』卷一〇葉一八表「上清真人馮延壽口訣」、注「前云是楚市乞人西嶽真人馮延壽、西嶽之號、自不妨上清之目也」。

雲林王夫人曰、「仙眞之道、以耳目爲主、淫色則目闇、廣憂則耳閉、此二病從中來而外奔也、非復有他矣、今令人聰明益易耳、但不爲之者、行之難、欲得上通徹映、旁觀鬼神、當洗心絕念、放棄流淫、所謂嚴其始矣、」

夜臥、先急閉目、東向、以手大指後掌、各左右按拭目就耳門、使兩掌俱交會於項中三九過、存目中當有紫青絳三色氣出目前、此是內按三素雲、以灌合童子也、陰祝曰、『眼童三雲、兩目眞君、英明注精、開通清神、太玄雲儀、靈驕翩翩、保利雙闕、啓徹九門、百節應響、朝液泥丸、身升玉宮、列爲上眞』、凡四十八字、祝畢、咽液五十過、畢乃開目以爲常、坐起可行之、不必夜也、要以生炁時、一年許、耳目便精明、久爲之、徹視千里、羅映神靈、聽於絕響者也、此亦眞仙之高道、不但明目開耳而已、

夫欲學道者、皆當不欲令人知見所聞、每事盡爾、太上宮中歌曰、『手把八雲氣、英明守二童、太眞握明鏡、鑒合日月鋒、雲儀拂高闕、開括泥丸宮、萬響入百關、驕女坐玄房、愈行愈鮮盛、英靈自爾通』、此歌正言耳目之經也、我滄浪方丈仙人常寶而爲也、此道出太上四明玉經中、傳行以青金爲誓、然後乃施行耳」。(右此竝是右英夫人受令告長史也、又用盟信、兼有青帛、令亦宜依准立格、乃得受傳耳、謂青可二十尺、金銀二雙、此四明玉經、三品元目也)

(1) この段、『西王母寶神起居經』、『上清三眞旨要玉訣』(ペリオ二五七六號)、『登眞隱訣』卷中、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品、『雲笈七籤』卷五三・三素靈法などに見える。

雲林王夫人が言われた。「仙眞の道術では、耳と目が肝心です。過度に色欲にふけると目はくらみ、憂いが多すぎると耳は閉ざされます。これらの二つの病は、体内からやって来て外に奔ります。他に理由はないのです。今、人々の耳目を聰明にさせることはいともたやすいのです。ただそれをやらないのは、實行するのが難しいからです。仙界に上通してあらゆるものを照らし出し、鬼神をあまねく觀察したければ、心をきれいさっぱり洗って雑念を絶ちきり、みだ

らな氣持を放棄しなければなりません。いわゆるその始めを戒めるというものです。

夜寝る時には、まず急いで目を閉じ、東に向かい、手の親指の後の掌でもって、おのおの左右に按摩し目をこすって耳の穴につけ、兩方の掌を項のまん中で交會させること二十七回、目の中に紫・青・絳<sup>あか</sup>の三色の氣がありありと現れ目の前に出て來る狀態を存思する。これが體內に三素雲<sup>①</sup>をおさえて、童子に灌ぐというものです。密かに次の呪文を唱える。『眼童の三雲、兩目の眞君<sup>②</sup>。英明は精氣を注ぎ、清神を開通させる。太玄の雲儀、靈なる驕女はひらひらと身輕に、雙闕を保安し、九門を開き放つ。あらゆる關節は響きに應じ、泥丸に向かつて津液を會朝させ、體は玉宮に昇つて、上眞の列に加えられる』。すべて四十八字。呪文を唱え終わると、唾を呑みこむこと五十回。呑み終えたうえで目を開く。これを常とする。坐つてやつても起きてやつてもよく、必ずしも夜に限ることはないが、必ず生氣の時にする。一年ばかりすると、耳と目は精明となる。長期間行えば、千里の先を徹視し、神靈たちを残らず映し出し、聞きとれないような響きを聞くようになる。これも眞仙の高道であつて、單に目がよく見え耳がよく聞こえるだけではありません。

そもそも道術を學ぼうとする者は、誰しも聞いたことを人に知られたり見られたりしてはなりません。何事につけてそうなのです。太上宮中歌にこうあります。『手に八雲の氣をつかみ、英明は二童を

守る。太眞は明鏡を握り、日と月の光を照らし合す。雲儀は高い宮闕を拂いのけ、泥丸宮を開閉する。萬響があらゆる關節に入り、驕女は奥深い部屋に坐る。行うほどに鮮やかで清淨<sup>③</sup>となり、すぐれた靈氣が自然と通る』。

この歌は耳と目についての經典をずばりと言ひ當てています。われわれ滄浪山や方丈山の仙人たちは、いつも寶として實修しています。この道術は『太上四明玉經』から出たもので、世間に傳授し流行させるに際しては、青帛と黃金でもって誓約<sup>④</sup>し、そのうえで實行させるのです。『右のこれらはいずれも右英王夫人が授けて許長史に告げさせたものである。また誓約の捧げ物を用いるにあたり、(黃金のほかに)あわせて青帛があるのは、規定に準據してはじめて傳授がかなうようにさせようとしてのこと。つまり青帛は二十尺ばかり、黃金の輪は二對である。この『四明玉經』は、三品の元來のリストにある』

(1) 三素雲 『上清黃庭內景經』上有章第二(『雲笈七籤』卷二一)

『紫煙上下三素雲』、注「三素者紫素白素黃素也、常存三元妙氣、上下在身、則形神通感」。

(2) 兩目眞君 『太上靈寶五符序』卷上「子欲爲道、長生不死、當先存其神、養其根、行其氣、呼其名、…兩耳神四人、字嬌女、

兩目神六人、字英明」。

- (3) 鮮盛 『眞誥』卷一〇葉八表「人臥室宇、當令潔盛」、注「盛字是淨義、中國本無淨字、故作盛也、諸經中通知此。」「眞誥」卷一〇葉一九表「行眞仙之事者、又不得以衣服借人、亦不服非己之物、諸是巾褐履屐之具、皆使鮮盛、三魂七魄、或栖其中、亦爲五神之炁、忌汚沾故也」。

- (4) 滄浪方丈仙人 『眞誥』卷一四葉一九裏「八淳山高五千里、周市七千里、與滄浪方山相連比、…方丈之西北有陰成大山、滄浪西南有陽長大山、山周迴各一千四百里、高七百里、其山多眞仙之人所居處焉」、注「方山即方丈山也」。

- (5) 傳行以青金爲誓 『登眞隱訣』卷下「其餘官號多在千二百官儀注」、注「千二百官儀始乃出自漢中、傳行於世。」「無上祕要」卷二四眞文品「至中皇元年九月七日、七聖齊靈、清齋其宮、青金盟天、跪誓告虔、奉受靈文、…右出洞眞七聖元紀」。

閉炁拜靜、百鬼畏憚、功曹可見與語、謂久行之耳。

七月二日、南嶽夫人喻。

燒香時、勿反顧、忤眞炁、致邪應也。

入靜戶、先前使人通達上聞。

臨食上、勿道死事、洗澡時、常存六丁、令人所向如願。

理髮欲向王地、既櫛髮之初、而微呪曰、「泥丸玄華、保精長存、右爲隱月、左爲日根、六合清鍊、百神受恩」、祝畢、咽液三過。〔此一條猶是安妃所說無異、但不知何者前後耳、按以日月推、此則是後也〕

右四條南嶽夫人喻。

- (1) この段、『登眞隱訣』卷下注に見える。  
(2) この段、『登眞隱訣』卷下注に見える。  
(3) この段、『登眞隱訣』卷下注に見える。  
(4) この段、『登眞隱訣』卷中、『西王母寶神起居經』に見える。

息を止めて靜室で拜禮すれば、百鬼は畏れ憚り、功曹と會つてともに語りあえる。つまり長期間實修することです。

七月二日の南嶽夫人のお諭し。

燒香する時には、振り返つてはなりません。(振り返ると)眞氣に逆らい、邪氣の反應を招くことになります。

靜室の戸口に入るには、まず、人を介して通達し上聞させます。

食事の席では、死を話題にしてはなりません。體を洗う時には、いつも六丁玉女<sup>(1)</sup>を存思すれば、人をして何事も願ひどおりにさせます。

髪を整える時には、王氣の方角を向くのが望ましい。髪を櫛けずり始める時、小聲で次の呪文を唱える。「泥丸には玄い華が咲き、精氣を保持して長生を得る。右は隱月であり、左は日根である。六合は清らかに精鍊され、もろもろの神たちはそのおかげを蒙っている」。呪文が終われば、唾を三度吞みこむ。(この一條は、やはり九華安妃が説かれたことと異ならないが、どちらが前でどちらが後なのかは分からない。月日から推測すると、こちらが後である)

右の四條は、南嶽夫人のお諭し。

(1) 六丁玉女 『登眞隱訣』卷中「常存六丁」、注「謂旦夕經常澡

洗也、至沐浴時、亦可存向之耳、六丁即六丁神女、此神善與人感通、易爲存召、亦應向六丁所在、謂甲子旬、即向卯也、其玉女別有名字服色、在靈飛中」。『上清黃庭內景經』常念章第二十二(『雲笈七籤』卷一一)「神華執巾六丁謁」、注「六丁者謂六丁陰神玉女也」。『眞誥』卷九葉一八表「此道以攝運生精、理和魂神、六丁奉侍、天兵衛護、此上眞道也」。

正一平經曰、「閉氣拜靜、使白鬼畏憚、功曹使者龍虎君可見與語、謂能精心久行之耳。泰清家有正一平炁、今此悉載拜靜衆事、必應是泰清經、恐脫炁字也」

又曰、「燒香時、勿反顧、反顧則炁眞炁、使致邪應也」。

又曰、「入靜戶、先前右足著前、後進左足、令與右足齊、畢乃趨行如故、使人陳啓、通達上聞」。

又曰、「臨食上、勿道死事、勿露食物、來衆邪炁」。

又曰、「數澡洗、每至甲子當沐、不爾、當以幾月旦、使人通靈、浴不患數、患人不能耳、蕩鍊尸臭、而眞炁來入」。

右玄師所敕使施用。〈右六條與前所說大同小異者、是受旨〔是〕<sup>2</sup>〔時〕略記、今更〔祥〕<sup>3</sup>〔詳〕記寫此、并益後二條、以示長史也

右十條竝長史寫。

(1) この段、『西王母寶神起居經』、『登眞隱訣』卷中に見える。

(2) 意をもって「是」の字を「時」の字に改める。

(3) 愈本が「祥」を「詳」に作るのに従う。

『正一平經』に言う。「息を止めて靜室で拜禮すれば、百鬼を畏れ憚らせ、功曹使者と龍君虎君に會つてともに語りあえる」。つまりよく心を清純にして長期間實修することです。〈泰清家に正一平炁の道術がある。今ここに靜室で拜禮することについてのさまざまな事例をことごとく載せている。きつとこれは泰清家の經典で、恐らく「炁」の字を脱しているであろう〉

また言う。「焼香する時には、振り返ってはならない。振り返ると眞氣に逆らい、邪氣の反應を招くことになる」。

また言う。「靜室の戸口に入るには、まず右足を前に置き、その後左足を進め、右足とそろえさせる。終わればもとの歩き方を續ける。人を介して申し上げ、通達し上聞させる」。

また言う。「食事の席では、死を話題にしてはならない。食べ物を露わにしてはならない。もろもろの邪氣を招くことになる」。

また言う。「しばしば體を洗う。甲子の日ごとに沐浴すべきで、さもなくば奇數月の朔日、そうすれば人をして神靈と交感させる<sup>③</sup>。沐浴は何度してもよいが、できないのが心配だ。尸臭を洗い除くと、眞氣が入って来る」。

右は玄師(南眞夫人)が教えて實修させた。〈右の六條が前に説かれた内容と大同小異であるのは、お告げを授かったその時に略記したものを今更めて詳しく記して寫したからであり、あわせて次の二條を増して許長史に示したのである〉

右の十條は、いずれも許長史の寫し。



(1) 功曹使者龍虎君 『登眞隱訣』卷下「太上玄元五靈老君、當召

功曹使者左右龍虎君捧香使者三炁正神、急上關啓三天太上玄元道君」。

(2) 幾月 『登眞隱訣』卷中「當幾月旦使人通靈」、注「幾月、即

奇月也、謂正月三月五月七月九月十一月也、月中有甲子、便可重沐、消尸用四時王日、仙忌用十一月十一日、九眞又用三月三日五月五日、皆應沐也、月得一過兩過、乃佳」。

(3) 通靈 『抱朴子』微旨「彼人之道成、則蹈青霄而遊紫極、自非通靈、莫之見聞、吾子必爲無耳」。『眞誥』卷二〇葉一一表「楊君名義、…幼有通靈之鑒」。

服仙藥、常向本命、服畢、勿道死喪凶事、犯胎傷神、徒服無益。

東卿司命君。〈此一條本在受明堂玄眞法後

右一條楊書。

太上九變十化易新經曰、「若履淹穢及諸不靜處、當洗澡浴與解形以除之、

其法用竹葉十兩、桃皮削取白四兩、以清水一斛二斗、於釜中煮之令一沸、出適寒溫以浴形、即萬淹消除也、既以除淹、又辟濕痺瘡癢之疾、且竹虛素而內白、桃即却邪而折穢、故用此二物、以消形中之

滓濁也、天人下遊、既反、未曾用此水以自蕩也、至於世間符水祝漱外舍之近術、皆莫比於此方也、若浴者益佳、但不用此水以沐耳、鍊尸之素漿、正宜以浴耳、眞奇祕也」。〈下眞品目有九化十變、疑此目是例言也〉

紫微王夫人所敕用。

右一條長史寫。

(1) この段、『登眞隱訣』卷中に見える。

(2) この段、『西王母寶神起居經』、『登眞隱訣』卷中に見える。

仙藥を服用するには、いつも本命の方角に向かう。服用し終えろと、葬式や凶事について語ってはならない。(語ると)胎を犯し神を傷つけ、服用しても骨折り損で機能はない。

東卿司命君。〈この一條は、本來は明堂玄眞法を授かった後にあつた〉

右の一條は楊羲の書。

『太上九變十化易新經』に言う。「もし穢れたものやさまざまの不淨なところを蹈みつけた時には、十分に洗浴して體の汚れを解消し

て除かねばならない。

その處方。竹の葉十兩<sup>③</sup>と桃の皮の削りとった白い部分の四兩を、清水一斛二斗でもって釜の中で煮て一度沸騰させた上、取り出して適當な溫度にして體を洗うと、あらゆる穢れが消滅する。穢れが除かれるばかりか、リウマチ<sup>④</sup>やかさの病も避けられる。そのうえ、竹は虚ろでさっぱりしており、内側は白い。桃は邪氣を退けて穢れをくたく。だからこれら二つの物を用いて、體内の滓濁を消滅させるのだ。天人は下界に遊ぶと、もどった後にはいつもこの水を使って汚れを取り除くのだ。俗世間の符水や呪文を唱えて口を漱ぐ<sup>⑤</sup>とか、在家の卑近な道術などは、いずれもこの處方とは比べものにならない。もし沐浴すれば一層よいが、しかしこの水を用いて沐浴するのではない。鍊尸の素漿<sup>⑦</sup>こそ洗浴するのによい。まことに奇しき祕術なのだ。〈下眞のランクのもののリストの中に「九化十變<sup>⑧</sup>」がある。もしかすると、ここの題目は通例の言い方なのかも知れない〉

紫微王夫人が用いるようにと命じられたもの。

右の一條は許長史の寫し。

- (1) 本命 『登眞隱訣』卷下「二朝計九十日」、注「後云從本命日爲始、此法當逆推取初生年月日、子後得第一本命日、便計以爲始、順數九十日輒一斷、至今當行此朝之本命日平日爲起也、假

令人以宋孝建三年丙申歲四月三十日甲寅日生者、至六月十三日得丙申日、即是第一本命日也、其八月十三日之丙申、自空過去、非復始本命矣、一丙申相去輒六十日、今用九十日、故長三十日也、今若絳取一丙申、便用正、恐是向空中者爲始、則非第一本命也、至後永成差僻、誤人不小、前丙申至癸酉年十二月二十二日丙申是第七十七、因以起朝計、復九十日至甲戌年三月二十一日丙寅平日又朝、明日丁卯又起數、九十日得丙申日又朝、如此一丙寅輒一丙申、若令朝計取九十日者、則用乙丑乙未也、一年或三朝四朝無定、若都不知生年生月者、乃取今年本命爲始」。

- (2) 在受明堂玄眞法後 『眞誥』卷九葉一八表を參照。  
 (3) 竹葉十兩… 『雲笈七籤』卷四五祕要訣法解穢湯方第六を參照。  
 (4) 濕痺 『金匱要略方論』卷上痊濕臍病「太陽病、關節疼痛而煩、脈沈而細者、此名濕痺」。  
 (5) 符水 『三國志』卷八張魯傳注「典略曰、…太平道者、師持九節杖爲符祝、教病人叩頭思過、因以符水飲之、得病或日淺而愈者、則云此人信道、其或不愈、則爲不信道」。  
 (6) 祝漱 『洞玄靈寶三洞奉道科戒營始』卷四誦經義「初入堂、祝漱如法、三上香、繞經一周、復三上香」。『眞誥』卷一〇葉一〇表「若兼以漱液祝說益善」。  
 (7) 鍊尸之素漿 『登眞隱訣』卷中「鍊尸之素漿、正宜以浴耳、眞

奇祕也」、注「沐者既以浴竟、復宜依常法沐頭、非用此水以沐也、若沐竟、以此水少少洗刷、亦當無嫌、此水一名練尸素漿、止供澡浴耳、解施之事、學者之所急、此之祕方、千金非寶也」。

(8) 九化十變 『眞誥』卷一四葉一八表「玉子者帝侑也、曾詣鍾山、獲九化十變經、以隱遁日月、遊行星辰、後一旦疾崩、營塚在渤海山」。

受洞訣施行太丹隱書存三元洞房者、常月月朝太素三元君、以正月

九日二月八日三月七日四月六日五月五日六月四日七月三日八月二日九月一日十月十日十一月十一日十二月十二日夜、於寢靜之室、北向、六再拜訖、稽首跪曰、「謹啓太上大道高虛玉晨太素紫宮八靈三元君、中央黃老無英曰元太帝、五老高眞上仙太極皇精三皇君、大洞三景弟子某、謹以吉日之夜、天關九開之間、上聞太上玉皇眞君、乞得長生世上、壽無億年、時乘黃晨〔緣〕〔綠〕蓋龍輦、上詣紫庭、役使萬神、侍衛四明」、畢、勿令人知也。〔此一條據寫〕

右四朝太素三元君法、以吉日夜半時。

太<sup>③</sup>上大道玉晨君、常以正月四日二月八日三月十五日四月八日五月九日六月六日七月七日八月八日九月九日十月五日十一月三日十二月十二日、登玉霄琳房、四眎天下有志節遠遊之心者、子至其日、平旦

日出時、北向再拜、亦可於靜中也、自陳本懷所願、畢、因咽液三十六過。〔長史寫〕

東<sup>④</sup>海青童君、常以丁卯日、登方諸東華臺四望、子以此日常可向日再拜、日出行之、可因此以服日精。〔又據寫〕

右紫虛元君所出。〔右此三事竝上學隱朝之法、其經竝不顯世、故南眞出之、亦是令長史遵用也〕

右三條有長史據共書、同在一紙上。

(1) この段、『洞眞高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』、『雲笈七籤』卷四一太素眞人隱朝禮願上仙法および同卷四一朝太素三元君に同類の文が見える。

(2) 俞本が「縁」を「綠」に作るのに従う。

(3) この段、『雲笈七籤』卷四一朝極に類似の文が見える。

(4) この段、『雲笈七籤』卷四一朝青童君に類似の文が見える。

洞訣を授けられ、『太丹隱書』を實行し、三元洞房を存思しようと

する者は、毎月、太素三元君<sup>①</sup>に朝謁する。正月九日、二月八日、三月七日、四月六日、五月五日、六月四日、七月三日、八月二日、九月一日、十月十日、十一月十一日、十二月十二日の夜に、寢臥している靜室<sup>②</sup>で北を向き六度再拜し終わると、稽首して跪き、次のように言う。「謹んで太上大道高虛玉晨太素紫宮八靈三元君、中央黃老・無英・白元太帝<sup>③</sup>、五老高眞上仙太極皇精三皇君に申し上げます。大洞三景の弟子某は、謹んで吉日の夜、天の關門が九度開く間に、太上玉皇眞君に上聞し、この世で長生がかなって、無數億年の壽が得られ、時には黄金色の光につつまれた綠蓋の龍車に乗って、上天の紫の宮廷に詣で、あまたの神々を役使して、四明の神を侍衛たらしめることを祈願いたします」。言い終わっても他人に知られてはなりません。(この一條は許掾の寫し)

右は太素(紫宮八靈)三元君に四たび朝謁する法である。吉日の夜半の時刻に行う。

太上大道玉晨君は、いつも正月四日、二月八日、三月十五日、四月八日、五月九日、六月六日、七月七日、八月八日、九月九日、十月五日、十一月三日、十二月十二日に玉霄の琳房に登って、天下に仙界に遠く旅立とうとする志のある者がいないかと四方を見渡される。そなたはその日が来れば、夜明けの日の出の時刻に北を向いて再拜しなさい。靜室中で行ってもよろしい。自分の心に願うところ

を述べるのです。述べ終われば、そこで唾を三十六回呑みこみなさい。(許長史の寫し)

東海青童君<sup>④</sup>は、いつも丁卯の日に方諸東華臺に登って四方を見渡される。そなたはその日にいつも太陽に向かって再拜しなさい。日の出の時に言い、このようにすることによって、太陽の精氣を服用することができのです。(さらにまた許掾の寫し)

右は紫虛元君(南嶽魏夫人)がお示しになられたもの。(右の三事は、すべて最高の道を學ぶ者の密かに朝謁する方法である。そのことを記した經典は絶えてこの世には明かされていない。そこで南眞がこれを示し、許長史に従い實行するようにさせたのである)

右の三條は、許長史と許掾が一緒に書いたもので、ともに一枚の紙の上に書かれている。

(1) 太素三元君 『無上祕要』卷一七衆聖冠服品上「太素三元君乃一眞之女子、則三素元君之母、頭建寶琅扶晨羽冠、服紫氣浮雲錦帔、九色龍錦羽裙、腰帶流金火鈴虎符龍書、…右出洞眞三元玉檢布經」。

(2) 寢靜之室 『登眞隱訣』卷中「含眞臺女眞張微子所受東華玉妃

某服霧法、常以平旦於寢靜之中、…」、注「即就所臥之室也」。

(3) 中央黃老無英白元太帝 『登眞隱訣』卷上「却入二寸爲洞房

宮」、注「左有無英君、右有白元君、中有黃老君、凡三神居之」。

『雲笈七籤』卷五〇・三一九宮法「洞房中有三眞、左爲無英公

子、右爲白元君、中爲黃老君、三人共治洞房中、此爲飛眞之

道、別自有經、事在金華經中」。

(4) 大洞三景弟子某 『洞玄靈寶三洞奉道科戒營始』卷五「上清經

總一百五十卷、上清太素交帶、上清玄都交帶、上清白紋交帶、

上清紫紋交帶、一日迴車交帶、亦謂畢道券、又名元始大券、

注「右受稱上清玄都大洞三景弟子无上三洞法師」。

(5) 東海青童君 『登眞隱訣』卷上「太極帝君寶章、東海青童君授

涓子以封掌名山也」。

(6) 方諸 『眞誥』卷九葉二〇裏以下を参照。

(7) 上學隱朝之法 『元始無量度人上品妙經四注』卷一「上學之

士、修誦是經、皆即受度、飛昇南宮」、『眞誥』卷一〇葉二〇裏

「此名爲太上祝生隱朝胎元之道」。

常以二月二日三月三日八月八日九月九日十月十日夜、於寢室存思

洞中訣事、而獨處不眠者吉也、其夕衛經玉童玉女將太極典禁眞人來

於空中而察子也、是其夜常燒香精苦、有如所待者也、坐臥存思、或

讀書念眞、在意爲之、唯不可以其夕施他事、非求道之方耳、若兼慎

於其日益善、匪唯守夜矣、受洞訣之始、常當修此、好以爲意也。

數遇惡夢者、一曰魄妖、二曰心試、三曰尸賊、厭消之方也、若夢

覺、以左手躡人中二七過、琢齒二七遍、微祝曰、「大洞眞玄、張鍊三

魂、第一魂速守七魄、第二魂速守泥丸、第三魂受心節度、速啓太上

三元君、向遇不祥之夢、是七魄遊尸來協萬邪之源、急召桃康護命、

上告帝君、五老九眞、皆守體門、黃〈闕〉神師、紫戶將軍、把

鉞搖鈴、消滅惡津、反凶成吉、生死無緣、畢、若又臥、必獲吉應、

而造爲惡夢之氣、則受閉於三關之下也、三年之後、唯神感旨應、乃

有夢也、夢皆如見將來之明審也、略無復惡占不祥之想矣。〈長史作惡

字、皆西下心、其義與西下心亦同、但謂西方金炁之心剛惡也〉

若夜遇善夢、吉、應好夢而心中自以爲佳、則吉感也、臥覺、當摩

目二七、叩齒二七遍、而微呪曰、「太上高精、三帝丹靈、絳宮明徹、

吉感告情、三元柔魄、天皇授經、所向諧合、飛仙上清、常與玉眞、

俱會紫庭」、畢、此太洞祕訣、以傳於始涉津流者矣。〈右此三事亦是

洞房太丹家事、眞經亦未顯世、今世中經乃粗有其事、皆增損不同〉

右三條有長史寫。

(1) この段、『洞眞高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』に見える。

(2) この段、『洞眞高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』および『雲笈七籤』卷四五秘要訣法惡夢吉夢祝第二十八に見える。

(3) 愈本が「閤」を「闕」に作るのに従う。

いつも二月三日、三月三日、八月八日、九月九日、十月十日の夜には、寢室で洞中の訣事を存思する。一人きりで眠らないでおれば吉事がある。その日の夕には、經典を護衛する玉童玉女<sup>①</sup>たちが太極典禁眞人を伴って空中よりやって来て、そなたを観察する。その日の夜には、いつもひたむきに焼香して、何かがやって来るのを待っているかのようにする。坐ろうが横になろうが存思しようが、あるいは經書を読んで眞人を念じようが、好きなようにするがよい。ただその夕には他の事をしてはならぬ。仙道を求める方法ではないからだ。もしその日の日中にも慎重に過ぐすなら一層よい。なにも徹夜するだけというのではない。洞中の訣事を授かった始めの時には、いつもこれを修めるべきで、しっかり意を用いなければならぬ。

しばしば惡夢を見るのは、一は魄妖、二は心試、三は尸賊なのだ。

鎮め消し去る方法として、夢から覺めた時、左手で人中を十四回ぐつと押し、十四回叩齒し、小聲で次の呪文を唱える。「大洞の深遠なる眞理が三魂を大いに鍊磨する<sup>②</sup>。第一の魂は速やかに七魄を守り、第二の魂は速やかに泥丸を守り、第三の魂は心に節度を授けよ。速やかに太上三元君に申し上げる。さきほど不吉な夢を見たのは、七魄からさまよい出た三尸<sup>③</sup>が、あらゆる邪惡なものの根源と一つになったからです。急いで桃康君<sup>④</sup>を呼んで命を護らせ、上は帝君に報告させます。五老と九眞はともにわが肉體の關門を守御し、黃闕神師と紫戸將軍<sup>⑤</sup>は手に斧を持ち流鈴を振り鳴らして、惡がおし寄せて来る渡し場を消滅させ、凶を轉じて吉となし、生死とは無縁となる」。唱え終わってもしまった横になれば、必ず吉祥の應答が得られる。そして惡夢を生み出す邪氣は三關の下に封じこめられる。三年後には、精神が動くと神靈の意志が感應して夢に現れるようになる。夢はすべてでありとした將來を見通すようなものとなり、もはや再び悪い豫感がする不祥の想いが起こることはない。〔許長史は「惡」の字をすべて「西」の下に「心」に作っている。その意味は「西」の下に「心」に作るのと同じであるが、西の方角の金氣<sup>⑥</sup>に相當する心は剛惡だということなのである〕

もし夜に善い夢を見るのは吉。好い夢に反應して心中にすばらしいと思えば、吉事が感應してくる。眠りから覺めれば、目を十四回

按摩し、十四回叩齒しなければならぬ。そして小聲で次の呪文を唱える。「太上のすぐれた精氣、三帝の丹き靈氣<sup>あか</sup>。絳宮は明るく輝きわたり、吉事が感應してありのまゝを告げる。三元は魄を柔和にし、天皇は經典を授け下される。何事もびたりとかない、上清で飛仙となり、常に玉眞とともに紫庭に集う」。これで終わり。この太洞の秘訣は初學者に傳授される。〈右の三事もまた洞房太丹家の事であり、眞人の經典はまだこの世には明らかにされていない。今の世間の經典には簡略にその事を記すものがあるが、すべて内容に異同があつて同じではない〉

右の三條は許長史の寫しがある。

- (1) 衛經玉童玉女 『登眞隱訣』卷下「侍經神童玉女」。『雲笈七籤』卷四玄都九眞盟科九品傳經錄「典衛靈文玉童玉女各三千人」。
- (2) 大洞眞玄、張鍊三魂 『眞誥』卷一八葉五表「大洞眞玄、張鍊三魂」、注「出惡夢祝」。
- (3) 七魄遊尸 『眞誥』卷一〇葉二二表「并右手第二指躡右鼻孔下、左手第二指躡左目下、…按此二處是七魄遊尸之門戶、鉞精賊邪之津梁矣」。
- (4) 桃康 『上清黃庭內景經』脾長章第十五(『雲笈七籤』卷一一)

「男女個九有桃康」、注「男女會合、必存三丹田之法、桃康、下神名、主陰陽之事、個三爲九、故曰個九、大洞眞經云、三元隱化、則成三宮、三宮中有九神、謂上中下三元君、太一公子白元無英司命桃康各有宮室、故曰有桃康」。

- (5) 黃闕神師、紫戶將軍 『登眞隱訣』卷上「兩眉間上、其裏有黃闕紫戶絳臺青房、共構立守寸之中左右耳」。

- (6) 西方金炁 『五行大義』論配支幹「庚辛申酉金也、位在西方」。  
『金華玉女說丹經』(『雲笈七籤』卷六四)「玄女曰、…夫金爲酉、酉配金」。

- (7) 太上高精、三帝丹靈 『眞誥』卷一八葉五表「太上高精、三帝丹靈」、注「出善夢祝、此二條事本經竝應出大丹中、今以抄出、別已在第五篇中」。

- (8) 飛仙上清 『眞誥』卷一〇葉二三表「永齊二景、飛仙上清」。
- (9) 玉眞 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「上清之天、天帝玉眞、无色之景梵行」。『眞誥』卷一〇葉八裏「玉眞巍巍、坐鎮明堂」。

- (符文 省略) 〈此符摹長史畫〉  
(符文 省略) 〈此符摹篆畫〉

已上符本朱畫。

明堂<sup>①</sup>內經開心辟〔妄〕符、王君撰用、開旦旦、向王朱書、再拜服之、祝曰、「五神開心、徹聽絕音、三魂攝精、盡守丹心、使我勿〔妄〕、五藏遠尋」、拜畢祝、祝畢乃服、服畢、咽液五過、叩齒五通、勿令人見〔兩妄字謂皆應作忘、若不用開日、以月旦月十五日二十七日、一月三服、一年便驗、祕術也。〕右符及此三條有長史掾寫兩本、掾朱書

東卿<sup>②</sup>司命曰、「先師王君、昔見授太上明堂玄眞上經、清齋休糧、存日月在口中、畫存日、夜存月、令大如環、日赤色有紫光九芒、月黃色有白光十芒、存咽服光芒之液、常密行之無數、若不修存之時、令日月還住面明堂中、日居左、月居右、令二景與目董合炁相通也、此道以攝運生精、理和魂神、六丁奉侍、天兵衛護、此上眞道也、太上玄眞經、先盟而後行、行之、然後可聞玉佩金璫之道耳、季偉昔長齋三年、始誠竭單思、乃能得之、於是神光映身、然後受書耳、此玄眞之道、要而不煩、吾常寶祕、藏之囊肘、故以相示有慎密者也、明堂玄眞自有經、經亦少耳、大都口訣、正如此而行之、偉昔亦不得經、但按此而行、始乃得經耳、爾欲得、可就偉取、玉佩隱書非偉所見耳」。

夜行及冥臥、心中恐者、存日月還入明堂中、須臾百邪自滅、山居

恆爾、此爲佳。〔右此是說玄眞經存之法、其大經在茅傳中〕

右三條楊書。

(1) この段、『登眞隱訣』卷中に見える。

(2) この段、『上清明堂玄眞經訣』、『雲笈七籤』卷三太上玄眞訣服日月法に見える。

(符文 省略) 〔この符は許長史が書いたのを模寫したもの〕

(符文 省略) 〔この符は許掾が書いたのを模寫したもの〕

以上の符は本來は朱で畫かれていた。

明堂內經開心辟〔妄〕符は、西城真人王君が撰述し用いられたもの。開日<sup>③</sup>の夜明けに王氣の方角を向いて(この符文を)朱書し、再拜して服用し、次の呪文を唱える。「五神が心をととき開き、聞こえない音までもがすっかり聞こえる。三魂は精氣を養って、ことごとく丹心を守御する。私に決して〔妄〕<sup>わ</sup>れさせるな、五臓を遠く尋ね



るということ。拜し終わって呪文を唱え、呪文を唱え終わってから服用する。服用し終わったら、唾を五回呑みこみ、五回叩齒する。他人に見させてはならない（二箇所の「妄」の字は、いずれもきつと「忘」の字であろう）。もし開日にやらないのならば、毎月の一日と十五日と二十七日に行う。一月に三回服用すると、一年で効果が現れる。祕術である。（右の符およびこの三條は、許長史と許掾が寫した二つのテキストがある。許掾は朱で書いている）

東卿司命君が言われた。「先師の西城真人王君は、昔、『太上明堂玄眞上經』をお授け下された。身を清めて齋戒し穀物を絶ち、日月が口中に在るさまを存思した。晝には日を存思し、夜には月を存思した。その大きさは腕輪ほど、日は赤色で紫色の九つの光芒があり、月は黄色で白色の十の光芒があるようにし、光芒からしたる液を呑みこみ服用するさまを存思した。常に人知れず何度となく實行した。もし實修し存思しない時には、日月を頭の明堂の中にもどしてとどめておく。日は左に、月は右にあり、日月の光と目瞳とが互いに氣を合して通じあうようにさせる。この道術は、生氣精氣を養い運らせ、魂神を調えて柔和にし、六丁の神女が付き従い、天兵が護衛するものであり、上眞の道術である。『太上（明堂）玄眞（上）經』は、まず誓いを立ててから行う。これを實踐すれば、やがて玉佩金璫の道術を聞くことができるであろう。季偉（茅固）は昔三年もの

長期の齋戒をし、そのうえで誠を盡くし想いを盡くして、ようやくこの道術を得ることができた。かくて神光がわが肉體を照らし出すようになって、やがて辭令を授けられたのである。この玄眞の道術は、簡要であつて繁雜でなく、私は常に寶として大切にし、肘後の袋に祕藏している。だから慎み深い者に教示するのである。（太上）明堂玄眞には自ずから經典があるが、經典はわずかなものに過ぎない。大部分が口訣により、まったくそのようにして實踐するのである。季偉もまた昔はこの經典を手に入れることができなかった。もっぱら口訣によつて實踐し、ようやくにして經典を手に入れることができたのだ。そなたが經典を得たければ、季偉のもとで入手することができ。ただ『玉佩隱書』は、季偉は目にすることがない」。

夜分に歩いたり夜中に横になっていて、心の中に恐怖を覺えた時には、日月が明堂の中にもどり入つて来るさまを存思する。たちまちのうちにあらゆる邪惡なものは自然に滅んでしまう。山中に住まう者は常にそうする。これがすばらしいのである。（右は『太上明堂（玄眞（上）經』の存思の方法を説明したもの。大經は『茅傳』に見える）

右の三條は、楊羲の書。

- (1) 開日 『淮南子』天文訓「子爲開」。「雲笈七籤」卷四九守五斗眞一經口訣「每至開日夜半時、起坐東向、…」。
- (2) 清齋 『無上祕要』卷九衆聖會議品「當此之日、清齋燒香、棄諸異想、願合天心、存思苦念、修行靈文、…右出洞眞七聖元紀經」。「真誥」卷一〇葉二〇表「凡甲寅庚申之日、…當清齋不寢、警備其日、遣諸可欲」。
- (3) 目童 『上清黃庭內景經』天中章第六(「雲笈七籤」卷一一)「九幽日月洞空無、注「又玉曆經云、太清上有五色華蓋九重、人身亦有之、當存目童如日月之明也」。
- (4) 天兵 『無上祕要』卷四一授洞眞上清儀品「便祝曰、神眞出遊、萬帝駭驚、玉虛玄衛、天宿倒傾、五獄司官、莫不輔靈、制召十方、驅策天兵、…」。
- (5) 明堂 『登眞隱訣』卷上「凡頭有九宮、兩眉間…却入一寸爲明堂宮」。
- (6) 山居 『上清黃庭內景經』務成子注敍(「雲笈七籤」卷一一)「受者齋九日或七日或三日…」、注「此師及弟子俱應結齋、齋日多少、隨其身事、若履涉世塵、宜須積日自潔、其山居清整者、三日便足也」。
- (7) 大經 『真誥』卷一八葉一二表「泰和三年五月、行奔二景道」、注「此則儀璘之法、雖已有抄事、未見大經」。

太虛真人南嶽赤君內法曰、「以月五日夜半時、存日象在心中、日從口入也、使照一心之內、與日共光相合會、畢、當覺心暖、霞暉映驗、良久乃祝曰、『大明育精、內鍊丹心、光暉合映、神眞來尋』、畢、咽液九過、到十五日二十五日二十九日、復作如上、使人開明聰察、百關鮮徹、面有玉光、體有金澤、行之十五年、太一遣寶車來迎、上登太霄、行之務欲數、不必此數日作也」。

右一條出太上消魔經中。〈此經亦未出世、右一條長史寫〉

東華真人服日月之象上法

男服日象、女服月象、日一不廢、使人聰明朗徹、五藏生華、魂魄制鍊、六府安和、長生不死之道、「目」「目」。「此兩字是摹眞、本朱書右書日月象法、亦可圓書日也。〈右一條楊書〉

右此二法不審是何眞所受。

(1) この段、『登眞隱訣』卷中、『西王母寶神起居經』、『雲笈七籤』卷三三行氣、同卷四七金仙內法などに見える。

(2) この段、『登眞隱訣』卷中、『雲笈七籤』卷三三行氣などに見

える。

「太虛真人南嶽赤君內法」に言う。「毎月五日の夜半時に、日の姿が心臓の中にあるさまを存思する。日は口から入るのである。心臓のうちすべてをくまなく照らせ、日とともに輝いて互いに合體する。それが終われば、心臓があたたまり、丹霞の光が照り映えていると感じるだろう。そしてしばらくしてから次の呪文を唱える。「大明が精を育み、密かに丹<sup>あか</sup>き心を鍊磨する。光は輝きを合わせ、神眞<sup>①</sup>たちがやって来る」。それが終わると、唾を九回呑みこむ。十五日、二十五日、二十九日になったら、また同様にやる。目はよく見え耳はよく聞こえ、すべての關節はすかっとするようになり、顔には玉のような光が生じ、體には黄金のつやが生ずる。これを十五年やれば、太一が寶車をつかわして迎えに來、大空<sup>②</sup>に登ってゆくことになる。これを行うには、何度もやることが大事で、この數日に限る必要はない」。

右の一條は、『太上消魔經』の中から出たものである。(この經典もまだこの世には出現していない。右の一條は許長史の寫し)

東華真人服日月之象上法

男は日の姿を呑み、女は月の姿を呑む。毎日一回、止めてはなら

ぬ。耳も目も何から何までよく聞こえよく見え、五臓には華が生ずるようになり、魂魄は鍊磨され、六腑も穩やかに調うだろう。長生不死の道である。「目」「見」(この二字は真人の書體を模寫したもので、もとは朱書してあった)

右は日月の象を書く方法で、まるく「日」を書いてよい。(右の一條は楊羲の書)

右のこの二法は、いったいどの真人が授けられたのか分からない。

(1) 神眞 『眞誥』卷二葉五裏「越桐柏之金庭、…」、注「既帶近洞天、神眞限衛」。

(2) 太霄 『周氏冥通記』卷四「歌曰、太霄何冥冥、靈眞時下遊」。

漢孝明皇帝夢見神人、身長丈六、項生圓光、飛在殿前、欣然悅之、遍問朝廷、通人傳毅對曰、「臣聞天竺國有得道者、號曰佛、<sup>③</sup>傳」聞能飛行、身有日光、殆其神乎、帝乃悟、即遣使者張鸞羽林郎秦景博士王遵等十四人之大月氏國、採寫佛經四十二章、祕蘭臺石室第十四、即時起洛陽城西門外道北立佛寺、又於南宮清涼臺作佛形像及鬼子母圖、帝感非常、先造壽陵、亦於殿上作佛象、是時國豐民安、遠

夷慕化、願爲臣妾、佛像來中國、始自明帝時耳。〈此說粗與外書同、而長安中似久已有佛、裴君卽是其事、且佛法乃與天竺國寶、而月氏無有、與此爲異、今既欲說小方諸奉佛、故先宜敘此也、按張騫非前漢者、或姓名同耳、傳毅字仲武、見漢書、秦景王遵等不顯、此寺名白馬寺、明帝乃葬顯節陵、此云壽陵者、漢諸帝在位時、皆預造壽陵、猶今世人作壽冢、非陵名也、外書記亦云、遭侍中張堪、或云郎中張愔、竝往天竺、寫致經象、并沙門來至、又恐今此說未必是真受、猶可楊君疏舊語耳、但眞經誥中自亟有論及佛事也〉

方諸正四方、故謂之方諸、一面長一千三百里、四面合五千二百里、上高九千丈、有長明太山夜月高丘、各周迴四百里、小小山川如此間耳、但草木多茂蔚、而華實多蒨粲、饒不死草、甘泉水所在有之、飲食者不死、青君宮在東華山上、方二百里中、盡天仙上眞宮室也、金玉瓊瑤、雜爲棟宇、又有玄寒山、山上別爲外宮、宮室周二百里中、方諸東西面又各有小方諸、去大方諸三千里、小方諸亦方、面各三百里、周迴一千二百里、亦各別有青君宮室、又特多中仙人及靈鳥靈獸輩、大方諸對會稽之東南、小看去會稽岸七萬里、東北看則有湯谷建木鄉、又去方諸<sup>⑤</sup>「十」萬里。〈方諸是乙地、湯谷是甲地、則自寅至辰、十萬里方五隅七言之、邪角十四萬里、故去會稽七萬里也〉

大方諸之西、小方諸上、多有奉佛道者、有浮圖、以金玉鏤之、或

有高百丈者、數十〔曾〕〔謂應作層字〕樓也、其上人盡孝順而不死、是食不死草所致也、皆服五星精、讀夏歸藏經、用之以飛行。〔按夏曰連山、殷曰歸藏、與此不同、依如三弟子、雖奉佛道、不作比丘形服、世人謂在「家」眞菩薩〔家〕耳〕

大方諸之東、小方諸上、多奇靈寶物、有白玉酒金漿汧、青君畜積天寶之器物、盡在於此、亦多有仙人、食不死草、飲此酒漿、身作金玉色澤、常多吹九靈簫、以自娛樂、能吹簫者聞四十里、簫有三十孔、竹長二三尺、九簫同唱、百獸抃舞、鳳凰數十來至和簫聲。

⑥大方諸宮、青君常治處也、其上人皆天真高仙、太極公卿諸司命所在也、有服日月芒法、雖已得道爲眞、猶故服之。〔霍山赤城亦爲司命之府、唯太元眞人南嶽夫人在焉、李仲甫在西方、韓衆在南方、餘三十一司命皆在東華、青童爲太司命總統故也、楊君亦云東軫執事、不知當在第幾〔住〕「位」耳〕

直存心中有象、太如錢、在心中赤色、又存日有九芒、從心中上出喉至齒間、而〔芒〕〔此字儻、非眞〕徊還胃中、如此良久、臨目〔存〕〔此字儻、非眞〕見心胃中分明、乃吐氣、嗽液三十九過止、一日三爲之、行之一年、疾病除、五年身有光彩、十八年必得道、行日中無影、辟百鬼千惡災氣、恆存日在心月在泥丸中、夜服月華、如服日法、存月十芒白色、從腦中下入喉、芒亦不出齒間而迴入胃。

右此方諸真人法出大智慧經上中篇、常能用之、保見太平。〔此即應是消魔智慧七篇之限也〕

右南極夫人所告。

行此日在心月在泥丸之道、謂省易可得旨、行無中廢絕者也、除身三尸百疾千惡、鍊魂制魄之道也、日月常照形中、則鬼無藏形、青君今故行之、吾則其人也、今以告子、子脫可密示有心者耳、行此道、亦不妨行寶書所服日月法也、兼行益善善也、仙人一日一夕行千事、初不覺勞、明勲道之至、生不可失矣。〔寶書日月、即謂紫文所用者〕  
右西城王君告。〔此竝告楊君、令以示諸許也〕

爲道當如射箭、箭直往不顧、乃能得造棚的、操志入山、唯往勿疑、乃獲至眞。

玄清告。〔按南極西城玄清 〔二〕 〔三〕 高眞、未當有餘降受、唯戒及詩各一條耳、不審此當是何時所喻〕

右八條竝楊書。

(1) この段、『牟子理惑論』〔弘明集〕卷二、〔四十二章經序〕〔出三藏記集〕卷六、〔高僧傳〕卷一、〔魏書〕釋老志などに同様

の記事が見える。

- (2) 意をもつて「傳」の字を「傳」の字に改める。
- (3) 意をもつて「六」の字を「十」の字に改める。
- (4) 愈本が「在家眞菩薩」に作るのに従う。
- (5) 以下、『無上祕要』卷二〇仙歌品に見える。
- (6) この段、『登眞隱訣』卷中、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法服日月光芒第二十四などに見える。
- (7) 愈本が「住」を「位」に作るのに従う。
- (8) 意をもつて「二」の字を「三」の字に改める。

漢の孝明皇帝は、夢の中で神人が、身のたけ一丈六尺、項にまるい後光を生じ、殿前を飛行するさまを、うれしくてたまらず、朝廷の臣下たちにあまねくたずねられた。博學の傳毅が答えた。「私が聞きますには、天竺國に道を體得した者がおりまして、佛と號します。傳え聞きますに、飛行でき、體から白光を放つとのこと。その神ではありませんか」。帝はそこではたと悟り、使者の張騫、羽林郎の秦景、博士の王遵たち十四人を派遣して大月氏國に行かせ、四十二章の佛經を手に入れ書寫させ、蘭臺の石室の第十四室に祕藏された。同時に洛陽城の西門の外、道の北側に佛寺を立てられた。また南宮の清涼臺において佛像を作り、鬼子母の圖を畫かれた。

た。帝は感ずるところ常ならず、あらかじめ壽陵を造營されていたが、その殿上にも佛像を作られた。この時、國は豊かに民は安らぎ、遠くの異民族もその教化を慕い、臣妾になりたいと願ったのである。佛像が中國にやって來たのは明帝の時に始まるのである。(この説は、ほぼ世俗の書に言うのと同じであるが、しかし長安に都があった前漢時代、ずっと以前から佛教があつたらしい。裴君<sup>①</sup>がつまりその事なのだ。かつ佛法は天竺<sup>②</sup>、罽賓とは關係するが、月氏には存在せず、この説とは異なる。今は小方諸で佛を信奉することを言いたいので、まずこれを述べておいたであろう。按ずるに、この張騫<sup>③</sup>は前漢のその人ではない。あるいは同姓同名なのかも知れない。傳毅<sup>④</sup>、字は仲武。『漢書』に見える。秦景、王遵たちのことははつきりしない。この寺は白馬寺と名づけられた。明帝は顯節陵<sup>⑤</sup>に葬られた。ここに壽陵というのは、漢の諸帝は在位中にみなあらかじめ壽陵を造營したのであって、ちょうど今の世人が壽家<sup>⑥</sup>を作るようなもの、陵名ではない。世俗の記載ではまた、侍中の張堪ないしは郎中の張愔を派遣して、一緒に天竺に行き、佛經を書寫し佛像をもたらし、かつ沙門も一緒にやって來たとある。また恐らく今のこの説は必ずしも眞人のお告げではなく、楊君が舊來の説をそのまま書き寫したものであろう。ただ、眞經やお告げの中には、しばしば佛に論及した部分がある)

方諸は正方形であり、故に方諸という。一面の長さは一千三百里、四面合せて五千二百里、高さは九千丈。長明太山、夜月高丘があり、おのおの周圍は四百里。ちつばけな山川は、このあたりのものと變わらない。ただ草木は多くが繁茂し、花と實は多くがきらきら輝いている。不死草<sup>⑦</sup>が多く、甘い泉水<sup>⑧</sup>も至るところにあり、これを飲み食らう者は不死となる。青童君の宮殿は東華山の上にあり、一方が二百里ほど、すべて天仙や上眞の宮室である。色とりどりの美しい金玉を棟木やら軒にちりばめてある。また玄寒山がある。山上には別に外宮をしつらえ、その宮室は周圍二百里ほどである。方諸の東西二方面には、またそれぞれ小方諸があり、大方諸から三千里離れている。小方諸も正方形で、各面それぞれ三百里、周圍は一千二百里である。またそれぞれ別に青童君の宮室をしつらえている。また中仙人と靈鳥靈獸などがとりわけ多い。大方諸は會稽の東南にあたり、ちよつと見ると湯谷建木郷<sup>⑨</sup>があり、また方諸から十萬里離れて(東北)方を見るとき湯谷建木郷<sup>⑩</sup>があり、また方諸から十萬里離れている。(方諸は乙地(東南)、湯谷は甲地(東北)で、つまり寅(東北)から辰(東南)までであつて、兩者の距離十萬里を方五隅七の割合でいえば、斜角の距離は十四萬里となる。故に會稽から七萬里離れているのである)

大方諸の西の小方諸には、佛教を信奉する者が多い。佛塔があり、

金玉がちりばめられている。あるものは百丈もの高さがあり、數十〔曾〕へきと「層」の字であろうの、高樓である。その人がすべて孝順で不死であるのは、不死草を食べてそうだったのである。みな五星精を飲み、夏の『歸藏經』<sup>①</sup>を讀み、それでもつて空を飛行する。〔按ずるに、夏では連山といい、殷では歸藏といい、ことは異なる。たとえば三弟子が佛教を奉じていたけれども、比丘の姿服裝をせず、世人は彼らを在家の眞の菩薩と言ったようなもの〕

大方諸の東の小方諸には靈物寶物が多く、白玉の酒や金漿の谷川がある。青童君は天寶<sup>②</sup>たる器物をためこんだが、すべてここにある。またたくさん仙人がいて、不死草を食べ、この酒や漿を飲み、體は金玉のような色つやになっている。いつもしばしば九靈籥を吹いて自ら樂しみ、籥を吹くのがうまい者は、四十里のかなたまで音をとどける。籥には三十の穴があり、竹管の長さは二、三尺。この九靈籥が一緒に吹き鳴らされると、百獸は手をたたいて舞いおどり、數十羽の鳳凰がやって來て籥の音色に唱和する。<sup>③</sup>

大方諸宮は青童君の普段の治所である。その人はすべて天真や高仙であつて、太極の公卿であるもろもろの司命<sup>④</sup>たちがいるところである。日月の光芒を服用する法があつて、すでに道を得て眞人になった者でも、あい變わらずこれを服用している〔霍山の赤城<sup>⑤</sup>もま

た司命の役所であり、太元眞人と南嶽夫人だけがそこにいる。李仲甫<sup>⑥</sup>は西の方にいて、韓衆<sup>⑦</sup>は南の方にいる。そのほかの三十一人の司命がみな東華にいるのは、青童君が大司命として統率するからである。楊君もまた「東軫執事<sup>⑧</sup>」と言われているが、第何位に位するのかは分らない〕。

心臓の中に形象があり、錢ほどの大ききで、心臓の中で赤色をしているのをじつと存思する。また日に九本の光芒があつて、心臓から上つてきて喉から出て齒のあたりまで來ると、「芒<sup>⑨</sup>」へこの字は塗りつぶしてあり、眞跡ではない〕は向きをかえて胃の中へもどつてゆくのを存思する。このようにしてしばらくしてからわずかに目を開けて「存」へこの字は塗りつぶしてあり、眞跡ではない〕思っていると、心臓と胃の中がはつきりと見えてくる。そこではじめて息を吐いて、唾を呑むこと三十九回にして終わる。一日に三回これをする。一年間行くと病氣は除かれ、五年たつと體が光彩を放ち、十八年たつと必ず道を得、晝間に歩いても影ができず、百鬼やもろもろの邪惡な災氣を追いはらう。常に日は心臓に、月は泥丸宮にあるのを存思する。夜に月華を服用するのは、日を服用する法と同じように、月の十本の白色の光芒が腦から下つて來て喉に入り、この光芒もまた齒のあたりから外へは出ずに、胃の中にもどつてゆくのを存思する。

右のこの方諸眞人法は、『大智慧經』上中篇に出る。常にこの法を

用いることができれば、間違ひなく太平聖君にお目にかかることができる。〈これは『消魔智慧』七篇の中にあるはずだ〉

右は南極夫人の告げられたもの。

日が心臓にあつて月が泥丸宮にある(のを存思する)この道術を行ふのは、簡易にして要點を押さえることができるから、途中で止めずに續けて行えるものである。身中の三戸やもろもろの疾病と邪惡をとり除いて、魂魄を鍊磨する道術である。日と月が常に體內を照らしているので、邪鬼は姿を隠しようがない。青童君は今もあい變わらず行つており、私がその(教えを受けた)人なのである。今それをそなたに聞かせてやるが、そなたは、志のある者に密かにそれを知らせてやつてもよい。この道術を行つても、寶書に言う日月を服する法を行う妨げにはならない。兩方とも行えば、一層すばらしい効果がある。仙人は一日一夜のうちに千もの事を行ふが、疲勞を感じるなどまったくない。心をこめて道に勤め勵み、生を失うようなことがあつてはならぬことは明らかだ。〈寶書の日月とは、『紫文』の服用の法をいう〉

右は西城王君のお告げ。〈これらはいずれも楊君に告げ、それを許家の人たちに示させたものである〉

道を行ふには、矢を放つようにしなければいけません。矢はひた

すらつき進んで振り返ることがないからこそ、的に命中できるので。志も高く山中に入れば、ただひたむきに疑念など抱いてはなりません。そうしてこそはじめて至眞が得られるのです。

玄清夫人のお告げ。〈按ずるに、南極、西城、玄清の三人の高眞には、ほかの降受はなく、ただ戒めと詩がそれぞれ一條ずつあるだけだ。これがいつ諭されたものであるのかは分からない〉

右の八條はいずれも楊羲の書。

(1) 裴君 『清靈眞人裴君傳』(『靈寶七籤』卷一〇五)「清靈眞人裴君、字玄仁、右扶風夏陽人也、以漢孝文帝二年、君始生焉、

家奉佛道」。『眞話』卷一四葉七表「裴眞人有弟子三十四人、其十八人學佛道、餘者學仙道」。張騫 『史記』卷一一一衛將軍驃騎列傳、『漢書』卷六一張騫傳を参照。

(3) 傅毅 『後漢書』列傳第七〇上文苑傅毅傳を参照。

(4) 顯節陵 『古今注』(『續漢書』禮儀志下劉昭注)「明帝顯節陵、山方三百步、高八丈、無周垣、爲行馬、四出司馬門」。

(5) 壽冢 『後漢書』列傳第六八宦者侯覽傳「督郵張儉因舉奏覽貪侈奢縱、又豫作壽冢、石椁雙闕、高廡百尺」、注「生而自爲



冢、爲壽冢」。

(6) 不死草 『十洲記』「祖洲…上有不死之草、草形如菰苗、長三四尺、人已死三日者、以草覆之、皆當時活也、服之、令人長生」。

(7) 甘泉水 『周氏冥通記』卷四「絕有甘泉、雜生衆華」。

(8) 湯谷建木鄉 『楚辭』天問「日月安屬、列星安陳、出自湯谷、次于蒙汜」、王逸注「言日出東方湯谷之中、暮入西極蒙水之涯也」。『山海經』海外東經「黑齒國…下有湯谷、湯谷上有扶桑、十日所浴、在黑齒北」、郭璞注「谷中水熱也」。『淮南子』地形訓「建木在都廣、衆帝所自上下、日中無景、呼而無響、蓋天地之中也」、注「衆帝之從都廣山上天還下、故曰上下」。『登真隱訣』卷下「太帝紫晨君也」、注「又方諸在會稽東南、其東北則有湯谷」。

(9) 乙地、甲地 『五行大義』論方位雜「五行非直性相雜、當方亦有雜義、東方甲乙寅卯辰、甲木也、乙中有雜金、寅中有生火、辰土也、卯中有死水」。

(10) 方五隅七 『孫子算經』「方五邪七、見邪求方、五之、七而一、見方求邪、七之、五而一」。正方形的一邊(方)の長さが五であれば、對角線(邪)の長さが七になるといふ近似計算法。ここで、對角線を「隅」と稱するのは、中央(會稽)から東南隅(方諸)、東北隅(湯谷)までの長さを指すことによる。

(11) 服五星精 『雲笈七籤』卷八〇洞玄靈寶三部八景二十四住圖

「朝引五星精、中瞻日中津、夕食黃月華、寢臥練五仙」。

(12) 夏歸藏經 『周禮』春官大卜「掌三易之灋、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易」、鄭玄注「名曰連山、似山出內氣也、歸藏者、萬物莫不歸而藏於其中、杜子春云、連山恣戲、歸藏黃帝」。

(13) 三弟子…道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八)「又清淨法行經云、佛遣三弟子震旦教化、儒童菩薩、彼稱孔丘、光淨菩薩、彼稱顏淵、摩訶迦葉、彼稱老子」。

(14) 白玉酒 『山海經』西山經「又西北四百二十里、曰崑崙山、…其中多白玉、是有玉膏、其原沸沸湯湯、黃帝是食是饗」、郭璞注「河圖玉版曰、少室山、其上有白玉膏、一服即仙矣」。『初學記』卷二七玉「十洲記曰、瀛洲有玉膏如酒、名曰玉酒、飲數升輒醉、令人長生」。

(15) 天寶 『無上祕要』卷九靈官昇降品「不勤帝局、虧替正事、降適過禮、朝晏失節、輕泄天寶、降授不真、皆削眞皇之錄、退紫虛之位、置於中玄清微遊散靈官、…右出四極明科」。

(16) 百獸拊舞、鳳凰數十來至和籥聲 『尚書』益稷「夔曰、…籥韶九成、鳳凰來儀、夔曰、於、予擊石拊石、百獸率舞、庶尹允諧」。

(17) 太極公卿諸司命 『登真隱訣』卷上「道傳於世」、注「其流珠經云、太極公卿司命之所行、中君小君亦得受之」。

(18) 霍山赤城 『眞誥』卷一一葉一六裏「司命君自在東宮、又書不

應總合、德有輕重之故也」、注「司命常住大霍之赤城」。

- (19) 李仲甫 『眞誥』卷一二葉三裏「慈顔色甚少、正得鑪火九華之益」、注「左慈字元放、李仲甫弟子、即葛玄之師也」。『雲笈七籤』卷四道教相承次第錄「太上老君命李中甫出神仙之都、以法授江南左慈字元放、故令繼十六代爲師相付」。

- (20) 韓衆 『楚辭』遠遊「奇傳說之託辰星兮、羨韓衆之得一」、王逸注「衆、一作終」。『眞誥』卷一二葉一四裏「韓終授其岷山丹、服得仙」。『眞靈位業圖』第四左位「韓終」。『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)七十二福地「第二十三洞眞墟、在潭州長沙縣、西嶽眞人韓終所治之處」。

- (21) 東軫執事 『眞誥』卷二葉九表「復二十二年、明君將乘龍駕雲、白日昇天、先詣上清西宮、北朝玉皇三元、然後乃得東軫執事矣」。

- (22) 行日中無影 『淮南子』地形訓「建木在都廣、衆帝所自上下、日中無景、呼而無響、蓋天地之中也」。『抱朴子』金丹「又韓終丹法、漆蜜和丹煎之、服可延年久視、日中無影」。

- (23) 唯戒及詩各一條耳 南極夫人のもものは『眞誥』卷六葉九裏、西城王君のもものは同卷六葉六裏、玄清夫人のもものは同卷六葉八裏に見える。

行此四道、按玉玄上法、一年便驚視聽、自可勉之學之無疑。〈中君此事失前紙、不知是何法也〉

太極眞人云、「讀道德經五千文萬遍、則雲駕來迎、萬遍畢未去者、一月二讀之耳、須雲駕至而去」。

右二條某書。

この四つの道術を行うのだ。玉玄上法によると、一年すれば人々の視聽を驚かせることになる。勤め行つて疑つてはならぬ。〈茅中君のこの事は、前の部分の紙がなくなっているのです、どんな方法なのかは分からない〉

太極眞人が言われた。『道德經』五千文を一萬回讀むと、雲の車が迎えにやつて来る。一萬回讀み終わっても天上へ行けない者は、さらに一月に二回ずつ讀むことだ。雲の車がやつて来て、行けるだろう」。

右の二條は、某の書。

(1) 讀道德經五千文萬遍 『周氏真通記』卷四「九月二十五日、忽

夢見張理禁令誦道德」、注「道德二篇實道書之宗極、太極真人

亦云、誦之萬過、白日昇天」。

山世遠受孟先生法、暮臥、先讀黃庭內景經一過乃眠、使人魂魄自  
制鍊、恆行此二十一年亦仙矣、是爲合萬過、夕得三四過乃佳、北嶽  
蔣夫人云、「讀此經亦使人無病、是不死之道也」。〔此〕〔二〕十  
年夕一過、不得萬遍、一恐應爲七、或爲八字、不爾、夕則三過耳

存五星、當謹按八素、以王星爲始、存以生氣時、若不王星先出者、  
故宜不先存王也、至於視星入室任意耳、唯以懃感爲上耳、亦不必須  
都見星、然後速通也、視之亦審耳。

清靈君告。

存思要法、當覺目觀五星於方面、竝乘芒而下行我、然後依王星下  
而存王星、但吞咽一芒、畢又當鎮星下、又存鎮星、良久、總五星各  
一芒、使俱入口而咽之、如鎮星、星過數也。〔此一事異法、經中無此  
說〕

若頓存五星、自當依常法、不心存對星下也。〔依此言則後是單修法  
也〕

六月一日夜、青靈真人言。〔右四條楊書、青當爲清也〕

(1) この段、『眞誥』卷一五葉一〇表に見える。また、『雲笈七籤』

卷四五祕要訣法にも「孟先生訣第二十五」として見える。

(2) 愈本が「一」を「二」に作るのに従う。

山世遠が孟先生から授かった法。夕暮れに横になって、まず『黃  
庭內景經』を一度讀んでから眠る。すると人の魂魄が自然に鍊磨さ  
れる。常にこれを二十一年間行うと仙人になれる。つまり全部で一  
萬回になるからである。夕方に三、四回讀むことができれば、ずっ  
とよい。北嶽蔣夫人が言われた。「この經を讀めば、病氣にもかから  
なくさせる。これは不死の道です」。二十一年間で毎夕一回では、  
一萬回にならない。「一」は多分「七」か「八」の字であろう。さも  
なければ、毎夕に二、三回するのであろう。

五星を存思するには、謹んで八素に基づき、王の星から始めて、

生氣の時に存思すべきである。もし王の星が先に出ていなければ、もとより先に王の星を存思しなくてもよい。星を見つめてするか、靜室に入つてするかは自由である。ただひたすら心をこめてやるのが何よりだ。また必ずしもすべての星を見たうえで、速やかに感通する必要はないが、星を見つめてやればはつきりとする。

清靈君のお告げ。

存思の要法は、目を開けて五星をそれぞれの方向にはつきりと見、五星それぞれが光芒に乗つて自分のところの下つて來るのを見るべきである。それから王の星が下つて來るままに王の星を存思し、ただ一本の光芒だけを呑みこむ。それが終わり、また鎮星が下つて來るとまた鎮星を存思し、しばらくしてから五星それぞれの一本の光芒をまとめて口の中に一緒に入れさせて呑みこむ。(他の四星についても)鎮星に對してと同じようにやる。存思する星の数は五の數を上回る。(この一事は普通とは違つた方法で、經中にこのような説はない)

もし一氣に五星を存思するには、通常のやり方<sup>③</sup>に従うべきであつて、心の中で對象とする星が下つて來るのを存思するのではない。(この言葉によれば、後の(清靈君の)方法は個別に一つの星<sup>④</sup>ごとにやる方法である)

六月一日の夜、青靈真人のお言葉。(右の四條は楊羲の書。「青」の字は「清」に作るべきである)

(1) 存五星 『清靈真人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「第一、

思存五星、以體象五靈、存之法、常於密室、以夜半後生氣之時、服挹五方之氣、於寢牀上平坐、向月建所在、先叩齒九通、咽液三十過、畢、存想五星、使北方辰星在頭上、東方歲星在左、西方太白星在右、南方熒惑星在膝中間、中央鎮星在心中、久久行之、出入遠行、常思不忘、無所不却、萬禍所不能干也」。

(2) 以王星爲始 『雲笈七籤』卷二三・三奔錄奔辰「木春王、火夏王、金秋王、水冬王、…一夕服五星、常令周遍、隨王月以王星爲先」。

(3) 常法 『眞誥』卷二三葉二裏「其存明鏡、非世間常法也」。

(4) 單修法 『登眞隱訣』卷上「存思三二洞房九道諸要道也」、注「諸單修明堂洞房玄丹者、皆先存祝如此」。

③ 日中五帝字曰、「日魂珠景昭韜綠映迴霞赤童玄炎飄象」、凡十六字、此是金闕聖君探服飛根之道、昔受之於太微天帝君、一名赤丹金精石

景水母玉胞之經。

右英云、「珠圓會暉韜綠凝、日霞煥明、赤童秉靈、玄炎散光、飄象鬱清、此日之勢也、神之威也」。〈此說按紫文曰日魂事、義旨不正可領〉

右二條公書。

(1) この段、『太上玉晨鬱儀結璘奔日月圖』、『皇天上清金訣帝君靈書紫文上經』、『上清黃庭內景經』瓊室章第二十一(『靈寶七籤』卷一一)などに見える。

日中五帝字に「日魂珠景昭韜綠映迴霞赤童玄炎飄象」とある。すべて十六字で、これは金闕聖君<sup>①</sup>の探服飛根<sup>②</sup>の法であり、昔、太微天帝君から授かった。一名、「赤丹金精石景水母玉胞之經<sup>③</sup>」である。

右英夫人が言われた。「珠のような圓い玉は輝きを集め、緑の光を韜んで固まる。日に映える霞は明るく輝き、赤童は靈妙な光をまとめてとる。玄い炎の神は光を散らし、飄風の象が清らかな空に盛ん

に充ちている。これは日の力です。これは神の威力です」。〈ここに述べているのは、『紫文』によれば日魂のことであるが、意味は正しくは理解できない〉

右の二條は某の書。

(1) 金闕聖君 『無上祕要』卷二〇仙歌品「於是夫人受錫事畢、王母及金闕聖君：靈酣終日、講寂研无」。

(2) 飛根 『無上祕要』卷九四昇太空品「上清金闕靈書紫文、探服日華飛根、以散解死結、保凝泥丸、混生雌雄、固魂養神、身得玉皇、氣同三光、案此吞氣之法、昔受之於太微天帝君、一名赤丹金精石景水母玉胞之經也」。

(3) 赤丹金精石景水母玉胞之經 『眞誥』卷五葉二裏「君曰、道有赤丹金精石景水母」。また、前注を参照。

扶晨始暉生、紫雲映玄阿、煥洞圓光蔚、晃朗濯耀羅、眇眇靈景元、森灑空清華、九天館玉賓、金房<sup>②</sup>「唱」霄歌。

右大洞眞經中篇、今鈔數行。〈今洞經亦有此四句〉

外國呼日爲濯耀羅、方諸真人呼日爲圓羅曜、夢見此濯耀羅者、日之應也、紫雲中人者、胎宮神也、玄眞之道矣、日德摩澤、長生之象、紫雲罔晨、魂魄安也、身康神寧、從此始矣。

辭四通已呈、意氣安和。〈此楊君自與長史書語耳〉

右英疏大洞眞經言、以釋夢濯耀羅之義也如別。〈此亦自語也、長史夢事不顯〉

右四條楊書。

(1) この段、『上清大洞眞經』第三章、『雲笈七籤』卷四二大洞眞經三十九眞法に見える。

(2) 『上清大洞眞經』が「煙」を「唱」に作るのに従う。

扶晨に始暉の光が生じ、紫雲が奥深い山のくまに照り映えている。圓光蔚はどこまでも輝き、濯耀羅は明るく光っている。靈妙な光のもとは遙かに遠く、空に清らかな光があふれている。九天には高貴な賓客が宿り、金房には大空の歌が流れている。

右は『大洞眞經』中篇から、今ここに數行を書き記したもの。〈今の『大洞眞經』にもこの四句がある〉

外國では日を濯耀羅と呼び、方諸真人は日を圓羅曜と呼ぶ。この濯耀羅を夢に見るのは日の感應である。紫雲の中に見える人は、胎宮の神であり、玄眞の道である。日の徳は恩澤を施し、長生のしるしであつて、紫雲が朝の空を覆えば、魂魄は安らぐ。身體が健康で精神が安寧になるのは、ここから始まる。

四通の文書を認めてすでに(右英夫人に)上呈しました。氣分は和らいだことでしょう。〈これは楊君が許長史に與えた手紙の言葉である〉

右英夫人が『大洞眞經』の言葉を書き抜いて、濯耀羅を夢に見ることの意味を解釋したのは、別のとおり。〈これも(楊君)自身の言葉である。許長史の夢のことは明らかでない〉

右の四條は楊羲の書。

(1) 扶晨始暉生 『眞誥』卷一四葉二三裏「季主讀玉經、服明丹之

華、挹扶晨之暉」。

(2) 圓光蔚 『無上祕要』卷三曰品「三天真人呼曰爲圓光蔚、…右出大洞正經注」。

(3) 靈景 『紫陽真人內傳』「三一者太微之玄眞、上清之元圖、一曰洞眞、二曰妙經、三曰素靈、東海小童君藏之於靈景之城、琳霄之室、非有仙籍者不授矣」。『三洞珠囊』卷五坐忘精思品「上清變化七十四方經云、…招靈景之幽華、榮朽老以長存」。

(4) 金房 『無上祕要』卷二〇仙歌品「結駕出九玄、金房蕭寥閑、龍駟乘三雲、神風扇飛煙、…右出太上真人八素陽歌九章」。

(5) 大洞眞經中篇 『雲笈七籤』卷三〇帝一混合三五立成法「故大洞眞經中篇曰、…」。

(6) 胎宮神 『太一帝君太丹隱書』(『雲笈七籤』卷四四)「太一者、胞胎之精、變化之主、魂魄生於胎神、命氣出於胞府、變合帝君、混化爲人」。

眞誥卷之十

協昌期第二

微誠因理感、積精洞幽眞、斐斐乘雲絲、靈像憑紫煙、眇眇濯圓羅、

佛佛駕飛輪、玄翰啓矇昧、顧景恩自新。〈長史既開啓告、賦詩一篇、本注之、此即酬釋夢之旨也、長史自書〉<sup>①</sup>凡眞書及古書作髻髯字、皆作彷彿字、此則是髻髯也、此字已下至也字竝朱書

<sup>②</sup>范幼冲、遼西人也、受胎化易形、今來在此、恆服三氣、三氣之法、存青炁白氣赤氣各如綫、從東方日下來、直入口中、挹之九十過、自飽便止、爲之十年、身中自有三色氣、遂得神仙、此高元君太素內景法、且且爲之、臨目施行、視日益佳、其法鮮而其事甚驗、許侯可爲之矣。〈范即是華陽中監也、事在第四卷〉

右一條楊書。

<sup>③</sup>東海東華玉妃淳文期授含眞臺女眞張微子服霧之法、常以平旦、於寢靜之中、坐臥任己、先閉目內視、彷彿使如見五藏「凡眞書及古書作髻髯字、皆作彷彿字、此則是髻髯也、此字已下至也字竝朱書」、畢因口呼出氣二十四過、臨目爲之、使目見五色之氣、相纏繞在面上鬱然、因入口內此五色氣五十過、畢咽液六十過、畢乃微呪曰、「太霞發暉、靈霧四遷、結氣琬屈、五色洞天、神煙含啓、金石華眞、藹鬱紫空、鍊形保全、出景藏幽、五靈化分、合明扇虛、時乘六雲、和攝我身、上升九天」、畢又叩齒七通、咽液七過、乃開目事訖、此道神妙、又神州玄都多有得此術者、久行之、常乘雲霧而遊也。

右一條楊書、又掾寫。

守玄白之道、常旦旦坐臥任意、存泥丸中有黑氣、存心中有白氣、存臍中有黃氣、三氣俱生、如雲氣覆身、因變成火、火又繞身、身通洞徹、內外如一、旦行、至向中乃止、於是服氣一百二十、都畢、道正如此、使人長生不死、辟却萬害、尤禁六畜肉五辛之味、當別寢處靜思、尤忌房室、房室即死。

初存出氣如小豆、漸大衝天、三炁纏煙繞身、共同成一混、忽生火在三煙之內、又合景以煉一身、一身之裏、五藏照徹、此亦要道也。

右二條有掾寫、并右三事在論華陽第四卷中、今又重鈔可修事出此耳、其本文猶在彼卷。

- (1) これ以下三十一字は、別條(卷一〇葉一裏)「彷彿」について  
の注の錯簡であろう。
- (2) この段、『登眞隱訣』卷中に見える。
- (3) この段、『登眞隱訣』卷中に見える。
- (4) この段、『登眞隱訣』卷中に見える。

眞誥卷十

協昌期第二

ささやかな眞心は道理に従って天に感通し、  
精進を積み重ねて奥深い眞の世界に貫き入る。

あでやかに色どり豊かな雲に乗り、

靈人の姿は紫のまやに寄りかかる。

遙か遠くには清らかな圓い太陽、

空飛ぶ車に乗っているように見える。

深遠なお手紙が愚かな私の目を開かせた、

自分を顧みて新しい人間に生まれ変わったことを有難く思います。

〈許長史は(眞人に夢のことを)申し上げたうえ、詩一篇を作り、本人が自分で書きつけた。これは許長史の夢を(右英夫人が)解釋した旨に答えたものである。許長史が自分で書いたもの〉

范幼沖<sup>②</sup>は遼西の人である。胎化を受けて肉體を變え<sup>③</sup>、今、ここにやって来て、常に三氣を服している。三氣を服する法というのは、青氣、白氣、赤氣がそれぞれ絲すじのようになって、東方の日の下からやって来て、そのまま口の中に入るのを存思し、それを九十回くみ入れて、腹一杯になればそこで止める、というものである。これを十年間行えば體の中に自ずから三色の氣が生じ、神仙になるこ



とができる。これは高元君太素内景法である。毎朝これを行い、わずかに目を開けて實行する。日を見ながらやればもつとよい。この仙法は分かりやすいが、實のところとても効果がある。許侯はこれを行うがよい。〔范は華陽洞天中の監である。このことは第四卷に見える〕

右の一條は楊羲の書。

東海の東華玉妃淳文期が含眞臺の女眞張微子に授けた服霧の法。常に夜明け方、寢臥している靜室の中で行う。坐つていても横になつていてもよい。まず目を閉じて内視し、彷彿に五臟を見るようにする〔およそ眞人の書體と古い書體は、「髣髴」の字をすべて「彷彿」の字に作っている。これはつまり髣髴である。この字以下、(この條末尾の「也」の字に至るまですべて朱書である)。それが終わると、そのまま口から氣を二十四回吐き出す。わずかに目を開けてこれを行い、五色の氣がからまりあつて顔の上で鬱然としているのを見るようにする。そして、この五色の氣を口に入れることを五十回行う。それが終わると、唾を六十回呑みこむ。それが終わると、小聲で次の呪文を唱える。「太霞が輝きを發し、靈妙な霧は四方に移る。結ばれた氣はしなやかにわだかまり、五色の氣が天を貫く。神煙がすべてを包んで開け起こり、金石が眞實の輝きを發する。氣が一面に立ちこめる紫の天空で、體を鍊成して完きを保つ。光を外に出し幽玄

さを内に秘め、五靈は變化し分かれていく。明るさと一體になつて大空にあがり、時には六雲に乗る。わが身を調え養つて、九天に上昇する」。呪文が終わると、さらに七回叩齒し、唾を七回呑みこみ、そこで目を開いて、事がすべて終わる。この道は神妙であり、また神州玄都にはこの道術を體得した者が澤山いる。長い間これを行えば、常に雲霧に乗つて遊ぶことができるようになる。

右の一條は楊羲の書。また許掾の寫しがある。

玄白を守る道術。常に毎朝、坐つていても横になつていてもよいが、泥丸の中に黑氣があり、心臟の中に白氣があり、臍の中に黃氣があるさまを存思する。三氣がともに生じて雲氣のように身を覆い、それがそのまま變化して火となり、火がさらに體にまつわる。體全體が貫き通り、内と外が一つようになる。朝、これを行い、正午近くなつてようやく止める。そこで、氣を百二十回復して、すべてが終わる。(玄白を守る)道術は以上のとおりである。人を長生不死にさせ、あらゆる障害を退ける。六畜の肉と五辛の味は、とりわけ禁忌である。また、家族と寢處を別にし、靜思しなければならぬ。とりわけ房室のことは禁忌である。房室のことがあれば、すぐに死ぬ。

初め、小豆くらいの大きさの氣が出てきて、それが次第に大きく

なつて天を衝くのを存思する。三氣のからまりあつた煙が體にまつわり、それらが全部、一つの混然とした塊になる。突然、三氣の煙の中に火が生じる。さらに景と合體して體全體を鍊りあげる。體全體の中では五臓があかあかと輝きわたる。これもやはり重要な道術である。

右の二條は許掾の寫しがある。右の三事とあわせて、華陽洞天のことを論じた第四卷中にあるが、今さらに重ねて、實修すべき事柄を抜き書きしてここに出したのである。その本來の文は、やはりそちらの卷にある。

(1) 啓告 『真誥』卷一九葉五裏「又云、疾者當啓告於玄師、不爾不差」。『周氏冥通記』卷二「書一白藤紙」、注「燒香啓告以受之」。

(2) 范幼冲 『眞靈位業圖』第六右位「監二人」、注「范幽冲、遼西人、漢尙書郎」。

(3) 受胎化易形 『雲笈七籤』卷九〇連珠「陰陽粹靈、胎化而成、乃成乃生、乃性乃情」。『漢武帝內傳』「子但愛精握固、閉氣吞液、氣化血、血化精、精化液、液化骨、行之不倦、神精充盈、爲之一年易氣、二年易血、三年易脈、四年易肉、五年易髓、六

年易筋、七年易骨、八年易髮、九年易形、形易則變化、變化則道成、道成則位爲仙人」。

(4) 高元君 『洞眞高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』「兆常以本命日、若八節日、或朔望日、用生炁之時、正坐向本命之方、接手端心、存金華洞房雌一宮中有三素高元君及帝君玄父玄母凡四女子二男子合六人也」。

(5) 事在第四卷 『真誥』卷一三葉七表を參照。

(6) 淳文期 『真誥』卷一三葉四裏および『眞靈位業圖』第二女眞位では、淳文期に作る。

(7) 含眞臺 『真誥』卷一二葉一四表「洞中有易遷館含眞臺、皆宮名也、…含眞臺是女人已得道者、隸太元東宮中、近有二百人」、注「前云八十三人、止是易遷耳、含眞既爲貴勝、當須遷轉、乃得進入也」。

(8) 服霧之法 『真誥』卷一九葉八表「猶如日芒日象玄白服霧之屬」。

(9) 五色之氣 『洞眞高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』「五神乃各吐五色炁、以薰北斗七星、滿兆口中、五色炁出、上薰營室」。

(10) 玄都 『元始上眞衆仙記』「眞記曰、玄都玉京七寶山週迴九萬里、在大羅之上、城上七寶宮、宮內七寶臺、有上中下三宮、如一宮城」。

(11) 守玄白之道 『真誥』卷一三葉一四裏「葉一五裏を參照」。

(12) 雲氣覆身 『皇天上清金闕帝君靈書紫文上經』「赤氣轉大、覆

身、下流身體、上至頭頂、變而成火、因以繞身、使匝一身、令內外洞徹、有如然炭之狀」。

- (13) 身通洞徹、內外如一 『洞真高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』  
「次存日月二象、欸然混化爲一明珠、如雞子大、中黃之狀、內外洞徹」。

- (14) 萬害 『抱朴子』金丹「若服半兩、則長生不死、萬害百毒、不能傷之」。  
『紫陽真人內傳』「一則消除萬害、一則形軀不败」。

- (15) 六畜 『周禮』天官庖人「庖人掌共六畜六獸六禽」、注「六畜、六牲也、始養之曰畜、將用之曰牲」、疏「掌共六畜者、馬牛羊豕犬雞」。

- (16) 五辛 『洞真高上玉帝大洞雌一玉檢五老寶經』「五辛爲拔藏之斧、酒色爲破身之刀」。

- (17) 房室 『禮記』月令「是月也、命奄尹、申宮令、審門閭、謹房室、必重閉、省婦事、毋得淫」。  
『雲笈七籤』卷五九項子食氣法「斷情慾者則能絕房室」。

太極真人敕酆臺北帝「使」〔告〕〔三〕「此三字被後人贗、不可復識」  
官制神滅鬼靈符、盛以重紫之囊、「係之頭上、入縊淹脫也」  
此九字又被青贗、〔刀〕<sup>①</sup>「乃」不可都識、而非今所書字、衛符有三天直使者二人、凶鬼萬邪有千佩符者即死。  
〔此下復有十字、亦被贗、不可

復識〕男女各佩一、已別題之。

小君今書此符、相與佩之、在玉馬經上、一名北帝書。〔七元符中有一符無題、相傳言是此符、而玉馬經世未嘗見、不敢爲定〕

一雄黃、二雌黃、三鉛黃。

右三黃華、先投朱砂一、熟研之於器中、次投雄黃、熟研之、次投雌黃、熟研之、次投鉛黃、合研之、良久成也〔以膠清合研之、言一者、以意爲之一分之品量多少也。〔此是諺作三黃色以畫符法、眞符多用此〕

右三條楊書。

(1) 俞本が「刀」を「乃」に作るのに従う。

「太極真人敕酆臺北帝「使」〔告〕〔三〕「この三字は後人によって塗りつぶされていて、識別できない」  
官制神滅鬼靈符」(太極真人が酆臺の北帝に敕し三官に告げて鬼神を制壓し消滅させる靈符)。濃い紫色の袋に入れ、「係之頭上、入縊淹脫也」〔この九字もまた青く

塗りつぶされていて、全部を識別することはできないが、今の人が書く字ではない(これを頭の上につける。不淨の地に入ればはずす)。符を衛る者として、三天直使者二人がおり、もろもろの凶惡な邪鬼で、符を佩びている人を犯そうとする者がいると、ただちに死ぬ(この下にもさらに十字あるが、やはり塗りつぶされていて識別できない)。男女それぞれ一つの符を佩びる。すでに別にその符の題を記した。

小君は今、この符を書いて、相手に與えて佩びさせている。『玉馬經』に載っている。一名、『北帝書』という。『七元符』の中に、題のない一つの符がある。それがこの符であると傳えられているが、『玉馬經』は世に現れていないので、定かなことは言えない。

# 一、雄黃<sup>(7)</sup> 二、雌黃<sup>(8)</sup> 三、鉛黃<sup>(9)</sup>。

右、三種の黃華。まず朱砂<sup>(1)</sup>を投じ、器の中でこれをよく碎く。次に雄黃を投じ、これをよく碎く。次に雌黃を投じ、これをよく碎く。次に鉛黃を投じ、全部一緒にすりあわせる。しばらくすると、出来あがる。(にかわの透明なものですりあわせるのである)「一」というのは、好きなように一定の分量の加減を決めてやればよいのである。(これは三黃色を作って符を畫く方法を論したのである。眞符には多くこれを用いる)

右の三條は楊羲の書。

(1) 鄧臺 『眞誥』卷一六葉八裏「庾生者晉庾太尉也、北帝往用爲撫東將軍、後又轉爲東海侯、今又用爲鄧臺侍帝晨右禁監」。

(2) 盛以重紫之囊、係之頭上 『洞眞太微金虎眞符』「右金虎眞符、

太微天帝君以傳金闕帝君、朱書白素、盛以紫錦囊、佩之著頭上」。「登眞隱訣」卷上「太極帝君眞符、：佩頭上、盛以錦囊」。

(3) 三天直使者 『眞誥』卷一〇葉二三裏「此是三天前驅使者捕鬼之法」。

(4) 凶鬼萬邪 『雲笈七籤』卷四六祕要訣法三元八節朝隱祝第二十  
四「若欲呪伐六天、滅諸凶鬼者、乃可小發聲耳」。

(5) 玉馬經 『雲笈七籤』卷四上清經述「於是清虛真人王君乃命侍女華散條李明允等、使披雲縑開玉笈、出太上寶文八素隱書大洞眞經靈書紫文八道紫度炎光石精玉馬神眞虎文高仙羽玄等經三十一卷、是王君昔於陽洛山遇南極真人西城王君所授者也」。

(6) 七元符 『洞眞太微金虎眞符』「豁落大符」以下に「日元」「月元」「歲元」「癸惑元」「太白元」「辰元」「鎮元」の各符が見える。

(7) 雄黃 『重修政和證類本草』卷四玉石部中品「雄黃、味苦、平、寒、主寒熱鼠瘻惡瘡疽痔死肌、殺精物惡鬼邪氣百蟲毒、勝五

兵、鍊食之、輕身神仙」。

- (8) 雌黃 『重修政和證類本草』卷四玉石部中品「雌黃、味辛、平、主惡瘡頭禿癩疥、殺毒蟲蝨身癢邪氣諸毒、鍊之、久服、輕身、增年不老」。

- (9) 鉛黃 『靈寶七籤』卷七一太清丹經要訣造小還丹法「石亭脂四兩、水銀一斤、鉛黃華三兩、金一兩成薄者、右水銀金鉛黃等、加功細研」。

- (10) 黃華 『靈寶七籤』卷五三太上丹景道精隱地八術「仰注玄精、吞嚥黃華、身生飛羽、輕舉登霞」。

- (11) 朱砂 『抱朴子』黃白「朱砂爲金、服之昇仙者、上士也」。『南史』卷七六隱逸下陶弘景傳「弘景既得神符祕訣、以爲神丹可成、而苦無藥物、帝給黃金朱砂曾青雄黃等」。

- (12) 膠清 『齊民要術』卷九煮膠第九十一「煮膠法、…近盆末下、名爲笨膠、可以建車、近盆末上、即是膠清、可以雜用、最上膠皮如粥膜者、膠中之上」。

- (13) 眞符 『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷二入定品「復授之以神虎眞符、使威誠六天、…且太微帝君所寶有金虎眞符、以制天地神靈」。

合藥當令精、不精者不自咎、反責方之不驗、若是人可謂咎乎、可

使鈔方合耳、可用昌蒲五兩、所以用十兩末、知道門戶之人耳、可用茱萸根皮二兩紫雲芝英三兩。

此〔用〕「周」君口訣。〔此是論合初神丸事、其方在蘇傳中、即周紫陽所撰、故受此訣、是告長史也〕  
右一條公書。

(1) 意をもつて「用」の字を「周」の字に改める。

藥を調合する場合には、純精に作らなければならない。純精に作らなかつた者は、(失敗した時)自分を咎めることはせずに、かえつてその處方に效きめがないと非難する。このような人こそ咎めるに値する者と言ふべきであらう。處方を抜き書きして調合させるがよからう。

昌蒲<sup>①</sup>五兩を用いるのがよい。十兩の粉末を用いるのは、道の門戶を知る人だけである。茱萸<sup>②</sup>の根皮二兩と紫雲芝英三兩を用いるのがよい。

これは周君の口訣である。(これは初神丸<sup>③</sup>を調合することを論じている。その處方は『蘇傳』の中に載っており、それは周紫陽が撰述したものである。だから、この口訣を授けられたのである。これは

許長史に告げたものである

右の一條は人の書。

(1) 昌蒲 『重修政和證類本草』卷六草部上品之上「昌蒲、味辛、

溫、無毒、主風寒濕痺、欬逆上氣、…久服、輕身、聰耳目、不忘不迷、或延年」。『南方草木狀』卷上草類「菖蒲、番禺東有澗、澗中生菖蒲、皆一寸九節、安期生採服仙去、但留玉焉焉」。

(2) 茱萸 『重修政和證類本草』卷一三木部中品「吳茱萸、味辛、溫、主溫中下氣、止痛、…殺三蟲、一名藪」。『西京雜記』卷三

「九月九日、佩茱萸、食蓬餌、飲菊華酒、令人長壽」。

(3) 初神丸 『玄洲上卿蘇君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「凡欲求真、當先服制蟲丸、制蟲丸者、一名初神去本丸也」。

(4) 周紫陽所撰 『紫陽真人內傳』「可先服制蟲細丸、以殺穀蟲、…

殺之方、用附子五兩、麻子七升、地黃六兩、茱萸根大者七寸、朮七兩、桂四兩、雲芝英五兩、凡七種、先取菖蒲根、煮釀作酒、使清醇重美、一斗半以七種藥咬咀、內器中漬之、亦可不用咬咀、三宿乃出、暴之令燥、又取前酒汁漬之、三宿又出暴之、須酒盡乃止、暴令燥、內鐵臼中擣之、下細篩令成粉、取白蜜和之、令可丸、以平旦東向、初服二丸如小豆、漸益一丸、乃可至十餘丸也、治腹內疝實上氣、心胸結塞、益肌膚、令體輕有華

光、盡一劑則穀蟲死、蟲死則三尸枯、枯則自然落矣、亦可數作、不限一劑也」。

成治朮一斛、清水潔洗令盛、訖乃細搗爲屑、以清水二斛合煮令爛、以絹囊盛、絞取汁、置銅器中、湯上蒸之、內白蜜一斛、大乾棗去核、熟細搗、令皮肉和會、取一斛、又內朮蜜之中、絞令相得如餠狀、日食如彈丸三四枚、一時百病除、二時萬害不傷、三時面有光澤、四時耳目聰明、三年顏如女子、神仙不死。

又法、成朮一斛、水盛洗、洗乃乾、乾乃細搗爲屑、大棗四斛、去核乃搗令和合、清酒五斛、會於銅器中、煎攪使成餅狀、日服如李子三丸、百病不能傷、而面如童子、而耐寒凍。

又法、朮散五斤、茯苓煮三沸、搗取散五斤、右二物合和、更搗三千杵、盛以密器、日服五合、百災百毒百疫不能犯、面童而壯健、久服、能飛越峯谷、耳聰目明矣。(此三方有據寫、似是紫微夫人所授、繼朮敘後者)

成治朮一斛。清らかな水できれいに洗い、清淨にしてから、細か

く搗いて小片にする。清らかな水二斛を合わせ、煮て煮くずれさせる。絹の袋に入れ、絞って汁を取る。それを銅の器に入れ、湯の上で蒸し、白蜜<sup>①</sup>一斗を入れる。乾燥させた大きい棗で核を取り去ったものを<sup>②</sup>、じっくり細かく搗いて、皮と肉が練り合わさるようにする。それを一斗取り、さらに朮と蜜の中に入れ、絞ってなじみあわせて餹<sup>あは</sup>状にする。日ごとに彈丸状のもの三、四個を服用する。最初の期間に、もろもろの病氣が除かれる。第二の期間には、もろもろの傷害に損なわれなくなる。第三の期間には、顔に光澤が現れる。第四の期間には、耳と目のはたらきがよくなる。三年すれば、顔は乙女のようになり、神仙になって不死となる。

またの調劑法。成朮一斛。水できれいに洗い、洗ってから乾かす。乾いてから細かく搗き小片にする。大きい棗四斗を、核を取り除いてから、搗いて混ぜ合わせる。清酒五斗を銅の器の中で合わせ、煮ながらかき混ぜて餹<sup>だんじ</sup>状にする。日ごとに李の實ほどのもの三個を服用すれば、もろもろの病氣に傷つけられなくなり、顔は兒童のようになり、凍てつく寒さに耐えられるようになる。

またの調劑法。朮の粉五斤。茯苓を煮て三回沸騰させ、搗いて粉状にしたもの五斤を取り出す。以上の二種の藥物を混ぜ合わせてから、あらためて杵で三千回搗き、密封した器に入れる。明け方に五

合を服用すると、もろもろの災難、毒氣、疫病は犯すことができなくなり、顔は兒童のようになつて壯健になる。長期間服用すれば、峰や谷を飛び越えることができるようになり、耳と目のはたらきがよくなる。(これら三種の處方には、許掾の寫しがある。紫微夫人が授けたもので、「服朮の紋」の後に續くもののである<sup>③</sup>)

(1) 白蜜 『南史』卷七六隱逸下陶弘景傳「永明十年、脫朝服挂神

武門、上表辭祿、詔許之、賜以束帛、敕所在月給茯苓五斤白蜜

二升、以供服餌」。『重修政和證類本草』卷二〇蟲魚部上品「石

蜜、味甘、平、主心腹邪氣諸驚癇瘕、安五藏諸不足、益氣補中

止痛、解毒、除衆病、和百藥、久服、強志輕身、不飢不老、一

名石飴」。

(2) 大乾棗去核 『重修政和證類本草』卷二三果部上品「大棗、味

甘、平、主心腹邪氣、安中、養脾助十二經、平胃氣、通九竅、

補少氣少津液身中不足、大驚、四肢重、和百藥、久服、輕身

長年」。『雲笈七籤』卷七七驪山老母絕穀麥飯術「黑豆、淨水淘

過、蒸一遍、曝乾去皮、又蒸一遍、又曝令乾、麻子、以水浸、

去皮、共棗同入甑中蒸、熟取出、去棗核、三味一處爛擣、又

再蒸一遍、第一服七日、三百日不飢、第二服四日、約二千日

不飢」。

(3) 繼此敘後 『眞誥』卷六葉一表を參照。

鍊麻腴法、清水三斛、麻腴一斛、薤白二斤、合三物會煎之、以木蓋蓋上、勿令腴煙散出、取一斛止、內酒中服之、亦可單服。〔此一方有長史寫、乃別出四藥丹方中、而世之方本又加葱白二斤〕

① 太極真人遺帶散、白粉、服一刀圭、當暴心痛如刺、三日欲飲、飲既足一斛、氣乃絕、絕即是死也、既歛、失尸所在、但餘衣在耳、是爲白日解帶之仙、若知藥名者、不復心痛、但飲足一斛、仍絕也、既絕已、自覺所遺尸者在地也、臨時自有玉女玉童以青輶與共來載之也、欲停者、當心痛三日、節與飲耳、其方亦可學家用、雲霞衣九兩是其首。〔此一條不知出何處事、即應是白翳散也、世未見方〕

右一條人書。

(1) この段、『無上祕要』卷八七尸解品に見える。

麻腴を練る法<sup>①</sup>。清らかな水三斛。麻腴一斛。薤白二斤。この三つの品物を合わせて一緒に煮る。木の蓋で蓋をし、麻腴の煙が散出し

ないようにする。一斛を取り出したところで止め、酒の中に入れて服用する。また單獨で服用してもかまわない。<sup>②</sup>この處方には許長史の寫しがある。「四蕊丹方」の中から別に抄出してきたものであるが、世間の處方書ではさらに葱白二斤を加えることになっている。

③ 太極真人の遺帶散。白粉狀。一刀圭を服用すれば、きっと必ず急激に心臓が刺すように痛む。三日すると水を飲みたくなる。飲んだ水の量が一斛になれば、氣が絶える。絶えるとはつまり死のことである。納棺し終わると、屍の在りかが失われ、ただ衣服のみが後に残る。これが白日解帶の昇仙である。<sup>④</sup>もし藥の名を知っていれば、もはや心臓が痛むことはない。ただ飲んだ水の量が一斛になると、やはり氣が絶える。氣が絶えてから、後に残した屍がその場所に残っているのに氣がつく。その時に、自然に玉女や玉童が現れ、青い幌の車で一緒にやって来て乗せてくれる。留まりたいと思えば、きっと必ず心臓が三日間痛むが、飲む量を加減すればよい。その處方は、一家を擧げて用いてもかまわない。雲霞の衣九兩が(昇仙して)最初にもらうものである。〔この一條はどこに出ていることなのか分からない。つまりきつと白翳散なのであろう。世間には、まだこの處方は見えていない〕

右の一條は某の書。



(1) 鍊麻腴法 『雲笈七籤』卷六八太上八景四蕊紫漿五珠降生神丹方「鍊麻腴之法、用清水五斛、麻腴一斛、葱薤白各三斤、合水腴葱薤四物、合煎取一斛止」。

(2) 可單服 『抱朴子』仙藥「又曰、五芝及餌丹砂玉札曾青雄黃雌黃雲母太乙禹餘糧、各可單服之、…地黃黃連之屬、凡三百餘種、皆能延年、可單服也」。

(3) 太極真人遺帶散 『雲笈七籤』卷八五に「太極真人遺帶散」が見える。

(4) 白日解帶之仙 『眞誥』卷四葉一五裏「人死、必視其形、如生人、皆尸解也、視足不青、皮不皺者、亦尸解也、…白日尸解自是仙、非尸解之例也」。

齋者不宜雜不齋者而相混、竝未體正道、後宜改之。

上道之高、神虎經是也、自非傳授者、皆不得令其見所寫之紙也、此又一未體矣。

南眞云、「寫神虎文不精、則萬物不爲己用心、將徒勞耳、得紙更留心謹寫燒香、先者寫上書、當恆燒香文之左右、亦初不能令專、使煙

清恆也、精誠務在匪懈、求道唯取於不倦耳、此又近於替乎、

夫得道者常恨於不早聞受、失道者常恨於不精勉、<sup>(1)</sup>「何」謂精耶、專篤其事也、何謂勉耶、恭繕其業也、既加之以檢慎、守之以取感者、則去眞近矣、爾其營之、勿忘也」。(此前五條竝似止告楊君)

(1) この段、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法常存識己形第二十二に見える。

(2) 愈本が「可」を「何」に作るのに従う。

齋戒をする者は、齋戒をしない者に雜つて一緒にいてはならぬ。まったくまだ正しい道が體得されておらぬ。今後改めるべきである。

上道の高等なものは、『神虎經』がそれである。傳授すべき者でない限り、すべて書寫した紙を見せてはならぬ。これもまだ體得できていない一つの證據である。

南眞が言われた。『神虎文』を書寫して精確でないと、萬物はおのれのために心をはたらかすことはない。むだに疲れるだけです。紙を手に入れば、あらためて心をこめて謹んで書き寫し、香を焚

く。先に上書を書寫するが、ずっと文の左右で香を焚き続けなければなりません。それでもやはりまったく専念できない場合は、香煙ですがしがしく落ち着くようにしなさい。誠實であるには、怠らないように務めることが肝要です。仙道を求めるには、ただ倦まずたゆまずすることが必要です。こうすれば怠慢に近づくことができるでしょうか。

そもそも道を得た者は、もっと早くに傳授されなかったことが常に悔まれる。道を失った者は、一心に勤めなかったことが常に悔まれる。何を「一心に」というのでしょうか。そのことに一意専心に勵むことなのです。何を「勤める」というのでしょうか。その営みを恭しくきちんと修めることなのです。それに加えて氣をひきしめ、その態度を守って靈感をつかむようにすれば、仙眞の道まであと一歩です。そなたはこれに勵みなさい。忘れてはなりません。〈以前の五條は、すべてただ楊君に告げられたもののようである〉

受書則師、乃恥之耶、眞心既有不盡、獲考者非一人、子往師蘇林守一、當先齋受戒、能得此度世、幾未可量也。

九華眞妃言、「守五科内一、是眞一之上也、皆地眞人法也」。

上黨王眞京兆孟君司馬季主、皆先按於此道而始矣、

魯女生邯鄲張君、今皆在中嶽及華山、正守此一、亦可得漸階上道而進、復爲不難也、五斗内一、涓子内法、昔所授於峨嵋臺中、本其外守一玄一之屬、莫有遠其蹤者也。

小君言。〈五科眞一、即今蘇傳中分至日所存用者是也〉

中君曰、「良勤不休、吾當與其流珠眞、此亦中眞之上道也」。〈流珠亦九宮家事、其經未出世、此前五條竝似令告牙也〉

又云、「性躁暴者、一身之賊病、<sup>③</sup>「心閑逸者、」求道之堅梯也、遂之者眞去、改之者道來、每事觸類、皆當柔遲而盡精潔之理、如此幾乎道者也」。〈此語似令告掾〉

小茅君云、「丹砂雄黃雌黃、家家皆有之、至於無一人合藥者也、皆如傳國璽印、父傳子、子傳孫耳、好道而不專、疲志而不固、華名鍾於胸心、榮味交於外視、萬萬皆是也、適足疲我三官之司矣」。〈此語似令告牙〉

可令許斧數沐浴、濯其水疾之氣也、消其積考之癭也、亦致眞之階。

右紫陽眞人言。

沐浴不數、魄之性也、違魄返眞、是續其濁穢自亡矣。

右紫微夫人言。

上道法、衣巾不假人、不同器皿者、車服床寢不共之也、所以過穢垢之津路、防其邪風之往來耳、此甚易行、而更以爲難、所爲信道不篤欲飛反沈者也、心違何必言哉、其自當知所爲。〈此三條以令告長史右南嶽夫人語。〉右十六條竝楊書、又雜掾寫

(1) この段、『登眞隱訣』卷上注に見える。

(2) この段、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法常存識已形第二十二に見える。

(3) 『雲笈七籤』卷四五祕要訣法の引文に従つて補う。

(4) この段、『登眞隱訣』卷中注、『無上祕要』卷六六沐浴品、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法常存識已形第二十二に見える。

道書を授けられれば、それが師なのだ。それなのに恥ずかしいと思うのか。<sup>①</sup>眞心が盡くされない點があつて、考罰を受ける者は一人にとどまらない。そなたは、かつて蘇林<sup>②</sup>を師として守一の法を行つ

た。まず潔齋を行い、戒律を受けなければならない。<sup>③</sup>この法を得て度世できるかどうかは、ほとんど測りかねる。

九華眞妃が言われた。「五斗内一を守るのは、眞一の上級の道です。すべて地眞人の法です」。

上黨の王眞、京兆の孟君、司馬季主たちは、皆まずこの道に基づいて始めた。

魯女生、邯鄲の張君たちは、今いずれも中嶽および華山で、ただこの一を守っているが、それでも一步一步、上道に昇つて前進するのも、困難ではない。五斗内一、涓子内法は、その昔、峨嵋山の臺中で授けられたもので、それ以外の守一と玄一の類を跡づけてみると、このやり方に及ぶものはないのである。

小君のお言葉。〈五斗眞一の法とは、今の『蘇林傳』中にある「二分二至の日に存用するところのもの」がそれである〉<sup>④</sup>

中君が言われた。「休むことなく精進せよ。私は流珠の眞を與えよう。これもやはり中眞の上道である」。〈流珠も九宮家<sup>⑤</sup>で言われている事である。その經典はまだこの世には出現していない。これ以前の五條は、すべて虎牙に告げさせられたものようである〉

また言われた。「性格ががさつで粗暴であるのは、一身にとつての弊害であり、心がのんびりとして靜かであるのは、求道のためのゆるぎなき階梯である。これを推し進めてゆけば、眞道は去つて行く。これを改めれば、眞道はやつて来るであらう。何事につけ、すべて柔軟にゆつたりと對處し、純粹で穢れなき道理を盡くせ。このようにすれば、得道も間近である」。この言葉は許掾に告げさせられたものようである」

小茅君が言われた。「丹砂、雄黄、雌黄は、どの家にもすべてある。けれども、一人として仙藥を調合する者はいないというありさまだ。皆まるで傳國の印璽のように、父は子に傳え、子は孫に傳えるだけだ。仙道を好みながら專念できず、心を疲れさせながら意志が固くなく、華やかな名聲への思いが胸中に集まり、榮達の味が視野の中に交錯する。どいつもこいつも皆このようなありさまだ。せいぜいわが三官の役人の手を煩わすのがおちだ」。この言葉は、虎牙に告げさせられたものようである」

許玉斧にしばしば沐浴をさせるがよい。その水疾の邪氣を洗い流させるのだ。その積み重なった考罰の傷を癒させるのだ。これも眞道に至る階梯なのだ。

右は紫陽眞人のお言葉。

沐浴をしばしば行わないのは、七魄がなさしめる本性なのです。七魄に背を向け眞道に立ち歸りなさい。そうすれば、穢らわしいものは洗練されて、七魄は自然と亡びるのです。

右は紫微夫人のお言葉。

上道の法では、衣服や手拭いを人に借りず、食器を共にしないと  
いわれるのは、車や衣服、寢床や寢具も(他人と)共用しないので  
す。それによつて、穢らわしいものがやつて来る道を塞ぎ、邪風の  
往來を妨げることができのです。これはとても實行しやすいのに、  
ことあらためて難しがるのは、いわゆる道を信じる氣持が篤くなく、  
飛び立とうと思ひながらかえつて淵に沈むというようなものです。  
心にびたりとかなうことは、どうして口で言う必要があります。し  
やるべきことは自分で分かるはずです。この三條は、許長史に告げ  
させられたものである」

右は南嶽夫人のお言葉。右の十六條は、すべて楊羲の書。許掾の  
寫しも雜っている」

(1) 受書則師、乃恥之耶 『眞誥』卷一九葉五裏「受經則師、乃恥

之耶、然則南眞是玄中之師、故楊及長史皆謂爲玄師」。

- (2) 蘇林 『眞靈位業圖』第三右位「玄洲上卿太極中候大夫蘇君」、注「名林字子玄、涓子弟子、周君師」。

- (3) 受戒 『太極真人數靈寶齋戒威儀諸經要訣』「受此戒者、心念奉行、今爲祭酒之人矣」。

- (4) 守五尉內一 『紫陽真人內傳』「斗中三一、宜以節日記之、爲二十年、三一見矣、見則長生成仙、家有三一、長生不滅、能存三一、名上玉札、…守三一、得爲地仙」。

- (5) 地眞人 『眞誥』卷一二葉四表「(賈)玄道：受學至勤、竝得眞道、今在太山支子小陽山中、此所謂地眞者也」。『雲笈七籤』卷五〇・三一九宮法「丹田宮有上元眞一帝君、帝君之卿、合三人、共治丹田宮、守三元眞一之道是也、此地眞之要路、…地眞人隱遁於官位、不勞損於朝宴、故從容任適、隨時而遊」。

- (6) 上黨王眞 『神仙傳』王眞を参照。『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「王眞」、注「上黨人也」。

- (7) 京兆孟君 『眞誥』卷二三葉二三表「其一承是咸陽樂長治、東卿司命君鄉里人也、…晚從中嶽李先生受道、行七元法得仙、一人是孟君入室弟子鄭雉正者、孟君所屬用」、注「孟君、京兆人、或呼爲孟先生、不知何名位」。『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「孟君」、注「京兆人也」。

- (8) 魯女生 『神仙傳』魯女生を参照。『眞靈位業圖』第六左位地

仙散位「魯女生」、注「在中嶽、…受行三一眞一」。

- (9) 邯鄲張君 『眞靈位業圖』第三右位「邯鄲張君」。『眞誥』卷一三葉一二表「趙威伯者東郡人也、少學邯鄲張先生、先生得道之人耳、晚在中嶽、授玉佩金鑑經於范丘林」。

- (10) 涓子內法 『紫陽真人內傳』「我受涓子祕要、善守三一之道」。

- (11) 玄一 『抱朴子』地眞「玄一之道、亦要法也、無所不辟、與眞一同功、吾內篇第一、名之爲暢玄者、正以此也、守玄一、復易

於守眞一、眞一有姓字長短服色、此玄一但自見之、初求之於日中、所謂知白守黑、欲死不得者也、然先當百日潔齋、乃可候求得之耳、…守玄一、并思其身分爲三人、三人已見、又轉益之、可至數十人、皆如己身、隱之顯之、皆自有口訣」。

- (12) 五尉眞一、即今蘇傳中分至日所存用者是也 『雲笈七籤』卷四九守五斗眞一經口訣「今謹按北帝自然之經云、法用正月三日當立春、二月十五日當春分、四月一日當立夏、五月十六日當夏至、七月七日當立秋、八月二十二日當秋分、十月五日當立冬、十一月十一日當冬至節、山林道士當用此法、若曉外曆日之八節、自宜按之、曆八節、蓋璇璣之正度、萬眞靈仙神明朝宴之日也、北帝自然發月數之中日、二景氣相隨之日、亦大吉時也、宜以修道建思、併而論之、吾從唯一」。また『上清金闕帝君五斗三一圖訣』を参照。

(13) 中君曰：『登眞隱訣』卷上「其明堂洞房丹田流珠四宮之經、皆神仙爲眞人之道、道傳於世」、注「其流珠經云、太極公卿司命之所行、中君小君亦得受之」。

(14) 九宮家 『登眞隱訣』卷上「凡頭有九宮、請先說之：」以下を參照。

(15) 濯其水疾之氣 『眞誥』卷一八葉一五裏注「恆須老及檳榔、亦是多痰飲意、故云可數沐浴、濯水疾之痕也」。

(16) 衣巾：『眞誥』卷一〇葉一九表「凡存神光行眞仙之事者、又不得以衣服借人、亦不服非己之物、諸是巾褐履屐之具、皆使鮮盛、三魂七魄、或栖其中、亦爲五神之忤忘汚沾故也」。

(17) 邪風之往來 『黃帝內經素問』陰陽應象大論「故邪風之至、疾如風雨、故善治者治皮毛、其次治肌膚」。

人臥床當令高、高則地氣不及、鬼吹不干、鬼悉之侵人、常依地而逆上耳。〈高謂三尺已上也〉

人臥室宇、當令潔盛、盛則受靈氣、不盛則受故氣、故氣之亂人室宇者、所爲不成、所作不立、一身亦爾、當數洗沐浴潔、不爾無冀。〈盛字是淨義、中國本無淨字、故作盛也、諸經中通如此〉

勿道學道、道學道、鬼犯人、亦不立、使人病、是體未眞故。〈青童亦云、「一言一事、泄減一算」、如此可不慎之、此三條本在鄧宮記中、楊書、又掾書

(1) この段、『眞誥』卷一五葉九裏、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法寢臥時祝第二十三、「上玄高眞延壽赤書」に見える。

(2) この段、『眞誥』卷一五葉九裏、『上清道類事相』卷四に見える。

(3) この段、『眞誥』卷一五葉九裏に見える。

人が寢臺に寝る時は、その高さを高くしなければならぬ。高ければ地氣は上つてこないし、鬼吹が犯す事もない。鬼氣が人間を犯す時は、いつも地面をつたってさか上つて来るのである。〈高くする〉とは三尺以上をいうのである

人が部屋で寝る時は、清潔にしなければならない。清潔であれば靈氣を受けるし、不潔であれば故氣を受ける。故氣が人間の部屋を亂すと、やる事は成就しないし、なす事もうまくゆかない。身體についても同様である。しばしば沐浴して洗い清めなくてはならない。そうでなければ(仙道成就の)望みはない。〈盛〉の字は、「淨」の

意味である。中國にはもともと「淨」の字はなかった。そこで「盛」と書くのである。他の諸仙經もすべて同様である。

仙道を學んでいると言つてはならない。仙道を學んでいると言つと、邪鬼がその人を犯すし、ものごとくうまくゆかず、人間を病氣にさせる。身體がまだ眞實でないからである。《青童君も「一言でも一事でも漏らせば、一算を減らす」と言っている。そうであれば、用心しなくてよからうか。この三條は本來『酆都宮記』<sup>(4)</sup>中にあつたものである。楊羲の書があり、また許掾の書がある》

(1) 鬼吹 『眞誥』卷一五葉九裏注「昔有人病在地臥、於病中乃見鬼於壁穿下、以手爲管而吹之、此即是鬼吹之事也」。

(2) 鬼炁之侵入 『登眞隱訣』卷下「鬼氣不敢干」。『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷一眞藥玄英高靈品「散六天之鬼炁、制萬妖之侵者、誦此章乎」。

(3) 故氣 『眞誥』卷一五葉九裏注「故炁皆謂鬼神塵濁不正之炁」。

(4) 酆都宮記 『眞誥』卷一九葉七裏に『酆都宮記』の名が見える。

大洞眞經高上內章過邪大祝上法<sup>(1)</sup>

曰、「每當經危險之路、鬼廟之間、意中諸有疑難之處、心將有微忌、敕所經履者、乃當先反舌內向、咽液三過、畢以左手第二第三指躍兩鼻孔下人中之本、鼻中隔孔之內際也、三十六過、即手急按、勿舉指計數也、鼻中隔之際、名曰山源、山源者一名鬼井、一名神池、一名邪根、一名魂臺也、躍畢、因叩齒七通、畢又進手心以掩鼻、於是臨目乃微祝曰、『朱鳥凌天、神威內張、山源四鎮、鬼井逃亡、神池吐氣、邪根伏藏、魂臺四明、瓊房零琅、玉眞觀我、坐鎮明堂、手暉紫霞、頭建神光、執詠洞經、三十九章、中有辟邪龍虎、截獄斬堦、猛獸奔牛、銜刀吞鑊、揭山攪天、神雀毒龍、六領吐火、啖鬼之王、電豬雷父、掣星流橫、鼻礪駁灼、逆風橫行、天禽羅陳、皆在我傍、吐火萬丈、以除不祥、羣精啓道、封落山鄉、千神百靈、併手叩額、澤尉捧燈、爲我燒香、所在所經、萬神奉迎』、畢又叩齒三通、乃開目除去左手、

手按山源、則鬼<sup>(2)</sup>「井」閉門、手薄神池、則邪根散分、手臨魂臺、則玉眞守關、於是感激靈根、天獸來衛、千精震伏、莫干我炁、此自然之理、使忽爾而然也、

鼻下山源是一身之武津、眞邪之通府、不眞者所以生邪氣、爲眞者所以遏萬邪、在我運攝之耳、故吉凶兆焉、

明堂中亦一身之文池、死生之形宅、存其神、可以眇乎內觀、廢其道、所以致平朽爛、故由我御順其術、而死生悔吝定焉」。

右一條出大洞眞經高上首章。《此一條不審誰授、有長史寫、此經亦

未出世也

(1) この段、『登眞隱訣』卷中、『上清三眞旨要玉訣』(ベリオ二五七六號)に見える。

(2) 『上清三眞旨要玉訣』が「神」を「井」に作るのに従う。

『大洞眞經』高上内章遏邪大祝上法に言う。

「險呑な道や鬼神を祭った祠廟<sup>①</sup>のあたり、胸中にさまざまな不安が生ずる場所を通る際、心に嫌な豫感が生じた時には、通ろうとする場所に禁敕を加え、そこでまず舌を反らせて内側<sup>②</sup>に向け、唾を三回呑みこまなければならない。呑み終わったら、左手の第二と第三の指で兩方の鼻孔の下の人中の根元、鼻中の隔壁の内側のあたりおさえること三十六回、ただちに急いで手でもむ。その時、指を上げて數をかぞえてはならない。鼻中の隔壁のあたりは山源という。山源は、一名は鬼井、一名は神池、一名は邪根、一名は魂臺である。おさえ終わったなら、そこで叩齒すること七回。叩齒し終わったら、手のひらを進めて鼻を覆う。そこでわずかに目を開け、小聲で次の呪文を唱える。『朱鳥は天高く舞い上がり、神靈の威力は體内に漲る。山源は四方を鎮め、鬼井(の邪鬼)は逃げ出し、神池は氣を

吐き、邪根(の邪氣)は隠れひそむ。魂臺は四方を照らし、瓊玉の部屋には麗しい音が鳴り響く。玉眞君は高々とそば立ち、明堂宮に鎮坐する。その手には紫の霞が光り輝き、頭には神光を冠とし、手に執つて讀むは『大洞眞經』のその三十九章、その中の辟邪と龍虎<sup>③</sup>は山を斷ち切り岡を斬り裂き、猛獸と奔牛は刀をくわえて白刃を呑みこむ。山をもち上げ天をつかむのは神雀と毒龍、六つの首から火を吐くのは鬼を食らう王。電猪と雷父は星々を捕まえて暴れまわり、がりがりばりと風に逆らつて縦横に飛び回る。天上の靈獸は連なつて、すべて私の側におり、火を一萬丈も吐き出して、不祥を除く。多くの精靈たちが先導をつとめて、山里に降り立ち、無數の神靈たちは、手を組んで頭をこすりつけ、澤尉は燈火を捧げて、私のために焼香する。居るところ通るところ、萬神たちが出迎えてくれる。』唱え終わったなら、また叩齒すること三回。そこで目を開けて左手を取り去る。

手で山源をおさえると、鬼井は門を閉ざす。手を神池に着けると、邪根はばらばらになる。手を魂臺に近づけると、玉眞君は關所をお守りになる。そこで、靈妙な根源を感動させると、天上の靈獸<sup>④</sup>がやつて来て護衛し、多くの精靈<sup>⑤</sup>が恐れひれ伏し、私の氣を犯すことはない。これは自然の道理であり、たちまちにしてそうさせるのである。

鼻の下の山源は、全身の中の武神の衛る渡し場であり、眞氣と邪



氣がまぜこぜになつてゐる倉である。眞なる道を修めなければ、邪氣を生じさせることになり、眞なる道を修めればもろもろの邪氣を防ぐことになる。自分でそれを制御するのだ。かくて吉凶がここにきざすのである。

明堂宮中もまた全身の中の文神の宿る池であり、生死がありありと現れる邸宅である。その神を存視すれば、廣々と内觀することができし、その道術を止めてしまえば、身體がぼろぼろになる原因になる。だから、自分がこの道術を操作するかどうかによつて、生死についての後悔の念が定まるのである。

右の一條は『大洞眞經』高上章草から出たもの。(この一條は、誰が授けたのか定かではない。許長史の寫しがある。この經典もまだこの世に出現していない)

(1) 鬼廟 『抱朴子』地眞「若在鬼廟之中、山林之下、大疫之地、塚墓之間、虎狼之藪、蛇螫之處、守一不怠、衆惡遠避」。

(2) 反舌 『登眞隱訣』卷中「若體中不寧、當反舌塞喉、漱津咽液、無數」、注「極力卷舌上向、屈以塞喉而漱咽也」。

(3) 辟邪龍虎 『漢書』卷九六西域傳上「鳥弋山離國、有桃拔師子犀牛」、注「孟康曰、桃拔一名符拔、似鹿長尾、一角者或爲天鹿、兩角者或爲辟邪」、『抱朴子』地眞「龍虎列衛、神人在傍」。

(4) 天獸 『雲笈七籤』卷五四制七魄法「天獸守門、嬌女執關、七魄和柔、與我相安」。

(5) 千精 『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷二入定品「九源絕滅、推校千精」。

夜行常當琢齒、亦無正限數也、煞鬼邪鬼常畏琢齒聲、是故不得犯人也、若兼以漱液祝說益善。

世人有知酆都六天宮門名、則百鬼不敢爲害、欲臥時、常先向北祝之三過、微其言也、祝曰、「吾是太上弟子、下統六天、六天之宮、是吾所部、不但所部、乃太上之所主、吾知六天門名、是故長生、敢有犯者、太上斬汝形、第一宮名紂絕陰天宮、以次東行、第二宮名泰煞諒事宗天宮、第三宮名明晨耐犯武城天宮、第四宮名恬照罪炁天宮、第五宮名宗靈七非天宮、第六宮名敢司連苑屢天宮」、止乃琢齒六下乃臥、辟諸鬼邪之氣。(如此凡三過也、此二法出酆都記、今鈔相隨)

北帝煞鬼之法、先叩齒三十六下、乃祝曰、「天蓬天蓬、九元煞童、五丁都司、高刁北公、七政八靈、太上浩凶、長顙巨獸、手把帝鐘、素臯三晨、嚴駕夔龍、威劍神王、斬邪滅蹤、紫氣乘天、丹霞赫衝、吞魔食鬼、橫身飲風、蒼舌綠齒、四目老翁、天丁力士、威南禦凶、天

騶激戾、威北衝鋒、三十萬兵、衛我九重、辟尸千里、去却不祥、敢有小鬼、欲來見狀、攫天大斧、斬鬼五形、炎帝裂血、北斗燃骨、四明破骸、天猷滅類、神刀一下、萬鬼自潰」。

畢、四言輒一琢齒以爲節也、若冥夜白日得祝、爲恆祝也、鬼有三被此祝者、眼精<sup>④</sup>「目」爛、而身即死矣、此上神祝皆斬鬼之司名、北帝祕其道、若世人得此法、恆能行之、便不死之道也、男女大小、皆可行之。

此所謂北帝之神祝、煞鬼之良法、鬼三被此法、皆自死矣、常亦畏聞此言矣、因病行此立愈、叩齒當臨目存見五藏<sup>⑤</sup>「ム」(此中一字、楊本穿壞不可識、據亦仍闕無、具五神自然存也、鄴都中祕此祝法、今密及之耳、不可泄非有道者、共祕之乎。

右五條楊書、又據寫、楊書北帝祝是口呪時書、極多僂贍改易。

(1) この段、『登眞隱訣』卷中、『三洞樞機雜說』啄咽按摩法、『三洞珠囊』卷一〇叩齒嚙液品などに見える。

(2) この段、『眞誥』卷一五葉二表、『登眞隱訣』卷中、『上玄高眞延壽赤書』清神外禁第三、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法寢臥時

祝第二十三などに見える。

(3) この段、『登眞隱訣』卷中、『要修科儀戒律鈔』卷一四、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法寢臥時祝第二十三、『太上元始天尊北帝伏魔神呪妙經』卷一、『太上九天延祥滌厄四聖妙經』などに見える。

(4) 俞本および『登眞隱訣』が「目」を「盲」に作るのに従う。

夜に出歩く時は、常に叩齒しなくてはならない。それには決まった回数はない。殺鬼や邪鬼<sup>⑥</sup>はいつも叩齒の音を恐れる。だから人間を犯す事ができないのだ。もし、それに合わせて唾液でうがいをして呪文を唱えれば<sup>⑦</sup>もっとよい。

世間の人で羅鄴都の六天宮の門の名稱を知っている者があれば、多くの邪鬼は害を及ぼそうとはしない。横になろうとする時には、いつもまず北を向いて、呪文を唱えること三回、小聲でつぶやく。呪文に言う。「私は太上君の弟子であり、下は六天を統括している。六天の宮室は私が管轄するところである。ただ管轄しているだけではなく、太上君から支配をまかされているところである。私は六天宮の門の名稱を知っている。だから長生するのだ。あえて私を犯す者がいれば、太上君はおまえの體を斬り裂くだらう。第一宮の名は

紂絶陰天宮。順番に東に進んで、第二宮の名は泰殺諒事宗天宮。第三宮の名は明晨耐犯武城天宮。第四宮の名は恬照罪氣天宮。第五宮の名は宗靈七非天宮。第六宮の名は敢司連宛屢天宮。唱え終えたら、そこで齒を六回叩齒してから横になる。もろもろの鬼邪の氣を退けるのである。へこのようにして、全部で三回唱える。これ以下の二つの方法は『酆都宮記』から出たものである。今は抜き書きして二條を續けておく。

# 北帝殺鬼の方法。

まず三十六回叩齒し、それから次の呪文を唱える。「天蓬天蓬、九元殺董よ。五丁都司、高刁北公よ。七政八靈、太上浩凶よ。長い頭の巨獸がその手に北帝君の鐘をつかみ、素臬三晨が夔龍に車を引かせ、威劔神王は邪惡なものを斬つて跡形もなくならせる。紫の氣は天に昇り、丹い氣はあかあかと立ち昇る。吞魔食鬼は體を横たえて風を呑みこむ。蒼舌綠齒や四目老翁、天丁力士は、威南の兵を使つて凶惡なものを防衛し、天驕はいきり立ち、威北の兵を使つて、白刃を口にくわえる。三十萬の天兵が、私を九重に護衛し、屍を千里のかたに遠ざけて、不祥なものを退ける。小鬼がやつて來て、その姿を現そうとすれば、天を切り裂く大斧が鬼の五體を斬り放ち、炎帝が血脈を斬り裂き、北斗君が骨を燃やし、四明公が死骸を碎き、天猷が一族を皆殺しにする。神刀が一回振り降ろされると、萬鬼は

自然と壞れてしまう」。

以上で終わりである。四言ごとに一回ずつ叩齒してリズムをとる。夜中でも眞晝でもこの呪文を唱えることができ、いつ唱えてもよい呪文である。鬼は三回この呪文を浴びると、目玉は潰れ爛れて即死してしまふ。この上の神呪に見えるのは、すべて鬼を斬り殺す役目の者の名である。北帝君はこの道術を祕密にしている。もしも世間の人がこの方法を會得していつも實踐できるならば、それで不死の道なのである。老若男女を問わず、誰でも實行するのがよい。

これがいわゆる北帝君の神呪であり、殺鬼の良法である。鬼は三回この方術をかけられると、みな自然に死んでしまふ。いつもこの呪文を聞くのを恐れている。病氣の時にこれを實行するならば、たちどころに癒えてしまふ。叩齒する時には、わずかに目を開けて五臟が「ム」へこの中の一字は、楊羲のテキストでは破れていて識別できない。許掾のテキストでも缺けたままである。具し、五藏神が自然と備わっているのを存思しなければならない。羅酆都にこの呪法は祕匿されている。今は密かに言及するのだ。仙道のたしなみのない者に漏らしてはならぬ。みなともに祕密にするのだぞ。

右の五條は楊羲の書。また許掾の寫しがある。楊羲が書いた北帝

君の呪文は、口授された時の書きつけであり、塗りつぶしたり書きなおしたりした文字が非常に多い。

- (1) 煞鬼邪鬼 『登真隱訣』卷中「殺鬼則酆都太上所使取人者也、邪鬼則天地間精物魍魎害人者也」。
- (2) 祝說 『登真隱訣』卷中「面向日、口吐死氣、…」、注「此亦頗類上法、但無祝說耳」。
- (3) 天蓬天蓬 『元始無量度人上品妙經四注』卷三「束送妖魔精、斬滅六鬼峯、嚴東注「峯者魔之總名也、故祝六天魔鬼云、天蓬天蓬、九元殺童、此之謂也」。
- (4) 威南、威北 『真誥』卷一五葉二三裏「許領威南兵千人、鮑勛領威北兵千人」、注「北帝呪所謂威南威北、即謂此兵、當是驍勇者也」。
- (5) 炎帝 『真誥』卷一五葉五表「炎慶甲者古之炎帝也、今爲北太帝君、天下鬼神之主也」。
- (6) 北斗 『真誥』卷一五葉五表「武王發今爲鬼官北斗君」。同卷一三葉四表「鬼官北斗君乃是道家七辰北斗之考官、此鬼一官又隸九星之精、上屬北辰玉君」。
- (7) 四明 『真誥』卷一五葉五表「夏啓爲東明公、領斗君師、文王爲西明公、領北帝師、邵公奭爲南明公、吳季札爲北明公、…四

明主領四方鬼」。

- (8) 天猷 『太上說紫微神兵護國消魔經』「眞武奉天尊敕、遂令北酆殺鬼天猷副將部領神霄大兵九炁功曹」。

風病之所生、生於丘墳陰濕、三泉壅滯、是故地官以水氣相激、多作風痺、風痺之重者、舉體不授、輕者半身成失手足也、若常夢在東北及西北、經接故居、或見靈牀處所者、正欲與冢相接耳、墓之東北爲微絕命、西北爲九炁、此皆冢訟之凶地、若見亡者於其間、益其驗也、

若每遇此夢者、臥覺、當正向上三瑛齒而祝之曰、「太元上玄、九都紫天、理魂護命、高素眞人、我佩上法、受教太玄、長生久視、神飛體仙、冢墓永安、鬼訟塞姦、魂魄和悅、惡氣不煙、遊魅罔象、敢干我神、北帝呵制、收氣入淵、得錄上皇、謹奏玉晨」、如此者再祝、祝又三叩齒、則不復夢冢墓及家死鬼也、此北帝祕祝也、有心好事者、皆可行之、若經常得惡夢不祥者、皆可按此法、於是鬼氣滅也、邪鬼散形也。〔此應令以受長史也、但許姓羽音、今去〕〔云〕東北微絕命、是爲不同、又九炁之名、墓書無法

③ 手臂不授者、沈風毒氣在脈中、結附痺骨、使之然耳、宜針灸、針灸則愈、又宜按北帝曲折之祝、若行之百過、疾亦消除也、先以一手

徐徐按摩臂、良久、畢乃臨目內視、咽液三過、叩齒三通、正心微祝曰、「太上四玄、五華六庭、三魂七魄、天關地精、神符榮衛、天胎上明、四肢百神、九節萬靈、受錄玉晨、刊書玉城、玉女侍身、玉童護命、永齊二景、飛仙上清、長與日月、年俱後傾、超騰昇仙、得整太平、流風結痾、注鬼五飛、魍魎冢氣、陰氣相徊、陵我四肢、干我盛衰、太上天丁、龍虎曜威、斬鬼不祥、風邪即摧、考注匿訟、百毒隱非、使我復常、日月同暉、考注見犯、北辰收摧、如有干試、干明上威」、畢「此亦以告長史也、長史極多惡夢、恆有冢注炁、又患飲癖及兩手不理、故每授諸法、并針灸在後、若弟子有心者、按摩疾處、皆用此法、但不復令臨目內視咽液琢齒耳。

昔唐覽者、居林慮山中、爲鬼所擊、舉身不授、似如綿囊、有道人教按摩此法、皆即除也、此北帝曲折之法、諸疾有曲折者、用此法皆佳、不但風痺不授而已也。〈唐覽無別所出、不知何世人也〉

鄧都北帝有此數法、亦參於高仙家用也、又有曲折經、藏著西明公處。〈周文王爲鄧都西明公也〉

鄭子眞則康成之孫也、今在陽濯山、昔初學時、正患兩脚、不授積年、其晚用針灸、兼行曲折祝法、百日都除〈鄭玄唯一兒、爲賊所害、有遺腹子名「卜」同耳、既不入山、又復不病脚、此子眞又

非谷口者、進退乖異、莫辯質據〉、唐覽今在華山、得虹丹法、合服得不死。〈前來至此、竝應是保命告

十三過針、三過灸、無不愈、左手勝右手也、少陽左肘手脈內纏、故宜十三過針、乃得理內脈入少陽也、灸氣得溫、浮上臂血得風痺、故宜三過灸、乃得補足流津、使筋屬不滯也、灸手幽關及風紆并五津、凡三處急要也、當待佳日、我自別相示也、保不使爾失此手也。

右中候夫人言。〈手幽關風紆五津凡三處、偃側圖及諸灸經竝無此穴名

夫風考之行也、皆因衰氣之閒隙耳、體有虧縮、故病來侵之也、若今差愈、誠能省周旋之役者、必風痾除也、今當爲攝制冢注之氣、爾既小佳、亦可上冢訟章、我當爲關奏之也、於是注氣絕矣。

昔鄧雲山停當得道、頓兩手不授、吾使人語之、令灸風徊曲津兩處耳、六七日間、便得作五禽按摩也、若針力訖、當語所灸處、又心存行道、亦與身行之無異也、昔趙公成兩脚曳不能起、旦夕常心存拜太上、如此三十年、太上真人賜公成流明檀桓散一劑、即能起行、後遂得道、今在鵠鳴山下、夫存拜及心行道之時、皆燒香左右、如欲行事狀也、此謂內研太玄、心行靈業、栖息三宮、偃逸神府者矣。

右保命言。〈風徊曲津兩處、灸經亦無此穴、冢訟章不見有具本、鄧

雲山趙公成竝無別顯出也

夜臥覺、存日象在疾手中、握之使日光赤芒從臂中逆至肘腋間、良

久、日芒忽變成火燒臂、使臂內外通匝洞徹、良久、畢乃陰祝曰、「四明上元、日月氣分、流光煥曜、灌液凝魂、神光散景、蕩穢鍊煙、洞徹風氣、百邪燔然、使得長生、四肢完全、注害考鬼、收付北辰」、畢、存思良久、放身自忘。

右保命說此、云案消魔上祕祝法。〈此經未出世、若猶是智慧七卷限者、未審小君亦安得見之〉

右八條竝掾書寫。

- (1) この段、『三洞珠囊』卷一救導品に見える。
- (2) 愈本が「去」を「云」に作るのに従う。
- (3) この段、「服氣精義論」(『雲笈七籤』卷五七)に見える。
- (4) この段、『三洞珠囊』卷一救導品に見える。
- (5) この段、『三洞珠囊』卷一救導品に見える。
- (6) 愈本が「ト」を「小」に作るのに従う。
- (7) この段、『三洞珠囊』卷一救導品に見える。
- (8) この段、『三洞珠囊』卷一救導品に見える。

(9) これ以下、『三洞珠囊』卷一救導品に見える。

(10) この段、『三洞珠囊』卷一救導品に見える。

風病が生ずるのは、墳墓が陰氣でじめじめし、三泉が塞がり滞っていることから生ずるのである。それ故、地官が水の氣を激しくかき立て、しばしば風痺<sup>(3)</sup>を起こすのである。風痺が重くなると、體全體が自由がきかなくなり、輕症のものでも半身の手足の自由が失われてしまう。もしも墓の東北や西北にいて、もと住んでいた家に近づくと夢をいつも見たり、あるいは靈牀<sup>(4)</sup>が置かれている場所をいつも夢見たりするようだと、それはまさしく冢墓の氣に近づこうとしているのだ。墳墓の東北は徵絶命であり、西北は九厄であって、それらはいずれも冢訟の凶地である。もし、そこに亡者を見るようだと、その兆候がますます顯著である。

もしいつもこのような夢を見る者は、眠りから覺めたら、まっすぐ上を向いて三回叩齒して、次の呪文を唱えなければならない。「太元であり上玄である、九都の紫天。魂を治め命を護る高素真人よ。私はすぐれた法を身につけ、太玄から教えを受けた。(それによつて)長生久視し、精神は飛翔し身體は仙となる。冢墓は永えに安らかに、死鬼の訴えもその姦詐を絶たれよう。魂と魄とは和悦し、惡

氣は立ち上らず、鬼魅や罔象が私の精神を犯そうとすれば、北帝は一喝してそれを止どめ、惡氣を収めて淵へと投げ込む。上皇から祕籙を授かった私は、謹んで太上大道玉晨君に上奏する。このように二回呪文を唱える。呪文を唱えてさらに三回叩齒すれば、冢墓や一族の死鬼を二度と夢見ることはなくなるであろう。これは北帝の祕呪である。仙道に志があり好んでそれに勵む者は、誰しもこれを行うがよい。もし、いつも不吉な惡夢を見る者は、誰しもこの法に基づいてやればよいのだ。そうすれば鬼氣は滅び、邪鬼はばらばらになつてしまふであろう。〈これはきつと許長史に授けさせたものであらう。しかし許の姓は羽の音であり、今ここで「東北は徵絶命」と言っているのとその點が合わない。また九層の名稱については、墓書にはその法が載っていない〉

手や腕の自由がきかなくなるのは、脈の中に潜んでいる風邪の氣や毒氣が固まり附着して、骨をしびれさせた結果、そうなるのである。針灸を施すのがよい。針灸を施せば良くなるであろう。そのうえ、北帝の曲折の呪法に基づいてやるのがよい。もしこれを百回行えば、病は消えて除かれるであろう。まず片方の手でゆっくりと腕をしばらくの間按摩する。それが終わってからわずかに目を開けて内視し、唾を三回呑みこみ、三回叩齒して、心を正して小聲で次の呪文を唱える。「太上の四玄、五華<sup>⑦</sup>六庭、三魂七魄、天關地精よ。神

符が體液を盛んに循環させ、天胎が上で輝く。四肢の澤山の神や、九節の數えきれないほどの精靈は、玉晨君から籙を授かり、玉城<sup>②</sup>にその名を刻み記され、玉女は旁に侍し、玉童は命を護る。永えに日月の二つの景<sup>③</sup>と竝び、上清天に飛仙となる。いつまでも日月とその齡をともにしながら、齡は日月におくれて傾く。天上高く騰つて昇仙すると、太平の氣を整えることができる。ただよい流れる風邪の氣が病を結び、祟りをする鬼は<sup>④</sup>五方に飛びまわり、魍魎<sup>⑤</sup>と冢氣<sup>⑥</sup>が陰氣を運らせ、私の四肢を侵し、私の盛衰に干渉する。太上の天丁力士、それに龍虎がその威光を輝かせて、不祥なる鬼は斬られ、風邪はたちまち打ち碎かれる。考罰を加え祟りをする者どもも訴訟を匿し、さまざま毒氣もそしりを隠す。私を常の状態にもどし、日月とその輝きを等しくさせる。考罰を加え祟りをする者どもが私を犯せば、北辰君は捕らえて打ち碎くであろう。もし、干渉し試そうとする者があれば、それは明上の威光を犯す。これで終わり。〈これも許長史に告げたものである。許長史は惡夢を見ることがとても多く、いつも冢墓の祟りの氣<sup>⑧</sup>があり、また飲癖<sup>⑨</sup>や兩手が思うようにならない病を患っていた。それ故、いつも諸法を授け、また後で針灸を教えたのである。もし仙道に志のある弟子が、具合の悪い場所を按摩するには、みなこの方法を用いるが、もはやわずかに目を開けて内視し、唾を呑みこみ叩齒させることはない。

昔、唐覽<sup>①</sup>は林慮山に住まっていた時、鬼に攻撃されて全身の自由がきかなくなり、綿の袋ようになってしまった。ある道人が按摩の法を教えたところ、病氣はたちまちすべて除かれた。この北帝の曲折の法は、あらゆる病で肢體が折れ曲がってしまう場合に、この方法を用いるとすべて良くなるのであって、風痺で自由がきかなくなった場合だけではないのである。〈唐覽のことはどこにも別に出ておらず、いつの時代の人なのか分からない〉

酆都の北帝にはこのようないくつかの法があるのであって、高仙家の用に供されもする。また『曲折經』は西明公のところに藏されている。〈周の文王が酆都の西明公である〉

鄭子眞は康成(玄)の孫である。今は陽濯山にいる。昔、仙道を學んだばかりの頃、ちょうど兩足を患い、長年自由がきかなかつたが、晩年になって針灸の術を用い、あわせて曲折の呪法を行うと、百日ですべて除かれた(鄭玄にはたった一人の息子があるだけで、(黄巾の)賊に殺害され、小同という遺腹の子だけが残された。(小同は)山にこもったこともなければ、足を病んだこともなかった。ここの子眞は、谷口に住した鄭子眞でもない<sup>②</sup>。いずれにしてもくい違い、しっかりとした證據を明らかにできない。唐覽は今華山におり、虹丹の法を得、調合服用して不死を得ている。〈前の條からここ

までは、いずれもきつと保命君の言葉なのであろう〉

十三回針を打ち、三回灸をすれば、どんな病氣も癒える。左手にする方が右手にするのよりも良い。小陽は左肘の手脈の内からまっているから、十三回針を打てばよいのであり、こうしてはじめて内脈が治められ、少陽に入ることができるよう。灸の氣が温められて臂血に浮上し、風痺の場所を捕える。だから、三回灸をすればよいのであって、こうしてはじめて津液の流れが補われ一定になり、筋肉がよく動くようになるのです。手の幽關と風絃と五津に灸をしないさい。この三箇所は危急のつぼです。佳日を待つて私自ら別に示すでしょう。そなたに手が動かなくならぬようにさせること受けあいです。

右は中候夫人のお言葉。〈手の幽關、風絃、五津の三つの場所は、『優側圖』およびもろもろの灸經にはいずれもその穴名が出ていない〉

そもそも風邪の氣や考罰の鬼が運るのは、氣が衰えた間隙につけこむのである。體が損なわれ萎縮しているから、病がそこに侵入するのである。もし、少しばかり病が癒えて、世間との付き合いの面倒を省けるならば、きっと風痺の病は除かれるであらう。今そなたのために墓の祟りの氣を取りおさえてやろう。そなたが少し良くなっ



たら、墓の死者の訴訟についての上章を上げてよい。私がきつとそれを取りついで上奏してやろう。それで祟りの氣は消えてなくなるだろう。

昔、鄧雲山は、まさに仙道を體得しようとするその時に、突然兩手の自由がきかなくなった。私は人を介して彼に告げ風徊と曲津の二箇所に灸をさせた。六、七日ほどたつと、たやすく五禽の按摩を行えるようになった。針の効力が盡きたなら、どこに灸をすればよいか告げるであろう。また、心に存思して道を行うのも、實際に行うのと異なるところはない。昔、趙公成は兩足をひきずり立てなくなった。(そこで)朝晩常に心に存思して太上を拜禮した。このようにして三十年すると、太上真人は公成に流明檀栢散一服を下賜され、ただちに立つて歩けるようになり、その後仙道を體得することになったのである。今は鵠鳴山にいる。そもそも、存思して拜禮する場合や、心の中で道を行う場合には、いつも右に左に焼香をし、實際に行おうとする時のようにする。これが内に太玄を磨き、心に靈業を行い、三宮に憩い、神祕なる玄府に安らぐということなのである。

右は保命君のお言葉。〈風徊と曲津の二箇所は、灸經にもその穴名がない。墓の死者の訴訟についての上章は、完全なテキストのある

のを見ない。鄧雲山と趙公成は他には明らかに出てこない〉

夜、眠りから覺めた時には、日象が病んだ手の中にあるのを存思する。日象を握って、日の光の赤い光芒が腕から肘、腋のあたりにさか上つて来るようにする。しばらくすると日の光芒はたちまち火となつて腕を焼き、腕の内と外にくまなく貫き通るようにする。それをしばらく行い、終われば密かに次の呪文を唱える。「よもに明らかな上元では、日と月の氣は分かれ、そこから流れ出る光は輝き、(玉)液を注いで三魂が結ばれる。神光は景を放つて、穢れを洗い火煙を鍊り上げ、風邪の氣に貫き通り、もろもろの邪鬼は焼き盡くされる。長生を得さしめ、四肢は完全となり、祟りの害をなす考罰の鬼は、捕えられて北辰君のもとに引き渡されよう」。唱え終わるとしばらく存思し、體を樂にしてわが身をも忘れるようにせよ。

右は保命君が説かれたものであり、『消魔經』上篇の祕呪に基づく法だという。〈この經典はまだこの世に出現していない。もし、やはり『消魔智慧』七篇の中にあるのだとすれば、一體、小君はどうしてこれを見ることができたのであろうか〉

右の八條はいずれも許掾の書寫。

- (1) 風病 『金匱要略』中風歷節病脈證治「夫風之爲病、當半身不遂、或但臂不遂者、此爲痺」。
- (2) 地官 『登真隱訣』卷下「若大吐下者、當請地官五衡君官將百二十人、在太平宮、下令治之」。
- (3) 風痺 『靈樞』壽夭剛柔「病在陽者、命曰風、病在陰者、命曰痺、陰陽俱病、命曰風痺」。
- (4) 靈牀 『晉書』卷八〇王徽之傳「獻之卒、徽之奔喪不哭、直上靈牀坐、取獻之琴彈之」。
- (5) 長生久視 『老子』第五十九章「是謂深根固柢、長生久視之道」。
- (6) 許姓羽音 『赤松子章曆』卷五注「各用本音姓、角姓、塚訟交通所屬勾芒之神、徵姓、塚訟交通所屬祝融之神、商姓、塚訟交通所屬蓐收之神、羽姓、塚訟交通所屬玄冥之神、宮姓、塚訟交通所屬勾陳之神也」。
- (7) 五華 『上清黃庭內景經』肺之章第三十四(『雲笈七籤』卷一)「調理五華精髮齒」、注「五華、五藏之氣」。
- (8) 神符榮衛 『黃帝內經素問』熱論「五藏已傷、六府不通、營衛不行、如是之後、三日乃死」。「太上飛行九神玉經」反行法(『雲笈七籤』卷二〇)「腰帶神符、首戴扶冠」。「元始無量度人上品妙經四注」卷一「侍經五帝玉童玉女各二十四人、營衛神文、保護受經者身」、薛幽棲注「常營衛神經之文」。
- (9) 玉城 「元始無量度人上品妙經四注」卷二「鬱羅蕭臺、玉山上

- 京」、李少微注「玉京山在諸境之上、故曰上京、山有玉城」。
- (10) 注鬼 『登真隱訣』卷下「辟斥故氣、斷絕注鬼」。
- (11) 冢氣 『真誥』卷一〇葉一七表「天帝告土下冢中王氣」。
- (12) 考注 『真誥』卷一三葉一三表「鄭維正主考注」。
- (13) 冢注炁 『真誥』卷一〇葉一四裏「今當爲攝制冢注之氣」。
- (14) 飲癖 『真誥』卷一八葉一五表「尊猶患飲痛不除」。
- (15) 唐覽 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「唐覽」、注「華山」。
- (16) 西明公 『真誥』卷一五葉五裏「文王爲西明公、領北帝師」。
- (17) 鄭子眞 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「鄭子眞」、注「陽翟山」。
- (18) 鄭玄唯有一兒：『後漢書』列傳第二五鄭玄傳「玄唯有一子益恩、：有遺腹子、玄以其手文似己、名之曰小同」。
- (19) 此子眞又非谷口者 『漢書』卷七十二王貢兩龔鮑傳「漢興：其後谷口有鄭子眞、：皆修身自保、非其服弗服、非其食弗食、成帝時、元舅大將軍王鳳以禮聘子眞、子眞遂不訕而終、：(楊雄)其論曰、：谷口鄭子眞不訕其志、耕於巖石之下、名震於京師」。
- (20) 虹丹法 『真誥』卷一四葉二表「已服虹丹之液」。同卷一四葉八裏「後俱授西城王君虹景丹方」。
- (21) 少陽左肘手脈內纏 『靈樞』經脈「三焦手少陽之脈、起于小指次指之端、上出兩指之間、循手表腕、出臂外兩骨之間、上貫肘、循臑外上肩、而交出足少陽之後、入缺盆、布臚中、散絡

心包、…」。

- (22) 偃側圖及諸灸經 『抱朴子』雜應「自非舊醫備明堂流注偃側圖者、安能曉之哉」。『隋書』經籍志「針灸經一卷、扁鵲偃側針灸圖三卷」。

- (23) 注氣 『真誥』卷一七葉一八裏「然大要是注氣之作也」。

- (24) 鄧雲山停當得道 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「鄧雲山」。  
『晉書』卷七三庾翼傳「臣等以九月十九日發武昌、以二十四日達夏口、輒簡卒搜乘停當上道」。

- (25) 五禽按摩 『三國志』卷二九華佗傳「佗語(吳)普曰、…吾有一術、名五禽之戲、一曰虎、二曰鹿、三曰熊、四曰猿、五曰鳥、亦以除疾、竝利蹄足、以當導引、體中不快、起作一禽之戲、沾濡汗出、因上著粉、身體輕便、腹中欲食」。

- (26) 趙公成 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「趙公成」、注「鶴鳴山」。

- (27) 三宮 『上清黃庭內景經』若得章第十九(『靈寶七籤』卷一一)「若得三宮存玄丹」、注「三丹田之宮、故曰三宮」。

- (28) 神府 『周氏冥通記』卷二「故得受學仙官、任秦神府」。

昨具以墓事請問荀侯、荀侯云、「極陰積沍、久經墳塋、遂使地官激注、冢靈沈滯、風邪之興、恆繼此而作、然衝氣欲散、作考漸歇、

鎮塞之宜、未爲急也、不如通婦墓之并、以潤乎易遷之塗、救渴惠乎路人、陰惠流於四衢、植棠棣於龍川、散松楊以固標、此其所利耶」。  
〈荀侯即應是荀中侯也、此即長史婦亡後所告〉

范幼沖、漢時尚書郎、「(人亡)〈缺失一字〉解地理、乃以冢宅爲意、魏末得來在此童初中、其言云、「我今墓有青龍秉氣、上玄辟非、玄武延軀、虎嘯八垂、殆神仙之丘窟、鍊形之所歸、乃上吉冢也」、其言如此。〈此猶是前所服三氣之范監也、四靈雖同墓法、而形相莫辯、又以朱鳥爲上玄、亦所未詳也〉

積善憩德、慈心在物、兼修長存之方、洞守形中之寶者、雖有此墓、爲以示始終之觀耳、至於神全得會、照鏡玄開、亦何時永爲朽物、不復生出耶、此墓之人、斯可謂應運矣。〈此竝論長史婦所葬墓事〉

辛亥子所言。〈辛亥子事在第五卷中〉

右三條楊書。

青龍秉氣 夫欲建吉冢之法、去塊後正取九步九尺、名曰上玄辟非、華蓋宮王氣神趙子都、冢墓百忌害氣之神、盡來屬之、能制五土之精、轉禍爲福、侯王之家、招搖欲隱起九尺、以石

方圓三尺、題其文、埋之土三尺也、世間愚人徒復千條萬章、誰能明吉凶四相哉、辟非之下冢墓、由此而成、亦由此而敗、非神非聖、難可明也、必能審此術、子孫無復冢墓之患、能知墳墓之法、千禁萬忌、一皆厭之、必反凶爲吉、能得此法、永爲吉家、不足宣也。〔此一紙異手書青紙、

玄武延驅

依如此法、亦爲可解、其九步九尺、而不云十步三尺者、是

九尺入冢裏、正取中心爲數也、但辟非應是朱鳥而云冢後、

虎嘯八垂

若徵冢甲向、朱鳥在西南、羽冢庚向、朱鳥在東北、所不論耳〕

員三尺、題其文曰、「天帝告土下冢中王氣五方諸神趙公明等、某國公侯甲乙、年如千歲、生值清眞之氣、死歸神宮、翳身冥鄉、潛寧沖虛、辟斥諸禁忌、不得妄爲害氣、當令子孫昌熾、文詠九功、武備七德、世世貴王、與天地無窮、一如土下九天律令」。〔員三〔天〕〔尺〕猶是方員、方員之法、六邊皆等、如印形也、趙公明、今千二百官儀乃以爲溫鬼之名、九功七德、事出左傳〕

夫施用此法、慎不可令人知、若云冢墓王相利害諸不足者、一以墳文厭之、無不厭伏、反凶爲吉、。〔行下被割、餘一字如此、當是此字後行又被剪、語則未盡也、從員三尺來、別一紙、復是異人迹、不與前同、而俱書青紙、色理亦小殊、疑此竝寫非眞、前范監既有此言、

恐後人因以造法耳〕

(1) 愈本が「天」を「尺」に作るのに従う。

先日詳しく墓の事を荀侯におたずねしたところ、荀侯は言われた。「ひどい陰氣が積み重なって凍り、永い閒墓域を巡ると、その結果、地官に激しく祟りをさせ、冢墓の靈氣を沈滞させることになる。風邪の氣が興くるのは、いつもそれに引き續いてのことなのである。けれども、墓から衝き出てくる氣は四散し、考罰はようやく盡きようとしているから、(墓を)鎮め塞ぐことは、急事ではない。妻の墓の井戸を濫い、易遷宮への道を潤す方が上策だ。渴きを癒してやって路行く人に恵みを施し、人知れぬ恵みが四辻の巷に流れる。棠棣を龍川に植え、松と楊をあちこちに植えて確かな目印とする。これがためになる方法ではないか」。〔荀侯とはつまり荀中侯のことであろう。これは許長史の妻が死んだ後に告げた言葉である〕

范幼冲は漢代の尙書郎であつた。「ム」へ一字を缺失している風水を理解していたので、冢墓のことに關心があつた。魏の末にこの童初宮にやつて来て住まうことができた。その言葉に言つ。「私の今

の墓には青龍秉氣（青龍が氣を捕え）、上玄辟非（上玄が非を退け）、玄武延軀（玄武が體を延ばし）、虎嘯八垂（虎が八方の果てにうそぶく）の墓相がある。まるで神仙のすみか、鍊形の修行をする者の行きつくところのようで、上々の吉家である。その言葉は以上のとおり。〈この人物はやはり前出の「三氣を服した」という范監である。四靈は一般の墓葬のやり方と同じだといえ、しかしこの地形墓相は不明である。また朱鳥を上玄とするのも、やはりよく分からない〉

善行を積み徳に安らぎ、慈愛の心を萬物に注ぎ、あわせて長存の方を修行し、身體内部の寶を奥深く守る者は、このような墓があるといつても、それは始めがあれば終わりがあつたという道理を示すものに過ぎない。神氣が完全でしかるべき機會をつかみ、明るく輝く鏡が不思議に開く時になれば、いつまでも永えに朽ち果てたままで、再生しないということがあろうか。この墓に葬られた人は、その機運に應じたといえよう。〈これらはいずれも許長史の妻が葬られた墓について論じているのである〉

辛亥子の言葉。〈辛亥子のことは第五卷にある〉

右の三條は楊羲の書。

そもそも吉家を建立しようとする法は、盛土の後方からきつかり九歩九尺の距離を取り、その地點を「上玄辟非」と名付ける。すなわち華蓋宮の王氣の神である趙子都や、冢墓に關わる無數の忌むべき害氣の神が、ことごとくここにやつて來て隸屬する。五土の精靈を制御し、禍いを轉じて福となすことができる。侯王の冢は、高々とこんもり九尺の高さに盛土し、方圓三尺の石にその文を書きつけ、土中三尺のところに埋める。世の中の愚人はただくだくだしく文章を書き連ねるだけで、吉凶に關わる四相を明らかにできる者など誰一人としていない。辟非（の氣）が冢墓に下るのは、それ（吉凶の四相）によつて成功もすれば、それによつて失敗もするのである。神人や聖人でなければ、明らかにするのは困難である。もし、この術を熟知できれば、子孫には二度と冢墓による禍いはない。墳墓の法を知悉できれば、千萬もの禁忌とすべきものをどれもこれもおさえこみ、必ず凶をひっくり返して吉とするであらう。この法を會得できれば、永遠に吉冢となることは、わざわざ言うまでもない。〈この一紙は別人の手で青紙に書かれている。このような法によると、（禍い）はらうことができる。「九歩九尺」とあつて「十歩三尺」と言わないのは、九尺は冢の内部に入っており、冢の中心までの距離を取つて數値としてゐるのである。だが、辟非は當然朱鳥であるのに、「冢の後」と言うのは、たとえば徵冢（南冢）が甲向（東向）すれば朱鳥は西南にあり、羽冢（北冢）が庚向（西向）すれば朱鳥は東北

にあるのであって、言うまでもないことである」

圓三尺の石には次の文を書きつける。<sup>19</sup>

「天帝が地下の冢中の王氣、五方の諸神、趙公明<sup>20</sup>たちに告げる。某國の公侯某々、齡は若干歳、生前には清眞の氣にめぐり會い、死後には鬼神の宮に歸り、身を冥郷に隱し、冲虛<sup>21</sup>に潛み安らぐ。もろもろの禁忌とすべきものを退け、妄りに害氣とならしめてはならぬ。きつと子孫が榮え、文は九功を詠われ、武は七德を備えさせるように。世々代々貴族王侯となつて、天地とともに窮まりなからんことを。すべて地下の九天の律令のとおり行え」。圓三尺とはやはり方圓のことだろう。方圓の法とは、六邊がすべて等しく、印璽の形のようにするのである。趙公明は、今の『千二百官儀』<sup>22</sup>では溫鬼の名としている。九功と七德のことは、『左傳』に出る<sup>23</sup>。

そもそもこの法を實踐する時は、くれぐれも用心して人に知られてはいけない。もし冢墓の王相の氣が不足のものに刑害される場合には、すべて鎮めの文によっておはらいをすれば、厭伏しないことはなく、凶が吉に轉ずる。<sup>24</sup>「行の下が切り割かれている。残った一字はこのようである。この字から後の行もさらに切り取られていて、言葉は完結していないのに違いない。」「圓三尺」からは別の一紙で、おまけに別人の筆跡であり、前のものとは異なる。ともに青紙

に書かれているが、色あいも紙質もまた少し異なる。これらはいずれも寫したもので眞跡ではないようである。前に范監がこのようなことを言つたので、恐らく後人がそれに基ついてこの法をこしらえたのであらう。

(1) 棠棣 『毛詩』小雅棠棣「棠棣之華、鄂不韡韡」。

(2) 荀侯：『眞誥』卷一五葉九表「蓋鬼神之事、不足示於世也、荀公言也」、注「荀公即是荀中侯、既隸司命、統諸鬼官、故究知之」。

(3) 「」解地理 『眞誥』卷一三葉七表「范監者即其人也、」、注「又別云、曾爲漢尚書郎、善解地理、以冢宅爲意、此亦在第三篇」。

(4) 冢宅 『後漢書』列傳六六循吏王景傳「初(王)景以爲六經所載、皆有卜筮、作事舉止、質於蓍龜、而衆書錯繅、吉凶相反、乃參紀衆家數術文書、冢宅禁忌堪輿日相之屬適於事用者、集爲大衍玄基云」、注「葬送造宅之法、若黃帝青鳥之書也」。

(5) 童初 『眞誥』卷二三葉二裏「易遷童初二宮、是男女之堂館也」。また次注を参照。

(6) 前所服三氣之范監 『眞誥』卷一〇葉一表「范幼冲、遼西人也、：恆服三氣」。同卷二三葉七表「范監者即其人也、昔得爲

童初監、今在華陽中」。

(7) 四靈雖同墓法 郭璞『葬書』「故葬以左爲青龍、右爲白虎、前爲朱雀、後爲玄武、玄武垂頭、朱雀翔舞、青龍蜿蜒、白虎馴順」。

(8) 辛亥子 『眞誥』卷一六葉六表「亥子字延期、隴西定谷人、漢明帝時諫議大夫上洛雲中趙國三郡太守辛隱之子、」。

(9) 王氣 『太平經』卷六五興衰由人訣「今天道自有四時之氣、地自有五行之位、其王相休囚廢自有時、但今人興用之也、安能適使其生氣、而王相更相剋賊乎、咄咄、噫、六子雖曰學、無益也、反更大愚、略類無知之人、何哉、夫天地之爲法、萬物興衰反隨人故、凡人所共與事、所費用其物、悉生王氣、人所休廢、悉衰而囚、故人所興事者、即成人君長師也、人所爭用物、悉貴而無平也、人所休廢物、悉賤而無賈直也、是故天下人所興用者、王自生氣、不必當須四時五行氣也」。『論衡』難歲「立春、艮王、震相、巽胎、離沒、坤死、兌囚、乾廢、坎休、王之衝死、相之衝囚、王相衝位、有死囚之氣」。

(10) 題其文曰 池田溫「中國歷代墓券略考」(『東洋文化研究所紀要』第八六冊)は、ここに記される鎮墓文が十二世紀に至るまで廣く行われていたことを指摘する。

(11) 趙公明 『搜神記』卷五「鬼神」曰、吾等十餘人、爲趙公明府參佐、初有妖書云、上帝以三將軍趙公明鍾士季、各督數鬼下取人、莫知所在、(王)祐病差、見此書、與所道趙公明合」。

(12) 神宮 『眞誥』卷一五葉一表「羅鄩山：其山下有洞天、其上下並有鬼神宮室、山上有六官、洞中有六宮、輒周迴千里、是爲六天鬼神之宮也」。

(13) 冲虛 阮籍「詠懷詩」其七十「列仙停修齡、養志在冲虛、飄飄雲日間、邈與世路殊」。

(14) 千二百官儀 『登眞隱訣』卷下「其餘官號多在千二百官儀注、」注「千二百官儀、始乃出自漢中、傳行於世、世代久遠、多有異同、殆不可都按」。

(15) 溫鬼 『女青鬼律』卷二「青炁溫鬼名高遠、白炁溫鬼名伯桑、赤炁溫鬼名士玄、黃炁溫鬼名君太、黑炁溫鬼名文遐」。

(16) 九功七德： 『左傳』文公七年「晉卻缺言於趙宣子曰、九功之德皆可歌也、謂之九歌、六府三事、謂之九功、水火金木土穀、謂之六府、正德利用厚生、謂之三事」。同宣公十二年「夫武(王)禁暴戢兵保大定功安民和衆豐財者也、故使子孫無忘其章、武有七德、我無一焉、何以示子孫」。

(17) 刑害 『登眞隱訣』卷下「若家中多死喪逆注氣、身中刑害、當請運氣解厄君兵士萬人以治之」、注「人家亟有父母兄弟夫婦亡、後還注復生人、值其身有刑害、便爲禍病、乃致死者、當請治之、按千二百官有運氣解死患君、今此既無患字、亦不救輒益」。

上清真人馮延壽口訣(前云是楚市乞人西嶽真人馮延壽、西嶽之號、自不妨上清之目也、此後凡十四事、雖未見眞書、類其事旨、不乖眞法、故別撰錄、附於卷末)

夫學生之道、當先治病、不使體有虛邪及血少腦減津液穢滯也、不先治病、雖服食行炁、無益於身、昔有道士王仲甫者、少乃有意、好事神仙、恆吸引二景滄霞之法、四十餘年、都不覺益、其子亦服之、足一十八年、白日升天、後南嶽真人忽降仲甫而教之云、「子所以不得升度者、以子身有大病、腦宮虧減、筋液不注、靈津未溢、雖復接景滄霞、故未爲身益」、仲甫遂因服藥治病、兼修其事、又一十八年、亦白日升天、今在玄州受書爲中嶽真人、領九玄之司、于今在也。(此說殊(功)〔切〕事要、仲甫父子無餘別顯也)

夫學生之夫、必夷心養神、服食治病、使腦宮填滿、玄精不傾、然後可以存神服霞、呼吸二景耳、若數行交接、漏泄施寫者、則氣穢神亡、精靈枯竭、雖復玄挺玉籙、金書太極者、將亦不可解於非生乎、在昔先師常誡於斯事云、「學生之人、一接則傾一年之藥勢、二接則傾二年之藥勢、過三以往、則所傾之藥都亡於身矣、是以眞仙之士常慎於此、以爲生生之大忌」。(此事彌會衆經之旨)

夫學道唯欲嘿然養神、閉氣使極、吐氣使微、又不得言語大呼喚、

令人神氣勞損、如此以學、皆非養生也。

凡存神光行眞仙之事者、又不得以衣服借人、亦不服非己之物、諸是巾褐履屐之具、皆使鮮盛、三魂七魄、或栖其中、亦爲五神之恣忌汚沾故也。

又八節之日、皆當齋盛謀諸善事、以營於道之方也、慎不可以其日忿爭喜怒及行威刑、皆天人大忌、爲重罪也。

右三條亦與經事相符。

(1) 俞本が「功」を「切」に作るのに従う。

(2) この段、『上清黃庭內景經』呼吸章第二十注(『雲笈七籤』卷一 一)に見える。

上清真人馮延壽の口訣(前には楚の市場の乞食西嶽真人馮延壽とあるが、「西嶽」の號は「上清」の名目を冠してもかまわないのである。この後の都合十四事は、眞書には見当たらないとはいえ、その内容を類別してみれば、眞人の法に背いてはいない。だから別に書



き記し、卷末に附することとする。

そもそも長生を學ぶ道は、まず病氣を治し、體に虛邪<sup>②</sup>があつたり、血や腦が減少したり、津液が穢れ滯つたりさせないようにしなければならぬ。まず病氣を治療しないなら、服食や行氣を行つても體に益はない。

昔、道士の王仲甫という者がいた。若くして志を立て、好んで神仙の事に心がけ、(日月)二景を吸引し霞を食らう法をいつも行つていたが、四十年餘りになるのにまったく効果を覺えなかつた。その子もやはりそれを服用していたが、十八年かっきりで白日昇天した。その後、南嶽眞人が突然仲甫のもとに降つてこう教えられた。「あなたが昇天度世しないわけは、そなたの體に大病があり、腦宮<sup>③</sup>は缺けて損なわれ、筋液は注がず、靈津は滿ち溢れていないからだ。いくら景を取り入れ霞を食らつても、もとより體の益になどならないのだ」。仲甫はかくてそのお言葉どおりに、藥を服用して病氣を治し、あわせてくだんの修行を行ったところ、さらに十八年たつてやはり白日昇天した。今や玄州に在つて、辭令を授かつて中嶽眞人となり、九玄の司を領し、現在もそこにいる。(これは特に効果がある緊要の事柄を説いている。仲甫父子は、これ以外には他に見當たらぬ)

およそ長生を學ぶ者は、必ず心を靜め精神を養い、藥を服食し病

氣を治し、腦宮を充實させ、玄精<sup>④</sup>を失わないようにする。そのうえではじめて神を存思し霞を服し、二景を呼吸することができののだ。もししばしば交接を行い、漏泄し施寫するようであれば、氣は穢れ神は亡び、精靈<sup>⑤</sup>は枯渴してしまふ。たとい玉籙に極立つた資質を掲げられ、その名を太極に金書された者であっても、やはり生に背くことから解放されないのではなからうか。

昔、先師が常々このことを誡めてこう言われた。「長生を學ぶ人は、一回交接すれば一年分の藥の效力が使い果たされ、二回交接すれば二年分の藥の效力が使い果たされてしまふ。三回を越すと、それまで注ぎこんだ藥がみんな體內でなくなつてしまふ。そこで眞仙の士はいつもこのことを慎み、養生上の大きなタブーと考えるのだ」。この事はいよいよもつてさまざまな道經の趣旨にかなつてゐる。

およそ道を學ぶには、ただひたすら默然として神を養い、ぎりぎり一杯まで氣を閉ざし、氣を吐くには微かにする。<sup>⑥</sup>またべちゃべちゃしゃべり大聲でわめき、人の神氣を疲れ損なわせてはならない。そのようにして學ぶのは、すべて養生の法ではないのである。

およそ神光を存思し眞仙の修行を行う者は、衣服を他人に貸してはならないし、他人の持ち物を身に着けもしない。いろいろな巾褌履履などの品物は、みな清淨にしておく。三魂七魄がその中に宿る

ことがあり、また五神の氣が不淨を忌みきらうからでもある。

また八節の日には、いつも潔齋してもしろの善事を思いめぐらし、道教の方術を行わなくてはならない。くれぐれも用心してその日に怒ったり争ったり喜んだり腹を立てたり、厳しい刑罰を行ったりしてはならない。それらはみな天人が大變忌みきらうことであつて、重罪である。

右の三條もやはり眞經の内容と符合する。

- (1) 前云是楚市乞人西嶽眞人馮延壽 『眞誥』卷九葉一一表「乞食公者、西嶽眞人馮延壽也、周宣王時史官也」。
- (2) 虛邪 『黃帝內經素問』八正神明論「虛邪者八正之虛邪氣也」、注「八正之虛邪謂八節之虛邪也、以從虛之鄉來、襲虛而入爲病、故謂之八正虛邪」。
- (3) 腦宮 『上清黃庭內景經』上清章第一(「雲笈七籤」卷一一)「九氣映明出霄間」、注「九天之氣、入於人鼻、周流腦宮、映明上達、故曰出霄間」。
- (4) 受書爲中嶽眞人 『眞誥』卷一四葉七裏「霍山中有學道者鄧伯元王玄甫、受服青精石飯吞日丹景之法、用思洞房已來、積三十

四年、乃內見五藏、冥中夜書、以今年正月五日、太帝遣羽車見迎伯元玄甫、以其日遂乘雲駕龍、白日登天、今在北玄圃臺、受書位爲中嶽眞人」、注「伯元、吳人、玄甫、沛人」。

- (5) 玄精 『登眞隱訣』卷上「洞房之中自有黃闕紫戶玄精之室、身中三一尊君常棲息處所也」。

- (6) 施寫 『養性延命錄』御女損益篇「老子曰、還精補腦、可得不老矣、子都經曰、施瀉之方、須當弱入強出」。

- (7) 精靈 『元始無量度人上品妙經四注』卷三「高上清靈爽、悲歌朗太空」、成玄英注「靈爽者是玉皇精靈爽利之氣也」。

- (8) 一接則傾一年之藥勢 『眞誥』卷一〇葉二三表「沈羲口訣、服神藥、勿向北方、大忌、亥子日不可唾、亡精失氣、減損年命、藥勢如土、：東海小童口訣、道士求仙、勿與女子交、一交而傾一年之藥力、若無所服而行房內、減算三十年」。

- (9) 閉氣使極、吐氣使微 『養性延命錄』御女損益篇「閉氣不息、於心中數至二百、乃口吐氣出之、日增息、如此身神具、五藏安、：凡行氣以鼻、納氣以口、吐氣微而引之、名曰長息」。

- (10) 八節之日 『登眞隱訣』卷上「立春春分立夏夏至立秋秋分立冬冬至始日也」、注「各以此八節日爲始」。

凡研味至道及讀誦神經者、十言二十言中、輒當一二過紙膏咽液、

百言五十言中、輒兩三過叩齒、以會神靈、充和血氣、使靈液凝滿、帝一欣宅、所謂沖氣不勞、啓血不泄也。〈此別一法、經中未見其事也〉

①學生之法、不可泣淚及多唾泄、此皆爲損液漏津、使喉腦大竭、是以眞人道士常吐納咽味、以和六液。

②凡甲寅庚申之日、是尸鬼競亂精神躁穢之日也、不可與夫妻同席及言語面會、當清齋不寢、警備其日、遺諸可欲。

凡五卯之日、常當齋入室、東向心拜、存神念炁、期感神明、亦適意所陳、恆如此者、玉女降侍。〈此三條與經語亦互相同者也〉

③常以本命之日、向其方面、叩齒三通、心存再拜而微呪曰、「太一鎮生、三炁合眞、室胎上景、母玄父元、生我五藏、攝我精神、下灌玉液、上朝泥丸、夕鍊七魄、朝和三魂、右命玉華、左嘯金晨、命我神仙、役靈使神、常保利津、飛行十天」、祝畢、又心拜四方、叩齒三通、咽液三過、此名爲太上祝生隱朝胎元之道、常能行之、令魂魄保守、長生神仙。〈未見此經法〉

④凡入室燒香、皆當對席心拜、叩齒陰祝、隨意所陳、唯使精專、必獲靈感。〈此亦朝靜之例也〉

⑤凡人常存思識己之形、極使髣髴對在我前、使面上恆有日月之光、洞照一形、使日在左、月在右、去面前令九寸、存畢、乃琢齒三通、微祝曰、「元胎上眞、雙景二玄、右抱七魄、左拘三魂、令我神明、與形常存」、祝畢、又叩齒三七過、咽液七過、此名爲帝君鍊形拘魂制魄之道、使人精明神仙、長生不死、若不得祝者、亦可單存之耳。〈道授乃有識形、而未見此祝法〉

又學道之士、當先檢制魂魄、消滅尸鬼、常以月晦朔之日、庚申甲寅之日、當清齋入室、沐浴塵埃、正席而坐、得不眠者益善、以眞朱筆點左目眥下、以雄黃筆點右鼻下、令小半入谷裏也、點畢、先叩齒三通、微祝曰、「上景飛纏、朱黃散煙、炁攝虛邪、尸穢沈泯、和魂鍊魄、合體大神、令我不死、萬壽永全、聰明徹視、長享利津」、祝畢、又琢齒三通、咽液三過、并右手第二指躡右鼻孔下、左手第二指躡左目下、各七過、當盡陰案之、勿舉手也、於是都畢、按此二處是七魄遊尸之門戶、鉞精賊邪之津梁矣、故受朱黃之精、塞尸鬼之路、引二景之薰、遏淫亂之炁也、此太極上法、常能行之、則魂魄和柔、尸穢散絕、長生神仙、通炁徹視、行之三年、色念都泯矣。〈此頗似太靈眞人法、可兼修用之〉

凡上清叩齒咽液法、皆各有方、先後有次、不得亂雜、使眞靈混錯

也。

夫叩齒以命神、咽炁以和眞、納和因六液以運入、制神須鳴鼓而行列矣。

凡存修上法、禮祝之時、皆先叩齒、上下相叩、勿左右也、一呼一吸、令得三叩爲善、須禮祝畢、更又叩齒、乃得咽諸炁液耳、此名爲呼神和眞以求升仙者也、吾屢見僞俗之人或誤定經文、先後雜亂、無有次緒、用以爲益、良可悲也。〔此亦同五神經中意旨〕

右本卷訖此。

(1) この段、『雲笈七籤』卷四一隱朝胎元法に見える。

(2) この段、『雲笈七籤』卷三三仙經禁忌、同卷四五祕要訣法制三尸日第二十一、同卷四六祕要訣法太帝制魂拔尸神呪第二十二などに類似的文が見える。

(3) この段、『雲笈七籤』卷四一隱朝太元法および同卷四五祕要訣法本命日第十九に見える。

(4) この段、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法入誦法第十および入室對席第二十に見える。

(5) この段、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法常存識己形第二十二に見える。

およそ最高究極の道を研究玩味し、また神經を讀誦するにあたっては、十言ないし二十言ごとに、必ず一、二回脣をなめて唾を呑みこみ、百言ないし五十言ごとに、必ず二、三回叩齒しなくてはならない。そのようにして神靈を會同させ、血氣を充實させ調和させ、靈液が凝集して一杯になり、帝一が欣然として宿るようにするのである。これが「沖和の氣がくたびれることなく、啓血が漏泄することがない」ということである。〔これは別の一法であつて、經典の中にはその事は見えない〕

長生を學ぶ仙道では、涙を流したり、何度も唾を吐いたりしてはならない。これらのことは、すべて津液を減少させ漏泄させて喉や腦を大いに涸渴させる。それで、眞人や道士たちは、いつも古い氣を吐き新しい氣を取り入れ、唾を呑みこんで味わい、六液を調和させるのである。

およそ甲寅の日と庚申の日は、三尸の幽鬼が狂亂し、精神がさつき穢れる日である。夫婦といえども、席を同じくしたり、べちや

べちゃしゃべって顔をつき合わせてはならない。清淨に齋戒して寝ずに過ごし、その日一日、よく氣をひきしめて謹慎し、あらゆる欲望の對象を捨てるのである。

およそ（丁卯・己卯・辛卯・癸卯・乙卯の）五卯の日には、いつも齋戒したうえで靜室に入り、東に向かつて心中で禮拜してから、諸神を存思し諸氣を念想して、神明との感應を期待する。何か呪願しなければしてもよい。いつもこのようにしておれば、玉女が降臨して隨侍する。〈以上の三條は經典の語とも互いに同じである〉

いつも本命の日には、その本命の方位に向かつて、三回叩齒し、心中に存思しつつ二回禮拜し、小聲で次の呪文を唱える。「太一がわが生命の根源に鎮座し、三氣が眞仙たるべき氣を合體させ、體內の宮室に上景の諸神を宿らせる。玄氣を母とし元氣を父とし、わが五藏を生かしめ、わが精神を養う。下は玉液を灌流させ、上は泥丸に朝謁する。夕には七魄を鍊成し、朝には三魂を調和する。右には玉華の玉女を呼びつけ、左には金晨の童子を呼び集める。われを神仙たらしめ、もろもろの神靈たちを役使して、永えによどみなき津液を保ちつつ、十天に飛行せしめよ」。呪文を唱え終わってから、また心中で四方に拜禮し、三回叩齒し、三回唾を呑みこむ。これを「太上祝生隱朝胎元之道」と名づける。常にこの道を修行することがで

きるならば、魂魄をいつまでも保養し續けて長生たらしめ神仙たらしめるのである。〈この經法は見たことがない〉

およそ靜室に入つて焼香するには、いつの場合も座席に正對して心中で拜禮し、叩齒して密かに呪文を唱える。呪願をしたければしてもよい。ただひたすら精神を集中していれば、必ずや神靈の感應を獲得する。〈これも靜室で神々に朝謁するやり方である〉

およそ人が常に存思して自己の身體を認識するには、速やかにありありと現前させ、自分の正面に對せしめる。顔の上方に常に日月の光明があつて、全身を明るく照らし出し、日は左にあり、月は右にあるようにし、顔の前から離れて、九寸（の直徑）があるようにする。存思し終わったならば、そこで三回叩齒し、小聲で次の呪文を唱える。「三元の）元胎に宿る上眞と雙景から生まれた二玄とが、右には七魄を抱きとめ、左には三魂を拘束して、わが神明が身體とともに永遠に生き續けるようにせしめよ」。呪文を唱え終わってから、さらに二十一回叩齒し、七回唾を呑みこむ。これを「帝君鍊形拘魂制魄之道」と名づけ、人間をして精明なる神仙たらしめ、長生不死たらしめるのである。もし呪文を唱えることができない場合には、ただ單に存思するだけでもよい。〈道授には、身體を認識することがあるのであるが、この呪法は見たことがない〉

また仙道を修學する者は、初めにまず魂魄を厳しく禁制して三戸の幽鬼を消滅させなくてはならない。常に毎月の晦日と朔日および庚申と甲寅の日には、清淨に潔齋して靜室に入る。沐浴して塵埃を洗い落とした上で、座席を正して端坐する。眠らないでいることができる一層よい。眞朱の顔料で左目のまなじりの下に點を筆で入れる。雄黃の顔料で右の鼻の下に點を筆で書き、鼻下の溝の中に少し一部が入るようにする。これらの點を入れ終わったら、まず三回叩齒して、小聲で次の呪文を唱える。「上景の諸神は飛びまとい、眞朱と雄黃から煙が散ずる。それらの氣が虚邪を取りおさえ、三戸の穢れは沈靜化してなくなつてゆく。三魂を調和し七魄を鍊成して、身體を大神と合一させる。われをして不死たらしめ、萬壽にわたつて永遠に完全無缺、耳と目とをはたらかせてすべてを徹視し、永えによどみなき津液を享受させよ」。呪文を唱え終わつてから、さらに三回叩齒し、三回唾を呑みこむ。あわせて右手の第二指で右の鼻孔の下をおさえつけ、左手の第二指で左目の下をおさえつけること、それぞれ七回。すべて密かにもむべきであつて、手を擧げてはならない。これですべて終了。これら(左目の下、右鼻の下)(二箇所は、七魄や遊尸のさまよい出てゆく門戸であり、精魅を<sup>まじかり</sup>鉞で切り殺し、邪鬼をやっつける橋であり渡し場である。それ故に、眞朱と雄黃の精を受け入れて、三戸の幽鬼の通路を塞ぐのであり、(日月)二

景のよき香りを引き入れて、淫亂の氣を塞ぎ止めるのである。これは、太極眞人の上法であつて、常にこれを実踐することができたらば、魂魄は柔和になり、三戸の穢れは散じてなくなり、長生を遂げ神仙となり、(日月と)氣を通じあつてあらゆることを徹視する。これを三年間實行するならば、色欲の念はすべて滅してしまふのである。(これは、「太靈眞人法」<sup>⑬</sup>といささか似ている。兼ねて實修してもよい)

およそ上清の叩齒と唾を呑みこむ方法は、すべてそれぞれのやり方があり、順序次第が定まっているのである。それをごちゃごちゃにしてはならない。眞靈たちを混亂させるであらう。

およそ叩齒して諸神に呼びかけ、諸氣を呑みこんで眞靈たちを調和させるのである。諸氣を内に納めて調和させるには、六液によつて運び入れるのであり、諸神を制御するには、齒の太鼓を鳴らしてきちんと整列させなければならない。

およそ上級の仙法を修行するにあたっては、禮拜し呪文を唱える時に、いつでも最初に叩齒する。上下にかちかち噛み鳴らし、左右にずれさせてはならない。一呼吸する間に、三回噛み鳴らすのがよいやり方である。禮拜し呪文を唱え終わつたところで、さらにもう

一回叩齒してから、そのうえでもろもろの氣なり液なりを呑みこむのである。これを、諸神に呼びかけ眞靈たちを調和させて、昇仙することを求めるものと名づける。私は、しばしばまやかしの連中が、ややもすると經文の順序を誤つて定めてしまつて、先後をごちゃごちゃに混亂させ、順序次第もないようにし、それでご利益があると考へているのを見かけるが、まことに悲しむべきことである。へこれも、『五神經』の趣旨と同じである。

以上の本巻は、ここで終わる。

(1) 神經 『上清大洞眞經』卷一誦經玉訣「玉帝上法、上聞三清、吉日齋戒、敢開神經」。

(2) 舐脣 「服氣精義論」(『雲笈七籤』卷五七)「東方青牙、服食青牙、飲以朝華、祝畢、舌料上齒表、舐脣漱口、滿而嚥之三」。

(3) 靈液 『上清黃庭內景經』上有章第二(『雲笈七籤』卷一一)「七液洞流衝臚間、注「七液者謂四氣三元結成靈液、流潤藏府、氣衝腦盛也」。同口爲章第三「漱咽靈液災不干」、注「靈液眞氣、邪不干正」。

(4) 冲氣 『老子』第四十二章「道生一、一生二、二生三、三生萬物、萬物負陰而抱陽、冲氣以爲和」。

(5) 六液 法琳「辨正論」卷二「案五千文解節中經序云、：異名者謂諸精、其名有六、一曰精、二曰涕、三曰汗、四曰血、五曰涕、六曰唾」。『雲笈七籤』卷五六元氣論「道林云、此道亦謂玉體金漿法、玉體金漿乃是服鍊口中津液也、一曰精、二曰淚、三曰唾、四曰涕、五曰汗、六曰溺、人之一身有此六液、同一元氣而分配五藏六腑九竅四肢也」。

(6) 尸鬼 『上清黃庭內景經』脾長章第十五(『雲笈七籤』卷一一)「遂至不飢三蟲亡」、注「人死則三蟲出爲尸鬼」。

(7) 清齋 『雲笈七籤』卷四〇受持八戒齋文「劉宋朝陸先生脩靜上啓、：今有善男子善女人等求欲受持八戒清齋、一日一夜、用以檢御身心、滅諸三業罪惱者、故洞神經第十三云、夫齋以齋整身心爲急、身心齋整、保無亂敗、：大略有八、一者不得殺生以自活、二者不得婬慾以爲悅、：」。

(8) 心拜 『雲笈七籤』卷四〇金書仙誌戒「凡修行太一之事、眞人之道、不得有所禮拜、禮拜亦帝君五神之所忌也、若有所精思行禮願之時、但心拜而已、不形屈也」。

(9) 適意所陳 『雲笈七籤』卷四六祕要訣法三元八節朝隱祝第二十四「凡是其日欲行禮願陳祝之時、當先叩齒三通、心拜四方、乃微祝曰、：今日吉日、八願開陳、上願飛霄、長生神仙、：祝畢、又拜如初、亦適意所陳、求解脫七祖之愆、及自己之罪狀、一續於行事之後也」。

- (10) 母玄父元 『洞眞太一帝君太丹隱書洞眞玄經』「夫兆欲修己求生、當從所生之宗、所生之宗謂元父玄母也、元父主炁、化理帝先、玄母主精、變結胞胎、精炁相成、如陰陽相生、雲行兆已、道合無名」。
- (11) 玉華、金晨 『無上祕要』卷二・三界官府品「瓊琳宮室、右玉華玉女所居、…右出洞眞經及道迹眞迹經」。「無上祕要」卷六六明燈品「祝曰、…却我百年期、還返孩兒容、賜我西華女、給我金晨童、…右出洞眞天關三圖七星移度經」。
- (12) 飛行十天 『上清黃庭內景經』紫清章第二十九(『靈寶七籤』卷一二)「紫清上皇大道君、…化生萬物使我仙、飛昇十天駕玉輪」。
- (13) 胎元 『洞眞西王母寶神起居經』「此法至妙、能行之者仙、所以吐納胎元、漱吸明眞」。
- (14) 日在左、月在右 『洞眞太一帝君太丹隱書洞眞玄經』「夜半生炁時、…存左目中出日、右目中出月、竝徑九寸、在兩耳之上、兩耳之上名爲六合高窗也、令日月使照一身內、徹泥丸、下照五藏腸胃之中、皆覺見了了、洞徹內外、令一身與日月光共合」。
- (15) 道授 『眞誥』卷五葉一表を参照。
- (16) 太靈眞人法 『靈寶七籤』卷五四に對日存三魂法として太靈眞人の仙法が説かれている。
- (17) 五神經 『眞誥』卷五葉一〇裏注「此即太素五神事也、別有經法」。同卷一八葉五表「左目童子」、注「出五神經」。

養性禁忌口訣(復有此諸條、亦未見眞書、而似是二許抄事、皆仙人條用小訣、有助於施行、故竝撰錄)

①黃仙君口訣、服食藥物、不欲食蒜及石榴子、豬肝犬頭肉至忌、都絕爲上、道士自不可食豬犬肉而交房中、令藥力不行、又計食一斤、損算百日、子其慎之。(此彭祖弟子撰傳者)

②青牛道士口訣、暮臥、存日在額上、月在臍上、辟千鬼萬邪、致玉女來降、萬禍伏走、祕驗。(即封君達也、出神仙傳五嶽序)

③沈羲口訣、服神藥、勿向北方、大忌、亥子日不可睡、亡精失氣、減損年命、藥勢如土。(沈出神仙傳)

④呂恭口訣、入山之日、未至山百步、先却行百步、反足乃登山、山精不犯人、衆邪伏走、百毒藏匿。(呂出神仙傳)

⑤樂巴口訣、行經山及諸靈廟祠間、存口中有眞人字赤靈丈人、侍以玉女二人、一女名華正、一女名攝精、丈人著赤羅袍、玉女二人、上下黃衣、所存畢、乃叱咤曰、「廟中鬼神速來、使百邪詣赤靈丈人受斬」



死」、衆精却千里、此是三天前驅使者捕鬼之法。〔即樂豫章也、出劒經神仙傳虎豹符及後漢書〕

東海小童口訣、道士求仙、勿與女子交、一交而傾一年之藥力、若無所服而行房內、減算三十年。〔此上相青童君之別號也〕

東陵聖母口訣、學道慎勿言、有多爲山神百精所試、夜臥、閉目存眼童子、在泥丸中、令內視身神、長生升天、劉京亦用此術。〔出神仙傳、今爲海神之宗、劉京〔渝〕、漢末人、出飛步經後〕

女仙程偉妻口訣、服食、勿食血物、食血物、使不得去三尸、乾肉可耳。〔程偉爲漢期門郎、其婦知房事、見葛洪內篇也〕

鳳綱口訣、道士有疾、閉目內視心、使生火以燒身、身盡、存之使精如彷彿、疾病即愈、是痛處存其火、祕驗。〔出神仙傳、能釀百草花以起死者〕

陳安世口訣、道士結頭理髮及飲食施履履枕褥、勿令非道士者見其理髮、干其飲食、動其履履、用其枕褥、彼俗尸魄形中之鬼來侵我神也、所以道士棲山林而幽身者、皆欲遠茲蠱穢、絕放人間之業、是恐外物凡百犯其性命也、祕之。〔陳出神仙傳〕

李<sup>①</sup>小君口訣、道士求仙、不欲見死人尸、損神壞氣之極、人君師父親愛、不得已而臨之耳、所以道士去世、不事王侯、是無君也、塊然獨存、是無友也、唯父母師主、不得不臨喪、致感極之哀、不吝性命之傷耳、苟以此故而傷、是以無傷之也、吾其祕之、故口傳焉。〔漢武臣、出神仙傳〕

女仙人劉綱妻口訣、求仙者勿與女子、三月九日六月二日九月六日十二月三日、是其日當入室、不可見女子、六尸亂則藏血擾濁飛越、三魂失守、神彫氣逝、積以致死、所以忌此日者、非但塞遏淫泆而已、將以安女宮、女宮在申、男宮在寅、寅申相刑、刑殺相加、是日男女三尸出於目珠瞳之中、女尸招男、男尸招女、禍害往來、喪神虧正、雖人不自覺、而形露已損、由三尸戰于眼中、流血於泥丸也、子至其日、雖至寵之女子、親愛之令婦、固不可相對、我先師但脩此道而仙矣、復不及至親無心者矣、子其慎之矣。〔綱妻出神仙傳、又虎豹符中、凡此雜事皆與眞經相符、竝可按而施用也〕

(1) この段、『枕中記』禁忌、『雲笈七籤』卷三三攝養枕中方仙經禁忌、『三洞珠囊』卷三服食品、『至言總』卷三などに見える。

(2) この段、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法青牛道士存日月訣第二十

八に見える。

- (3) この段、『枕中記』禁忌、『雲笈七籤』卷三三攝養枕中方仙經禁忌、『三洞珠囊』卷三服食品、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法青牛道士存日月訣第二十八、『至言總』卷三などに見える。

- (4) この段、『枕中記』禁忌、『雲笈七籤』卷三三攝養枕中方仙經禁忌、『無上祕要』卷六五山居品、『攝生纂錄』行旅篇などに見える。

- (5) この段、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法樂巴口訣第二十九に見える。

- (6) 「渝」の字は衍字とみなす。

- (7) この段、『枕中記』禁忌、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法服食忌第三十などに見える。

- (8) この段、『枕中記』、『雲笈七籤』卷三三攝養枕中方自慎、『三洞珠囊』卷一救導品、『雲笈七籤』卷四五祕要訣法服食忌第三十などに見える。

- (9) この段、『至言總』卷三に見える。

- (10) この段、『枕中記』禁忌、『雲笈七籤』卷三三攝養枕中方仙經禁忌などに見える。

養性術の禁忌事項に関する口訣へさらにまた以下の諸條がある。

やはり眞人の書には見えないものであるが、二人の許氏が抜き書きした事柄のように思われる。どれもみな仙人が一條一條用いる小さな口訣であり、實踐に役立つものであるから、あわせて撰録しておく。

黄仙君の口訣。藥物を服食する際には、蒜や石榴子を食べてはならない。豚の肝、犬の頭の肉は最も忌むべきもので、すべて絶つのが最上である。道士たるものは、豚や犬の肉を食べて房中で交わってはいけない。藥效の運りを悪くさせる。また、(豚肉などを)合計一斤食べると、百日分の壽命を減らすことになる。汝は用心するよ。に。(これは彭祖の弟子で、彭祖の傳を撰した者である)

青牛道士の口訣。夕暮れに臥した時、太陽が額の上にあり、月が臍の上にあるのを存思する。もろもろの邪鬼を退け、玉女を來降させ、多くの禍いをひそみ逃れさせることになる。えも言われぬ効きめがある。(青牛道士とは)すなわち封君達である。『神仙傳』と『五嶽序』に出ている。

沈義の口訣。神仙の藥を服用する際には北の方角を向いてはならぬ。(北を向くのは)最大のタブーである。亥と子の日には唾を吐いてはならぬ。精氣を失い、壽命を減らし、藥效はまるで土のように

なる。〈沈義のことは『神仙傳』に出てゐる〉<sup>13</sup>

呂恭の口訣。山に入る日には、山の手前百歩のところでもまず百歩さがり、後ろ向きに歩いて山に登る。(そうすれば)山精が人を犯すことはなく、澤山の邪鬼はひそみ逃れ、あらゆる毒氣は隠れこもってしまふ。〈呂恭のことは『神仙傳』に出てゐる〉<sup>13</sup>

樂巴の口訣。山やもろもろの神靈の祠廟をよぎる時には(次のように)存思する。口の中に眞人がいる。字は赤靈丈人。玉女二人を侍らせている。一人は華正といい、もう一人は攝精という。丈人は赤い羅の打掛けを着ている。玉女二人は上下とも黄衣。このように存思し終えたところで次のように叱咤する。「廟中の鬼神よ、たちどころにやって来て、澤山の邪鬼を赤靈丈人のもとに差し向け、(丈人に)斬り殺させるように」。澤山の精靈は千里のかなたに退却する。これが三天前驅使者が悪鬼を捕獲する法である。(樂巴とは)すなわち樂豫章である。『劍經』『神仙傳』『虎豹符』および『後漢書』に出てゐる。

東海小童の口訣。道士は仙人になろうと思うなら、女性と交わってはならぬ。一回交われば、一年分の藥の効力が使い果たされる。もし何も服さずに房中のことを行ふならば、三十年の壽命を減らし

てしまふ。〈この東海小童とは上相青童君の別號である〉

東陵聖母の口訣。仙道を學ぶ時には、ゆめその事を口にしてはならぬ。しばしば山神や多くの精魅に考試されることになる。<sup>14</sup>夜臥する時、目を閉じて眼童子が泥丸の中にいるのを存思し、そやつに體內神を内視させる。(そうすれば)長生し昇天するであろう。劉京もこの術を用いた。<sup>15</sup>〈東陵聖母のことは『神仙傳』に出てゐる。今は海神の宗主となつてゐる。劉京は漢末の人で、『飛步經』の後に出てゐる〉

女仙の程偉の妻の口訣。服食する際には、血なまぐさいものを食べ<sup>16</sup>てはならぬ。血なまぐさいものを食べると、三戸を除去すること<sup>17</sup>をできなくさせる。干肉ならよろしい。〈程偉は漢の期門郎であつた。彼の妻は房中術を知つてゐた。葛洪の『抱朴子』内篇』に見える〉

鳳綱の口訣。道士が病にかつた場合には、目を閉じて心臓を内視し、火を生ぜしめてそれによつて體を焼き、體が焼け盡きたら、存思して精氣をさながらに彷彿させる。(こうすれば)疾病はすぐに治る。すべて痛むところがあれば、火を存思する。えも言われぬ効きめがある。〈鳳綱のことは『神仙傳』に出てゐる。>(彼は)数々

の草や花を發酵させて、それによって死者を蘇らせることができる」

陳安世の口訣。道士は頭髮を結ったり整えたり、飲食したり、履物や寢具を用いたりする際に、道士でない者に髪を整えるのを見させたり、飲食物に手を觸れさせたり、履物の位置を變えさせたり、寢具を使わせたりしてはならぬ。その俗人の三戸七魄<sup>23</sup>という體内の惡鬼がやつて來て自分の神靈を侵すからである。道士が山林に隱棲して身をひそめるのは、すべてこうした穢れから遠ざかり、世俗的な行いを完全に斷ち切ろうとするからであつて、ありとあらゆる外的事物が生命を犯すのを恐れてのことである。祕密にするように。〈陳安世のことは『神仙傳』に出ている〉<sup>24</sup>

李少君の口訣。道士は仙人になろうと思うなら、屍を見てはならぬ。それこそ神氣を損ない破壊する最たるものだ。人君や師匠や父や親愛な者の場合には、やむを得ずその場に臨むだけだ。だから道士は俗世間から離れて王侯に仕えない<sup>25</sup>。これは君主を持たないということである。つくねんとして一人きりでいる。これは友を持たないということである。ただ父母や師匠の場合だけは、喪に臨まないわけにはゆかぬ。悲哀の限りを盡くして、生命が損なわれることすら惜しみはしないのだ。いやしくもこのような理由で生命を損なうのであれば、損なつたことにはならぬ。私はこのことを祕密にする

から、口頭で傳授するのである。(李少君は)漢の武帝の臣下で、『神仙傳』に出ている<sup>26</sup>

女仙人の劉綱の妻の口訣。仙人になろうとする者は、女性を相手にしてはならぬ。三月九日、六月二日、九月六日、十二月三日、これらの日には入室するにあたり、女性の姿を見てはならない。(男女各三戸の)六戸が亂れば、五臟と血氣が亂れこわれて飛散し、三魂はうろたえ、神氣は萎えてなくなり、それが積み重なると死に至る。これらの日を忌むのは、ただ單に淫佚を塞ぎとどめるだけではない。それによって女宮を安らかにしようとするのである。(というのも)女宮は申の方位にあり、男宮は寅の方位にあつて、寅と申とは互いに相手を刑害し、刑殺が加えられる。これらの日には男女の三戸が腫のところに出てきて、女性の三戸は男性の三戸を招きよせ、また男性の三戸は女性の三戸を招きよせるので、禍害が行き來して、神氣を喪失させ正氣を損ない、人は自覺せずとも、體にはすでに損なわれた徴候が現れる。三戸が眼の中で戦い、泥丸宮に流血を引き起こすことによるのである。汝はその日になつたならば、どんなに愛してやまない女性や親愛な妻であっても、決して對面してはならぬ。わが先師はもっぱらこの道を実修するだけで仙人となられた。淫欲の心の起こりようのないごく親しい肉親をすらかまいつけられなかったのだ。汝は用心するように。(劉綱の妻のことは『神

仙傳<sup>⑦</sup>」や「虎豹符」に出ている。以上の雑多な事項はみな真人の經典と符合するものであるから、すべてよくそれに基ついて實行するがよい。

- (1) 二許抄事 『眞誥』卷一九葉四表「今人見題目云某日某月某君受許長史及掾某、皆謂是二許親承旨、殊不然也、今有二許書者、竝是別寫楊所示者耳」。
- (2) 小訣 『眞誥』卷一八葉二表注「洞齋即大洞齋法、今有眞書小訣」。
- (3) 服食藥物 『抱朴子』仙藥「或問、服食藥物、有前後之宜乎、抱朴子答曰、按中黃子服食節度云、服治病之藥、以食前服之、養性之藥、以食後服之」。
- (4) 蒜、石榴子 『上清黃庭內景經』務成子注敘（『雲笈七籤』卷一一）「忌五辛」、注「生葱蒜雖非胡荽也」。『眞誥』卷一五葉四裏注「石榴子即世之安石榴也」。
- (5) 猪肝、犬頭肉 『上清黃庭內景經』務成子注敘（『雲笈七籤』卷一一）「大都通忌食六畜及魚臊肉」、注「六畜、牛馬猪羊雞犬也」。
- (6) 藥力不行 『抱朴子』仙藥「欲以藥攻病、既宜及未食內虛、令藥力勢易行、…若欲養性、而以食前服藥、則力不行」。

- (7) 彭祖弟子… 『神仙傳』黃山君「黃山君者、修彭祖之術、年數百歲、猶有少容、亦治地仙、不取飛昇、彭祖既去、乃追論其言、爲彭祖經、得彭祖經者、便爲木中之松柏也」。
- (8) 即封君達也… 『神仙傳』封君達、『雲笈七籤』卷七九・五嶽眞形圖法を参照。
- (9) 神藥 『抱朴子』金丹「夫五穀猶能活人、人得之則生、人絕之則死、又況於上品之神藥、其益人豈不萬倍於五穀耶」。『史記』秦始皇本紀「方士徐市等入海求神藥」。
- (10) 勿向北方 『枕中記』避忌「凡求仙忌十敗、…十勿北向大小便、仰視三光、勿北向解脫衣裳、勿北向罵詈、犯破毀」。
- (11) 沈出神仙傳 『神仙傳』沈羲を参照。
- (12) 山精不犯人 『抱朴子』登涉「山中山精之形、如小兒而獨足、走向後、喜來犯人、人入山、若夜聞人言聲大語、其名曰蛟、知而呼之、即不敢犯人也、一名熱內、亦可兼呼之、又有山精、如鼓赤色、亦一足、…見之皆以名呼之、即不敢爲害也」。
- (13) 呂出神仙傳 『神仙傳』呂恭（呂文敬）を参照。
- (14) 即變豫章也… 『後漢書』列傳四七樂巴傳（樂）巴使徐州還、再還豫章太守、郡土多山川鬼怪、小人常破貨產以祈禱、巴素有道術、能役鬼神、乃悉毀壞房祀、翦理姦巫、於是妖異自消。また『神仙傳』樂巴を参照。「虎豹符」については、『眞誥』卷二〇葉三表「楊書中黃制虎豹符」。

- (15) 山神百精所試 『抱朴子』登涉「以此日入山、必爲山神所試」。
- (16) 眼童子 『上清黃庭內景經』上清章第一(『雲笈七籤』卷一一)「神蓋童子生紫煙」、注「童子、目神也」。
- (17) 劉京… 『神仙傳』劉京を参照。
- (18) 出神仙傳 『神仙傳』東陵聖母を参照。
- (19) 海神 『史記』秦始皇本紀「始皇夢與海神戰、如人狀」。
- (20) 血物 『雲笈七籤』卷四〇金書仙誌戒「夫學仙之人、勿北向便…、勿以五月五日見血物」。
- (21) 程偉爲漢期門郎… 『抱朴子』黃白篇を参照。
- (22) 出神仙傳 『神仙傳』鳳綱を参照。
- (23) 尸魄 『真誥』卷一六葉一二表注「而世或有見鬼身不全者、蓋是尸魄託骸者耳」。
- (24) 陳出神仙傳 『神仙傳』陳安世を参照。
- (25) 不事王侯 『周易』蠱上九「不事王侯、高尚其事」。
- (26) 出神仙傳 『神仙傳』李少君を参照。
- (27) 網妻出神仙傳 『神仙傳』劉綱、樊夫人を参照。